明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十五年四月廿三日印刷納本
（每月一回廿三日印刷納本）

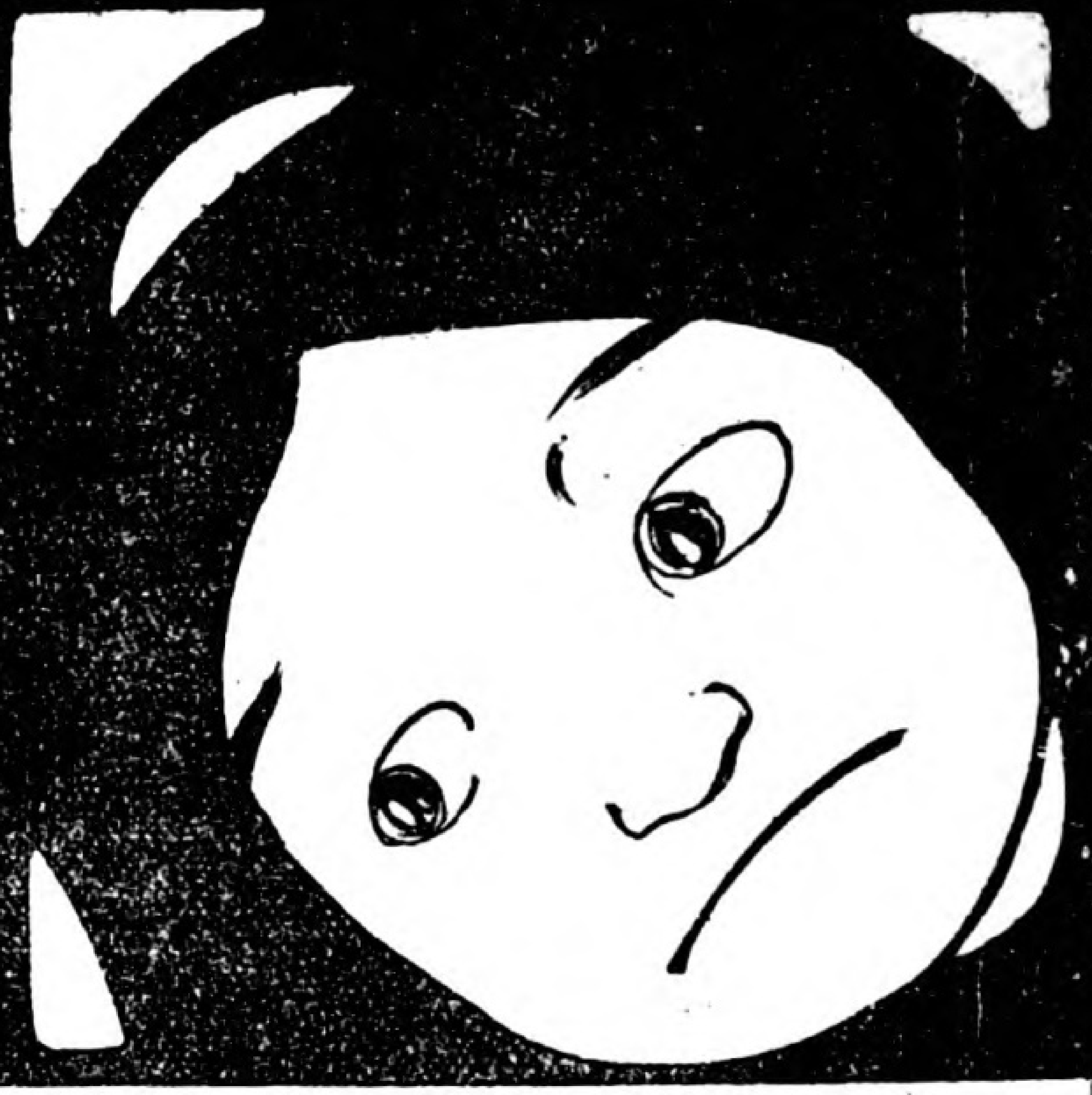
女學世界

第十二巻
第七號



博文館


東京
大阪
平尾賛平
レート白粉
ゆかりの色の
さわやかに咲け
るや花のあやめ草
紫の麗はしき色香いや増す
レート白粉
つけてゆかしき
美人の姿



五月一日より

第四回 兒童博覽會

（御入口は特に日本橋通りにも取設け置き候）

五月五日より

大日本織物協會主催

染織物嗜好研究會

右の通り何れも特別盛大に開會仕候○御外出には此上なき好時節にも有之候につき、御慰みかた〴〵御來觀のほど奉願上候○

東京駿河町

三越呉服店

女學世界第十二巻第七號目次

表紙畫＝(杜鵑花)　口繪＝五月晴れ(佐々木林風畫)ネルのきもの(田中竹園畫)
磯邊(河崎蘭香畫)若鮎(毛筆畫)　竹田宮妃昌子内親王殿下
令孃かゞみ　松城氏令孃　磯ゝ氏令孃　阿部子爵〃令孃　鹽見氏令孃
阪正臣翁歌の會、明治母の會送別會、女子師範學校生宮城拜觀、以上寫眞版

クラブ新聞

禁轉載

クラブあらいこ
クラブおしろい
クラブはみがき
クラブ美身クリーム
練香油クラブ美髪用ポマード

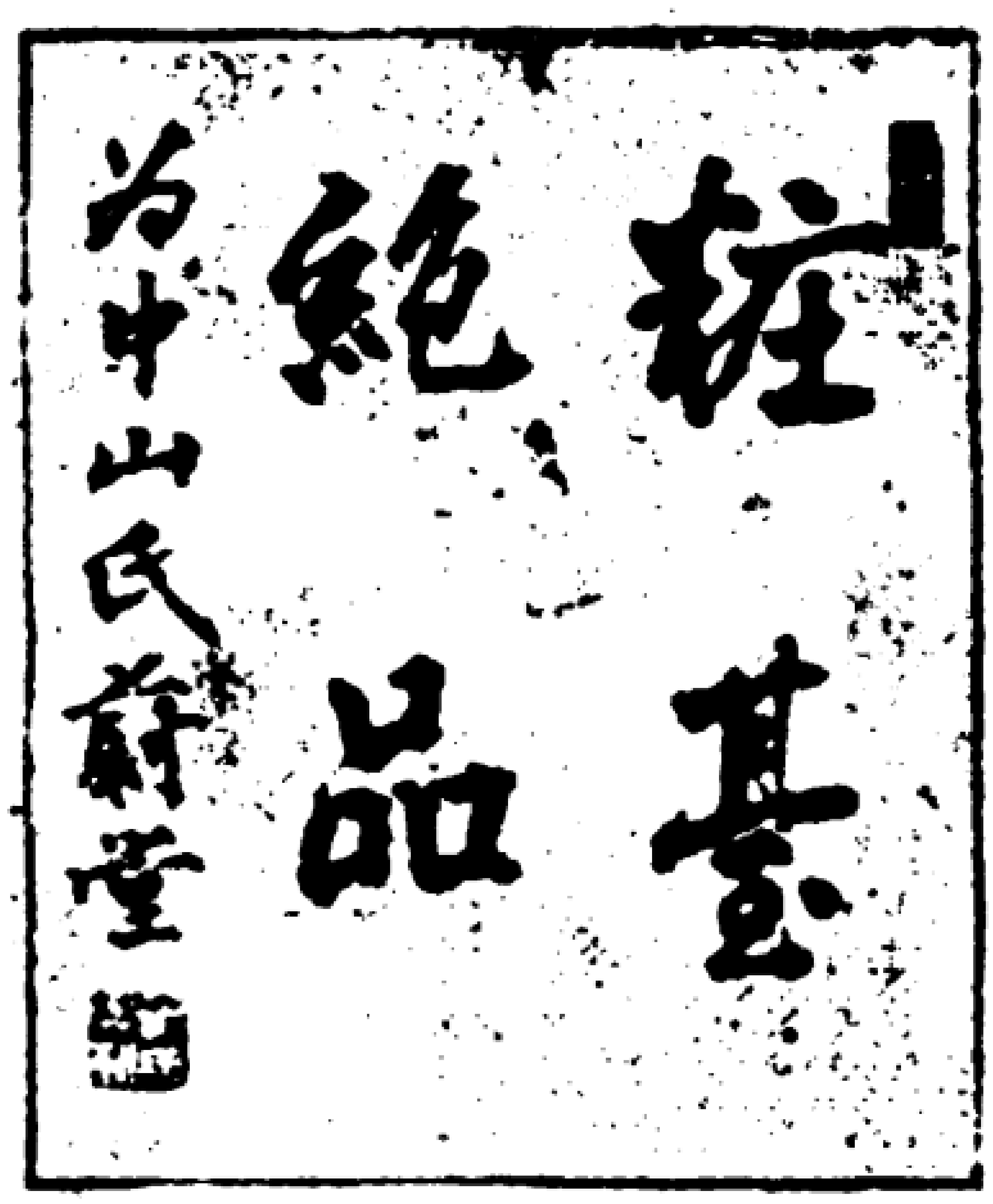
本店新案

■モデルと白粉

岡田八千代夫人談

化粧映と申しまして深く研究もいたしてをりませんからこれと申す面白いお話も御座いませんが、よく主人などはモデルを使ひます時、そのモデルが白粉をつけてまゐりますと、特別に白粉をつけた顔を描くといふ時のほかは、顔が青く見えるからと申しまして厭がるやうで御座います。矢張り好い洗粉なんぞでよく磨いた素顔の方が喜ばれるやうでムいます。それから手と足の化粧などもモデルには大切な事と存じます。幾ら美しい顔を持つて居ても、手や足が鼠色をして居たのでは畫になりませんから、之にもよく困るやうに見受けられます。折角綺麗な花を持たせても、指の折目折目の皺に、黒く垢の這入つた指ではとても品がよいとは申されませんし、いくら意氣な吾妻下駄を穿かしても、踵がかさ／＼と破れて皮が剝けて居ては困る事があらうと存じます。化粧と云ふものは其時ばかり注意するよりも平常の心掛が一番肝心であると思はれます。

秋元子爵筆蹟



子爵はクラブ歯磨の愛用者

クラブ川柳

蠻殼も陰ぢやクラブの愛用者　△△子
居候鳥渡クラブの瓶を嗅ぎ　同人
女客あとへクラブの香が殘り　京丸
齒磨はクの字でげせうと通が言て　同人
藪醫者は虫齒をクラブで全治させ　許棒
名物の水とクラブで磨き上げ　突飛

美容問答

●問　妾は種々の石鹸を使つてゐますがどうも顔が荒れて仕方がありません何か別に良い品はありませんか（荒性の女）

▲答　御尤もです、石鹸にはアルカリ性がありまして皮下の脂肪までも分析する結果皮膚を荒して艶をなくすることがありますがそれには舶來石鹸に優るクラブ洗粉などお用ひになればそんな患はムいますまい（係）

●問　妾は近頃歯痛で困つて居りますが全治法があれば教へて頂戴（心配女）

▲答　さうですねクラブ歯磨を日々お用ひになれば口臭、口熱を防ぎますから自然歯痛のおそれもないやうになります（係）

●問　一寸お尋ね申します普通の無鉛白粉は附きや伸びが悪いのですがどの白粉がいいでせう（小町女）

▲答　お尋ねの白粉にはクラブが最も適してるだらうと思ひますクラブ白粉をお用ひになれば無鉛でツキもノビもよくそして高尚な化粧が出來ます（係）

造花術獨習の唯一機關出でたり

此際入會者に限り種々の特典を與ふ

會員募集

通信教授科目

梅の花、忘れな草、八重櫻、つゝぢ、藤の花、桔梗、朝顔、すみれ、南天、庚申ばら、薊、撫子、百合、牡丹、スウヰトピー、チューリップ、葡萄二種、其他和洋花簪數種、材料の製法等本會獨特の技術に近來更に歐米の通信教授法を參酌して改良を加へ其上器械、材料見本まで取添へてありますから誰でも容易に出來ます

美術造花通信教授

製品見本並に規則書は郵券十錢送れば送呈す

本講義の特色

花瓣の裁ち方、造り方、葉の造り方、花簪の組立方等總て造花に要する染色法並に器械の使用法に至るまで一々圖解を施したる新工夫の說明がしてありますから直接敎師から習ふと同一であります全く素人の方でも前記器械を以て形を造り見本と比べて組立つる時は至つて容易に熟達します。

速成二ヶ月卒業會費全學期分金三圓也

東京神田西小川町一ノ一 美術造花講習會 振替口座東京九一四八番

◎造花材料營業目錄御入用の方は左下方の切取に郵券二錢を添へ東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

造花材料書籍

科目

造花器具及材料。造花及半製品。摘細工材料。袋物材料。刺繡材料。造果材料。瓶細工材料。

實用造花自在 正價一圓廿錢 郵稅八錢

實用造花圖譜 正價一圓 郵稅六錢

◎造花自在は造花の秘術を說き盡す造花術秘密の鍵にして◎造花圖譜は七十一花種の瓣、葉、萼等の切形に一々鮮麗なる石版數度刷の着色を施したる者なるを以て斯技に就事する者必携の好著なり

◎造花書籍內容見本御入用の方は左下方の切取に郵券二錢を相添へ東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

東京九段坂 吉住商店

特長電話番町二〇五六番

振替東京六六七九番

切取り線

女學世界五月號

女(いの二)



女(いの三)

煉香油

パール

東京日本橋區橫山町三

本舗 平尾銑也商店では

尚此外美髪香油としてA印ポマードと申して無類の特製品もあります、其他專賣特許になりました、スミレ黑香油などは最も艶氣のない赤い毛の方などには重寶がられてをります、皆さん毛髪を大切してその毛の色光澤を美しくなさいますには以上の香油をお使ひ遊ばせ



女(いの四)

殘花見る窓





最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
醸造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

女(ろの二)

THE GIRL'S GRAPHIC.

少女畫報

第一年第五號定價拾五錢郵稅一錢五厘　六冊税共九十錢　十二冊一圓七十五錢

編輯顧問

高嶋平三郎　倉橋惣三兩先生

▼口繪　新緑　平福百穗　五月の朝　竹久夢二

畫報

▼つみ草……▼白き傘▼遠足▼花あやめ▼鏡
▼行春のある夕…▼合のり▼汐干▼その花頂戴！
▼修業式と卒業式▼動物園▼飯事▼上つた／＼！
▼上から見れば…▼理髪室▼門前▼面白い懸賞寫眞

三十有餘の美しい寫眞は悉く少女の活動ぶりを載せてあります

讀物

あぶない／＼……高島平三郎
（三輪田高橋）兩先生の少女時代……
（小説）達哉さん……長谷川時雨
女學生お化粧法…宮田修
（小説）露子の夢……生田葵
柏餅と摘草料理…手塚かね子
同情すべき秀子さん…谷江風
（少女小説）養女……尾島菊子
（小説）雪枝さん……佐々木邦
（探偵小説）二人少女……松山泰一
校長先生と記者との問答…
（小説）長い顔の花嫁…黒田湖山

□繪ばなし……夢二
□紫式部と國依姫……
□面白い狂歌のお話……
□藤花と鯉の自慢競……
□お伽唱歌……春風
□多美子さんの便り……
□新案爪袋の作り方……
□少女ノートブック……
□郊外散歩は如何？……
□ポンチ繪ばなし……
□一口噺……
□繪手本……跡見玉枝
□字手本……多田令子
□文學遊戯……
□頓智問答……
□繪探しと判じ繪……
□□懸賞　和歌作文其他いろいろ……

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八



千代田香油

(嬉しいこと)
美ちゃんの赤い毛も、花ちゃんの縮れ毛も、芳ちゃんの脱毛も頭垢も、皆美しくなりました、之れ全く千代田香油の賜と喜んで居ります



定價
金七十錢
金三十五錢
金二十五錢
金十七錢

英國製スワン石鹼日本一手發賣元

本舗 東京馬喰町四丁目 振替東京二〇五〇〇 山岸三之助 電話浪花三七九三

大阪支店・・・大阪南區堺筋鰻町二丁目七番地

英國製 スワン浮石鹼

家庭用

○入浴用にも化粧用にも安心して使へる最も純良な石鹼
○何處の御家庭でも盛んに愛用される最も重寶な浮石鹼

千代田香油本舗 山岸三之助



僞物あり スワン鳥に御注意を希ふ

つゆの晴間



佐々木林風画

御懐中紙入



刺繍、綴珍、蜥蜴皮、鰐革、印傳、蒲團皮、生地皮及其他古代烈各種

男持
拾五圓　拾圓　八圓　七圓五拾錢　六圓　五圓五拾錢　五圓　四圓五拾錢　四圓　三圓五拾錢　三圓　二圓五拾錢　二圓

女持
拾二圓　拾圓　八圓　六圓　五圓五拾錢　五圓　四圓五拾錢　四圓　三圓五拾錢　三圓　二圓五拾錢　二圓　一圓五拾錢

●各地逓送料は內地十二錢臺灣清朝共三十錢郵券代用一割增

賣品目錄　煙草入、烟管、烟管筒、緒締、金銀前金具、婦人御簪、千代田袋、銀貨入、金銀盃類、寶玉石入指輪、金銀眼鏡、金象嵌類、金銀赤銅象牙唐木パイプ、金銀製振出し箸、卷莨入、蒔畫古器

貴金屬美術細工袋物商
東京市京橋區南傳馬町三丁目
丸屋商店
電話京橋二一番　振替口座第九五八六番

專賣特許

エンゼル香油

田原藥學博士の實驗御證明　清浦子爵家高山三兩博士の實驗有効御證明東京美術學校千頭教授の實驗有効御賞賛狀其他大家より多大の高評を以て迎へられたる特許エンゼル香油は毛髪を黑化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる「ヘリオトロープ」「バイオレット」「ホワイトリリー」等の高雅な芳香を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升



◎實價は小壜六十錢中壜壹圓大壜壹圓八十錢と天性縮毛用特製三圓五十錢の四種で送費は市內は何れも七錢內地は小中壜迄は十一錢大壜及び特製十五錢です▲代金引替は一切謝絶す▼

東京市本郷區東片町十五番地
エンゼル商會
電話下谷二五六九番　振替東京二〇七四三番

女(はの一)

東京の貴婦人はナゼ美しいでせう!!!
▲其れはこの様にしてみがき立てるからであります

美顔と化粧法

定價送料共金三十七錢
切手代用は金四十錢

目次の大略▲色白くなる方法▲赤き顔を桃色にする方法▲シワのよらぬ方法▲キメを細かにツヤを出す方法▲日にやけるを防ぐ方法▲齒を白くする方法▲手の色を白くする方法▲髮の毛を黑くする方法▲毛のぬけるを止める法▲毛をのばしつやを出す方法▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法ふとる法▲鼻を高くする方法▲聲をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の撰び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模樣と縞柄▲衣服の縫ひ方▲衣服の着方

此外いろ／＼の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其効果も面白い程あらはれます。私方へ二錢切手十五枚又は一錢五厘切手廿枚御申越し下されば一千部限り特別に御分ち申上げませう

本書著者 東京神田錦町三ノ二 高柳孝子

●色白くなる

私は色々様々の化粧品など用ゐても効なき處今回ふとした事にて色白くなりました。嬉しさの餘り皆様に御吹聴致しました處、澤山の御禮狀を戴きました。返信料封入御照會あれば委しく御知らせ致します。

東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

見よ●月經なき女子●病める婦人

▲勿驚……藥力最稱賛…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物



其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學にて專用病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

●肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと／＼肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと／＼ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顔赤●にきび●ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり暫て美顔窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸嬢姉の福音



一劑一圓五十錢 三劑四圓卅錢 送料十錢
二劑二圓九十錢 四劑五圓半

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替貯金〇六七七番 小宮愛生堂

女（はの二）

わきが ラピヨー

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐せしむる悪臭を根底より全滅作用を有する最近發見の特種頑固劇烈なる腋臭症の新劑にして如何程の[illegible]決して再發せず[illegible]●しらくも●等すべて類似の皮膚病に對し●いんきん●た[illegible]速に用[illegible]卅錢特別[illegible]頑固症用貳圓五拾錢

[illegible]下し リルピニ

本劑は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三ヶ月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊ひよ極安全に流經す本劑は効能極て强烈なるも毫も子宮身體に害なくたやすく下る月經不順より起る子宮病を全治し古血を一掃す近頃怪しき類似藥續々顯る用藥者[illegible]名に注意あれ●[illegible]劑六拾五錢壹劑壹圓廿錢特別製貳圓廿錢參圓五拾錢

ぢを治す

從來迂遠なる内服藥に治療を委ね適切なる治方を講ずる者少し本[illegible]近世醫學界の貴重なる新藥を以て座藥に調製し之を肛門内に挿入するも少しも疼痛を覺えず體溫の爲め徐々適切に溶解し直接病患部に作用し穴痔、いぼ痔、烈痔、蓮痔、脱肛、又は痔瘻の初期等痔病一切に對して偉大なる効顯を奏す 價半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢

にきびそばかす

男女青春の時期に多く發生し美花の美貌も[illegible]く醜貌に[illegible]かしむるニキビソバカス吹出物に對し從來の姑息なる外用藥に依らず内服藥の力を以て皮膚間の組織に及ぼし原因的療法を講ずる獨逸皮膚病學博士ウンナ氏の學說に基き調製したる新劑にして[illegible]三四日にして効顯著しく輕きは一劑重きも特製にて根治す本劑は色を白くする効著しければ[illegible]用ひて天賦の美貌を全ふせよ●半劑五拾錢●壹劑壹圓●特製貳圓

注意（一[illegible]包料拾貳錢と●ラピヨン●ハンドコロン●ヘグネス●ラキセ藥●ぢの藥を御注文の方は外に小包實費三錢と都合拾五錢藥價の外に拂込下され度▲爲替は神田猿樂町局振宛

色の白くなる ハンドコロン溶液

本劑は獨逸貴紳淑女紳士間に大高評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥と大に性狀を異にし本劑の力に依り皮膚の新陳代謝を盛にし且つ漂白性あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に白色艶美となる 價A印並製壹圓 B印特製壹圓五拾錢

毛のはへる 毛髮生養液 原名ヘグネス

本劑は最も進歩せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛芽の發育を速にし完全なる毛髮叢生す又本劑は拔毛を止むる効能著しく又常に香油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき無名の賣藥に迷ふ勿れ 價並製壹圓卅錢特別製貳圓

りん病 キーロン

本劑は最新の治淋藥にして急性慢性の淋病もうがちも速に輕快を覺え膿血次第々々に止り痛み止め輕きは一劑重きは二劑分にて慢性には特製を用ゆ速に奏効す本劑は內服すれば强度の殺菌防腐液となりて小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を驅逐し人知れず病根を斷絶す輕症用六十五錢重症用一圓廿錢特製頑固症用貳圓廿錢

梅毒 ギーネル

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして忽ち全身の毒もなく小便に[illegible]とり 如何なる劇烈の梅毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそう●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必ず大効あり輕症は半劑急性重症は二劑用ゆ醫て奏効す藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

らい病 ダービン發見の

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服用し得る樣幣館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者なり本劑に優る者なしとして其有効確實なる試に一劑分丈けにても用ゐよ必ず大効あり一劑廿日分二圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

專賣 東京神田區小川町四十 オリエンタル藥館

女（はの三）

ネルの着もの



田中竹園筆

◎附錄刺繡下圖寫眞挾の圖石版印刷◎

五月號 新女學

■東伏見宮妃周子殿下の御高德……駿東女史

○男子も及ばぬ健氣なる支那婦人……犬養毅

■我子に嫁を娶らなる……三輪田眞佐子

○食物の話……後藤博士

■七轉び八起……（惟精會會長）龜井櫻悟

（口繪）

◎横顏……藤島武二 三色版

◎作圖法の要領……木村淡香 石版口繪

◎あぢさゐ（表紙）……杉浦非水 石版彩色

寫眞版

◎九條公爵夫人惠子の方◎活花の挿花（高木連水軒）

◎牡丹の刺繡額面◎佛光寺裏方澄子の方

◎間々田たま子孃◎松の門三艸子女史（八十一歲）

◎原安民氏の食堂と臺所◎其他數十種入

▲動物の結核と牛乳……佐藤愛淳

◎筍の話……大木學士 ◎茶の話……山田學士

▲今の裝飾と昔の裝飾……堀田午吉

◎新式七曜表のおさいく……杉山みち子

▲入梅前の衣服と家具の仕末……井上秀子

◎春持手提袋の編み方……山田さめ子

▲鬱憂なる良人を持てる妻の心得……高津正嗣

◎端午の御料理……金風樓主人 ●ダリヤ栽培法……千葉晩香

◎家庭と毒草……廣田花洋 ●半襟と帯……木村淸香

◎食堂と臺所……原ちよ子 ●家庭漫錄……宮村櫻園

◎私の入學當時……美波子 ●俗話と大和民族……戸川晩花

◎卒業後（小說）……加藤攀子 ●歎談松の門三艸子……野口梅溪

一冊二十八錢 郵二錢五厘 ●半ヶ年前金郵税共一圓六十八錢 ●一ヶ年前金郵税共三圓二十四錢

東京日本橋 大倉書店（振替東京二三八番）

奥様

方は今迄に……在來の鍋……「アルミ」や「セト引鍋」に就いて充分の御經驗がございませう　アルミは體裁優美ですが長く保たず　セト引は剝げて直にいけなくなりますのは申上げなくとも御承知の事でございませう　と言つて此純錫引鍋は何う云ふ特長があるのでせう？

衛生上無害なのは申迄もなく　劇しく使つて剝げもせず穴もあかず、輕くつて**老人小供**方にも樂に取扱ひが出來ます　又耳に鐶が着いてありますから、どんなに猥狽ても火傷する恐れがありません故、學校で習つた割烹の御稽古などには最もよろしいので**煮立ちの早い**事と飲食物の味をよくする事は妙でございます。地が鐵ですから丈夫で安心して使へます

要するに**便利で經濟で現代的の食器**といつたら此錫引の右に出るものはございますまい。而も直段が非常の割安です

是非**一度**御試しを願ひます　直接御注文下さるよりも最寄の金物店へ御命じ下さる方が御便利でございます

理想の純錫引鍋は現る



全國金物店ニアリ

内務省衛生試驗所試驗濟
警視廳檢査濟

※印 スヾナベ

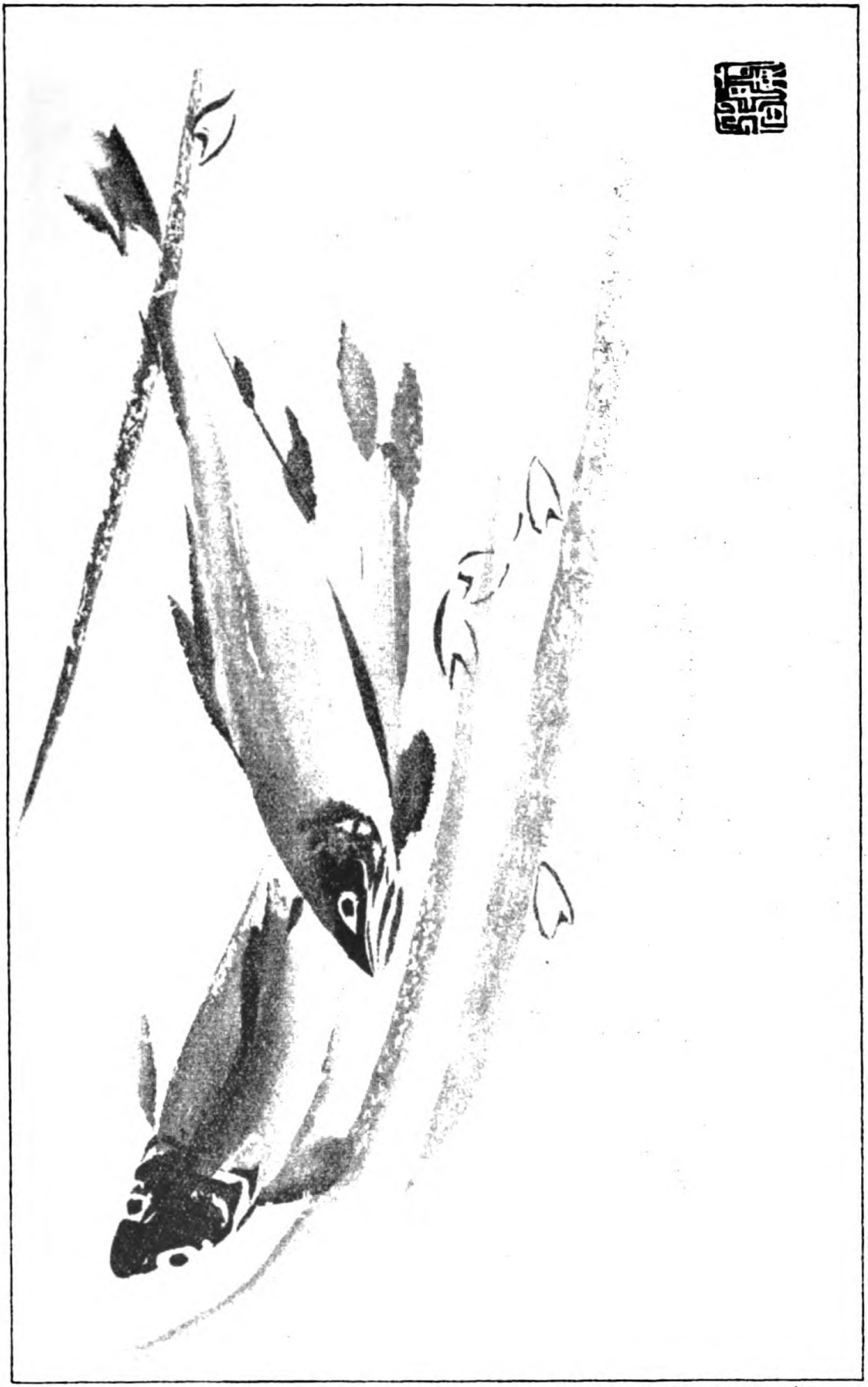
衛生無害
堅牢優美

一手販賣元
東京日本橋小網町
釜七本店

杉柾フタ付

六寸	二十錢
六寸五分	廿四錢
七寸	廿八錢
七寸五分	卅二錢
八寸	卅七錢





若鮎

河端玉章筆

博文館 圖書陳列所 館内にあり

隆鼻術（はなたかくするほう）

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

午後 夜間

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番

女子文壇化粧問答顧問藤波芙蓉先生實驗發明

美髮劑

コールドクリーム

艶肌劑

●美髮劑定價 小三拾錢中五拾錢 大瓶壹圓▲同特製 香油壹圓五拾錢各 小包八錢市內四錢

●クリーム定價 壹瓶金壹圓 小包八錢市內四錢

●艶肌劑定價 壹瓶金六拾錢 小包八錢市內四錢

●内地の外は送費各三拾錢●代金引換小包謝絶●郵券代用壹割増●本品は先生特許の化粧品なれば本社の外一切販賣店なし●本品は世間にある品と異り一切粧飾せず實用專一なり速に試みよ

專賣元 東京市京橋區大鋸町 振替口座壹七貳九 女子文壇社代理部

春と婦人衛生

婦人科專科某病院長の談話（安全堂主人筆記）

若い令孃方が初期の月經を見るのは多く此春季ですが此際には餘程御注意なさらないと意外の病氣に罹る事がマ、御座い升、初は誰も親に話すのが恥かしい者ですから、ツイ不潔な物で用をたして病毒に侵され子宮病やヒステリー等に罹るのが多ふムい升、私の患者にもコンナのが澤山有升、ソシテ其人達は皆良家の令孃方なのです、其一人は病毒を含むだ手巾から（多分其家に痳疾の方が有たのでせう）若い身空で消渇になつて居るのです、其他月經初期の婦人でなくとも不完全な防經を爲さるゝ爲めに傳染性の病氣に罹る人が澤山有升、併乍ら予が友藤川藥學士の發明された安全帶は歐米婦人の月經帶と同一ですから是を御常用になれば前隙の危険より全然脱する事ができます



定價 安全帶●甲壹圓廿錢●乙八拾錢●並五拾錢（各一本で四五年使へます）安全衣●壹打金四拾錢●内地送料一組（帶・衣共）金八錢、餘は一組毎に貳錢增し●代金引換小包料一組金二十貳錢 清、鮮は卅錢

本舖 東京下谷區池ノ端七軒町四二 振替（東京）壹六九貳〇番 安全堂

關西代理店 大阪西區阿波座上一電車道角 振替（大阪）壹壹四六壹番 洋々堂分店

女（ほの二）

女（ほの三）


露を含める
菖蒲の活花
活々として
水際だつた
大學白粉と
ツバメ洗粉との化粧
ツバメ香水のかほり
其ゆかしき風情
そのあでやかな姿
何人も詠めあかぬ心地やせん

竹田宮妃昌子内親王殿下



姫踊[illegible]



實業家山瀨良之助氏令孃あつ子、右)(わき子左)


ZEOZON
日やけをふせぎ
色を白くせんとは
ゼオゾーンクリームを
使用せらるべし
定價金壹圓
（ウンナ教授報告書申込次第無料郵呈）
東京日本橋室町三丁目
三共合資會社


毎朝揚枝を使ふとき
食後及寢に就くとき
小児の口中を拭ふとき
オドールは
口中を
清潔にし
歯牙を
保護す
定價 大瓶金壹圓拾錢 小瓶金六拾五錢
本品數滴を水に落加して
使用て御覧なさい
東京日本橋室町三丁目
三共合資會社

女（への二）

毛のはへる藥

多年實驗の十毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓●三圓半●送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價（一週）七十錢（三週）二圓（五週）三圓二十錢●送費十錢



◀にせ物ありご注意▶

リウマチス根治劑

驚く可き天下唯一の保證　藥禮狀山の如し

七日分三十五錢　半劑七十錢　一劑一圓三十錢　二劑二圓四十錢　送料八錢

方名パウル氏丸は獨逸醫學大博士パウル先生發明の靈藥にして其効驗の確實なる實に神の如し如何なる難病のリウマチも此藥二劑にて奏効す證明禮狀寫希望の方申込あれ送呈

（全快禮狀店內に保存す）　**新宮藥館**　（東京本郷三丁目　振替一二五八四）

電話下谷五一四六番

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒りん病　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人病　わきが　ぢ

東京淺草瓦町廿八　淺草橋通瓦町停留場横

中央醫院

ぢ　諸病　梅毒（横根　下疳　全身梅毒等）　りん病　消渇

子宮病　血の道　月やく　とまりたる病　子なき婦人

生殖器諸病　神經衰弱症

記憶力減衰　思考力症等　生殖器病　萎縮　遺精　早漏　夢精　發育不充分症等

わきが　きき人　色の黑きき人　にきび　ふきでもの

そばかす　あれ性　皮膚諸疾患　いんきんたむし　蟲等症

▲病狀記し郵劵四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地　淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

女（への二）

婦人之友

樂天號　五月一日發行

▲斯る逆境に在りて平然たり…江原素六

▲余は幸福な人と思ふ…長井長義

▲樂天的南無阿彌陀佛　西巻都兒子

▲規律正しきと淡泊なること…山脇房子

▲生活問題を超越せよ　內ケ崎作三郎

▲輕い氣分で事に當る　棟居美智子

▲私の樂天主義…棚橋絢子

▲私の自然より受くる慰藉…野口幽香子

▲眞の樂天家…長谷川喜多子

▲キヤベージ畑の寡婦…三谷民子

▲如何に艱難に處すべきか…松野菊太郎

▲運命に安んずる生活…小崎千代子

◎お婆さん　文學博士　三宅雪嶺

◎樂天家となる修養　羽仁もと子

◎危險なる子守の背

◎十年間の物價しらべ

◎洋傘の研究

◎サンドウキッチの拵へ方

定價一冊金十八錢郵稅一錢五厘　半年分郵稅共一圓八錢　一年分郵稅共貳圓十錢

東京小石川雜司ヶ谷町　振替東京一一六〇〇番

婦人之友社

電話番町三六九八

（女への三）



ランラン香油は
毛髪の艶が
見違ひる程に
美しくなり升
一度御ためし
下さい

定價 廿錢 三十錢

大阪新町三
福田源次郎
東京馬喰町三

箏曲通信教授所御撰定
新案特許願六六四三八五號
琴曲大家御證明付

坂本式 琴糸志め機

定價特製金四圓五十錢並製金三圓五十錢送料十二錢
海外送料四十錢

◎本品の特色

一此琴糸志め機は從來の物と異なり機械完全用方最も簡便にして御婦人方は勿論子供にても易く志め得らるゝ機に出來て居りますから如何に素人のお方でも僅か二三分時間にて十三の糸を自身の思ふまゝに志めたりゆるめたりする事が出來ます

一此機は少しも琴の糸をいためる事なく且つ其形を傷くる事もなく之を裝置すれば反て裝飾となり從來の優美なる琴の形に一層の光輝を添ゆる者で有ります

一此機械を裝置すれば琴の音色が著しく良くなります

一例へば十圓の琴は二十圓以上の音色となります

一此機は二三分時間にて糸を志め又はゆるめる事が出來ますから演奏會などにて三絃尺八其他の樂器と合奏を成す場合に琴柱を動かさずして自由に調子の上げ下げが出來ますから大なる便利を得られます且つ音色が良くなると調子の自由が利きますから假令半琴をお持ち遊ばしても其効力は本間のお琴と異なる事はありません

此他種々の特長を有す愛琴諸賢速に之を備へて斯界の指導者と成り給へかし御注文の際は御所持の琴が生田流の琴か山田流の琴かを御書添へ被下度願上候

發賣元 振替福岡四四四番 福岡縣福岡橋口町 **勝野樂器店**

女（へあ四）

令嬢かゞみ

紅きは躑躅、淡きはさつき、花とりどりの思ひは燃ゆる五月雨の日や、空にひと聲ほとゝぎす、誰が玉章をかけて飛ぶらん。



右　静岡縣富豪松城兵作氏令嬢、　左　國民英學會長磯部彌一郎氏令嬢文子（學習院女學部）

坂正臣翁の歌の會



坂正臣氏門下の人々が毎月先生の邸に催さるゝ歌會小集の光景なり。
左より坂わかな子、本堂男爵令孃壽子、安達澄子、近藤多喜子、石田茂子、
石黑八重子、藤倉光子、平井とみ子、牧野子爵世嗣夫人牧野悅子、


御待兼の
象印兩面盤
吉住小三郎の長唄
新作十二ケ月
小さん圓太郎の落語
染太夫呂昇の義太夫
樂遊重友の浪花節
其他壹千餘種
多數到着仕候
◎新作十二ケ月書本
◎スタークトーン象印兩面盤歌集
刊行
スタークトーン兩面盤
支店
九州福岡
大阪南區順慶町四丁目
東京市淺草區駒形町
北海道小樽
電話南三二一八三番
振替口座大阪一五一四七番
電話長下谷九八八番
振替口座東京一九八八四番
東京銀座一丁目
三光堂本店
長電話京橋九七八
九七九
定價表目錄は
御一報次第贈呈



衛生無害 えびが染（ヘーヤダイ）金二圓五十錢 金一圓（小包料八錢）

本品は最近の發明にして身體に害無く且つ良好にして眞黑に僅か拾分間にして染むす

ちゞれ毛くせ直し（複法ベント） 定價一函九十錢（小包料一個に付八錢）

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛、くせ毛も立ち處に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

毛はへ藥（エフ、ビコール） 定價（大壜一圓五十錢 特製金三圓）（小包料一個に付八錢）

本劑は頭髪は勿論眉、口鬚及び陰部に至るまで凡そ毛の生ずべき所に皮膚病其他の故障の爲め生毛せざる者又は發生せるも極めて微弱なるに塗抹すれば其効能頗る確實に現はる

生毛強壯劑（エフ、トニツク） 定價（廿日分二圓五十錢 十日分一圓）（小包料十六錢八錢）

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして根本的に毛髪を美化するにありされば身體強健血行良好となり皮膚腺の分泌を盛んにし毛根の營養を能くし從つて薄毛、細毛、赤毛、白髪等に連用せば奇効あり

美髪法

右三製劑の内容を知り美髪の目的を達せんとするものは必ずこの『美髪法』を讀め。郵券二錢封入御申越あれば直ちに贈呈すべし

發賣元 東京市本所區外手町八十七番地 振替貯金口座東京二〇八二五番 深澤國華堂

女、との二）

女(その三)

令孃かゞみ





上圖　子爵阿部正功氏令孃直子（學習院女子部）
下圖　京都素封家鹽見氏令孃千賀子

明治母の會送別會



神學博士平岩愃保氏が頃日神戸關西學院長に推されて彼地に赴かるゝに當り、明治母の會の會員諸氏が、本郷中央會堂に惜別の小集を催されました、本圖は當時の紀念撮影です。

貧血症の御婦人　產後や病後の方
平素弱いお方　乳の不足の方
發育不良の兒をお持ちの方



にはこの滋養強壮剤ソマトーゼを御服用なされます様おすゝめいたします。

ソマトーゼは血液を濃厚にし體量を増加し元氣を旺盛ならしむる卓越の滋養品なれば總て身體、氣力の衰弱したる人、病中、病後、結核肺病、其他神經衰弱患者、熱性病者の滋養品として偉大の効を奏します

百瓦入五十瓦入の二種として全國の藥舖に販賣す

發賣元　バイエル會社

色白く美人

となる内服外用の二種新奇藥を輸入發賣す内服劑は飲んで體内の悪血毒血惡液を體外に排泄し血液を淸淨にし根本的に肉色を純白艶美ならしむる奇効顯著確也外用藥はきめを細に艶を出し肌を滑に皺を伸し色白くする特効確也双方併用せば偉大の奏功忽ち顯る内服用壹劑貳圓九拾錢外用壹劑貳圓拾錢當今即刻小包送藥す

月經閉止（つきやくとまり）

如何程長きにて困難せる婦女子に告ぐ頑固の月やく不順閉止停滯及び流經する最新の奇藥血塊にても忽ち快進流經あり早く試よ峻烈偉大なる特効直に顯る價壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢特別製分貳圓卅錢近時無効類似藥多し御注意を乞ふ

腋臭根治新藥（わきがねきりしんやく）

いか程頑固慢性の腋臭も誓て根治し決して再發或は他病に變ぜざる最新發見奇藥あり他藥にて効なき患者は速に試み病根を斷絶せよ藥價輕症用九拾錢重症用貳圓拾錢頑固慢性症用特別製分五圓貳錢當今小包郵送す郵券代用は必ず貳割增しの事

腦病根治 記憶增進劑

腦病神經衰弱に基因し記憶力消耗し物事忘れ易く讀書するも理解せず記憶力思考力缺乏し常に頭痛逆上して諸事あき易く根氣なく困難せる患者は當館多年實驗發見せる新藥（記憶增進丸）を試よ忽ち頭腦明晰優秀となり記憶力增進し元氣旺盛となり理解力判斷力思考力を頗る强健ならしむる可驚峻烈卓効あり裁判官辯護士新聞記者學生銀行會社員劇務者早く試よ愉快に執務せよ小丸拾錢中貳圓四拾錢大參圓七拾錢特別製分四圓七拾錢

あざ

（奇効顯著）
（最新發明藥）

あざ及入墨は約廿日ほくろそばかす。なまづ。いぼは約拾日にて美麗に除去することの的確なる新藥にて患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも痕跡を殘さず除去し得らる但し其製劑を二種に區別し一はあざ。入墨。ほくろを除去し又一はそばかす。なまづ。いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記し申込あれば其症に適應する藥を指定送付す價は各試用劑壹圓拾錢小劑壹圓拾錢中劑五圓拾錢大劑拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを適用とす）當今即刻送藥す

毛生新藥

（奇効顯著）

本劑（藥名（アーゲワース））は多年研究實驗の結果發見したる毛髮速生藥なり[illegible]げの痕やけどの痕額[illegible]毛なき人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人速生する特効あり用ゆれば毛髮蒼々と速生する特効あり本劑は世にありふれたる種々雜多の毛[illegible]は其効大に異なる[illegible]なく速に試み偉大なる奇効を知らむ[illegible]圓廿錢中劑二圓卅錢特別製分[illegible]送藥す

美容 やせる藥

壹劑[illegible]（藥名[illegible]）[illegible]世界唯一の發明藥にて[illegible]ぶらぶとり、顔赤[illegible]等總て肥滿質多[illegible]害にして著しく醜[illegible]容健康を保ち頗よく[illegible]見苦しくふとりたる[illegible]くべき偉大なる特効を知らむ[illegible]

東京市神田區五軒町十九番地

以上七藥專賣 日新館藥房

電話下谷五四六番
振替東京壹九貳四六番

令嬢かゞみ



五月晴の海のほとり、松は青く、波は白し、そゞろに歩く白衣の袂に、磯吹く風のほのかに漂ふ。

上圖、書家加藤繁子（神田）　下圖、北村ます子（敦賀）

女子高等師範卒業生の宮城拜觀



本年の東京女子高等師範學校の卒業生が、職員に引率せられて宮城を拜觀したる時の光景です



宮内省御用達

醸造元

千葉縣野田町

茂木佐平治

天下一品

最上醤油

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

女(りの一)

第十四回

新學期開講

通信教授 産婆看護 講習生募集

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

規則要郵券三錢

東京四谷區内藤町一

東京産婆看護婦講習會

産婆科六ヶ月卒業

看護科四ヶ月卒業

美術造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋 關口商店

電話下谷四〇五一番

振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノヿ

催眠術

通信教授

誇言を揭げて法外の金員を貪り無責任なる單行本を送付するの類に非ず會員には教授書全部六册を交付するほか永久無料にて質問に解答し又斯學に關する各種學會講義錄著名圖書等希望に應じ遠近不論無料貸送す全學期教授料二圓八十錢三回分納隨意只今入會金全免

詳細案内書實驗錄無代送呈

大阪東區生玉

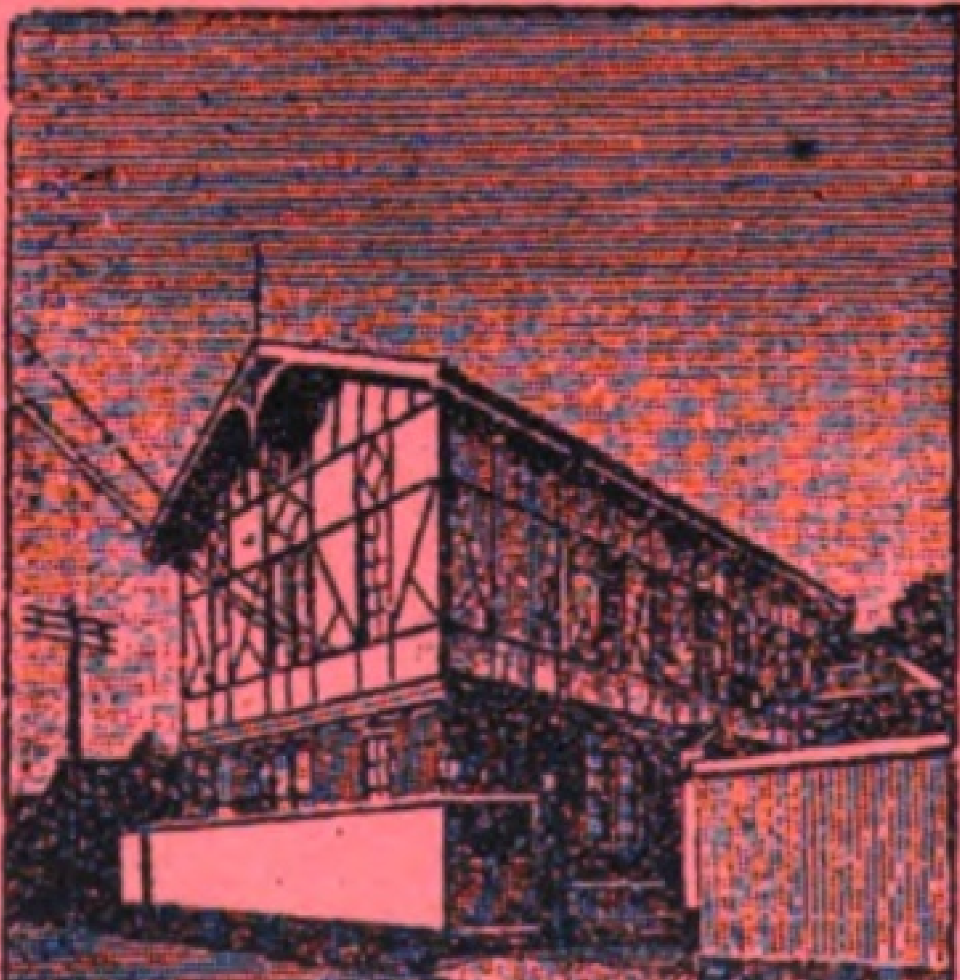
帝國神秘會通信部

男ちゞれ女くせ毛

赤毛は何程の難毛も直に根本的矯正黑化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に敎授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町

岩阪澄子



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

電話本局三八五四番

生徒募集

○本校及東京音樂學校入學受驗科及特別科は何時にても入學することを得

○學科目……唱歌、ピアノ、バイオリン、オルガン、音樂理論、其他管絃樂（オーケストラ）に關する諸樂器等

女（りの三）

女學世界

第十二卷 第七號





流行と一家の經濟

紋服の色目一定と被衣

跡見花蹊

現今男子の禮服は略一定して居りますが、女子の禮服は見受けますところ一定して居りません、餘程雜駁な有様を呈して居ります、私はそれを一定して欲しいものと思ひます。

此事は私の年來の希望でありますが、年老つた婦人は兎も角　若い人にはそれが容易に實行が出來まいと思ひます。

此節は流行の變化が激しいもので、昨年新調した紋附は、今年になるともう着ることが出來ない、來年は又何うなることかと怪まれるやうな有様では、奥様や令孃の着物の新調の爲めに大抵の身上は傾くやうな次第で、それ



も西洋のやうに澤山の持參金でも持つて來た奥樣ならば兎に角ですが、今日の日本の奥樣達は、大抵は御主人に強請つて拵へて貰はなければならぬのであります。此流行を追ふといふことは一家の經濟に取つては實際困ることであります。けれども此厄介なことも、婦人の禮服さへ一定して居れば、全然無くなることが出來るであらうと思はれます。

△規律正しき昔の禮服

昔は紋附の色目といふものは整然と定まつて居つたもので、即ち黑、赤、紫、檜皮、鴇等の數種に紋附の色は極つたもので、今日のやうに去年は小豆色であつたが、今年は何色が流行るといつたやうに年により色目が變るやうなことは決して無かつたものです。

それで其定まつた色も、皆それ〴〵季節によつて何月何日から何月何日迄は何色といふ規定があつて、若い人でも年を老つた人でも、其季節になつて皆同一の色を着たものです。

それから祝儀の時の禮服は、夫婦揃つて居る婦人ならば、幾歳々々にならうとも必ず總模樣の紋附を着用すべきもの、又後家ならば、幾ら若くとも必ず模樣なしで、偶には地紋織のものを着る人もある位のものでした。又葬儀の折には無模樣の白無垢とそんな風に萬



睡蓮や水を離れて水に影　（四明）

事に亘つて一定したものですから、同じ物が古くなつても構はずに着ることが出來たものです。それ故、今のやうに年々歳々流行を趁ふて紋附を新調しなければならぬといふやうなことは昔は決して無かつたものです。

△禮服を斯の如く定めよ

されば今日の如き奢侈の增長した弊風を矯正しやうとするには、昔の禮服の規定を參酌して一定することにすれば可いと思ひます。先づ總模樣の黑紋附に白の下着を祝儀の時の禮服とし、無模樣白無垢を葬儀の時の禮服といふ風に一定することにしたならば、一家の經濟の助かることはどれ程だか知れまいと思はれます。併し是は若い人達の必ず不贊成なことでせうけれども、今日の奢侈の風がます／＼增長して、流行許り趁ふて居た日には、大抵の身代ならば到底立ち行くまいと思はれますから、若い婦人方も此邊はよく氣を附けられて、身の行末の爲め、又は我一家の爲めに、奮つて此禮服一定の事に贊成して欲しいものです。こんなことは先づ第一に上つ方から手本を示されたならば、自然下々も之に見習ふて、今日の弊風も漸々改まつて行くことであらうと思はれます。

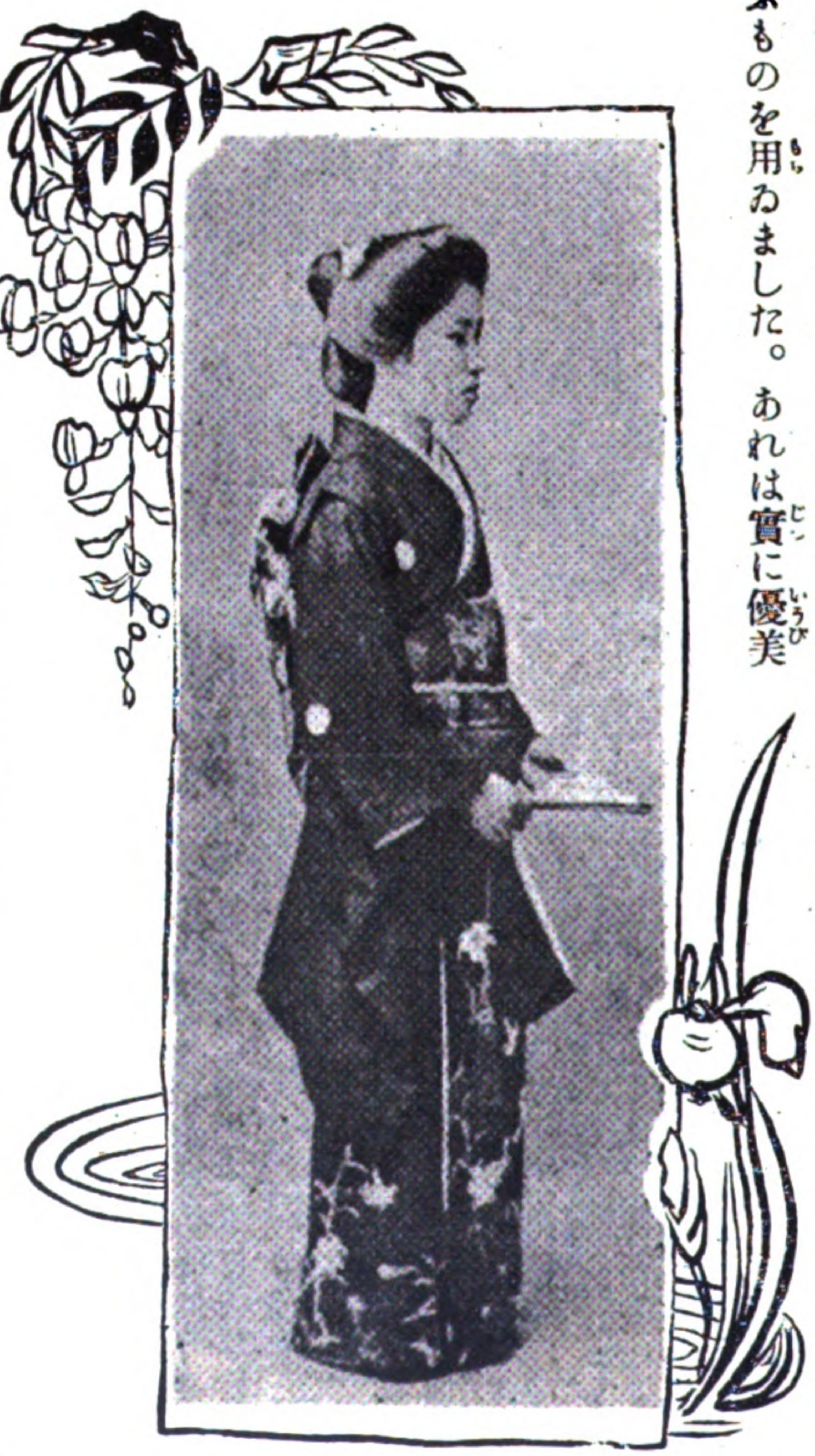


牡丹のせて今戸へ歸る小舟かな　子規

△被衣の復興を望む

事の序に申して置きたいことがあります。以前は婦人が皆被衣といふものを用ゐました。あれは實に優美なもので、地味な色合の絽に家の紋散しに若い人のには眞紅の總、年增以上の婦人のには紫の總などが下がつて、それを被衣針といふもので頭に止め、それで風や塵芥を避けたのです。

被衣を被いて外出すれば、髮が塵芥によごれることも少なく、又多少髮が亂れて居ても目立たないのみならず、此被衣を着ると婦人の姿が非常に優美に上品で、唯では左までゝ無い婦人も大層な美人のやうに見えたものです。東京のやうに塵芥の多く飛ぶところでは第一塵避けとしても至極都合のよいものであらうと思ひます、地質は絽と極つてゐるので、外して疊めばなんの一寸したものに過ぎませんから、決して荷厄介になるやうなこともありませず西洋のベールなどよりも純日本風で、一層優美ですから、此被衣を復興したら何んなに優美で宜からうかと思はれます。



むらさきの雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらん　公任

習つた事は皆役に立つ

棚橋絢子

何の爲に貧乏したか

私は十九の年に棚橋家へ嫁いで、盲目の夫にかしづく身となりました。その當時は生計向きも可なり豊かでしたが、後に追々不如意に陷り、隨分苦勞を致しました。今迄豊かであつたものが如何して急にそんなに貧乏になつたかと、誰でも不審にお思ひになるでせうが、決して身分不相應な贅澤をして金錢を浪費したのでもありませんし、又夫が放蕩をして財産を蕩盡したのでもありません。全く國家を憂へると云ふ心から種種な事に奔走した結果なのであります。私の嫁いだ當時は、丁度維新の際でしたから、勤王の志士が諸國から出て幕府と衝突をしたり、不穩當な事をしたり、誠に内外共に騷がしい時代でした。その頃夫の弟二人も亦非常な勤王家で、殆んど家事を捨てゝ一心に國家の爲に日夜諸方を奔走したのです。私の夫も亦同じ志の者でしたが、何分盲人の事ですから、自分が先立つて如何すると云ふ事も出來ませんので、萬事この弟二人の顧問となつて、いろ〳〵の相談を致して居りました。かうして絶えずこの事にのみかゝつて居ましたから、家産の事などは顧る暇がなく、その爲に漸々二人の家は傾いて仕舞ひました。こんな次第で、自然自分ばかりが財産を握つて居る事は出來ぬから、私共も一緒になつて財産は盡くこの運動費にあてたのでした。收入の途とてはなく、たゞ費す一方でしたから僅かの間に私共も洗ふが如き赤貧に陷りました。併し自分の意志で自分の物を失ふたので、誰の故でもありません、決して惜しいとも殘念なとも考へませんでした。これから私は一家の生計を支へる爲に種々の事を致したのです。

藝が身を助けた事

そこで私が子供の折に習ふた事、嫁ぐ迄に覺えた業は、この時になつて盡く役に立つ樣になりました。先づ第一には自分が好きで習ふた學問です。この學問があつた爲に、學校の敎師になる事が出來ました。そして自分の知つて居る限り、善いと信じた通りを行つて、子弟の敎育を致しました。併し何と申しても女の細腕で、とても學校だけでは足りません。それから家へ歸ると一生懸命に裁縫を致しましたが、この裁縫も十一の年から十七迄熱心に稽古して置いたそれがこの時非常な力で私を助けたのでした。



堀切の花菖蒲

最初は名古屋で小學校の敎師をして居ましたが、後に明治八年に女子師範學校が初めて東京に設けられてそこに奉職するやうになりました。それから又華族女學校へも敎へに出る事になりました。この頃は華族女學校では宮內省から伶人が來て伶人唱歌と申すのを敎へましたが私は子供の折に好きではなかつたけれど兎に角琴も三味線も習ふて居た爲に、伶人唱歌も一番早く覺えたのです。それですから伶人

から私が唱歌を習ふて三つ四つ覺えると生徒に敎へ、又種が盡きると習ふ、そして又敎へると云ふ風にして速成の唱歌の先生も勤めました。これも偏に習つてあつた藝の爲とつく〴〵感謝致しました。この外生花でも茶の湯でも料理でも、人に敎へる迄には行かずとも、一つでも役に立たなかつたものはありません。學問をしたつて嫁に行けば何の役にも立たない遊藝も嫁入の資格を作るに過ぎない、高等敎育など受けたとて寶の持ち腐れだなどと申される方もありますが、これは大きな間違ひで、役に立たないのではなく役に立てないのです。それも貧乏しなければ役に立てられないかと云へば、決してさうではありません。私の樣に目に見えて役に立たぬ迄も、必らず日常のすべての事に役に立てる所があるに相違ありません。

何草と見へずに青く野はなりぬ（抱一）



何でも一番先き

私は不思議に只今迄何でも一番先きになる事が多かつたので、小學校の敎師になつたのも女では私が嚆矢ですし、女で中等敎員になつたのも外に二人の

仲間はありましたが、矢張り一番最初でした。もう一つ面白い事は、女で演説をすると云ふ事も私が初めてでした。丁度師範學校の出來た翌年、即ち明治九年と覺えて居ます今日から見れば演説と申される程の事ではありませんが、兎に角演壇に立つて一言でも二言でもおしやべりをしたのです。當時はそれが甚だ珍らしい事でして、外國の新聞に迄出て、外國に居つた私の友達から手紙で、大層な評判である日本も追々さうなるかと思ふと嬉しいと云ふてよこされました。今度の有がたい御沙汰も、三輪田さんと御一緒ですが、女では始めてださうで、外にも私などよりまだ／＼教育の爲に盡された方もお有りになるにも拘らず、私がその一人に入りました事は全く夢のやうで、これも矢張り廻り合せかと存じて居るので御座います。



つれ／＼のめざまし草と誰もみな
うちの木の芽を愛るなりけり　（忠熈）

△婦人の胃病は子宮病より來る

この病は女子に多くして男子に少し是れ胃自己の病に發するものにあらずして慢性胃カタル神經痛、腹膜炎等によく似たる疾病なれば注意せざれば不思議の災厄にかゝることあり、其原因は月經の異常、ヒステリー、子宮病、痛風、腦脊髓病等より來るとありとは經驗家の説なり。

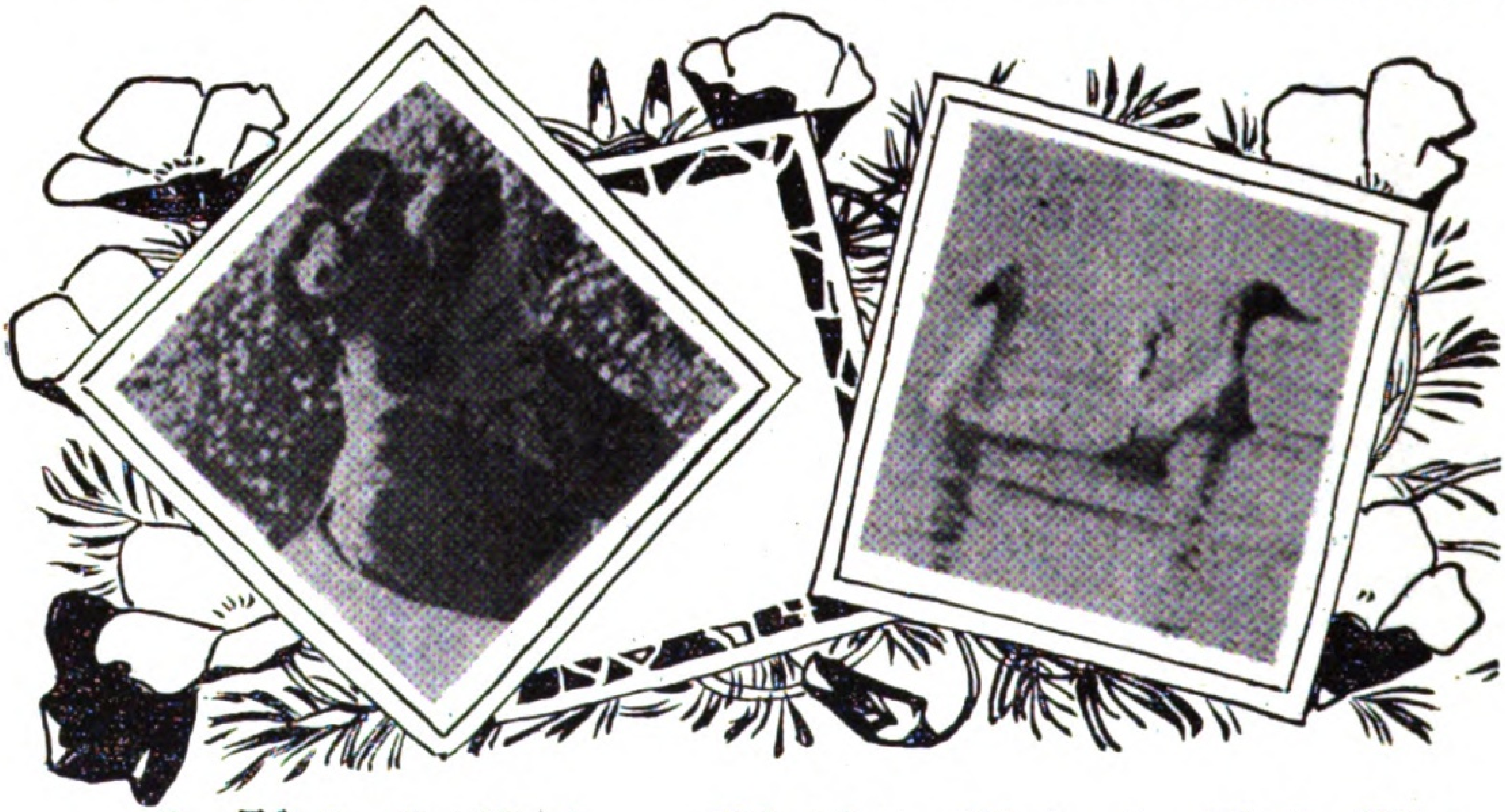


△驚くべき化粧料

ナポレオンの愛妃ジョセフエンは、ナポレオンの后となりしとき、其の化粧料として年十四萬四千圓を與へられたるが、後には十八萬圓を與へられ、是にても尚ほ足らずして、毎年別にナポレオンの補助を仰ぎしといふ。メーソンの統計によれば、ジョセフエンは其の化粧の爲めに、一年平均四十四萬圓を費したりと。ジョセフエンの簞笥を開きて、其の品々を評價せるに、其の額は非常の莫大なるものにて、例へばジョセフエンのズボン釣の如きは、白地の絹地に見事なる縫箔を施せしものにして、一對八圓乃至十六圓のもの一百五十餘種を有せり。又常に二人の髮結を雇ひ置き、其の手當として毎年一人には二千四百圓、他の一人には四千圓づゝを支拂ひたりとは、驚くべき贅澤ならずや。若しナポオンの常識的儉約主義なかりせば、ジョセフエンの贅澤は野火の燃ゆるが如く、佛蘭西の貴族社會に擴がりしならん。而して佛蘭西の一般人民は饑渴に迫るに反し、上流社會は益々贅澤に流れたるべし。

△贅澤なりし羅馬人

貧富の懸隔の殊に甚しかりしは羅馬帝國なりき。羅馬の國民はア



キサンドリヤより來る穀物船の延着せし爲めに、方に餓死せんとする慘狀なるに拘らず、上流社會の者は、唯一回の宴會に於ても何千圓に値する杯を使用し、孔雀の腦漿、或は鶯の舌などを馳走として、巨額の金錢を糟粕の如くに費せり。故に種々なる惡疫は流行し、人々は短命にして死せり。當時の婦人の衣裳は、何れも數寄を凝らし、歷史家プレニーの錄する所によれば、ロリヤポリナと云へる婦人が、或る婚姻の式に列するに、四千萬圓をかけて寶玉眞珠を以て造りたる燦爛たる衣服を纏ひたりと。贅澤と放逸の風は、當時社會の中心を荒廻り、而して當時の人々は之を以て、其の物淋しき單調一律の生活を破り、或は其の失望の苦を慰せんとしたりしなり。

羅馬人は其の奢侈に向つて費したる金額は、殆んど信じ難き程多額のものなり。歷史家スイトニアスの記する所によれば、ビテリアスの同胞が、ビテリアスの爲めに催したる晩餐の如きは、實に驚くべき贅澤のものにて、杯前には、二千匹の鮮魚と、七千羽の珍鳥とを鹽梅し中央なる一皿には、當時の有名なる美肴、雉子、孔雀の腦漿、鸚鵡の舌等價の最も高きが故に之を求めて料理せるものなどありしと。羅馬の滅亡せることと偶然にあらざるなり。

嫁と姑の不和

大阪夕陽丘女學校長　伊賀駒吉郎

△偏狹な心同志

嫁に姑、犬と猿、孰らも仲の惡いものと相場が極まつて、嫁と名が付きや娘でも憎いといふ諺さへある程だ。扨此兩者間の感情は何故に其樣に齟齬するのであらうかといふと、先づ我日本の社會組織では、女は學問をしなかつた爲めに、其思想界が狹いのみならず、社交界に出ることが極めて稀であるから隨て經驗が狹いのであつた。

斯の如く學問もなく經驗も狹いといふことは、其思想界に融通が利かないといふ弱點を生ずる原因となつて、要するに心情が偏狹である。其偏狹な嫁と姑とが、年齡の差異に伴ふ時代精神を異にして居るのであるから、物事に對する見方なり評價の方法を異にして居るから自然兩者の間に意見の衝突を來すことになることであらうと思はれる。

△愛情の移轉

時代精神を異にして居ること丶、互ひに心が狹いから衝突するといふ事は、他から貰つた嫁と姑の仲の惡い原因であるが、自身の娘に婿を迎へて、即ち自分の娘が嫁になつた場合に双方の仲の惡くなる原因を見ることは出來ない。併しそれには又別の原因がある。

それは愛の競爭といふ事情から生ずる不和であらうと思はれる。娘が婿を取らない以前の純然たる娘である間は、其愛情は母たる自身にのみ集つて居たのであるから、それが婿を取つてからも其通りであれば何事も無いのである。然るに婿を取るといふと、其娘の愛情の大部分は轉じて婿の方に注がれるといふことになるので、母の方では今まで自分に注がれた愛を婿に奪はれたやうな感じがするのみならず、母の眼には娘が其婿を愛することを以て、娘が僅かに薄情になつて自分に對する愛情を他に移したと感ずる。

△娘が自分を馬鹿にする

それに實際上から云へば、娘であつた時代は一から十まで萬事母の意見に從つたのであるが、嫁となつて見ると、婿に對する關係もあるから、其意見も斟酌しなければならぬので、一々母の意見に從つて許り居るといふ譯には行かない。それを母の心のひがみから、婿を取つた爲めに娘が自分を馬鹿にするやうになつたと思ふ。それに婿と嫁には年齢といひ境遇といひ、大體に於て類似して居ることが多いから自然兩者間の意見も嗜好も一致し易い、新夫婦の間柄が斯くの如くして親密の度を高めるに隨つて、母と娘との關係が多少親密の度を減じて行くことになるからして、遂には娘でも憎いといふ諺に唱はるゝやうなことになるのである。尤も人により、更に其外の或る原因も加はつて嫁憎の感情を盛んにする特例も無いではないが、大體の原因は、斯の如き些々たる事であるやうに思はれる。



瓶水に浮べる星のうつるかと見ゆるは夜中の螢なりけり　藤原眞經

藤若葉牡丹花咲く野茶屋哉　花紅

葉柳や洗馬の水といふを見る　乙鳥

銀瓶に水さす夜半や時鳥　月斗

眠氣覺しかた〳〵機や時鳥　禾水

學校時代の希望と實社會の狀態

ミセス、コーツ

△受けた敎育と實地の經驗

世間では女子を敎育すると生意氣になるからと言つて、敎育を怠る人がありますが、これは甚だしい間違ひです。敎育を受けて種々の事を知れば知る程、自分の無學に氣が附いて來るもので眞の敎育を受ければ、生意氣になるどころか、反つて謙遜る樣になつて參ります。學校で敎はつた事は實社會へ出て如何いふ必要があるかと言ひますと、それは直ぐ役に立つとは申されませんが他日實社會へ出た時に種々の事柄を處決する頭腦を拵へて置くのであります。

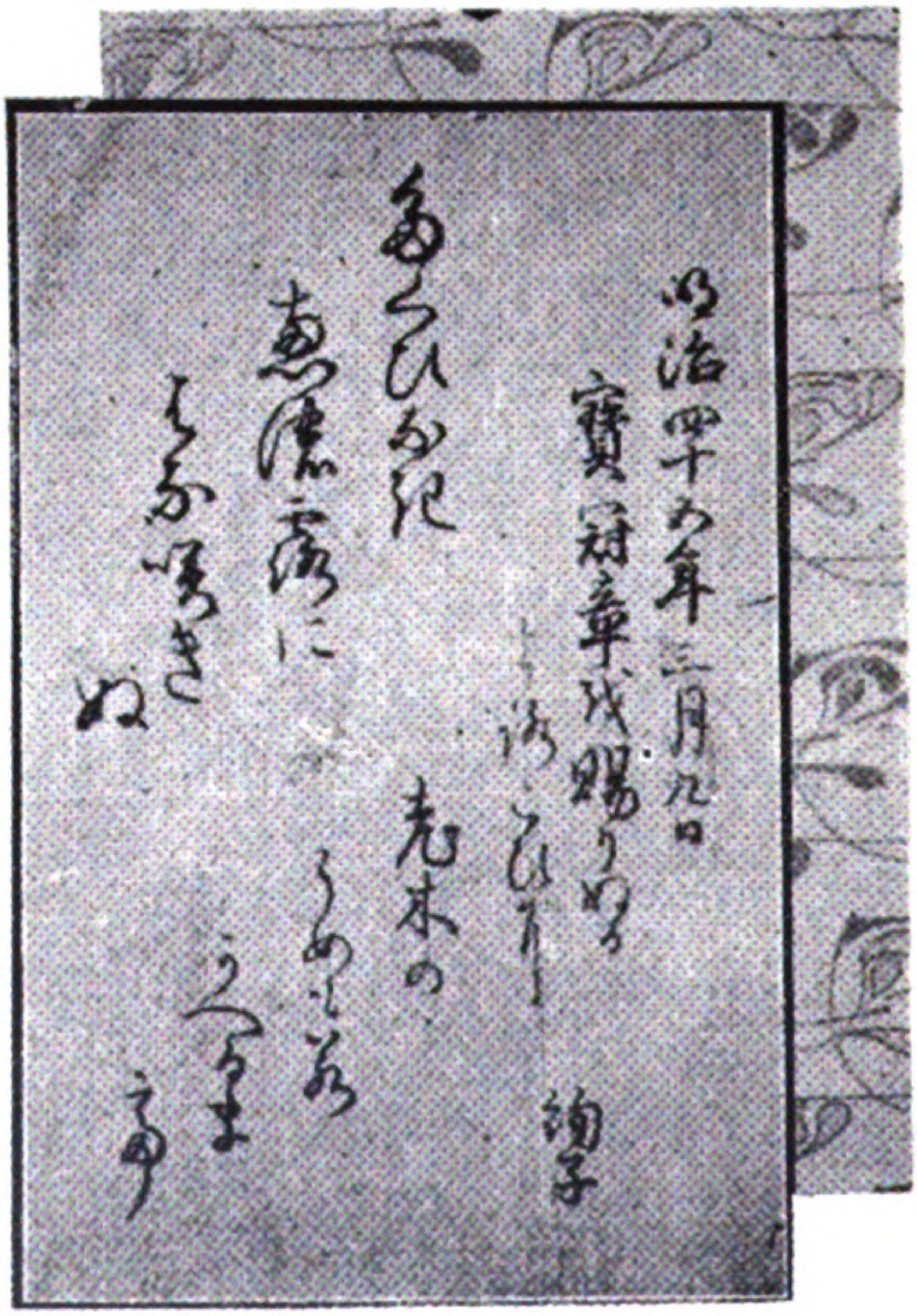
それから趣味を廣める助けともなるものであります實際のところ母の時代になりますと娘時代に學校で覺えた事は大半忘れて了ひます、毎日練習するのでも無ければまア大概忘れるのが當然であります併し之を以つて直ちに敎育といふものを誣す譯には參りません、何故ならば娘時代に覺えた事を忘れて了つても其の時に拵らへて置いた頭腦は實地の經驗を經て益々明確となつて參ります、故に娘時代には敎育を怠つてはなりません。



短夜や赤い花咲く夢の先（一茶）

△自信を保持せよ

それから娘時代には勇氣を養つて置く必要があります。日本は過渡の時代で、新しい思想と舊い思想とが相鬪つて居るから、婦人は新舊孰れに就くべきかに就て迷はない譯には參りません。この間に處して自分の善しと信じた事を何處までもやり通すと言ふには、大なる勇氣がなければなりません。一寸とした話が日本では下駄に洋服と申しますが、私共も雨天の時などにはその方が餘程都合が宜しいのであります、然るに一部の人々は無闇矢鱈に西洋風を喜ぶと言ふ風が見えるのは如何なものでせう。私共は平常帽子を被つて居りますがこれなども大變



厄介な物で始終形式が變りますし、それに一旦廢つた帽子は何の役にも立ちません。私は辛とこの古帽子をスリッパーの裏に使ふことを考へ附きましたが、私共の帽子程困つたものはありません、私は數年前一旦帽子を廢さうとしたのでしたが、私の夫がそれではアメリカのジプシーの樣で土人と同じ樣で不可ないと申しますので、矢張り被る事にはしてゐますが、被らないで濟む事なら被り度くないものであります　西洋の風だからと云つて直ちに日本の婦人方が眞似をなさる必要はありません、故に自分で善しと信じた事は何處までも保持して行かなければ不可ません。其れには勇氣が無くては出來ないことで

庭のみどり



あります。

△眞摯な態度と高尙な心持

それから近頃は女の職業が增えて來ましたので下女が拂底になつて參りました、アメリカでは此頃は下女一人を抱へるには食べさして五十圓出さなければ誰も下女になり人が無いのであります、其故成るべく下女を使はないで濟ませる樣に覺悟して、娘時代から種々手足を動かして細かな仕事に馴れて置く樣に心掛けなければなりません。

日本では今まで何もしないのが奥樣と考へて居ましたが、この惡習慣は打破する必要があります、母の時代に入ると學校時代に抱いて居た大望といふ樣なものは却々成し遂げ得られないといふ事が漸次分つて來ます、誰しも始じめは何にか豪いことをして世間に名を現はし度いと言ふやうな希望はありますが、それは努力さへすれば誰でも有名になれると言ふ譯には參りません、天分と機會とが備はらなければ如何もこの希望は遂げられません、多くの人々が同じやうに努力しても其の中有名になる人は極く尠なく、千人の中に一人も六ケ敷いでせう、故に女子は何もそんなに夢中になつて名を求める必要はありません、何をやらうとも眞摯な態度で高尙な心持を抱いてやつてゐればそれほど豪い事は御座いません。

△憂しと見し世ぞ今は戀しき

母の時代に入ると隨分苦しい事があります、而してそれが甚だしい時には自分の生命まで縮めて了ひたいと言ふ樣な考へになる事もあります、併し聖書にも言つてある通り都ての善い事惡い事は皆働いて其の身の爲めになる樣に神樣が御配劑下さるのですから決して望を失つてはいけません、自分ばかり何故こんなに非道い目に遇ふのだらう、天道は是か非かと言ふ樣に慨いた事でも、後で追憶して見ると憂しと見し世ぞ今は戀しきで、ある時にあゝだつたから、今は斯うして居られると言ふ樣に、思ひ返すことがあります。



繁雜に處する心の修養

子爵母堂　三好梅子

△一生中の大切な時代

婦人の一生中、最も氣苦勞で大切な時代は、嫁入りした頃でございます。此の時代は、世間のことが分り掛けて、而も理想と實際とが調和せず、謂ゆる煩悶の時で、何うして良人の内助をしてよいやら、何うして舅姑に事へてよいやら、其の外賓客の接待法、家事の經濟法、家庭の和合法等に就て一向方角が分らないから、なか〳〵辛うございます。男子は非常に胸を痛むる代りに、一方に氣息をぬく所もあつて、之を補ふことが出來ますが、婦人は年中休日なしで、始終種々の事に氣を配つて居らねばなりません。唯だ良人に仕へる丈でも、食物の世話もあれば、衣服の世話もあります。機嫌もとらねばならず、慰めることも大切です。又物質上のこともあれば、精神上のこともあつて、なか〳〵複雜でございます。そして舅姑にも夫々仕へ方がありますし、其の内子供が多勢出來ると、全く眼の廻はる程忙しく、其の他小舅姑、召使などを取扱ふにも、夫れ〳〵機轉を利かせて、好き程を保たねばなりません。此の外に最も大切な家事の經濟、家庭の雜事、社交上の事柄もございます。今日は電燈、瓦斯、其の他色々文明の器械も出來て、多少家庭も閑散になり、社會事業に奔走する餘裕のある方もありますし、此の上分業が盛んになつたら、歐米のやうに、尙ほ一層家事が閑になりませうが、今日の處、家庭は未だなか〳〵複雜でございます。此の間に處して、遺憾なく

事を行ふといふことは、實に難しいのでございます。

△慣るれば何でもない

此のやうに複雜でむづかしい間を切抜けて參りますには、堅固な意志も要りませうし、機智も要りませう同情も要りませうし、謙遜でなくてもなりませぬ。又愛嬌にも富まねばならず、勉勵心が強くなくてもなりませんが、特に必要なのは辛抱といふ事であります。分り切つた事ですが、自分がしてさへ思ふやうにならぬのに、人のする事が自由になる譯がありません。それを彼の西郷南洲の、人を相手にせずして天を相手にせよとの格言の如く、何事も天命である、因緣であると諦めて、何事も辛抱するのでございます。何でも上を見れば限りがなく欲を云へば際限がないから、足ることを知つて、事毎に辛抱して行くのでございます。此の辛抱も初めは骨が折れますが、修養すれば、習ふより慣れで、何時の間にか容易く出來るやうになります。



このあたり寺でなければ茶山かな　（六花）

此のやうに何事も赤心を盡して辛抱して行けば、期せ

すして幸福が來り、末は必ず好くなります。男子でも同じでせうが、殊に婦人は、偏頗な感情に走り易いものですから、注意せねばなりません。

△科學の力

諺に、ならぬ堪忍するが堪忍と申しますが、其の出來ぬ堪忍は、なか／＼出來るものではありません。其れを一生懸命に致して、次第に其の習慣を作ることが、當然の道と存じますが、私共のやうな天稟の劣つた者には、なか／＼出來かぬるのでございます。其れには宗教に依るのが一番よい樣に思ひます。私の信仰するのは佛教ですが、私共が絶對其の者と一致して行つたならば、腹の立つことも、辛くて怺へ切れないこともありません哀しくてならぬ、口惜しくてならぬと云ふ場合にも、絶對眞如の榮光を念ひ、救世本佛の難有きを謝し、未來の天國極樂を思へば、いろ／＼の煩悶は霧のやうに消え失せて、暗夜に燈を得たやうな心持になります。何か不快なことでもある時、救世本佛の大慈大悲を念じると、自然妄念が消滅してしまひます。世には、佛教などは抹香臭い、今日のやうな科學の進歩した世の中には時代遅れのものだといふやうに思つてゐる人があるやうですが、古來如何なる英雄豪傑でも、宗教に依つて居ない人はありません。科學の力は如何に强大であつても、釋迦基督のやうに、精神の安福を得ることは到底出來ないのであります。殊に腹が立つことを抑へることは、到底理論の上では出來ませんが、已に絶對眞如の榮光を受けながら是れでは相濟まぬ、救世本佛の大慈大悲に相濟まぬと思へば、硬き感情も自ら軟くなります。短氣は損氣と思つて辛抱出來ないことはありませんが、怒り心頭に燃えて居る場合に　利害の觀念では、到底打消し難うございます。人を使ふのでも佛の大慈大悲の光に照されて致しませんと、却て馬鹿にされたりしてとんだ過失を仕出かしますから　矢張婦人としては、宗教の信仰、道德の信念が、何より大切でございます。

初夏の眺め



常識教育　新鶉衣

曙内侍

貧富論

花咲く春の都大路を音もとゞろに自働車に驅りゆけるは、あはれ誰が家の子にかあるらむ。霞のヴエールの心にくきに、美しきは鶯兒が黄金の聲かも。杜鵑啼くや五月のあやめ草、あやめもわかぬ戀ごろも着るにはあらず、あたら女盛りの年頃を穢き衣服に工場通ひの憂き身を窶すは血を吐く苦しみの思ひなるべし。夫れ貧富苦樂の鑑は行く道の砂礫よりも數多ありけるをさりとて古への聖賢は、など貧苦を擧げて富樂を擯したりけむ。かのヂオゲネスは日あたりよき桶の中に寢ねて歷山大王に羨まれ、顏回は一簞の食に悠游して孔子の稱賛を博し、東西貧乏の名譽は唯だこの二者に盡きぬるも笑止なりかし。されぱこそエルサレムに乞食行脚絡繹としてつゞきては中世の榮華茫乎として夢の如く消え、陋巷の英雄みだりに清貧を樂しみては四百餘州の末路慘澹を極めぬ。崇貧の俑、恐れずやはある。古き遺話に賢き男子の山に入りて仙人に逢へるがありけり。七つの寶の中、孰れか欲しきと問はれて、かくれ笠かられ簑の唯だ身を隱すより他に術なきものよりは、打出の小槌の希ふにまかせて打出すが好しと答へしに、仙人打笑ひて、されば汝は唯だ稼ぎて金錢を貯へよ、金錢だにあれば如何なるものも心のまゝに得むと云ひけるとぞ。實に金錢なるかな。抑もこの物は、小槌の場所塞ぎなるに比べて、大にしては銀行の金庫に隱れ、小にしては懷中の蝦蟇口に入る、隱身の妙、かくれ笠かくれ簑に越えたり。而もこれを取つて一度投ずれば、己が欲するところの物直ちに眼前に顯はれ

地獄の沙汰もその多寡に依りては、強ち極樂の特別席と取替へられ得ぬ限りにあらず。蓮華の臺の樂しみも火の車の苦しみも、唯だ貧富二途の踵の向け方に依りけるものと知るべし。

病氣の解

世にさまぐ\の災難あり、火難水難、盜難劍難なは數へあげなば、人生五十の行路難の、その到るところの險難絶所は是れ皆な難の字の附くところにして、近ごろは更に生活難、就職難、細君難などの新熟語をも見るぞかし。さは云へ此等の難は心の配り方、氣の注けやうに依りて、強ち避けがたきにもあらざれど、病氣病難に至りては、生あるものゝ是非に免れがたきものにぞありける。されば人は一向にこれを怖れて冷水浴に皮膚を強からしめ、食物の撰擇に胃腸をいたはれども退ぞいて熟々病氣の眞相を觀察すれば、亦た多少の詩的趣味なきにしもあらず。彼の胃病患者の絶えず藥餌に親しみながら餅菓子など摘むは無下に卑しけれど、不治の病氣に死の宣告を受けな



つれぐ\と音たえせぬは五月雨の軒のあやめの雫なりけり　（橘俊綱）



竹柏會春季大會（於日本橋倶樂部）

から、覺悟を極めし若き女の、日に／＼顏の白くなりまさりたるに、いさゝか茜さしたるは、死して後天國へゆくかと、そゞろに魂の行衞ぞ偲ばるゝ。脚氣に脛の膨みたる、齲齒に頰の脹れたる、共に甚と見よげならねど、面わ美しき女の紅絹當てたる、さては眉剃りし年增の頭痛膏故意とらしきは、また捨てがたき風情ぞ有なる。さて又胃病の靑き、猩紅熱の紅き、ペストの黑き、黃膽病の黃色なる、癩病の紫色なる、色彩美をば發揮したるものとも思はれず、この五色を合せて五色の息を吐く貧の病は、四百四病のそれにも增して如何ばかり苦しくやあらむ。昔より醫師にも溫泉にも治癒りがたき戀の病は、言ふばかり風情あるものから、詩に歌に普く叙べつくされければ、今更諄々しく記し立つるはなか／＼に無粹の限りなるべし。世に云ふ禍を轉じて福と爲すとは、假病を使用ふ類ひならんか、借金取の膝詰談判にうんと一聲仰さまに倒るゝは當意卽妙の奇策なれども、病と稱して朝せざるは吳楚七國の亂の始めとのみ思ふべからず、親戚朋友の間

にも是れあるは、すでに亂兆の萠せるものと知るべし

障子の辨

紙門は唯だ部屋の區劃に設けられたるものなれば、面白味のほども然のみは厚からねど、障子は僅かに紙一重を隔てゝ、直ちに内外の區別をなし、且つは其陰に居る人の姿さへ仄かに見ゆれば、いとゞ意味深長の趣きはあるぞかし。さればお染は障子の外の久松を戀しがり、多助は障子の内なる父の聲を聞きて一目會ひたしと悶へ泣きける。さても富める家の障子は、塵も止めぬ清き美しさに、希望の光明さへ輝きわたれども貧家の障子は無殘に破れて、冬は北風に音ひゆう〳〵三角形の舌出すも哀れなりけり。そも如何にして貼らぬにや、障子紙の無さか、貼る餘暇の無きかと問へば障子紙もあり、貼る餘暇もあれど、唯た貼る元氣なしと答へぬ。これぞ敗殘者の聲なる哉。佛魔一紙の世の狀態は、障子一枚のそれにも表はれてけり。

竹柏會春季大會園遊會（其の二）

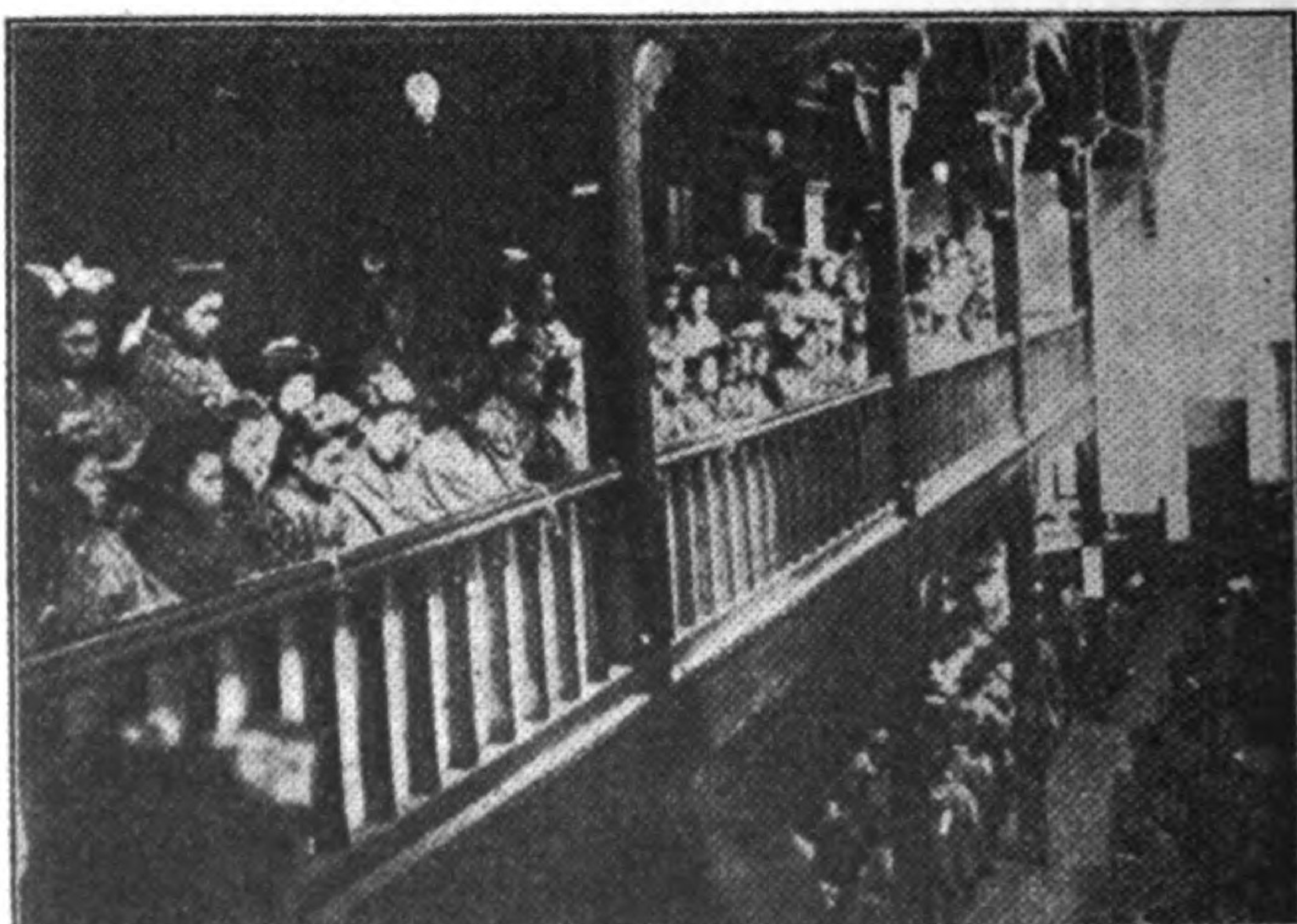


ばらの香





女子大學の卒業式



都へ遊學せる妹へ

若杉浪江

梅雨とは申せ、田舍人は麥刈に田植に、中々忙しき時節とて、雨の中を右往左往、誠に都にては見られまじき景色を、日々眺め暮し居候。偖も其後は如何にお過しなされてか、今年を限りの學び舍の、夜となく日となく、勉強に餘念なき事と存じ參らせ候。樂しき夏休にも歸省なさらぬとか、結構には候へ共亦、身體の事等もよくお考へなされ候て、第一に身體の養生、第二に心の修養、第三に學問と申す樣なる順序にて專心お勉めなさるべく候。然しそなたは、妾と異りて健康よほど勝れ居候事故、安心とは申せ、餘りの氣許しより返つて不養生に陷るものにて候へばよくよく御注意然るべく候。

毎々申候樣に、若き人の若き望み、誠に末頼もしうは候へど、女と申すものは今の處、能力に於ても、權力に於ても、何一つとして男子に及ぶもの無之次第とて、とかく世の多くの女は、男子に依賴し易く、自ら弱者として平然たる傾あるものにて候へば、まづ婦人としての自覺を持ち候て、深く熟慮の上、益々出來得る限りは男子に及ぶ丈けの學問も、修養も心掛くべき事實に肝要に候。婦人の自覺と申しても、所謂世にいふ醒めたる女とか又は、イブセン劇の極端なる女等の如き、型を作れと申すにては無之、新時代の女の自覺などゝ名をつけ候て、とんでもなき自覺を致すとかいふ婦人を、しばしば聞及び候へ共、そは決して眞實の婦人の自覺にては無之、只上すべりしたる聞きかぢりの誤解も甚しきものに候。

そなたも已に十八歲、徒らに若き空想に憧憬候のみが青春の少女の命にても候まじ。今こそは、眞面目にわが身を考へ候て將來の方針を定むべき唯一の時機にて候なれ。

竊に聞及び候へば、都の若き人々は、しかすがに青春の幸や憧憬に醉ふて、朋友間のあやしき交際などより、果は男子をいと珍らしきものに思ひなして、一高

あやめ草



よ、早稲田よ等と何かにかこつけて取沙汰致し候とか、かゝる中に我知らず恐ろしき墮落の淵に沈みゆくものも有之べく、誠、歎かはしき次第にては候はずや。少女子の戀持つは是非もなし、されどされど、謹しみなき、心のゆるみほどおそろしきものはまたと候はじ。

あはれ、かゝる輕佻浮華の風に染まず清く尊き白百合の如き心もて日々を進み候へ。かくて、よき女となりて、あつぱれ世の爲にも人の爲にも盡し給ふべし。



しらがしのみづえ動かす朝風にきのふの春の夢はさめにき　（景樹）

世には女學校卒業するや否や、直ちに人妻となりて、家政を一手に引受けらるゝ人も不少候。然もかゝる境遇にある一人の友より耳にせし事は、

一日中家事に追はれて本よむ暇もなく人にも世にも、おくるゝ事誠に悲しき極み乍ら如何ともなし難く困り居り候。

等いふ愚痴なりき。

またある友は、新婚當時一年餘りを夢と過す中、はや、母といふ身に

なりて、今更、我身の責任を感じ是迄に、今少し勉强も、修養も、何かと勵みおきしならむにはなど、後悔致し居候。

と……………夢と過ぎゆく一年々々も、價値あらしめんとせば、如何樣にもなるべきを、とかく、行ふは難くして、人生またとは來るまじき、貴重なる年々を、遂にうか／＼と過し候事、誠に惜しき限りに候。

願はくば、かゝる悔なき樣、今更ぞと、充分にお勵みなさるべく候。尤も、學問と云ひ修養といひ、すべて人間一生涯の仕事にて候へば、心掛一つにて進歩も、退歩も、心の儘にて候。さり乍ら、若き時は決して再びとは來ぬものなれば、せい／＼後日果實となるべき糧を取りおき候らへ。

凡てこは、身體弱うして、學び舍に斃れし妾が老婆心に候。夢をろそかに讀み給ふべからず。

さるにても、わが住家の昨日今日、誠に、心ゆく許り長閑にて候。田植歌を聞き乍ら、衣縫ふもゆかしきものに候。まこと田舍女のよく働らき候には、感心の外なく候。されど彼等の間にも、都風のふき來てか、百姓に生れしを、痛く悲しみ歎く樣を見受け候。

彼等にも、田舍女としての美しき自覺を得させ候らはんには、かゝる歎きも候まじを、誠うたてく候。每も／＼、此等の人を見候每に、思ひ起すは、故鄕の昔にて候。あはれ、此夏は、父君、母君の如何許りお淋しき事にて候はん、せめて玉章なりとも、度々參らせ候て御慰め奉らるべく候。

倘、都の朝夕、一入御氣をつけなされ、呉々も、身體の事用心なされ度候。こは第一の親孝行にて候。さらば……

◎インフルインザの手當　發熱したときはアンチヒリンなどを服ませて發汗させ、咳嗽が出るやうならば水飴を食べさせ、衰脫した時には少量の葡萄酒を飲ませ、食物は淡泊なものを擇び、渴いた時は菓物の液の甘く酸味あるものを飲ませ、成るべく外氣に觸れぬやうに安靜にするが必要である。

五月カード



地久節

五月二十八日

軒端の橘袖に香りて、若竹の葉風微々たり。初杜鵑なく夜半の妻垣に、ほろ〳〵こぼるゝ卯花の雪に二十日あまりの月さしたる草戸の樣、げにや此世の人の住むべうとも覺えず、あはれ過ぎこし方のことの戀しさもまされ　仰げば皐月の空の色淡きかな

あやめ葺く山家の軒やほとゝぎす

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞讃好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を参考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツガー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用ニ割増の事

取次所ハ前月ノ廣告ニアリ

らい病

取次所ナキ地方ハ直接本舗へ註文アレ

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

テノサール　一ケ月分　貳圓
複方テノサール　一ケ月分　參圓

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ケ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生癩病を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町
振替口座東京貳參壹壹
電話 刈谷參拾貳番
本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

毛ぬき新劑

従來脫毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脫毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脫毛劑ヘールピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脫毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールピン
定價 壹圓
特製 參圓
內地送料 十五錢
海外 三十五錢

飲んで色白になる藥

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確効あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ビオール錠は極て强度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

藥名ビオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
內地送費十五錢

東京市牛込區北山伏町壹番地
百合園製藥所

女(ぬの五)

巖谷小波君著　山中古洞畫伯挿畫　高村眞夫畫伯裝幀

小波お伽噺 出づ

洋裝四六判美本
各册紙數三百頁
正價一册金四十五錢　郵税六錢宛

明治お伽噺以來、久しく其自作のお伽噺を出さゞりし著者は、今や其多數の作物中、最も得意の物のみを撰拔して、新しく世に問ふことゝはなれり

而して第一に現はれしは

第一册 お伽太閤記……新刊

第二册 お伽歌劇……五月發行

の二篇にして、前者は有名なる太閤記を、著者一流の筆法によりて、お伽式に書き改め、附するに今太閤、お伽詩篇など東西古今の英雄お伽噺を以てし、後者は艶麗なる筆法を以て春夏秋冬の自然を詩化し、お伽式筆法によりて縱横無盡の變化に富めり、共に彩色石版畫二色刷寫眞版を多く挿入して、錦上更に花を飾る、少年の机上、家庭の書庫に缺く可らざる好册子也

東京　博文館　本町



レーベン

レーベンの特色と効能

レーベンは常持醫學士の發見に係るものにして米食人たる東洋人種に適合すべく和漢洋法を折衷して得たる植物性の藥物にして「リンサン」の多量に加味せる絶好の良劑なる事は醫學博士岡田、森戸山腦病院長、等の證明による明白なる事實なり。

醫治効用 は回性、興奮、鎮痙の三作用を兼備せる最新式の錠劑なれば腦、神經衰弱、頭痛、眩暈、逆上、便秘、不眠ヒステリー等を治癒し心神爽快元氣旺盛ならしめ殊に陰萎遺精、早漏夢精、生殖器神經衰弱等にて交接不能となり人生の快樂を奪はれて長へに悲歎憂愁の涙に暮るゝの人は皆何れも腦神經衰弱其婦人にありてはヒステリー患者なればなり故に以上記載の其一を患ふる人は最後の試藥としてレーベン百錠乃至二百錠を試みよ其効神速に顯はれて平靜和樂の健康體となり、得も云はれぬ愉快に其日を送る事を得べし、夫の大黃の下劑を主とせる粗藥にあらず、論より證據今直に試みよ

●本病患者には腦神經衰弱自然療法と精神療法とを發行所へ「ハガキ」にて申込次第進上す

定價

三十錠	三十錢	二百錠	一圓六十錢
五十五錠	五十錢	四百錠	三圓
百錠	八十五錢	八百錠	五圓五十錢

各藥店にあり無くば發行所へ全國送費無料信用なき藥店にて他藥を賣付んとす注意

發行所 東京銀座弓町二二 電話京橋三〇八 弘濟藥院 中南定太郎 貯金口座東京七七七七番

支那婦人の特質

文學博士服部宇之吉氏夫人　服部繁子

▲氣の強い女學生

支那の女學生は、氣が強くつて、議論好で、敎師でも何でもズン〱やりこめます。不平があると往々同盟休學を企てると云ふ風ですから、敎師は餘程骨が折れます。併し頭腦は一般に明晰で、數學や物理は却々よく出來、殊にお手のもの〻漢文ではうつかりすると敎師が間誤つく位です。支那語の不達者な敎師ですと、込いつた講義は黑板へ漢文で書き示すことがあるのですが、こんな場合に若し一點一劃でも間違はうものならサア默て居りません、先生あの字の點が足りませんとか、劃が違ひますとか云つて、遠慮會釋なく笑らひます。

▲間に合せの敎授は承知せぬ

或時、畫學の敎師が缺勤したので、生徒を一時間遊ばせて置くよりはと、事務員が間に合せに敎壇に立つて修身の講義を始めやうとしましたところ、生徒一同は承知しません。私達へ一言の斷りもせずに、規定外の敎授をされるのはどう云ふ次第か、間に合せの講義

を聴く位なら、自由讀書でもして一時間を有益に過した方が良いと申して、大層怒つて歸り支度をいたしたことがございました。未だ十四や十五の少女がこんな理窟を並べるのですから、隨分氣が強いではありませんか。

▲寛嚴の度がむづかしい

外國人が經營して居るミッションスクールの生徒は、主に貧民ですから、手加減が餘程違ひませうが、私共が監督して居つた學堂の生徒は、上流の女子で、遺傳的に頭腦も見識も進んで居るだけに、無暗に嚴制すれば反抗して、しまひには同盟休學を企てます。さうかと申して餘り機嫌をとれば、直きに教師を侮つて我儘をします。而して不平があると直に私のところへ申して參ると云ふ風になりますので、その寛嚴の度が却々むづかしうございました。

▲權利自由の渇望

日本でも初期の女學生は、マチ高袴をはいて、肩肱を怒らし、女權擴張を稱へて、男子を凌ぐ勢ひがあつたさうですが、今の支那女學生も丁度これと同じ趣があるやうです。支那では昔から氣の强い婦人を儒教で壓へ付けて置いたものですから、新教育にふれ初めた今の女子は、この壓へられた反動で、自由や權利を渇望することが實に甚しうございます。それで私は受持の修身講話をいたすにも、成るだけこれを鎭める方針を取りました。貴女方がそれほど權利自由を得たいなら、先づ義務を充分に盡さなければなりませぬ。舅姑のある家へ嫁ぐのを嫌つたり、家政育兒の務めを厭うたりするやうでは、折角世間で唱道してくれる新教育の値打を下げて、つまりは貴女方が新教育を受けられなくなつて、權利自由を得る道も絶える次第ゆゑ、ここを篤と考へて暫らく總てを忍び、女子の本分をお盡しなさい、さうすれば自然に世間から權利自由を與へてくれますと云ふやうなことを說き聞かせました。彼地の女子は却々國家觀念が盛んですが、日本のやうに

愛國と忠君が一致して居りませんから、修身講義の呼吸が違つて一寸面倒なところがございます。

▲理想は屹度實行する

支那の婦人は隨分思ひ切つた事を考へ出しますが、これが空想でなくて、屹度實行いたします。明治四十年頃、北京の或未亡人が、女子教育の振はないのを憤慨して自殺しましたが、これがために女子教育が忽ち勃興しました。又某財産家の未亡人が病死する際全財産を女子教育費に寄附したので、某俳優が非常に感激し、一個人で慈善演劇を催ほしましたが、雷同の盛んなところですから、社會の同情は大したもので、切符は飛ぶやうに賣れたのです。何んでも一旦思ひ立つたことは、直に實行する、又一人が事を起すと誰も彼も雷同して騷ぎ立て、忽ちそれが瓦解しても平氣で居ると云ふのが一般の氣風ですから、革命騷動なども度々起る理由であります。妙齡の女子の頭腦にも矢張この血が流れて居りますから、日本の女學生とはまるで教育の手加減が違ひます。



▲獨身の婦人は隨分多い

彼地では身分の良い婦人の中に獨身者が隨分多うございます。學者の娘などが學問に凝つて偏屈になり、自然緣遠くなつた結果、止を得ず獨身で通すのもあり、

又は女子の貞操を重んじて嫁がぬものもございます。支那では二夫に見えぬことよりも、生涯無垢の處女で暮すのを第一の貞操として居りますから、童貞女は一番尊ばれるのでございます。

▲娘は母親より上座

支那の處女は、既婚婦人よりズッと權力がございまして、客に招かれた場合でも、娘はいつも母親より上席に着きます。又長兄でも、妹には一目置いて居るのです。私は懇意先へ參つて、其家の娘と談して居る席へ、娘の兄がはいつて來ますと、娘は兄を尻目にかけて尊大な態子をいたし、兄は狐鼠〱と出て往くことなどをよく見受けました。こんなに權力のありますのは、童貞を尊ぶ風習が主な原因でせうが、一には女は姓のないもので、庶人の娘も王公の夫人にならぬとも限らぬと云ふ考へで、親々が大切に取扱ふためでございます。而して昔から娘は上目に嫁がせ、嫁は下目から貰ふのが理想ですから、自然男兄弟より尊ばれる次第でございますが、又一面には、女の子は親の手元に暮す時が短くて、可愛想だと云ふいたはりもあるやうです。

▲上流夫婦の日常

支那の上流社會の夫人が良人に仕へる趣は、家の構造の加減で、餘程日本と違ふやうに思ひます。彼地の顯官の家は、主人の書齋が表門の直側にありまして、主人はこゝで事務を執りながら來客にも面會し、忙しい折は三度の食事から寢起まで此處ですませます。彼地の家の作りは、御承知の通り一室から他室へ續つゞきに行けませんで、中庭を越し中門をくゞつて參るので、身分がよい程、門の數も殖え、庭の道程も遠くなりますから、主人が一々奥へ用達しに入るのが億劫になる次第です。警視總監のやうな役人ですと、殆んど夫人の室へ往く暇がございません。私が夫人の許へ訪れた折にも、家來が「只今旦那様が奥方に宜しく云つてくれと仰つてお出ましになりました」と申して參つ

たり、夫人が、「このお召物を旦那樣へお屆け申しておくれ」と家來に言ひ付けることなどがよくございまして、夫人は幾日も主人の顏を見ぬのが通例でございます。ですから御主人が自由な遊びを爲たり、側室が不都合を働くなどの噂があるのでせう。又高位の家庭では、主人が夫人の室へ入るのには、先づ家來を以てその旨を通ずることになつて居ります。これは夫人が女客と談して居る折に不意に主人が入つて來ますと、その女客は大層迷惑をいたしますし、主人の方でも一寸バツが惡く、相方睨み合の妙な工合になりまして、夫人が困る場合があるからでございます。



新綠の色に包まれたる山の姿の美しいこと、麓の森から一連つゞいて山の頂きまで綠の色その綠の色を壓して空色が掩くかゝつてゐる。

▲思ひ切りが良い

支那の婦人は氣の強いだけに、思ひ切は實に良いものです。大切な親や良人でも病重つて醫者が見放しますと、未だ生命のある病人へ直に死裝束を着せて寢

床も取かへて了ひます。支那で死ぬことを易簀と稱へますのはこの事です。これも昔からの國風でせうが、慣れぬ私共は何ですか見るに忍びません。もつと忍びないのは、丁年未滿の男女が死ぬと親や先祖への不孝者として冷やかに取扱ふことでございます。平生は掌の玉と愛しんだ子供でも、十歲未滿で死ますと、寺へも送らず、僅かばかりの手數料で乞食の手に托し、捨埋同樣に葬らせるのです。一體彼地の人は風水の迷信が深いために、不孝な兒を鄭重に葬れば、先祖の怒りを招き、家に祟りがあることを怖れて居ります。凡て死者は鬼になつたものとして怖ろしがり、行者の敎へによつて死體から魂魄の拔け出る時刻には、集つて居る親族が殘らず家の外へ逃げ出すのでございます。

▲凡てが共和的

上流社會で表立つた宴會を催す時には、却々贅澤な御馳走をいたしますが、平生の副食物は極質素なものです。私は或訪問先でその家族と一緒にお午飯を頂く折に、その質素なのに感心いたし、或時一日の御菜代を夫人に尋ねて見ましたところ、平均日本の五十錢位ですみませうと云ひました。是は家來の多い顯官の家庭でございます。親王方でも平常は少し缺けた食器なぞを平氣で食卓に用ひて居ますし、副食物も家來方と平等でございます。こんなところは何處までも共和的のやうに思はれます。

五月の鯉幟

維新前江戶の武家で男子のある家は五月節句に外幟三旒（家の定紋つき）鍾馗畫幟一本、毛槍二本、外に紅白の吹流しを立てる所もあつたが、幟も何もない家は大きな鯉ばかりを立てることが多かつたから、大きな鯉を立てる家は貧乏屋敷としてあつた。馬上の話を俗に貧乏屋敷の五月幟だといつたのは鯉（登）が大きいといふ謎である。ところが近年幟を立てる家は皆無で皆鯉ばかりを立てることゝなつたが、長屋に住んでゐて途方もない大きな紙鯉を二つも三つも立てるから風のある日などにはカサ〳〵鳴つて近所迷惑だといふものもある。

八重雲に朝日匂ふ五月かな





此頃は融通の利く婦人が尠い

男爵　後藤新平

△家庭に於ける娘の躾け方

婦人問題は現代の大問題である。故に新聞にも雜誌にもいろ〳〵婦人の處世訓や、家庭に關する論說などが載てゐるが、多くは神經の亢奮した新時代の人氣に投ずる爲めの挑撥的文字に過ぎないだらうかと思ふ。

現代の婦人は實に六ケしい時代に生れてゐる。チョット着物の事について云つて見ても、今では昔と違ひ洋服も要れば和服も要る。又どんな人でも襯衣を着る。釦の附方がよくないと、外れて困る。その附方も知つて置かねばならない。

故に家庭に於てもそんな事を敎へると可いのだが、それは敎へないで、ヤレ何處のお孃樣は斯う云ふ衣服を着てゐるとか、彼あ云ふ髪を結つてゐるとか、あの色が流行るとか、このリボンが好いとか、そんな事ばかり氣にして居るので、娘も自然に左樣いふくだらない方向にのみ傾くやうになる。その他學校の成績や席順などを酷く親達が氣にして、先には三番だつたが今度は八番に下つた、あそこのお孃樣に負けては不可いなど丶云つて、親自身が娘の神經を刺戟するやうに仕向ける。だから神經過敏の娘は、すでに小學時代から神經衰弱に罹り、お嫁に行けば直ちにヒステリーになることは當然の事である。

全體學校の成績などは、それ程氣にするものでない。試驗の點數は偶然した事が多かつたり少なかつたりするものだから、奬勵と云ふ事も、成程爲なければならないが、それは程度の問題で、もう少し暢然とさせて置きたいと思ふ。一體家庭の人があまりに學校を賴り過ぎるのは宜しくない。學校にさへ出して置けば娘の

敎育は出來るものだと思ふのは全くの誤解で、家庭で萬事の躾をしなければ駄目である。

△身の周邊の始末

現代は生計の方から云つても、萬事に都合の惡い時代である。帶も要れば袴も買はねばならない。下駄も要れば靴も要る。又それぞれ取扱ひ方も心得て置かなければならない。

今の若い女で下駄の鼻緒のすげ方を知つてるものが



幾人あらうか。吾輩などは、母親が、泥のついた下駄を洗つて、鼻緒をすげかへて、穿かして呉れて、而して育つて來たのであるから、その邊の細かな母の慈愛と云ふものをよく知つて居るが、今の婦人は、そんな微細な點まで溫い母の情を傳へる事が出來るであらうか。

靴の磨き方や保存法に就いても同じである。少し生活の餘裕のある家では、爲切れない程仕事のある女中に娘の靴まで磨かしてゐる。書生にも、お孃樣の靴を磨けとか、揃へろとか、少し遲くなると、なぜお孃樣の靴を出さないの

だと叱言を云ふ。學校の退ける頃になると、お孃樣のお迎ひに行けと云ひつける。不意に雨でも降つて、濡れて歸つて來ると、迎ひに行かぬから濡れたのだと叱る。而してそんな人が何を云ふかと思ふと、自由平等と云ふ。何處に平等があらう。こんな風では、娘の躾けは素より、家庭の平和、社會の幸福などさへ望み得べき事でない。

自分の身の周邊の事は一切、自分で出來るやうに神が拵へてゐるのだから、娘が女中に靴を磨けと命ずるのを聞いたならば親の方から、そんな事は自分で始末するものだと窘めなければならない。そして、如何したら靴なり下駄なり、よく保つかといふ事まで心得させ、また汚いものを綺麗にするのは決して卑しい事でなく、文明生活の要義である事をよく自覺しなければならない。

△變通の心掛

それからまた、財政の困難な世の中だから、ケチにせよとは云はないが、出來るだけ儉約やかにしなければならない。如何に大家だからと云つて、要もないのに炭をドン／＼焚いたり、勝手元の障子の少しばかり破れたのを繼張を爲ずに皆な張りかへたりする事は、よく戒めねばならず、これは一々實地について家庭で教へる外に爲方がない。

質素の點から云ふと、私の家では娘に指環など箝めさせない。母親のものがあつても決してそれをやらない。家内も亦た外國人などに面會するとか、已むを得ない時でなければ、指環などは用ゐないのである。

こんな事を云ふと、後藤は馬車も持つてゐる、自働車にも乘るではないかといふ者があるかも知れないが、それは已むを得ない。今日二人前も活動しようと云ふには、自然馬車も必要である、自働車も必要である。西洋館も必要である、室內の裝飾も必要である。だから私はそんなものまで不要だとは云はない。また指環や簪にしても、皆な悉く排斥はしない。唯だ贅澤の爲めには排斥し、交際などの爲めには大に必要とする。

西洋館で思ひ出したが、婦人が西洋間の掃除の仕方一つ知らないやうでは困る。場合に依つては日本間の便所の掃除、西洋館の便所の掃除までも自分でやる位の覺悟と心得がなくてはならぬ。然うあつてこそ、浮世の轉變につれ、高貴の夫人となつても、また貧家の主婦となつても、その境遇に應じて立派に行て退けることが出來るのである。

返す〴〵も今日の婦人はボタンの附方一つでも爲すべき事が多くなつたのだから、徒らに風潮につれて所謂るお孃樣流に躾けぬことが肝腎である。



女學校出の妻君は、何うも落ち附きが惡い上に、口許り達者で、其癖薩張働けないから、一向役に立たぬと、冷評するのは老人達ばかりでなく、新らしい教育を受けた人までが、一齊に罵倒するのである。そこで斯う云ふ輕薄な實際に遠い女子の出來る原因を調べて見ると、無論本人達の不心得もあらう。が、其大部分は教育の仕方が惡いからであらう。これは、教育者や父兄に大に注意を促さなければならぬ。その教育の方針は小事を氣にせず、常にニコ〳〵笑つて居る快活な氣質と物事に好き嫌ひをせず勞働を厭はず、篤實に働く勤勉の氣象を養成する事を先きにして、その際家庭を整理し、子女を教育する知識技能を授けて實際に間に合ふ、女子を養成しなければならぬ。つまり前垂がけの世話女房で、然かも確乎とした母親を作る目的で教育しなければならぬ。



巴里の珍味會

◎過ぐる頃巴里市リヨン停車場の會食室で珍味會が開かれ、會長エドモン、ペリエー氏を始めとして數十名の出席者があつた、各員まづ如何なる珍味佳肴に有つくだらうと、食卓上に飾付けられた獻立書を見詰て待に待た。

◎まづ第一に出たのは熊肉の燻製と云ふのであつた、日本では熊の肉は賞味されてあるが、さりとて然程の珍品とは認められて居ない、然るに巴里ッ児の舌には己れが生れ落ちて最初の馳走である。

◎それから第二に出されたのは日本產鰑烏賊である、鰑烏賊と云へば日本人の常用食品であるのに巴里人には頗る珍味とされてゐる

◎始めて鰑を食つた顔如何と見渡せば、細かく刻んだ所は恰も刻煙草のやうであるのに拘はらず、之を取り上れば乾酪の香氣あり、之を口に入れば最上のホルドウブルであると云つて、賞讃の聲は卓の各隅より發せられた。

◎露國熊の肉は、其切口の薔薇色を呈したのがまづ各員の味感を刺激し決して豚製ハムに劣らぬものとの定評を受けた、比較的に當日の珍味中で成功しなかつたのは支那產腐敗鷄卵のオムレツであつた。

◎元來本會は珍奇な食品を採つて文明人士の食卓上に紹介しやうと云ふ目的を以て組織したのである、會長エドモンペリエー氏は有名な佛國博物學長で、巴里博物館長の職にある名望家だ、ペリエー氏の意見によれば今日文明國に賞味されて居る飲食料品は、もとを糺せば野蠻人から傳へられた者が多い珈琲でもカカオでも、煙草でも其通りだと云ふのである。



私の娘時代

代議士板倉中氏夫人　板倉ひさ子

△四十年前の女學教育

私は千葉縣の田舍に生れましたが、幼少の頃は、學校と云ふものがないので、寺小屋へ通ひました。丁度今から四十年ほど前です。何しろ最う古い昔のことですから判然と記憶しても居りませんが、いろはから始めて女今川とか、女庭訓とか云ふやうなものを教はつたのでありますが、其の後間もなく學校が出來ました。尤も當時のは、今の學校とは較べ物になりませず、年限は三年、學科は讀本に地理、歷史、習字、算術の五科目位で、今のやうに色々のものは教へませんでした。その變り程度は高かつたやうに思はれます。讀本は全體で六册ありましたが、その一の卷は今の小學讀本の五の卷位の漢字があり、六の卷なぞは中學校の二年級で用ひる讀本と同じ位の程度でした。算術は珠算と洋算の二つに分れて居て、その一つを勝手に選ぶものでした。珠算の方は主に商家の子供が選びますので、妾は横文字を覺えるために洋算を選びましたが、後に至つて色々の實用上から珠算にして置けば好かつたと後悔いたしました。

そして小學校を卒業した後は、千葉迄行けば、師範學校がありましたが、父兄が手放しませんので、參りませんでした。尤も當時は僅か三年の小學校でさへ卒業する人が尠く、況して些し大きくなつてまで學校へ通つてゐますと『彼處の家では教師にでもする積りか知ら』などと云はれる位でした。

△知つてゐさうで知らぬ

昔に比べますと、今の教育の仕方はズツと進んでゐると思ひます。併しそれに伴れて隨分華奢に流れてゐます。それですから私は親類の若い娘などに會ふと、口癖のやうに華奢に流るゝなと戒めて居りますが、どうも一向利き目がありません。

それに今の學校は色々の事を敎へますから、年齡の割合に世間は知つて居りますが、見識ばかり高過ぎて、實際の役には却つて立たないやうに思はれます。これは今の敎育方針が家庭に必要でないものを餘り敎へすぎてゐる故であらうと存じます。私は女と云ふものは心が柔順で、身體が强壯で、氣立てが善くて、それで何事にも一寸間に合へば、それで澤山だと思ひます。結局、裁縫が一と通りと、洗張が出來て、且つ割烹の心得があれば、それで間に合ふだらうと存じます。今の女學校では、皆敎へて居るやうですが、卒業しても、直ぐ役には立たないやうに思はれます。知つて居て爲ないのは差支へもありませんが、或は知てゐさうで知らないのではありませんかしら。

△昔は姑の機嫌とり
今は理想のあこがれ

私が嫁ぎましたのは今から三十年程前でしたが、それは無邪氣なものでした。今の若いお方は家庭の人とならぬ中に、一家の主婦となつたら、恁う切廻はして行かうとか、如彼して見ようとか、一定の理想を備へて居られますが、私共の若い時分は、唯だ父兄の云ふ儘になつて、姑に敎はりながら、皆なの機嫌を取るより外に、何も知りませんでした。

一體に昔の人は、今の若い方よりも柔順だつたやうに思はれます。その代り世間のことは全つきり分りませんでしたが、學校へ行く年限が短くて、家庭に居て家事向きの手傳ひをする月日が長かつたので、實際の仕事をする段になると、役に立つものが多う御座いました。今の方は、お話なぞを承りますと感心な程御怜悧で、世間の物事をよく辨へて居られるやうですが、實地に當つて見るとそれほどにもないやうに見受けられます。多分口の人が多くなつて、手の人が尠くなつたので御座いませう。

一體婦人として是非覺えてゐて戴きたいのは裁縫、割烹、茶の湯、生花などでありますが、女學校では皆な大概敎へて居るにも拘らず何うも物足りないやうに

思はれますのは、其外に尙と六ヶ敷科目が澤山ある爲めでありませう。些と手解きだけして、それに理論を附け足して置くだけでは實習の時に間に合ひません。この邊は何卒家庭でもよく注意して、日曜や土曜に其の實習をさせる如にしたら好からうと思ひます。

△二十過ぎては婆娘

私共の若い時分には、女の子は二十歳を過ぎると最う婆娘だと笑はれたものですが、この頃は大抵二十歳過ぎに片附くやうになりました。何うしても二十歳以上になつて居りませんと、當人も困りますし、貰つた方でも役に立たないで困ります。二十歳過ぎまでなら女學校を卒業して二三年間がありますから、學校で習つたものゝ中で、猶ほ不足だと思ふものを補習し得られますから、大層都合が宜しうございます。



それから娘を嫁に遣るには、昔から『女は氏なくして玉の輿』とは申しますものゝ、斯んなことを考へてゐると、何時でも失望して物ごと不足に思ふやうになるのですから自分と同じ位の所か、又はそれより以下の所を望んで居たら、確實だと思ひます。

家庭の中心と裝飾

三輪田元道

△ストーブ中心

家族が團欒的に集るには、必ず何か中心になるものがなければならぬ。この中心には幾種類もあつて、ストーブなどもその一つと言つてい〻。北歐の寒國は言ふ迄もなく、日本でも北海道及び北陸地方では、一家族は皆なストーブ若しくば爐邊に集まることになつてゐる。北歐は殊にこれが發達して、ストーブは家内の裝飾の重もなるものとして、大理石で造られるとか、又その上に花を生けるとか、鏡を置くとか云ふ風に、之を中心としてすべての裝飾も施され、家族はそこに集つて四方山の話をする。又寒國では寢るにも一度ストーブを燃くと云ふやうにして、一家に火を絶やさない事を以て一の誇りとして居る風がある。又或はこの火を絶やすまいと云ふ注意から、炭團、線香、火繩と種々の方法を以て祖先以來の火を子孫に迄傳へ度いと考へて居る所もあつて、この火が子孫に迄續いて家と云ふ感じを深くしてゐることもある。此等の風も矢張りストーブ爐を中心として出來たことで家庭が火によつて結び付けられてゐる面白い事實である。

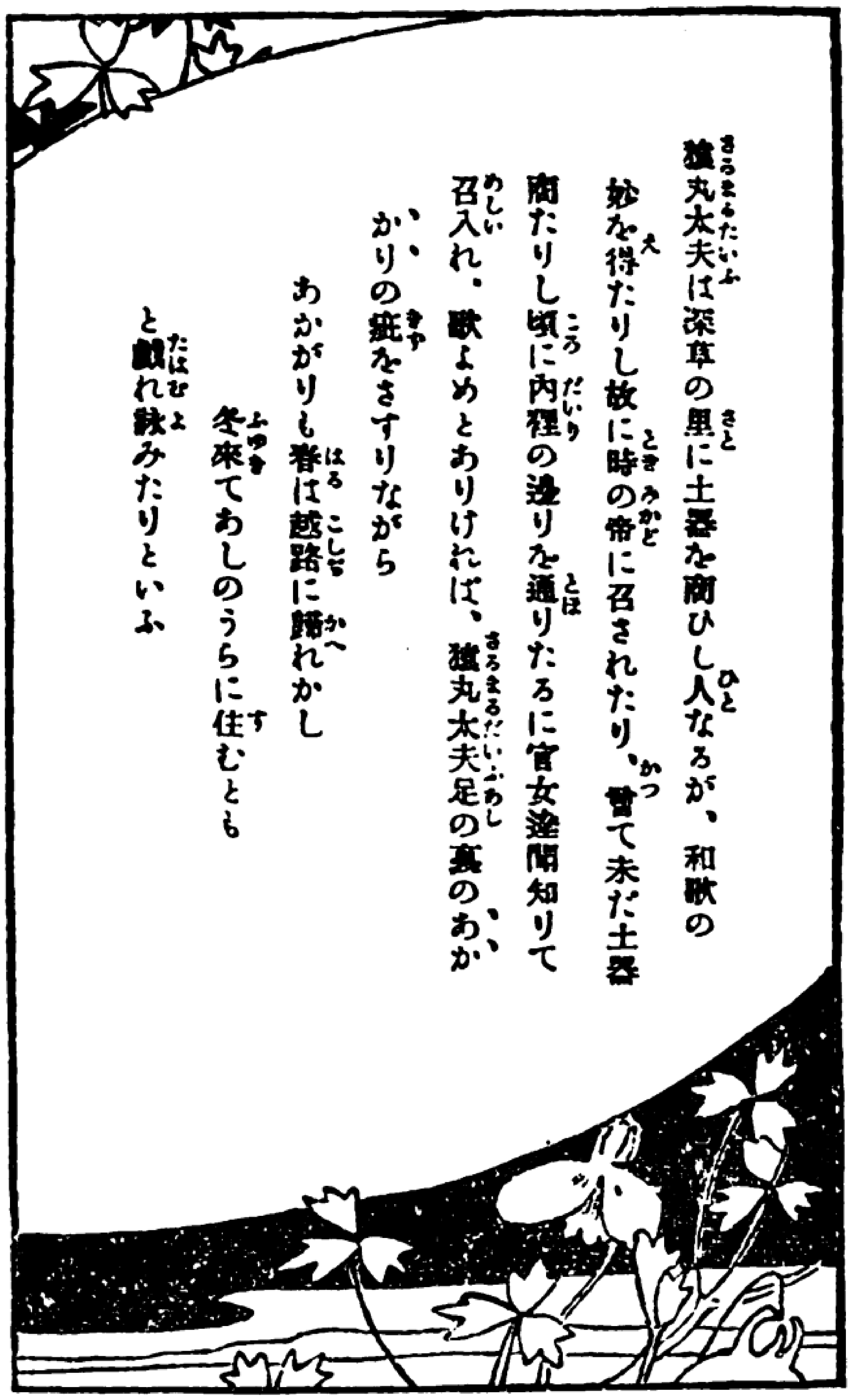
△食卓中心

人は食物によつて生存するのみならず、交際も談判も食卓に於て談笑の間に出來る事が頗る多い。故に食卓を家庭の中心と定めるのは各國に古くから傳はつて居る風習であるが、日本では古來殆んど之を忘れて居たので、日本の家庭に於ては食堂は實に哀れなもので、多くは臺所の横の片隅等一家中最も不利益な處である。從つて無論裝飾などに工夫も凝してない。けれども食堂本位にして考へれば、少しく之を裝飾する必要がある。西洋式にすれば第一白の卓子掛をかけるが、今日の如き日本の食卓食器では、到底これは行はれない。西洋のやうにプレートがあつて、その上に食器を置くのならばよいが、直接に皿小鉢を並べるのでは、毎日洗濯をせねばならぬから、煩はしさに堪へられない。食堂に花を飾るにしても、我國の生花では裏表があつて、周圍から眺めるには適しないから、雅致を損ぜぬ限り在來の活花を改良する必要がある。又料理にしても、從來は子供の料理、老人の食物など云ふものは、少しも研究されて居なかつたが、一家には必ず老人もあり、子供もあるのだから、大人の食物と共にこれ等のものも研究されねばならぬ。而して日を定めて、子供本位、老人本位、大人本位と云ふ料理を調へたならば、一家の中で互に客に招かれたやうで、食事に興味も生ずるし、且つ各自の趣味理想も滿足させる事が出來やうと思ふ。西洋人は食事を大切にする結果、食事には必ず盛裝して連なる。日本の様に食事が濟んでから着物を着更へるやうな事はない。又食卓に於て四方山の話をするのにも、話の趣味も材料も實に豐富で、日本の如く

女中の小言、子供を叱るなどは決してしない。

△祖先中心

これは即ち佛壇を飾る、佛壇に光輝あらしめると云ふので燈火を絶やさぬ、線香を絶やさぬ、一家に事あれば祖先の靈に告げる、馳走も先づ祖先に供へてから後に一同が食べる、重大な事件をばその前に於て決議する、冠婚葬祭も祖先に告げると云ふ様にすべてを神靈本位にする家庭である。これは西洋人などの想像する事の出來ない我國特有の風で、古來から養はれた祖先崇拜の國民的精神である。併し近來はこの風が漸く廢れて、祖先の靈は輕んじられて來たやうな傾向がある。よく祖先の位牌をば簞笥の上に飾つて置いて、毎朝掃除する度に轉げ落したりするので、今度は押入の中に入れる、或は又こんな物は無くても宜しいと云つて、佛壇も位牌もなしにして仕舞ふ家もある。時代の推移とは云へ、あまり面白くない傾向と云はねばならぬ。



△人格中心

これは一家に於ける主人或は主婦又は老人が非常に學問が出來るとか、人格の高い尊敬すべき人である爲めに、一家族が皆その週圍に集まる即ち一家の注意が悉くそこに集まるもので、食事でも濟むと、一同その部屋に集つて歷史上の話を聞くとか、文學藝術の批評を聞くとか云ふ風に、その人を中心としてその人格の力によつてそこに引き付けられるのである。それには食堂も食卓も、ストーブも要らない。生きた人間の人格本位に一家族が結び付けられるので、最も高尚なものである。かう云ふ家族は古へもあつたが、近代は大にこの必要が出來て來た。と云つてもこれは何處でもと云ふわけには行かない。家族を率ゐる丈の人格と經驗とを持たねば出來な

い或家では老人が昔語りをする、又或家では父が旅行談をする、家族の者が皆集つてその風俗人情等を聞く、その中に云ふ可からざる偉大なる感化を受ける。又或所では主婦が得意のピヤノを彈じてその妙音に一同が引き付けられるなど、智も有り徳も備はつた主人其他の人が一家の中心となつて、家族全體を結び付けて居るのである。

△紀念中心

一家の紀念が中心となるには、その家が一の歴史を持つた古いものでなければならぬ。例へば歴史上に關係ある寶物を持つとか、潰す事の出來ない事實を持つとかいふやうなのが家族を結び付ける爲に大なる力を有するのである。併し悲しい事には、現代の日本人は、新らしいものゝみを重じ、古いものを顧みない風があつて、家全體を紀念にするなどの考がない。西洋は日本とは國柄が異つて居るが、却つて日本人の理想とする所を實行して居る。カーライルや、ゲーテの住んだ家を紀念として永久に保存するなど國は家族主義でないのに、それ以上の事が行はれて居る。然るに我國には紀念を有し、名譽を保つべき家があるにも拘らず、少しもそれが力を持たぬのは不思議な話である。何うか今少しく國民が昔を偲び、謝恩の念を盛にする風を發達させ度いものである。

△子供中心

祖先を大切にすると同時に、子供をも大切にする事が必要で、一家の運命は實に子供によつて定まると云つてもよい。故に子供の進歩發達を中心として家庭の幸福を計るのも、亦結構な事である。子供が夫婦の縁を固める、子供の爲に互に苦勞すると云ふのは、確に子供中心の家庭です。日本人は殊に子煩惱であるから、かゝる家庭は至る所にある。併しこれは稍もすると子供を飾り物にする弊があつて、恰も人形か何かのやうに思つて、美しい着物を着せて親の虚榮心を滿足せしめる道具にする事がある。そして縮緬の着物を着せ緞子の帶をしめさせて、それを汚しなどすると、親はひどくに叱るが、子供こそ宜い面の皮である。全く子供本位なら、子供さへよく發達すればそれでよいので、着物などは問題以外である。よく世間には子供本位と自信して居り乍ら、不知不識子供に害毒を流しつゝある家庭があるが、力めて子供を奢侈にせぬやう、注意して育てる事が大切である。子供本位の點から云ふと、子供のない家庭は實に氣の毒なものである。彼の『小公子』などは其の一例である。また近頃家庭劇でやつた祖父と孫も好例で、兩親と祖父とを結び付けて一家を圓滿にするのは偏へに子供の働きである。即ち子供は大人の父、國民の父と云つても宜い。

要するに、すべての家庭は右に述べたやうな事柄が錯雜して、その中の何れかゞ重になつて出來上つて居る。その中心點が定まつて、その何れに屬するかゞ明かになつて、初めて一家の裝飾もきまる。これが國民制として定まつて居るのもあり、又在來の習慣によつて有耶無耶

の間に惰性的に出来て居るのもある。例へば子供中心の家庭ならば一種の感化を得しめむが爲に、ワシントンの肖像を掲げて正直な處を學ばしめるとか、或は孟母三遷の敎を繪にして床に飾るなどし又子供の爲に別に部屋を作り、庭も子供の運動遊戯に適する樣にせねばならぬ。

歷史中心、紀念中心とするならば、祖先の木像を飾り、祖先のなした事業を文章に表はして子孫の爲に紀念物とし、或はその他の裝飾物も皆由緒ある歷史付の物を用ゐ、殊に床の間に置かれた正宗の一刀は先祖の遺愛であると云ふ風に、一家の裝飾をすべて中心に關係あるものにするのである。

又神靈中心或は宗敎的のものならば、宗敎的の儀式も必要である。朝夕の禮拜も行ふし、經も讀み、祈禱もすると云ふ樣に、萬事神靈本位とする。從つて神棚や佛壇を飾るのである。又基督敎などを信ずるならば。偶像的のものを排し



て、一家が集つて祈り、讃美歌をうたひ、聖書の研究をすると云ふやうに、精神的に一家の中心を定めるのであらう。

其の他食堂中心ならば、家を造る際に適當な設計をせねばならぬし、ストーブ中心ならば、全然室内裝飾もストーブ本位にして、空氣の流通などにも注意を要する。日本の如き木造の家ならば殊にこれが大切である。又日本室に卓子を置き、椅子を置くならば、一丈以上の窓でなければ光線を採る事が出來ぬ。日本室は坐つて居る膝の上に丁度光線が落ちるやうに造られてあるのだから、腰をかける場合にはその樣に工夫せねばならない。

要するに一家の裝飾は家庭の中心が定まつて然る後にきまるので、それを定めずして如何に裝飾したとて、それは眞裝飾とは云はれない。



繪もの語

あやめの鬘

太田三郎

狐

それは丁度暮春の頃の、何處からとも無く甘い粛やかな匂ひが、ぼうと漂つて來る夜のことでした。或る若い男は、行きずりの人の誰彼となしに、何か話しかけてみたいやうな柔かい氣分で、ぶら／＼と京の街を歩いて居りました。すると朱雀の大路で、ふと美くしい女、それはもう、宛で繪のやうな美くしい女に行き逢ひました。で、はつとして思はず後を振返ると、丁度女も亦こゝろ有つてか、其輝く面を此方にしたところ、視線と視線ははたと合ひました。さあ斯うなつては、でなくてさへ、漫ろに物懷しさに雀躍する春の夜の若い心はじつとして居りません。つか／＼と女の傍に寄り添つて、二言三言何氣ない話をしかけました。と、對手は激しい羞耻に耳を染めながら、然もなほ夫れを厭はぬらしい素振、渠はもう堪らなくなつてつと其火のやうな手を差し伸べました。すると女は遽かに身を退いて、

『若しさうしたならば、お命に係りませう。』

とさし俯首く。其姿が又えも云はれません。男は猶更に胸をときめかして、益々烈しく迫り寄るのでした。と、美くしい人は少時じつと其顔を凝視めて居りましたが、思ひ決した面持で、

『では兎に角に御心の儘に。――その御命には此身を代へませうから――』

と云つて、ほつと切ない吐息を洩しました。が、燃え上る情熱に總身を顫動させる男には、さうした言葉を考へてみる餘裕など有りません。歡喜の手は直ちに花を摑みました。



翌る朝のこと、其男が武徳殿の邊を通りますと、其處に美くしい牝狐が、一本の扇をしかと抱き締めて死んで居りました。見ると、其扇こそは、渠が前の夜の女に別れる時、又の日までの形見にとて與へた夫れであつたのです。――敢て百歳の壽を抛つて、春宵一刻の情に代へる畜類の心緒、哀れにも亦嘉はしいではありませんか。

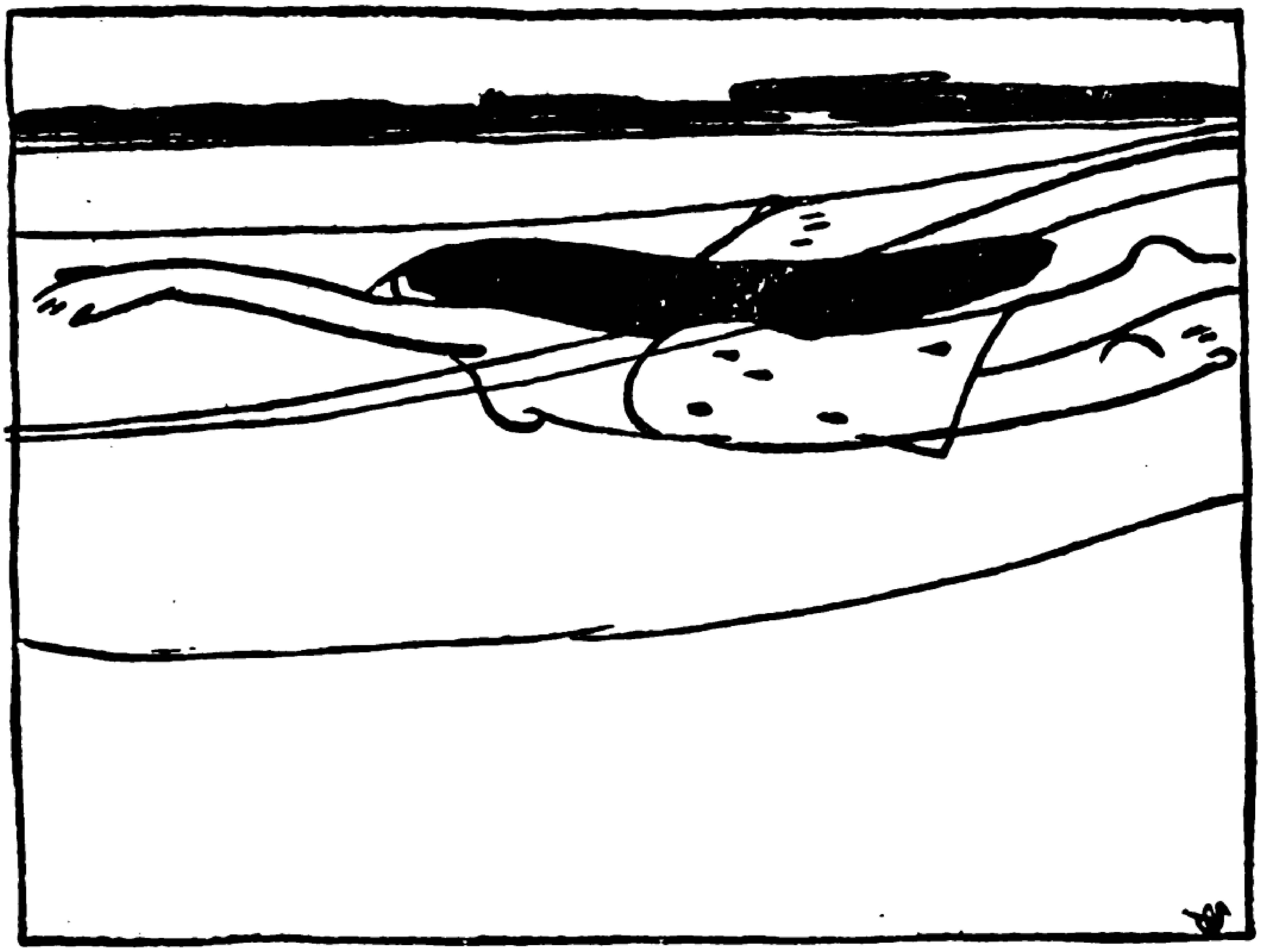
錦木塚

陸奥のごく古い昔、意中の人に其うら恥しい想ひを傳へる手段としては、心のたけを墨の香の匂やかな文字に籠めて、そつと紅の袖に忍ばせると云つたやうな事はしないで、目を覺める許りに飾つた一尺ぐらゐの木を、其人の門に立てるのが慣例となつて居りました。で、もし其想ひが屆かぬ時は、猶幾本も幾本も立て添へて、遣瀬無い心を訴へたものであります。匡房卿の歌に

　思ひかね今日たてそむる錦木の千束ならで逢ふよしもがな

とあるのなど、此事を云つたものでありませう。

その頃のお話です。其地に一人の青年がありましたが、同じ部落の或る女に激しく懸想して、例の錦木を立てましたところが、女は、未だ冬の眠りに深く捉はれて居て、少しも夫れに心を留めません。二本三本十本二十本、五彩の木は殆ど千に滿ちる程になりました



けれど、でもなほ振り返つてもみませんでした。男はもうひどく落膽して、終に或る夜絶望の體を、程近い川に沈めて了ひました。すると、其處に始めて女の心は永い眠から呼び覺まされました。と共に、それ程までに――身を殺すまでに慕つてくれた情のほどが、身にしみ〴〵と思はれて、一刻もじつとしては居られなくなるのでした。で、これ亦おなじ淵瀨に男の後を追ひました。

里人等は、其憫らしい男女の心をいたく憐んで、軈て浮き上つた二つの亡き骸を隣り合せに埋め、彼の心盡しの錦木をも添へて、永へにその瞑福を弔ひました。奥州忍ぶが里の錦木塚と云ふのは、此二つの塚のことでございます。

湖畔の戀

江州の草津に美くしい少女がありまして、大津に住む或る青年と戀し合ひました。が、草津と大津とは、御存じの通り琵琶湖を隔てゝ始ど目と鼻との間に在る

のですけれど、陸を行つては六里の距離で、人目を忍ぶ僅かな時間の通ひ路には到底なりません。で、彼女は健氣にも、纎弱い身に夜毎湖水を泳ぎ切つて、嬉しい夢を見に行くのを例としました。一念結晶した戀の女は、額へしかと結ひ附けた鬢鏡へ、高觀音常夜燈の灯がちら〳〵と映つて、更に水上三四尺へ反射する其微かな明りを頼りに、五十丁の大波小波を搔き分け搔き分けしたのであります。

すると、或る夜のこと、其夜は怪しい黒雲が空一面に瀰蔓して、星影一つ見えないのみか、吹き荒るゝ風は凄じう浪を蹴り煽つて、たゞ家の中に居るさへ物怖ろしい夜でありました。けれど彼女は、一夜逢はねば千秋の思ひに鞭打たれる苦しさに、矢張毎時のやうざんぶと湖水へ飛び入りました。

ところが、痛ましくも夫れが彼女の運の盡きでした激風怒濤の間を、辛うじて懐しの岸近くまで切り抜けたと思ふ途端、どうしたのか一縷の頼りの常夜燈が遽かにふつと消えて、後は唯もう眞の闇の、黒い波黒い風のみの其中に、行く手を失した疲勞の體は、暗慘の水底深く奪はれ去つたのであります。

亡き骸は、二三日の後男の岸へ打ち上げられました男は驚愕と絶望とに狂せんばかり、伏して悶へ起つて悶へ、人目を厭はず泣き叫びましたが、軈て房やかな髮をぷつりと切つて、飄然其地を去つて了ひました。情人を奪つた憎むべき湖の色や響きを、朝夕に見聞く



のが堪へられなかつたからでせう。

機織池

現今ではどうか知りませんが、つひ御一新近くまでは、尾張の丹羽郡新居村では、五月朔日に女が機を織る事を禁じて居たさうです。それは次のやうな譯からなので。



昔この地に非常に大きい池がありました。ところが如何した譯か、自然と水が溢れて、堤を潰し田畑を荒らし、果ては人畜をも害ふのです。村民等は或は堅固な高い堤を幾重にも作つてみたり、或は水の出口を浚渫して疏通をよくして見たり、種々と工夫して夫れに備へましたけれど、それ等は皆無駄でした。築いた堤は未だ草さへ生えぬ中にもう崩れ、やつと鋤き返した畑は直ぐ洗はれて了ふといつた始末、一村はたゞもう手を束ねて廢滅の姿を見て居るより外仕方がありませんでした。

すると何處からか、ふらりと此村に來た、年老つた筮者がありましたが、痛ましい樣をつく〴〵と見て、『此災厄を絕つのは譯も無い事だ、それは來る五月一日に機織る具を携へて池の畔を過ぎる女が有らうから、それを捉へて水中へ投げ込めば夫れでよい。』と斯う云ひ捨てゝ、又何處へかふらりと去つて了ひました。

軈て其日になりましたところ、果して筮者の言に合ふ女が通るのです。村人はそれとばかり矢庭に躍り出

でゝむんづと引摑む、見ると未だ年もうら若いのみか透き徹るやうな美くしさ。有繫に荒くれ男達も思はず手を引き窄めましたけれど、一村の衰頽には易へられぬと云ふので、終に泣き叫ぶ無辜の女を、深い冷たい淵に突落しました。

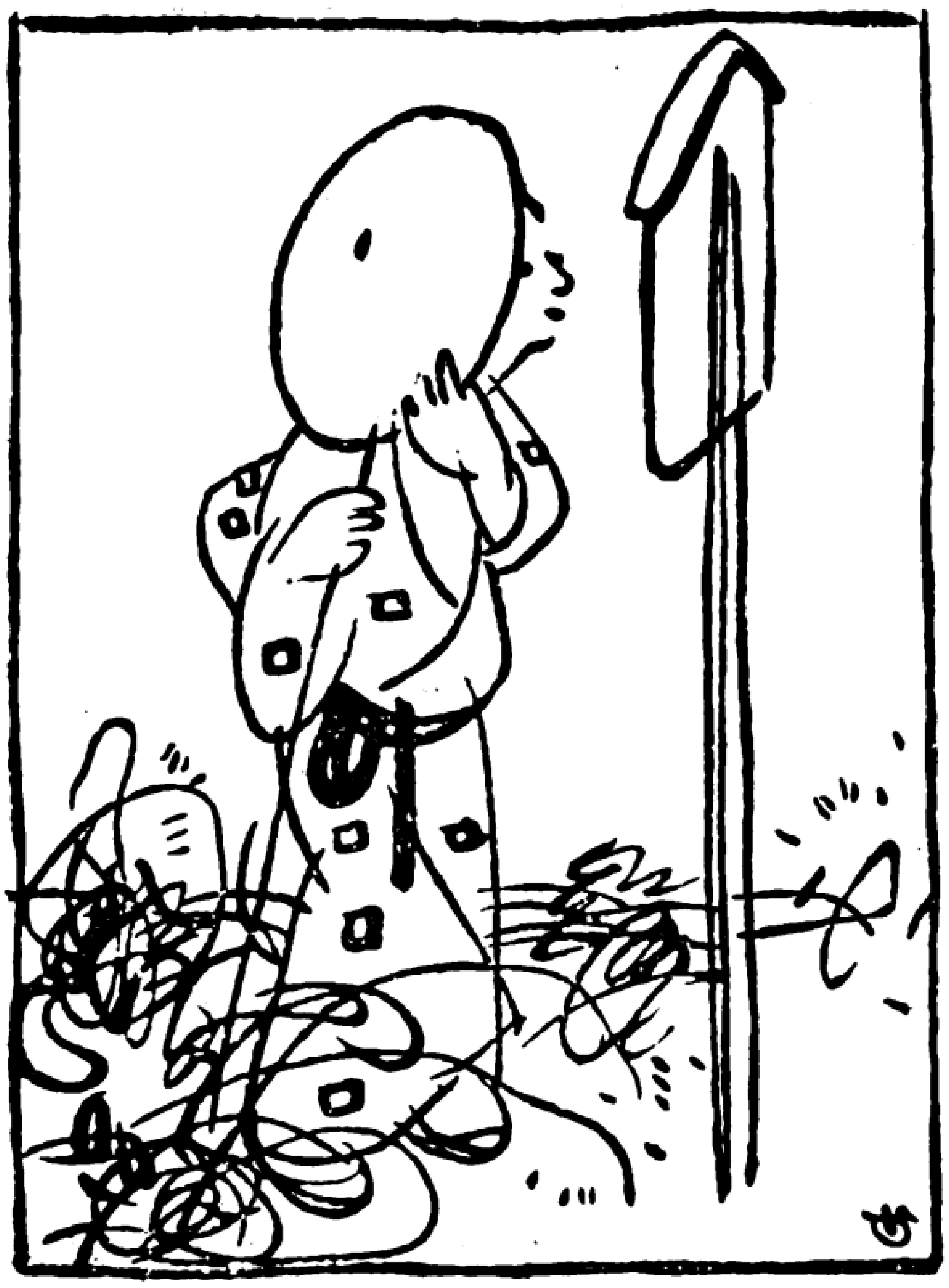
其後、不思議にも水害ははたと絶えて、一村は至で以前と反對の、極く豐かな村となりました。が、犧牲の祟りは怖しいもの、それ以後もし五月一日に機を織る女があると、其人は屹度譯も無い事を口走つて、悶へ苦しんで死なねばならなかつたさうであります。

女郎花

日向の國高松に佐瀨某と云ふ鄕士がありました。不圖した事から世の中が厭はしくなつて、年頃添ひ馴れた妻を棄てゝ、肥後國深葉山のさる寺院へ脫れ入りました。

殘された妻の嘆きは譬ふるにものがありません。愛を命の女の身が、今突然にそれを奪はれては、これから先の果敢ない生をどうして送つて行くべきか、思へば唯もう果てもない曠野に一人立つたやうな物寂しさに、日を夜をさめ〳〵と泣きに泣く許りでしたが、終には堪へかねて、せめては今一度あの懷しい顏をと、未練の糸に引摺られて、鄕里を徘徊ひ出でました。

ところが、こはそも此山の麓には、女人禁制の札が嚴然として立てられて居るのであります。宗教に絕對



の權威を與へて居た其頃の女には、如何に熱烈な情を以てしても、此四つの文字に泥塗るだけの勇氣はありません。彼女ははつと當惑の胸を抱きしめて、そゝり立つ杉の木の間を恨めしう見遣つたまゝ、どうと倒れて了ひました。

かくて幾時か經つてから、人の氣はひにつと頭を上げます。と丁度一人の若僧が、摘み溜めた秋草を手に傍を通るところでした。と、彼女は不圖ある事を思ひ附いて、慌しう其袖を引き留めました。而して切に乞ふて

花のみは同じ名ながら許されてわが袖ばかり露むすべとや

の恨みを、女郎花の一莖に結び着けさして貰ひました恁うして此花が、あの白雲の裡に運ばれた時、もし運よくば懷しい人の目に觸れる事もあらう。と行く水に文字する果敢ない業も、其場合の彼女には、なほ幾分の慰めとなつたのであります。

すると偶然にも夫れが門主の眼に留りました。枯れ切つた僧侶の群に珍らしく、人の情をよく知つた門主は其不憫しい歌の意にひどく打たれて、樣子を悉しく若僧に聽いた上、更は一山の中に其對手を索め、軈て分つた佐瀬某に樣々と說き諭して、山を下らせました。

斯くて可愛らしい妻は、再び其夫の腕に凭り縋つて小鳥のやうに身を躍らせながら、鄕里に歸つたと云ふ事であります。

△女丈夫の典型

豪商森村市左衛門夫人が豪膽であつた事は、一年汗をながしてかせぎにかせぎし甲斐あつて、小金のたまつた頃、五六人のあらくれ浪人、氷の太刀、ぬきつれて、深夜突然氏の家を襲つた。このとき夫人は泰然自若、ちつともさわがず、自ら金簞笥の鍵をにぎり、ものすごき浪人をしりめにかけつゝ『これが金簞笥の鍵です。私は、これからこの鍵をもつて訴へにゆくのです。金をとらうと思ふなら、私をお斬りなさい』といひつゝ悠々として戸口にすゝむ、をゝしさに、さすがの强盜も、度膽をぬかれおどろくそのひまに、しづかに戸をひらいて、おもてへ出たなどは到底堂々の婦人のなしうる所ではない、誠に常世まれなる女丈夫の典型といはればならぬ。



家庭に於ける女の趣味

波多野承五郎

△良人を外へ追ひ出す妻

家庭の幸福を全うするには、女子の趣味教育が必要です。此の教育の缺乏は、一家の浮沈に關する事が少くありません。

男子が終日の惡戰苦鬪に疲れはてゝ家に歸つた時に家庭に統一がなく、無味乾燥であつたなら、何の慰安も求められぬから、一日の事業を終へていそ〳〵歸るべき家庭が自然にイヤになり陰氣な自分の門を潜るのを避けて友人の家を訪ねて談笑するとか、圍碁會所へ廻つて碁を圍むとか、球突場へ寄つて球を突くとか、倶樂部で夜を更かすとかして、家庭が與へてくれない慰安を他で求めます。從來人はそれが寧ろ當然で、然うせねば慰安は求められぬものと思ひ、亂雜無趣味、寂寥は家庭の一資格とまで思ふ者があつた位で、家庭の幸福、慰安などは、全く期待しなかつたやうですが實に甚しい間違ひです。これは畢竟女子の學校教育が餘りに家庭と緣が遠いからと思はれます。たとへば

音樂にしても、日本の家庭に最も親しい、三味線は、俗謡と卑しめられて、決して學校では敎へてくれません。また清元や長唄や新内を敎へると云ふ學校のある事は聞かないやうです、此等の音樂が何故に不可いか何の爲に日本の家庭に採用出來ぬか。人人が之を俗謡と卑しめ乍ら芝居のさはりに感嘆するところを見れば不可ない理由は少しもないやうです。若し歌詞が氣に入らぬと言ふ事ならば、それを學校で新しく製作すればよろしいでせう。それを作る藝術家や詩人は幾らでも居ります。



△趣味の缺けたお稽古

また學校では裁縫に重きをおき、やゝ長じた女子に對しては、一日に四五時間乃至六七時間も課してゐるが、成程之れは婦人に大切な事には相違ないが、こんな事は仕立屋に任せて置いてもいゝし、また召使ふ女中にさせても出來ないとではありません。かういふ事に重きを置ながら、最も必要な料理の事を疎かにしてあるのは、譯の分らぬ話です日本の家庭は、一體に粗食ですが、これは粗食は、君

子の本分で、美味を歡ぶのは愧づべき事のやうに思つてゐる論理觀の爲でもあるが、大なる原因は、妻女が料理割烹の趣味智識を缺いてゐたからです。然るに今日學校で授けてゐる料理法は、只だ庖刀の持ちやうとか、刺身の並べやうとかの方式に止つて、最も大切な味の事は殆んど顧みないやうです。或はある家庭では學校以外に其の子女を茶の湯の稽古に通はしてゐる者があるが、世の宗匠はその手續や身體の態度こそ練習させるが、趣味の養成といふ事は全く閑却してゐますけれど手續を覺えたのみでは、家庭の幸福ともならず慰安にもなりません。たとへ手續きは拙いにしても、其れに趣味が伴はなければ、茶の湯の極意に至らないのです。これを世間の宗匠に望むのはむづかしからうが、學校で之を補つて呉れてもよさゝうなものです。

△婦人の美術思想

伊太利ローマ、ネープルスの博物館は世界で有名なもので、非常に貴重な古物を藏して居ります。その他博物館に限らず。個人の貴族の家などでは多くの古書古美術を陳列して廣く縱覽せしめるし、寺院などにも多くの寶物を持つて居ります。從つて伊太利人は非常に美術思想に富んで、古物を鑑別する眼のない者は貴婦人紳士の仲間入りが出來ないと言つたやうな有樣です。

我國でも、奈良の正倉院はじめ、各寺院が有してゐる古美術品は、支那などよりは遙かに上であるから、日本人も秀れて美術思想を有たねばならぬ譯ですが、其實さうではありません、殊に多くの婦人は、客間、書齋、食堂等の裝飾さへも巧みに配置出來ず、机の上の文房具一つと雖も、主人の手を煩はさねば置かれぬと云ふ始末です。そしてそれらは總て女子の重要な務めであるに關らず、全く主人のなすべきものゝやうに思ひ、床の幅を一つ掛け替へる事が出來なくとも、少しも恥とは思つてゐません。たゞ來客の時に、茶の間に坐つてゐて茶を運ばせる指圖をするとか、料理屋よりの料理を客間へ運ぶ世話をするとか出來れば、女一

通りの義務は果されたものとして居ります。が日本の婦人も今少しく座敷の裝飾、書畫、骨董、美術品に關する一通りの智識を具へてほしいものです。それは決して難かしい事ではありません。その蘊奥を極めるのは難しからうが普通ひと通りの事は決して然うではありません。書畫骨董商賣の者は、小僧時代から禿頭になるまで苦しんで來たのだから、非常に難かしいものゝやうに思つてゐるが、それも敎育ある頭で研究すれば、茶の湯の手續を覺えるよりも容易すい事です。



牡丹東とゞろとふみぬ蹤の圖

生花にしても、妻女はその生ける法式だけは知つてゐても、その生くべき器の形、または置くべく位置等は、主人に質さねば解らぬと云ふが普通ですが、これも趣味敎育の缺陷から來てゐるのです。

△面白くもない妻の裁縫

右のやうにして、自分の家へ客を招いた場合などに家庭料理では面白くないといつて、妻君や娘はお燗の

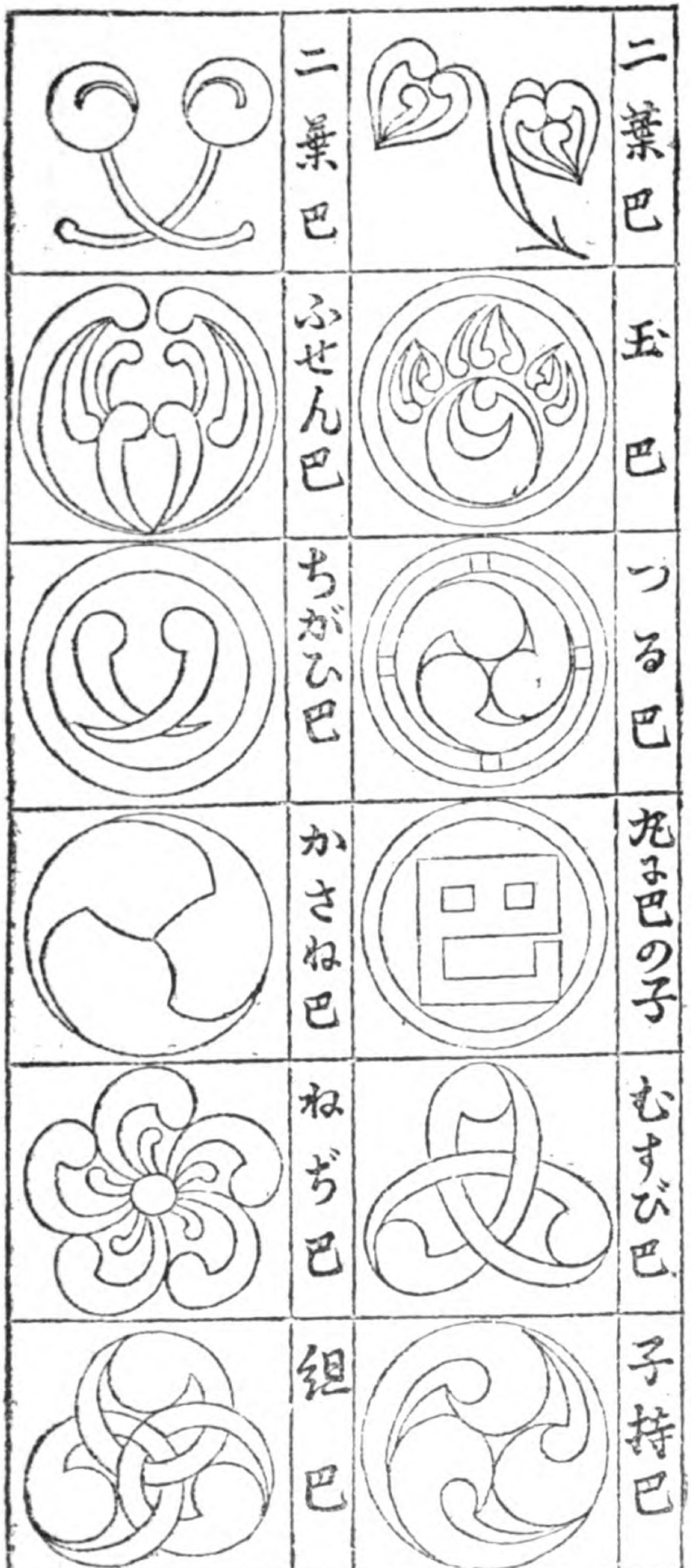
番、お酌には料理屋の婢を招かねば用が足りず、音樂は藝者でなければ役に立たないとしたら何うでせう。客をもてなすべき料理で、待遇も、音樂も出來ないといつては、婦人の恥ではないでせうが。學校に於て徒らに貞女烈婦の論のみを聞かされて、良妻賢母は貞女烈婦でなければならぬものゝ様に思ひ、家庭の和樂、圓滿、慰安の資本たるべき趣味の考などは全く缺けて居ります。そして食物は菜根を噛んで足るといふ粗食論、衣服は無理に粗衣を纏ひ、流行に從ふは一種の罪惡と信じ、書畫骨董も皆目わからず、俗間の音樂は穢はしとて、朝から晩まで女中相手に裁縫のみを事業の如く心得で、その夫や兄弟が家庭の無趣味に堪へずして球突をやり、圍碁會所へゆき、倶樂部で時を移し料理屋で料理を食つて夜を更かすをも平氣で見てゐます。隣室で夫は謠曲の稽古をやつてゐても、妻は耳も傾けずして矢張り女中相手の裁縫に餘念がない。これで家庭の融和、圓滿を期さうとするのは無理な注文です。一面から言へば男子が内を外にして遊ぶと云ふのは、寧ろ女子が夫を驅逐するのではないかと思はれます。斯くてお互に好いた同士が結婚してゐる筈なのにその結婚の熱がさめない中に、既う男は外遊びをしてゐます。

△趣味の生活は美人を作る

或は趣味の生活は日本人の財産が許さないといふかも知らぬが、日本が貧しければこそ、趣味の敎育を進め、趣味生活の必要があるのです。價の低い物をも巧みに美はしく裝飾し、美はしく料理して味はふ、其處に貧しい日本が能く幸福を得べき路を發見しなければならないのです。又話は別であるが、丸善へ行つて見ると「繪入世界人類書」と云ふやうなものがありますそれを一寸、覗いて見ると、人間が美しいといふのも醜いといふのも、文明の發達程度の區別に過ぎないといふことが、直ぐに會得されます。全く美しいといひ醜いといふ區別は、その面に憂ひ、恨み、苦みの色は表はれてゐると其れがないとにあるやうです。即ち野

蠻の社界にあつては無理、非道、虐政が行はれ、文明の國に於ては自由、平和、安心があると同時に、女子の容貌にも快活、寛か、靜穏などいふ心持が見えてゐます。だから日本でも趣味教育が完全に行はれ、家庭が圓滿にゆきさへすれば、日本の婦人は數百年後には今より數倍の美しさを增すでせう。子孫より子孫へ傳へて、いよ〳〵美しくなるに違ひない。

巴の意匠



頼山陽の妻の手紙

坂田靄軒

人物の活動には種々な背景が伴ふ、事業の成功には家庭の内助がある。かの文豪で詩人で歴史家で、機才縱横豪放不羈な頼山陽その人が、一代の著作に曠世の盛名を擅にするに至つた所以も、彼が天分以外、半ばその家庭に負ふ所があつた爲めだと思ふ。果然山陽の家庭には、梅颸といふ賢母と梨影といふ良妻があつた。

梅颸の事は今姑く言はぬ、兎も角山陽夫婦の人並以上に仲の善かつたことは有名な話で、當時の祇園の歌妓幾松といふが、『頼さんのおしものは、川魚に、赤味噌・葱小口切り、慈姑の丸だま、大根豆腐に雲丹うるか、駱駝（夫婦同伴のこと）に瓢簞伊丹酒』と歌にまで作つて謠つた位、山陽自身の手紙にもさういふ事實が幾多も書いてある、此の平和な愉快な家庭の女主人公梨影といふはもとは、近江の煙草屋の女で、京都小石氏の下婢となり、遂に緣ありて山陽の妻となつた才媛である。柔順貞淑・書に通じ繪を善くし、夫妻筆硯を共にすることなども屢々あつた。次に掲ぐる梨影夫人の手紙は、天保三年九月廿三日、山陽の歿する三日前に、長らく夫の病牀に侍し、夜の目も寢ずに看護を盡された當時の狀況を具さに認めて、備中長尾の素封家小野泉藏の妻及びその姪の許に報じた手紙である。

便を求め一筆申上まゐらせ候。時分から時こうさだまりまゐらせ候。いよ〳〵御揃まし御機嫌よく御入遊ばし、御めで度存上まゐらせ候。左樣候へば、當春はじめて御めもじ樣申上、御うれしく存まゐらせ候。其せつは大いに〳〵御ちさうにあづかり、其上いろ〳〵御みやげ被遣、だん〳〵と忝く存まゐらせ候。毎々御うはさのみ申上候。其後御歸り遊し候ころに、此かた主人より書狀さし上候へども、とんと〳〵あなた樣より一つも御狀參り申さず、いかが致しました事やと、日々主人申出し、御察申上

候。
扨また此方主人も六月十二日よ
り存じの外大病に取あひ、誠に
誠に心配いたしまゐらせ候。
はいけつにて、初めは少
少にてたんけつのや
うに存じまゐらせ候
處、又七月廿五日大
出、又三四日ほどに
てをさまり、もはや
よろしと存じ、主人
もさしてのかはりも
なく候ゆゑ、おひ〳〵
とよろしく候事と存じ候
處、又々八月十八日朝大出
又廿二日廿三日、一日三度ほ
ど出、誠に〳〵大たんそく、小石、ふく
井、新宮も、誠に〳〵むつかしく〳〵、いたし方も



うろはしく水枝さしたるわが岡の
かしの林に朝風ぞふく（景敏）

なしと申し、いろ〳〵と心配致しま
ゐらせ候。お察し下さるべく候
九月二日ごろより誠につか
れ出、身もよわり、又十
五日ごろより兩便も
すぐにねまにて取
ると申すやうにな
り、すこしはなし
をいたし候てもい
きがきれ候やうに
なりまゐらせ候。
もはや今日は丸に
もいられ申さず、丸
へあがり度候へども、
いきがきれ申候やうと申い
られ候。むつきにて取申候。扨
扨〳〵つういたされ、見申候所扨々氣
どくに存じ先はじめより食事はあぢはひよ

ろしと、少しづゝなれどもおいしく夫に日により候へばむかつきがあり、大いに〳〵食もむつかしく、日に三度の食事みづからこのみいふに従ひ、いたしまゐらせ候。言に氣ぶんは誠に〳〵たしかな事、今に其内々つう義どもの文をかきたし、ちよじつもみなみなほし候て、門人にかゝし申候、かやうなげん氣有り、扨いしやは、とてもいたしかたなしと申候へども、右やうな所を見申候へば賴の所あり、たのしみにかいはう致し、ながくとも、どうぞ〳〵本ぶく致され候樣と祈りまゐらせ候。

　まづ〳〵本代三百疋此方より九月拂に取かへ申候。左樣におぼしめし。

　誠にかいはう中、門人衆もよく〳〵かいはういたしくれ、二人づゝかはり〳〵に、よとぎいたしまゐらせ候。私はちのみ子あり、扨々心ばかりにて、いきとゞきかね、しんきに存候。いそぎ主人より御便りもなき事氣づかひ、私より御見まひ申上候やう申つけまらせ候。めで度かしく。

九月廿一日　　　　賴内より

小野氏

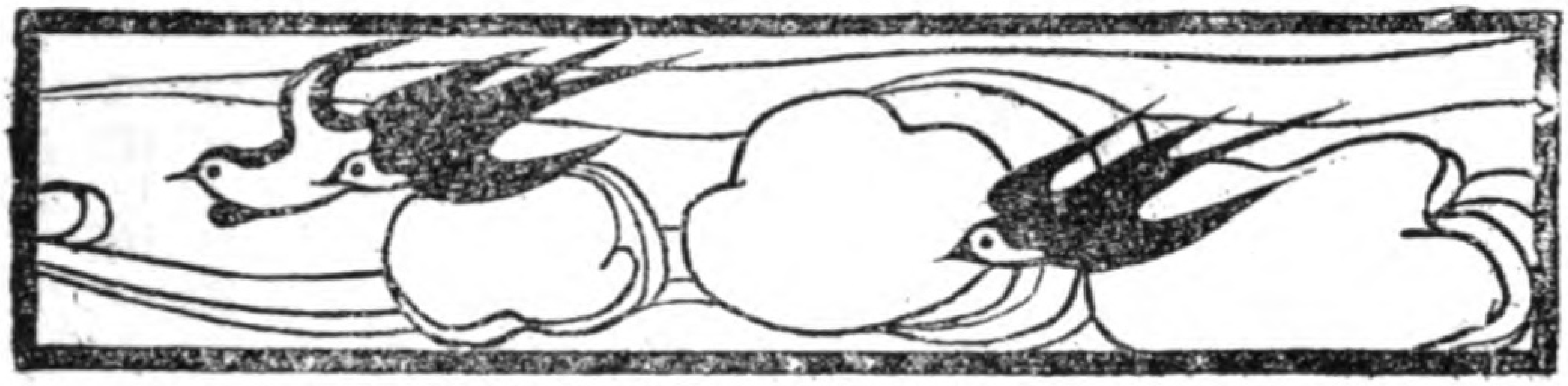
　御おもじ樣

　お新もじ樣　御もとへ

なほ〳〵、折から御いとひ御用心遊ばし、何か申上候事も山々おはしまし候へども、右の通り取り取りの主人大病ゆゑ、御あいさつも書殘しまゐらせ候。御めん可被下候。

　猶々國元母君へ、いつて大病の事申遣し不申、少々のよしに申候へども、はやよろしと存、左樣におぼしめし被下候。此義主人にも申つけまゐらせ候。日夜心配のみいたし候。

梨影夫人が此の手紙をものした、二日後には、山陽はもう此の世の人で無つた。夫人が丹誠の中に一縷の望を繫いで、せめてもの本復を祈つた甲斐もなく、彼は筆を持つたまゝ突然咯血して、遂に敢なく斃れたのである。看護に窶れて、乳吞子を抱へながら、後へ殘された夫人の悲歎は、果して何のやうであつたらう。



一藝に達する者は萬藝に達す

女子共立會長　松江美佐子

△學課以上に頭を使ふ

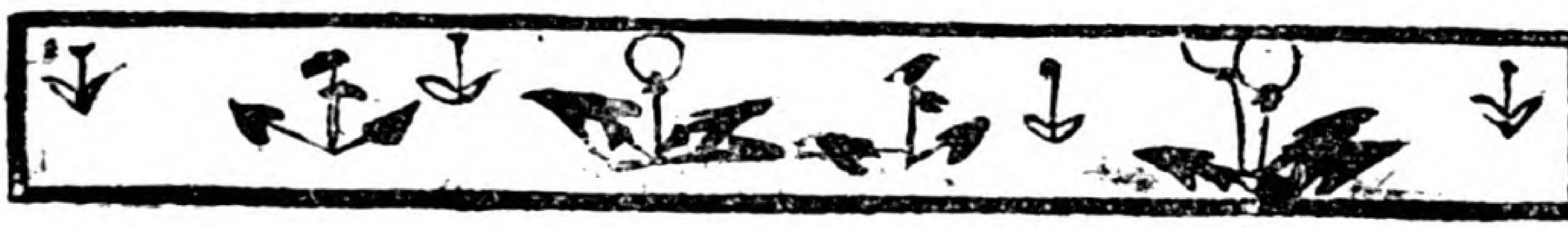
よく女學校時代には、生徒が裁縫に興味を持たぬと云ふ事を聞きますが、これは無理もない事だと思ひます。凡て他の學課は、たとへ一時間でも二時間でも、學べば學ぶだけ、事柄が變つて行きますから自然と興味も湧いて參りますが、裁縫に至つては、一時間や二時間は愚か、一週間經つても大した變化がありません。しかも此の變化の少ない、著物や羽織の一枚に、永い事かゝつて、漸く出來上つても、自分にさへも滿足が出來ないので、ます／＼裁縫は苦しみの多い、樂しみの少ない、詰らぬものだと思ふやうになるのであらうと思ひます。つまり裁縫は、單に手先きの仕事のやうに見えて、殆んど學課以上に腦力を要するものですから、編物や體操と違つて、色々の學課の間に時々取り出す位では、到底完全に仕上げる事は望まれません。從つて、興味も起らぬ道理でございます。

△虻蜂取らずの修業

それと同樣に、裁縫學校で、色々の學課を並べる事も、それを悉く仕遂げる事は愚か、肝腎の裁縫までが不充分になつて、多くは虻蜂取らずに終ります。現に本會で試みて見ますのに、この裁縫の間に色々の學課を挾んで學ばせますと、其れに要する時間は僅かでも、長い間には、非常な進歩の妨げとなるのでございます。夫れ故、近來は決して間に他の學課を入れる事は致しませんで、塾生は、成るべく朝か晩、即ちまだ裁縫に掛らぬ前か、終つて心氣一轉の後にかゝらせる事と致しました。此の方が遙に結果が宜しうございます。夫れ故、裁縫に志す女子は、先づ最初の間は專心裁縫を學んで、大體會得も出來興味も十分起つて來た上で、他の事を傍ら學ぶと云ふやうに致した方が宜しからうと思ひます。

△女子の裁縫と人品

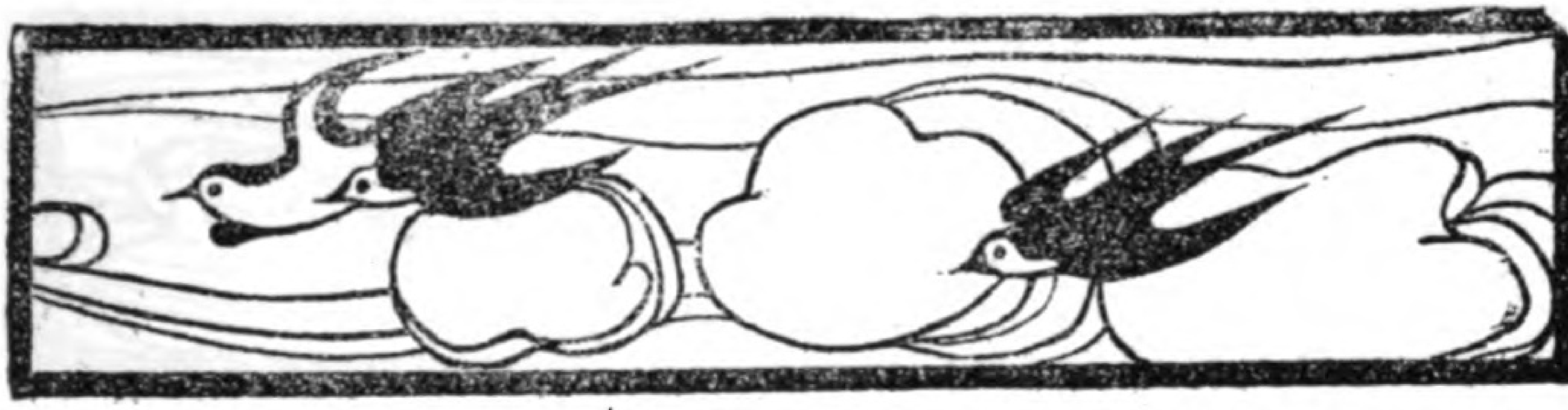
かやうに申しますと、裁縫に志す女子は、極く程



度の低い、高尚でない人間になりはしないかと思はれませうが、決してさうではありません。成る程、地理、歷史、語學等の如きものは、特に學ばれば解らぬものですが、精神教育、即ち婦德の養成、常識の開發の如きに至つては、別に修身學家政學と、態々時間を設けて學ばずとも、この裁縫を成業する迄の間に十分其れ以上の効果を擧げる事が出來るのでございます。昔から「一藝に達する者は萬能なり」との諺があるのも、つまり此邊の道理から申したものでありませうが、裁縫は前申す通り、他の技藝に比して最も腦力を要するだけ、効果も殊に著しいのでございます。尤もそれには充分良教師を選ばなければなりません。裁縫は他のものに比して、生徒と教師が最も長時間對座して居ります上に多くは個人教授ですから、生徒の長所短所が明に解ると同時に教師の感化力も至つて多大なのでございます。從つて、良教師に就て學べば、啻に技術の進歩の速なばかりでなく、忍耐力、優美な思想、緻密なる注意力、其他種々の方面の美德を養成する事が出來ますが、之れと反對に、人格の低い教師に就いて居れば精神上少なからぬ惡影響を受けます。

△自ら不器用と言ふ人

併したとへ良教師を得て親しく教授を受くる事が出來ても、自身の意志が薄弱では、何の効果も擧げる事は出來ません。即ち裁縫は女子の天職である、家を治むる爲にも、萬一逆境に立つた時の用意としても、是非、之を修めて置かねばならぬと、一旦志を立てた以上は、たとへどんな難關に出逢はうとも決して、臆せず屈せず、飽く迄初志を貫徹しやうと云ふ、この堅固な意志が最も必要なのでございます。世には、往々私は不器用だからと云ふ人がありますが、私はかやうの生徒が來る度に、「考へて御覧なさい、貴方だとて目も二つあれば、指も十本あるでせう、して見れば、人に出來る事が自分に出來ないと云ふ事は決してないので若し出來ないとすれば、つまり心の働き、云ひ換へれば熱心が足りないからです」と申して、きびしく教へます。すると成るほど器用な人に比ぶれば、幾分か日數を長く要しますが決して出來ないと云ふ事はありません。つまり、教員は、生徒の個性に應じて夫々適宜の教育を施す事が必要でありますし、又習ふ方では、自分の腦力を



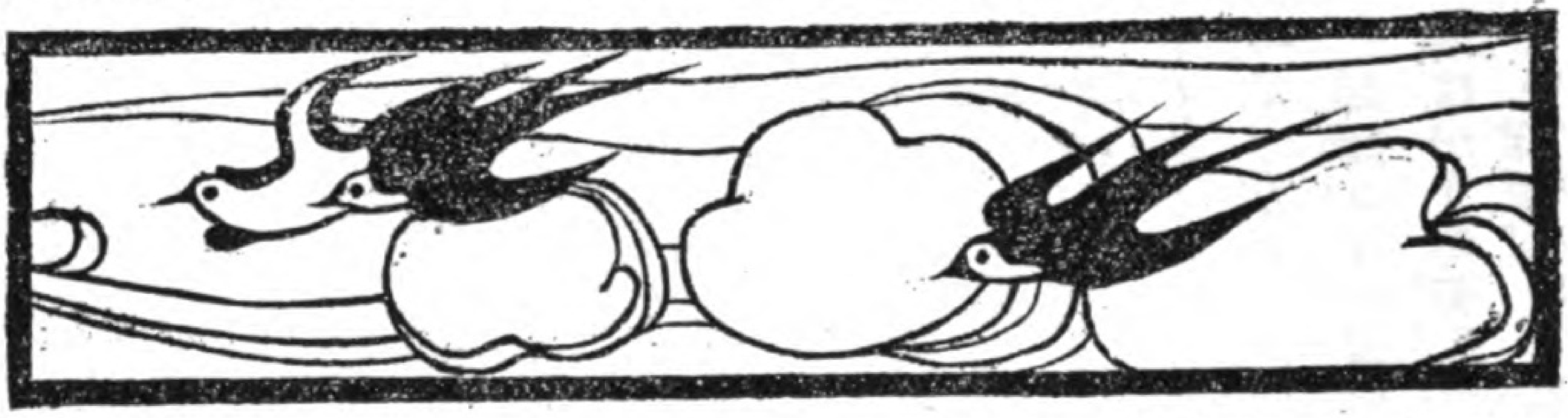
よく顧みて、徒らに急がずあせらず、さりとて油斷なく、熱心に修業する事が最も肝要でございます。

△材料の困難

それから尚一つ裁縫に取つて大切な事は、實物の材料でございます。これは東京に家庭のある人は別として、地方から態々上京なさる人々は、多くはこの材料の事を考へずに、只學校に入つて卒業さへすれば、事が成るやうに思つて、夢中で出て來られる人の多いのは、大きな誤りでございます。總て他の學課には夫れ〴〵、教科書を要すると同樣、何の技藝にも材料が必要であります。然し他の學課の教科書や、他の技藝の材料は、買ひ求めるとしても容易ですが、裁縫の材料は、中々左樣は參りません。尤も一時は雛形を以て一通りの方法さへ覺えれば道理は同じだとの理窟から、其の方針を取る學校もありましたが、近來は漸く其の弊を悟つて、殆んど全く廢して居ります。此れは當然の事で、若し雛形でよい譯なら、木綿切れで總て縫ふも宜しいと云ふ事になりますが、これではならぬ事は申すまでもありません。

△良き品を手にかけぬ生徒

裁縫は日常用ふる衣服の種類は僅かでも、夫々地質の異なるに從つて、其の扱ひ方が違つて來るのであります。此の扱ひ方は、とても理論ばかりでは解るものではありません、教師の膝下に居る間に其の經驗に基いて、十分方法を覺えると同時に、色々の品質を手にかけて、其の扱ひ方をも會得しなければならないのです。然るに最初の木綿類、銘仙類位こそは、自分達の物や知人の物を借りてもどうにか間に合せる事が出來ますが、段々方法も覺えて、上等物にかゝらねばならぬ時が來て、非常に困難を感じて居るのを往々見受けます。先頃も某裁縫女學校の卒業生が、本會の研究科に入學致しましたが、其の話しに、「私共の修業中は、材料の爲に殆んど普通女學校生徒の倍額も費用を要しましたが、それとて上等品を求めるには無論足りませんし、借りやうにも夫れだけの技倆がないので貸して吳れる人はありません。其れが爲に卒業の時日も餘程、後れますし、實に困りました」と申して、本會の生徒が、卒業間近には立派に模樣の重ね物などを仕立てゝ居るのを



見て、非常に羨ましく感じた樣子でしたが、成る程仕事をさせて見ますのに、銘仙類位は兎に角相當に仕上げますが、少し上等物のお召、縮緬類になりますと、まるで人が違つたかと思ふほど手際が落ちてしまひます。これは修業中によい物の取扱ひ方を習はなかつた結果でございます。夫れ故本會では最初からこの材料の供給に最も心を用ひて一方に研究科と云ふものを設け、材料のない生徒には、此方から適當の物を貸與すると云ふ事に致して居ります。そして骨が折れますが、極稽古始めの人達にでも決して見苦しい仕立方をさせぬやうにと、始終注意をして居る結果、幸ひ皆樣の信用を得て、始終有り餘る程に材料があるので、生徒は卒業するまでに、幾つとなく上等品を手にかける事が出來ます。

△修業期間の短縮

倘ほ一つ私はいつも生徒に注意して、「皆さんが只一年なり、二年なりの年數が經てば、自然に卒業が出來ると思つて居られるのは大きな間違ひです。「ここに二人の人があつて、一人は一枚の着物に三日かかる、又一方の人は一日で仕上げると云ふ事になれば、前の者が三年かゝる稽古を、後の者は僅かに一年で卒業の出來る道理です。この事をよく考へて、一刻でも油斷をせぬやうに」と申して居りますが、かやうに致すと、他校で二年かゝつた丈の技倆は、一年間で、確に修得させる事が出來ます。そして倘ほ婚期に間のある女子ならば、進んで研究科に入學致させ、一層裁縫の奧儀を究むる傍ら、たとへ家に不足のない女子にでも、技倆相當の配當を與へて、各自希望の學藝を學ばせると云ふ事に致してございます。此の研究科に入つて、一二年もすれば、六七年も苦心してなつた男子の本職に比べても、少しも遜色なき迄に熟達致します。色々申述べましたが一般女子の通弊として、なるべく樂に物を習はう〳〵と望む處から、學校の方では、此の缺點を利用して、比較的苦しみの多い實物の方を等閑にして、只管生徒の歡心を得る事に努める結果、何れも實力に乏しい、空理一方に傾いた人のみが澤山に出來上り、其の内の人達が教師となつて、又生徒を教へると云ふ風になるので、益々肝腎の技倆が退歩するのは遺憾です。



向陵の夜月

内藤千代子

三月一日朝上京。新橋から雨中に俥を飛ばして九時二十分、本郷なる青柳さんのお宅につく。丁度一高の弟さんがマントかぶつて、外から飛びこんでゐらしたのと顔見合せ、うつかりお兄さんと間違へてしまつた處へ、實物のお兄さんが、ヤアこれはとお現れになつたので、少なからずびつくり敗亡。

「さア直ぐと二階へ。K君も先刻から來てゐます。」

御免遊ばせ、と次の間の襖のきはに面隱れ、K先生お近眼鏡を光らせながら、五ツ紋にお袴ばきか何かですまして居られる。これは獨法の森田君です。ともう一人の方を紹介して下さる。

お妹さんの瑠璃樣、お茶をもつてゐらッしやる。十八ばかりの美しい方、前髪ふくよかなマガレツト、あらい京お召に、更紗縮緬の無垢を重ねて、白襟凛々しく、俯かるゝ肩ごしに、褪紅色の矢の字がのぞく。

この君がおん筆になる繪絹は、可愛らしい振分髮の兒が三人、椿樹の下の青草の緋毛氈の上にお飯事してるところで、まだ書きかけのまゝ室の隅に立てかけられてあつた。眞珠の樣な露を結んで、庭前の白梅には音もなく春雨がそゝぐ。

紺飛白の羽織を着ぶくれた青柳さん、片手を懷中に片手で火箸をぐさと灰へつきさしながら、お三人はしきりとお話がはづむ。ひとりぼつちの私は仕方なしに雜誌の口繪など拜見する。

とどろと階段をふみ鳴らす足音、ヤアとばかりお元氣な丹波さんの御入來。かねて期したる事ながら、はつと伏目になつて後退り。

「始めまして。」と物愼ましう。けれどお互に初對面のやうな氣はしない、制服のまゝではあるが利かぬ氣のお眼つきや、高い鼻、引しまつた口許、お髮を四寸ばかりに長うして、少し浪打たせて右へと綺麗に分けてある。これなら何時佛國へ御赴任遊ばしたつて大丈夫

在學中に外交官試驗を二番で及第した秀才と云へば知る人は知らう。丹波篠山々家の猿が、花のパリーで芝居する。あら、失體、これはつひ――。

しやれた靴下のあぐらして、オリエントの煙をふきながら「金子さん」と呼びかけられる度に冷々する。ほんとうにお人の悪い丹波さん、かね〴〵お手並は承つて居りますもので。

そのうちにだんだんお客樣もお揃ひになつた。瑠璃樣がお友達の方々である。瑠璃樣は世に時めき給ふ女流畫家藤園樣のお弟子でゐらつしやる。田鶴子樣は女史の御令妹ときく。丸顏の眼のぱつちりした眉の濃い可愛いお孃樣。黄八丈のお羽織も、白いお顏によくうつる。すらりと優しい撫肩の、しとやかな須磨子さま。異彩を放つて被居るは嘉久子樣、黒地に紅で麻の葉を縫ひつぶしたお半衿から、眞白い首筋を拔いて、厚化粧の人形立。結立の唐人髷つや〳〵と、長いお袖でお口元おほへば、美しい花櫛が、するりと前髪をすべつて落ちる。お羽織なしの胸をせめて、お帶たかく、まアこの方が毎日お袴つけて學校通ひとはどうしても思はれない。舞扇飄と



開いて振の袂を飜へさん、春の夜の金屛ひくき廣前にふさはしかるべき艶麗さ。

御一緒に如何ですつておすゝめしたけれど、森田さんは、失敬しますつて書物抱へて角帽かぶつて、京橋の方へ勞働者の問題とかの研究に行つてお了ひなすつた。お若いのに感心な方と思ふ。十一時頃から揃つて一高へ出掛ける。いたづらなK先生、玄關で丹波さんの角帽の徽章を手早く逆さにつけ直し、腰の立たぬほど笑ひころげて被居る。後の青柳さんがお靴の紐を結んで居らるゝ間を、一同門外にたゝずみながら、見合す顔にはおさへ切れぬうら若い含笑みの輝き、今日ばかりは天下晴れて向陵の空氣が吸へるのですもの、一年一度の紀念祭なんですもの。學校ぐらゐはエスしたつて何だつてまだ〳〵足りやしない、脫線して溝ん中へ飛び込んぢまふかも知れない。丹波さんは寄り道があるつて途中からお別れ遊ばした。思ひ〳〵に美しい蛇の目傘かたむけ、西片町のぬかるみをこねまはしながら、やう〳〵目的地にたどりつけば、足早のお兩人はもう門前に焦れつたがつてゐらした。

あちらにも此方にも氣をとられて、ともすれば高足駄をふみくら返す。下足場の混雜を外に見て南寮の入口から。こゝで皆さんは御持參の草履とはきかへ、私の分は弟さんが駈けてつて何處からか持つて來て下すつたが、播溜から拾ひ上げたやうな薙刀形の麻裏を、「これはね、返して下さいよ、僕困るんだから失さないやうにね」つて操り返し〳〵仰有るもので可笑しくて〳〵、何んな方のだか知らないけど、田中とか田尻とか書いてあつたつけ。

販賣係りの寮生二三人、寮歌集とエハガキ如何です如何ですと笑ひながら袖をつかまぬばかり。漸くこの包圍攻擊を切り拔けて最初が十號室、こゝは少青柳さん達のお室とか。アラ、ピリケン〳〵、振つてるわねえ、大きな〳〵張子のが鎭座まし〳〵、それに銀紙張の「膝利劍」を利かしたもの。

天井からたわゝにつるした藤の花房、櫻の造花、自浩燈の灯影に動く金絲の彩、振の紅、制服の黑、寶石

光るさし櫛、巾廣リボン、薄暗い廊下はおすな〳〵の大さわぎ。

南寮では『夜の池畔』と『蜃氣樓』『南歐の夜』などが呼物、いゝわね〳〵つて瑠璃樣、嘉久子樣、首さしのばし人波にもまれ〳〵もなか〳〵動きさうには成さらぬ。

『籠城主義』だつて大きな蛙に釣瓶と櫻の花片をあしらひ『井戸の蛙とそしらばそしれ花も散りこむ月もさす。』文科の人たちだと云ふ。『白い鳥』のところでは、先生寮生に追ひすがられて。是非〳〵と名刺をねだられ大閉口。



北寮は『蹂躙六大洲一劍攘妖魔』と大變な表題、袴をツンツルテンにはいた、裄みじかな蠻的書生さんが、クラブ洗粉や香水やレートやチックやヴイオレツトに向つて竹刀を振りかぶつたところ。一高氣質をあらはしたものだ、けれど〳〵、何だかイヤ味だ。四番の『源氏物語の或る夜』などは瀟洒で床しかつたが、『紫式部は中座してお留守なのだらう。』と誰やらが後の方からどなるので、失笑して了ふ。『靜中の動』、青草の芝生に卵色の雛兒が二羽、ピヨ〳〵ピヨと鳴きながらチヨコ〳〵歩いたり、餌をひろつて居る罪のなさ、可哀想にもう五六時間の後はストームのさわぎ

でつかみつぶされるとも知らずに。
『楓橋夜泊』も人目を惹いたものゝ一つであらう。K先生や青柳さんは一々知つた方々に挨拶されて、御會釋や立話にいそがしく、少し離れてたゝずむ私の間のわるさ。放心してまた去年のやうに綾様と大神樂など見惚れてゐるとこを尾けて歩かれちや……

後れ勝の瑠璃様達は、やう〳〵人ごみを分けてゐらした。

二階の廊下を通る時、一々寢室をのぞいて歩く、成る程こゝはデカンショ〳〵とあばれ込むのに都合がよく出來てゐる。名にし負ふ萬年ベッド『まア亂雜だわねえ』と嘉久子様が黄いろい聲を出す。これは寮雨の窓ですつて青柳さんが敎へて下さる。

青柳さんはしきりに『今年の御感想は如何です、如何ですつて、仰有る。まだ解らない、けれど何だか昨年の方がいゝやうにおもふ、つて其樣こと云へはしないが、切角御案内下さる方に滿足したやうなお答もしないではほんとに濟まない。

出口でおさるゝはづみにつまづいて思はず、『アッ、貴女、御免遊ばして？』

手をかけたのは須磨子様のお肩だつた。白いお顏は振りむいてにつこり。

『どうです……K君。諸君もくたびれたでせう、食堂へ行かう、飯の冷めて了はないうちに』

『どうぞ……』一議に及ばず、東寮と洗面場の間の細い路をぞろ〳〵と從いて行く。賄の御飯を食べるのだつて、どれ程樂しみにしてゐたでせう、精養軒や有樂座をおごると云はれたよりよつ程うれしく、いそ〳〵と食堂へはいつたが、婦人連は互に顏を見合す。粗末な一間ばかりづゝの卓や腰掛が縱列にも、すーと並んで床は夕ゝき、天井のひくい廣い室（○）とは云へない半分野天みたいな氣がするのだから。

もう學生の立つたあとなので、食卓の四隅からはポタ〳〵と雫が流れ、ふやけた御飯粒が散亂し、腐つたお味噌汁みたいな一種の匂が鼻を打つ。夏になつたらさぞ蠅が生くであらう。小さくなつて席につく。

私はコートを着てゐるからいゝけれど、皆樣お召物がよごれはしまいかと氣になつてたまらなかつた。こんな腰掛へかけるものだから、それで一高生の制服はお尻が光つてゐるのだわ！

お櫃つたら、炭をつかんだお鍋の手ほどにきたなく、懐紙を取り出して幾度となく茶碗をぬぐふ。



運ばれたのは冷たくなつた茶碗蒸、それに眞黑なお木皿の蓋がかぶせてあるのでウンザリして了ふ。小松菜のお浸し、豚肉のカツレツ、こわごわ箸をつけてみれば、酢つぱいのだか辛いのだか甘いのだかわからぬ。青柳さんてば、「一高生だつて人間でせう．人間の食物なんですから生命に別條はありません。みんなこれ食つて勉強してるんですからね。ハヽヽ、妙な顔してますね」皮肉を仰有る。だつて／＼食堂を見たらもう一高が

嫌ひになつて了つてよと誰らやが交せ返せば、同感だわと卓を叩く、箸が轉げる。『賄、飯――ッ！』『賄、茶ッ！』方々で盛んに怒鳴る、白胸かけの男が、ヤーッと答へて飛んで來る。

洗面場の兩がはの壁や羽目にずらりと張られたビラの廣告やポンチ繪を見ながら、

「どうしてなか〳〵向陵健兒、隅にはおけない。藤園様のお弟子方はハダシで逃げ出さねばなるまいか」

なんて瑠璃様をおいぢめ遊ばす。

どう云ふ順にみてまはつたのだか、朶寮のなんかはちつとも覺えがない。お菓子でも食べませうつて今度はホールへおしかける。丁度陸軍々樂隊の演奏最中、何處もかしこも滿員なのを漸々のことでせまい處へ目白おしにならんだ。うつかり身動しようものなら、兩はしの方はころげ落ちゝまふわ。お腹が空いた〳〵つて、各々に俯きながら羊羹ムシャ〳〵。

お茶碗の數が足りないので仕方なく、飲みまはしにする。お代り取りに行く人をチャンケンと定める。宙にひらめく指環の手、白い手、細い手、タコだらけの手、餘りさわぎがえらいので、四邊の人の視線をあつめた。

中にはスケッチを始めた人もあつたとやら。須磨樣がみつけて總立ちになると、コソ〳〵人ごみの中へにげて行つた。顔盗人め、失敬な。

たしか東寮の始めの方でしたつけ、『偉大なる踊圖』とか何とか云つて、のぞくと突然鼻つまむんですつて。あらかじめ少青柳さんの御注意故、端の方によつて過ぎやうとすると、青柳さんや先生は胴上げにされんばかり、二三人よつてたかつて無理に首突込ませうとする。『御免〳〵』と手足をもがきにげ出す風つたら。だん〳〵見物人が増えてくるので、大抵のとこはおされて過ぐるばかり。

『月宮殿』では中央に可愛い臼と杵とをおいて、澤山の兎を放し飼ひ。

赤い眼をキョト〳〵させながら菜ッ葉を食べてゐる一寸御愛嬌だけれど、お月樣のお使姫にしてはきたな

いこと、臭いこと。『向陵の夜』はほんとによかつた。あれ、あの窓もる灯影の輝き！　中はコムパのたけなわでゝもあらうか。西寮では『廢墟の月』や、ロツテルダムの風車の回轉てるところや『ひたすらに學生時代享樂主義を想ふ』、『榮華の夢』、その外『一視同仁』と題し雪白の診察服つけた斑猫が、聽診器かけて鹿爪らしう、寢臺に横たはつた鼠の脈をとつてるところがあつた。

掻分け／＼いつか場外へ押出されてホッと一息…向ふから丹波さんがやつてゐらした。まだ『大學』の帽子かぶつて平氣なお顏、切角氣取つたオーバも何



もあるものですか、可笑しくて／＼皆さんのかげに隱れて笑ひをこらへる。

何處からともなく勇しい寮歌の響、見上ぐる窓には幾個かの顏が生つて見下してゐる。

各寮の入口はまだワーツワーッつて云ふさわぎ。諸學校が退けたのであらう女生徒の袴の色、リボンの蝶がチラ／＼と。

折よく雨はあがつてゐるのでさゞめきつゝ打つれて私達は青柳さんのお宅までもどりました。

二階座敷にずらりと並んで、新にそゝがれし宇治の葉の香り高う、湧くが如き歡談笑聲、てんでに蜜豆をすくつてお口へ運ぶ。

私と隣り合つた須磨子様は、弱々しい、花にたとへたら女郎花。さうだ、でなければあるとしもなき春風に、ヒラ〳〵と散る彼岸櫻か。派手つくりの嘉久子様は露をふくんだ緋桃の花で、紅リボンのお下げ髪、一番お年若な田鶴子様が八重椿。瑠璃様は薄紅の匂ふばかりなお眼元ならお顔色なら、薔薇の面影麗はしく、立ちこむる香水の香はむせぶばかり。

八雲さんがゐらつしやいました、と下から呼ぶ。丹波さんはいきなり立ち上つて例の綸緞のかげにひそみ手眞似やら、眼配せやら、頭を振り。そこへもう八雲學士はみちびかれて上つて被居した。

高等學校時代から首席をのみ通したと云ふ秀才、現今は大藏省に敏腕の法學士、おん名はとうから承はつて居る。お洋服のはち切れさうに丸々と肥つて、可愛いお顔遊ばしたお聲の美しい方、御挨拶もすまぬ中から皆さんは目引き袖引きクス〳〵クス〳〵。

「八雲さん、近頃丹波君にお遇ひですか」

「ハイ遇ひますよ、時々。何でした、一週間ほど前にも」

こゝに至つて堪らず私も失笑して了つた。流石の八雲法學士も面喰つてキヨト〳〵して被居るところへ

「ワツ」

とばかり、辨天小僧の聲色か何かで飛び出した丹波さん、一座はいよ〳〵笑ひころげる。

「あゝ君も居たんですか、どうも變だとおもひましたよ」

と案外落ちついたもの。

とう〳〵みんな一緒になつて、トランプやら羅漢廻しやら。私は存じませんと逃げれば、譯はないんですといろ〳〵敎へて下すつたが、どうしてもイヤと首ばかり振つて居たので、それぢや二三度見て被居いとさしも瑠璃様はお鼻の上に拳を重ね、田鶴子様は鐵砲かつぐ眞似、嘉久子様がコン〳〵チキの手附なされば、須磨様はお袖を胸に抱く。青柳さんは腕ぐみし、丹波さんは舌をペロリ、八雲さんが兩手を膝のわきについて蟇蛙の様な形。サ、よしか、「羅漢様が揃つたらまはそ

お待ちかねの第一巻第二號　五月一日發行

淑女畫報

四六倍判口繪光澤紙寫眞版四十頁石版三色版數頁本文百頁

正價廿五錢　郵税二錢

六冊壹圓五十錢　十二冊二圓六拾錢　郵税要外

▶畫報◀

■二八姿（原色版）諸岡清潭女史畫　◎長春花◎姫百合◎大輪　◎小弦◎耕牡丹◎五月晴

◎北白川宮房子内親王殿下……◎伯爵大木遠吉氏の家庭……◎阿部子爵令孃……◎德川伯爵令孃……◎品川子爵令孃……◎佐々木侯爵令孃……◎新婚の肝付男爵令孃……

■雨細かにして燕脂流る（彩色石版）北野恒富畫　■國粹の花

■◎英國大使館の假裝會◎阪正臣氏の歌會◎天の岩戸の略◎竹柏會大會◎小笠原伯夫人の海外出發◎女子大學卒業式◎棚橋刀自の叙勲祝賀會◎女子職業學校台覽の造花◎府金局競技會◎女子美術學校展覽會◎様々の女の職業

■淑女かゞみ　いづれも名譽ある家庭の大人令孃の最近の撮影にかゝるもの數十葉玉の如く花の如く眞に美し

▶讀物◀

▽小説形見の梅　宇井桃水　▽俠巷雜話　尾崎恒子

▽新時代の婦人の貞操　伯爵大木遠吉

■智戀物語……桑見草　■京都婦人氣質……川村文芳

■四季袋……野の花　■惜春譜……壺すみれ　■茶毘の花……鳴[illegible]

▽浮世眼鏡（世間の裏 人情の表）　▽下層社會の婦人

▽仙臺侯へ送りし遊君高尾の手紙　桑田春風

■現代婦人評論――山脇房子女史と嘉悦孝子女史　■車沸繁昌記……行竹

■新緑にふさはしき衣裳流行子　■料理の出來よう　佐野峰子　■話の秘

▽衣裳の着こなし　佐々木　▽昔のお産今のお産　西尾京子

▽實録――三十年前の娘の秘録

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

創刊號は湧くが如き喝采を得たる

演藝倶樂部

第壹卷第二號（五月一日發行）

四六倍判二百八頁　正價卅錢郵税三錢

□五月雨（極彩色木版）……鳥居清忠
□春日局（原色版）……中村歌右衛門・中村兒太郎
□檜垣（原色版）……梅若萬三郎
□吾妻（コロタイプ）……片岡我童
寫眞版（歌舞伎、本郷、帝劇、宮戸、新富、蓬萊、三崎、土曜劇場、伊井の家庭其他各劇場の當り狂言四十頁）

●梅若萬三郎の檜垣……坂元雪鳥
●新派劇の滑稽……瀬戸半眠
●鎌倉翁劇話……遠藤為春
●歌舞伎劇最後の人々……楠山正雄
●川上追悼劇……本山荻舟
●佛蘭西見物記……[illegible]

●芝居雑言……瀬戸英太郎
●芝居見ない記……[illegible]
●講談 音羽屋火事……細川風谷
松旭齋天勝……二洲橋生
●能樂亡び渡い事……[illegible]
●長唄研究……中内蝶二

●帝劇の評……長谷川時雨
●女優劇の新舞稽古……[illegible]
●呂昇と長唄……中村秋湖
●今昔色物語……岡鬼太郎
●第二回土曜劇場……[illegible]
●歌舞伎座劇評……[illegible]

●力士の芝居……[illegible]
●開港場の芝居……[illegible]
●浪花節 楼神樂……[illegible]
●講談 寝床……[illegible]
●讀者文藝（懸賞）興行便覧……[illegible]
●落語評判名家選……[illegible]

▼スケッチ▲
□歌舞伎座……[illegible]
□帝國劇場……[illegible]
□本郷座……[illegible]
□能樂……[illegible]
□演藝漫畫……小川千甕

▲史劇 劍……山崎紫紅
▲喜劇 パンタレの昇天……小山内薫

東京日本橋本町三丁目　博文館

文藝倶楽部

本號には矢崎嵯峨の家氏が雄健なる筆を揮つて立志傳中の一人物某氏が其夫人との結婚奇談を叙述せる小說より奇異の事實談を巻頭に掲げ次ぎに新進作家水島尺草氏作「痣」てふ傑作第三には海賀變哲氏が得意の滑稽物「拙者一代記」を收む。滑稽趣味に溺する人々の歡迎や湧くが如けむ。脚本としては「新衣」てふ喜劇を載す。是れ中村吉藏氏の新作新味溢るゝばかりならむ。新講談は桃川若燕氏が會津奇談山之內壽太郎と題し絕好の傑作客を舌頭に上ぼし演藝界其他の活社會を網羅して全誌悉く活文字を以て埋め盡せり愛看を賜へかし。

第十八巻 第七號

五月一日發行

○菊判本文紙數三百廿頁○原色版口繪一枚　定價二十五錢

○寫眞版光澤紙刷八頁、普通刷四枚、二色刷光澤紙二頁○木版彩色數十度刷錦繪一枚　郵稅二錢

博文館



女（ゐの八）

ちやないか、ヨイヤサのヨイヤサ、」とまはし始める拜見してる私はあまりの可笑しさに苦しくて／＼、まアどうしてこんな眞似が出來るものですか。それでも皆樣感心に笑ひ出す方もなく一生懸命。「ヨイヤサのヨイヤサ、ヨイヤサのヨイヤサ」と調子にのつてだん／＼聲が高くなる。

「しまひには藝づくし。チヤンケンをして負けたものから一つづゝやる事となつて須磨樣はつと次の間へ……讃美歌の悲しい一節、細く細く、情にせまつてとぎるゝおん聲、拍手は急霰の如く湧き立つた。

八雲さんは曉鐘の『花上の露』を美聲はり上げて御朗吟。

生れてこゝに二十年、これほど美しいと身に沁みたお聲はない。高く、透きとほつた、少し震へる、たとへば水晶の水盤に岩間清水の走るが如き、何と云ふいお聲なんだらう。



八雲さんはじめ先生にしろ丹波さんにしろ青柳さんにしろ、いづれも演壇にきたへられた方達、何遊ばしたつて惡からう筈はない。ことに丹波さんがお得意のマルセーユ、ローレライ、はては取ときの阿呆陀羅經までかつぎ出し「何が何よとたづねてみたら」チヨツ／＼と舌で調子をとりながら。もう／＼新年會とカルタ會の三つも一時にかち合つたやう、夢中になつてあそんで了つた。

夕方八雲さんはお歸り遊ばす。さぞ奥さまがお待ち遊ばして被居るでせう。

花瓦斯がパッと點されて、一時に明るくなつた。室内はまるで光明世界のやう。かく子樣は何につけてもあまりお袖にお顏おあてになるので、お鼻の頭の白粉だけツルリとはげて了ひ、何だか斑猫のやうで可笑しい。お鮨だのバナ、など頂きながら、なほもいろ〳〵なお話。丹波さんは人知れず、櫛を出しちやア手ぎはよくお髪をかきつけて被居る。

歡樂の後にせまり來る不安よと、須磨樣は先刻から帶の間の時間ばかり氣にして被居たら、終にお迎ひのお俥まゐる。これを動機に皆さまつゞいてお立ち遊ばす。

私もお暇をと小聲で云ひ出づるをお兄妹に打けされもとの座におしすゑられて、K先生と田鶴子樣と私の三人はとう〳〵泊めて頂くことゝなつて了つた。あまりと云へば愼なしと、何處かでさゝやがれる氣はしながらもうれしくて。

K樣なんかいゝわねえ、何遊ばしたつてもうお母樣にお叱られなさる樣なことないでせう、私は兄樣と一緒でなければ、何處へ出掛けることも許されませんのよ。羨しいわ、と無邪氣な瑠璃樣、紫のリボンがさやさやと被布の襟に鳴る。

くつろいでお菓子など食べながら、あのね、私先刻丹波さんのポケットに、鹽煎餅のかけらをおしこんどいたのですよ。大勢の前で絹ハンケチでも引出される時、飛び出したらまア何んなお顏をなさるでせうね、と笑へば、丹波さんはあの御新調のブカ〳〵したオーバを、最新流行だつて大威張なんですけど、私いつか活動寫眞で見た西洋喜劇の茶加兵衛つて爺父にそつくりのスタイルなのよと瑠璃樣も笑ひくづれる。

話題はいつしか大學の秀才物語。大學の秀才とか何とか云はれてたつて、みんなガラにもない失戀さわぎきいてみれば戀人に既成品と見かへられたので、あんまり意久地のない方たちねえつて笑つたら、失戀するから秀才になれるんだつて。それが發奮の動機ときいては難有くも何ともない。

それでもう今ぢやせつせと——いゝえ、あの、外交

官なんて云ふお役は、婦人方への交際手腕が御資格の一つなので、その御練習なのかも知れません。第二のを探してゐらつしやるんぢやなくつて。

頑健な青柳さんでさへ、そんな事申上げると黒いお顔に紅をお潮し遊ばすから可愛いわ。演壇に立ち、竹刀とつてはその名各校に鳴り給ふ鬼をもひしぐべき君が『月夜のヴァイオリン』には涙潸々として下ると云ふ。

田鶴子様はのぼせたと仰有つて、つと縁にお立ちなさる。夜更の冷氣は水のやうに流れこんで、月に輝りそふ一株の梅花さながら、香れる雪かとあやまたれる。



瑠璃様は下からお布團運び上げるので大さわぎ、はア〳〵と息をはづまして被居る。

さうして私たち女同士は、お下座敷の八疊に仲よく床を並べる事となりました。瑠璃様のお召故、まだ肩あげがあるのを拜借して長いお袖をかへりみながら、昔なつかしさに含笑まれた。時計は高く十二時を打つ。朱塗行燈の光りほのかに、半ば黒ビロードの襟にうづめた白いお顔もおぼろ〳〵、お二階からはまだ盛んな笑ひ聲がひゞいて來る。

夏の蠅と臺所衛生

亞弗利加には睡眠病といふ恐ろしい病氣がある、一種の蠅に依りて傳播さるゝもので、昔は只黒人間の流行病とのみ思はれて居たが近來歐洲に侵入して猖獗を極め、或る村落の如きは全く荒廢に歸した位だ。爲めに各列强は殖民政策上大打撃を被るので、有名な學者を派遣して豫防に努め、今は世界の學問界の大問題となつてゐる。

亞弗利加の蠅の如く恐ろしい蠅が日本にも居る、東京の眞中にも居る、と言つたならば多數の人は否定するだらうが實際居るのだ、我々の家に見る家蠅がそれである。

普通人家に現はるゝ蠅の大部分は、家蠅の種類に屬する、それが何故に恐ろしいかといふに赤痢、虎列剌窒扶斯等の媒介者となるからだ。

統計によれば、是等の流行病は毎年夏になつて著しく殖へる、死亡者も冬よりは夏が多い、色々原因もあらうが最も大なる原因は夏は蠅が多いからである。

試みに蠅の體を見ると、頭部にある舌の樣な嘴の末端は扁平で、皺があり、物を能く甜めるやうに出來てゐる、足には毛が生へて、爪の間に吸盤がある、滑かな硝子窓にとまつても、落ちないやうに。

其の扁平い嘴でよく甜めるが、最も好むものは人糞の新しいのである、故に若し窒扶斯菌などの附着した足で、晝寢して居る子供の顔に止まつたり、食物の上にたかつたりすると、忽ち病毒を傳播する。

殊に日本では便所の構造が開放的で臺所とも坐敷とも凡て共通であるから、病毒散漫の虞が頗る多い、のみならず細菌學者の說によれば窒扶斯患者の如きは全治後も一定の期間は猶は病毒を發散するといふ、其の便糞を蠅が持ち運はるので夏は大流行を來たすのである。

「やれ打つな蠅が手を擦り足をする」と古人は此れを憐れんだが、吾々の眼から見るとお膳の上などで、こんな振舞をされるのは危險千萬、さりとて其の場で叩き殺すのは却つて病毒を撒き散らす基、宜ろしく他の方

法で驅除しなければならぬ。

差當り我邦の便所を改造する必要がある、今日では警察で干渉して審査に制限を設け、糞便の地面に浸み込まぬ様にはなつてゐるが肝腎な上の方は全く開放した儘で顧みない、所謂頭隱して尻隱さずだ。

其處で便所に蠅の入らぬ様に窓に網を張るとか「きんかくし」に蓋をするとかして、此の缺を補ふのが何よりも急務である。

衛生設備の整つた紐育に夏になると毎年窒扶斯患者が出來、而もそれが沿岸地方に限られて居るので市民は不思議に思ひ調べしに、同市の下水が遠海に排水しないで近海に注ぐ結果、沿岸に打付けられる塵埃に蠅が生じて斯くは病毒を傳播する事が判つてから今日では下水改良を唱へるものが多くなつた。

東京では諸所から集めて來た不潔な塵埃を人家稠密の河岸端に幾日も、幾日も溜めて置く、附近の住民も平氣、通る人も平氣、全く蠅に就ての智識が無い者としか思へぬ。

然らば蠅はどうして出來るかといふに、重に塵埃捨場、腐敗せる藁屑や紙屑、食物の殘り、或は馬小屋などから湧く。こんな所は醱酵作用を起して卵子の發生に都合が良いからである。

卵は夏なら十時間、遲くも二日間に孵化して小さな蛆蟲となり、分解しつゝある種々の物質を食うて、發育する。塵埃溜の溫度の高い程發育が早い、度々皮を脫いで後には褐色の蛹と變り一定の日數を經ると、其の中から蠅が生れる。

最も良い驅除法は其の發生前に種を絕滅せしむるにある、即ち東京でならば、各戶に備へ付けてある塵埃溜を七日目々々に片付ける、涼しくなつたら二週間目に仕末する事だ。

七日目と言つたのは卵から蠅になる迄の日數八日目の前日、まだ蠅にならぬ內といふ意である、塵埃箱を掃除した後に重油を撒布すれば、隅々に殘つて居る小蟲、卵など皆な殺されて了ふ、此の藥の香氣の爲め、他から蠅が寄り付かぬ、重油の代りにデシンフエクトルを十培に溶解して用ひても宜しい、或は熱湯を注いでも宜い。

粗忽物語

荒磯の嫗

○後家樣二人

お臺所に瀬戸物色々洗はれんとして過ちてお急須の口を缺きぬ、よき形したりしを惜しき事しけりと思ひつゝ傍なりし蓋をも取りて諸共に打捨てぬ。不圖又見れば、今一つ同じ蓋ありけり。怪しみてよく見るに、是こそ眞實の彼の蓋にて、前に打捨てけるは小さき蓋物の具なりけり。こはしなしつる哉と、掃溜より探し出し見るに、哀小さく壞れはてゝけり。さらばやと、殘れる急須の蓋とりて蓋物に掩ひて見る、又合ふべくもあらず。

遂に寡婦樣二個造り上げぬ。

○健康調査

我、葉山にありける時人あり、裏口より「今日は」といふ、誰ならんと障子開けて見れば、卑しげなる男盲目縞の袢纏着て立てり。「何屋さん？」別に何の荷も持ちてあらぬよりなるに尋ぬれば、「皆さんお揃ひで御變りも有りませんか、殿下の御滯在中故健康調査に參りました」といふ。「是は失禮申上げぬ、一同更に變りなし。御太儀の御事」と云ひて歸しぬ。あはれ、村の衛生委員にておはしけり。我は屑屋か、又は何ぞの御用聞かと誤りぬ。

○田中澄麿

或日、夕餉の膳に向ひ居たる折しも、「御免」と人の訪ふ聲す。「どうれ」とばかりお箸をおきてお取次に出づれば三十前後の髭男、米琉の着物羽織を揃へて、手にはマントと帽を持ち丁寧に挨拶したり。見知らぬ君なれば、此方よりも恭々しく誰方樣にやと伺申せば、田中澄麿としたる名刺取り出し「實は某奥樣よりお伺致し、此方樣へ出ましたる次第、即ち頂戴のお名刺是に、何分宜しく」といひて、某夫人の名刺差出したり

取りて裏を返せば、實にしるき御筆の蹟にて是は在京中よく知り置きし小間物屋の此度より當地へも屢々御用聞に參るよし何分御贔屓に遊ばし頂度候とかいつけ給へり。思ひかけぬ人なりきとをかしく、さりとて俄に手の裏返したらん樣に言葉改めんもさすがにて何れ又願ふやも知れませねど、今日の處別に何もなしといふ、西洋小間物化粧品一式何でも取揃へ御座りますれば、何卒御用仰付けられ度とて歸り行きける。早くに其事といひ出さばかくつれなき思ひも爲ですみけるものを。磨こそすさまじかりけれ



○物忘れ

横須賀へお稽古に參りける折、或日常よりも少し時間かゝりし樣なれど、例の汽車に間に合はんか如何と、歩を早めて行く程にステーションに今半丁といふ處にて、發車を報ずる鈴からん、からん、と鳴り渡りぬ。

すは、と駈けにかけて漸く改札口に至りぬ。回數乘車券取出さんと、帶の間、懷中と探しけれど、落しやしけん見當らず、生憎此日に限りて財布さへ忘れける術なさ。汽車は早や出なんとす。如何はせんに困じはつる折しも、

早や乘り給へ、立替參らせんよ、とて、顏のみは常々見知れる驛夫の、切符もちつゝはや徐ろに動き出せる汽車の中に、兎角して我を押し入れ吳れぬ。嬉しや是に乘り遲れたらんに、父母の如何に案じ給ふべかりしをとほと息つきて、本包みを膝に置けば、是は、是は失せしと思ひし回數券をば、包み抱へし手の内に、確とこそは握り居たりけれ。思へば走せ出でし折に、手廻しよくと取出し置きけるを、粗忽にも握りつぶしけるなりき。

○老人にも近眼鏡

誰樣の家の加留多會に招かれぬれど、彼家はお祖母樣のお讀み手なれば厭よと、從妹の物語る。お聲でも小さいの、と聞くと、お聲はさもなけれど、其お氣の永さといはゞお話にならず、去年のお正月行きし時など、秋の田の、とよみてお煙草一服遊ばし、刈穗の庵のとまを荒みで、お眼鏡はづして丁寧にお拭きになりそれから漸く、我衣手に露と來るのですもの、札なんかお煙草おつめ遊ばす前に疾つく飛んでますは、でも集る方が皆御おとなしければ、御催促も何もなされぬのをよき事にして、一々拭いたり呑んだり、大變ですの。眞逆にと我の笑へば、否、眞個よ、ほんとう、と力入れて口とがらせ居たり。それならば十度する間に千回もお眼鏡拭き給ふや凸面レンズが摩擦されて凹面になつて仕舞はんもの、お祖母樣若返つて飛んだはいからにお成り遊ばす事、といへば、あら、御年召した方にだつて近眼はありますは、と。

確に一本參りぬ。

○お詫の言後れ

友と二人道を行きけり。雨上りの小砂利しきたるに足駄よろめかしつ、友の足したゝかにふみてける。驚きざま我にもあらでア痛た〳〵と叫びけり。友は自ら踏まれたるをも忘れて、我の何か怪我などしつるならんと案じて、如何し給へる、何とかやなど勞られたる、眞逆に踏み參らせたれば御足痛からんとて君に替

りて呼ばひつるとも云ひ出で難く、何ともあらぬ足の甲打さすりなどしつゝ、遂に友には詫言も云はずなりぬる、氣の毒に將たをかしかりけり。

○草箒二本



徒然に親しき友の許參りける。繪かきて在はしけんと思しく、急ぎ御机の上なる繪の具、繪葉書の臺紙やうの物の取片附け給ふを、ちらと見付けて、面白の御繪や、草箒二本轉がせて何の偶意にやらむと伺申せば、友は驚き顏に、はた怨めしげに取り出でつゝ、箒とのたまはするが口惜しければ見せ參らすなり、竪にしてよく見給へと云ふ。取り上げて熟々見たれば實に箒と申せしは無禮なりけり。杉にやあらん二本立ちて、空なる方には濃きコバルトを付き、地をばグリーン、セピアなどもて塗り消し給へり。よき色彩出だし給へるもの哉。かゝる杉の畫をば箒と聞えつる、鳴滸なりけり御心にばしかけ給ひそ、と詫ぶるに、友は猶打解けぬげに、杉とや見給ひしといふ。しなしたり、杉にもあらぬはや。何の木なれば斯く人を惱ましむると考ふれどもそ

れかと思ひ付くものも無かりけり。もしやと、題は忘れたれど去年なりけん文部の展覽會にて斯樣の畫をば見き、彼の類にてや、といふに始めて笑もらし給へり何とやら申す木と聞きけるが、耳なれねば忘れはてぬ敎へ給へといへど、箒と見給はん程の人に語るべき名ならずとて、獨り眺めおはす。

よし、聞かじよ、荒物屋の店頭なる草箒木に靑き繪の具濃ぎたらんには、今少し生々したる繪になり申さんと心の内に毒突きける。

○御禮の先發

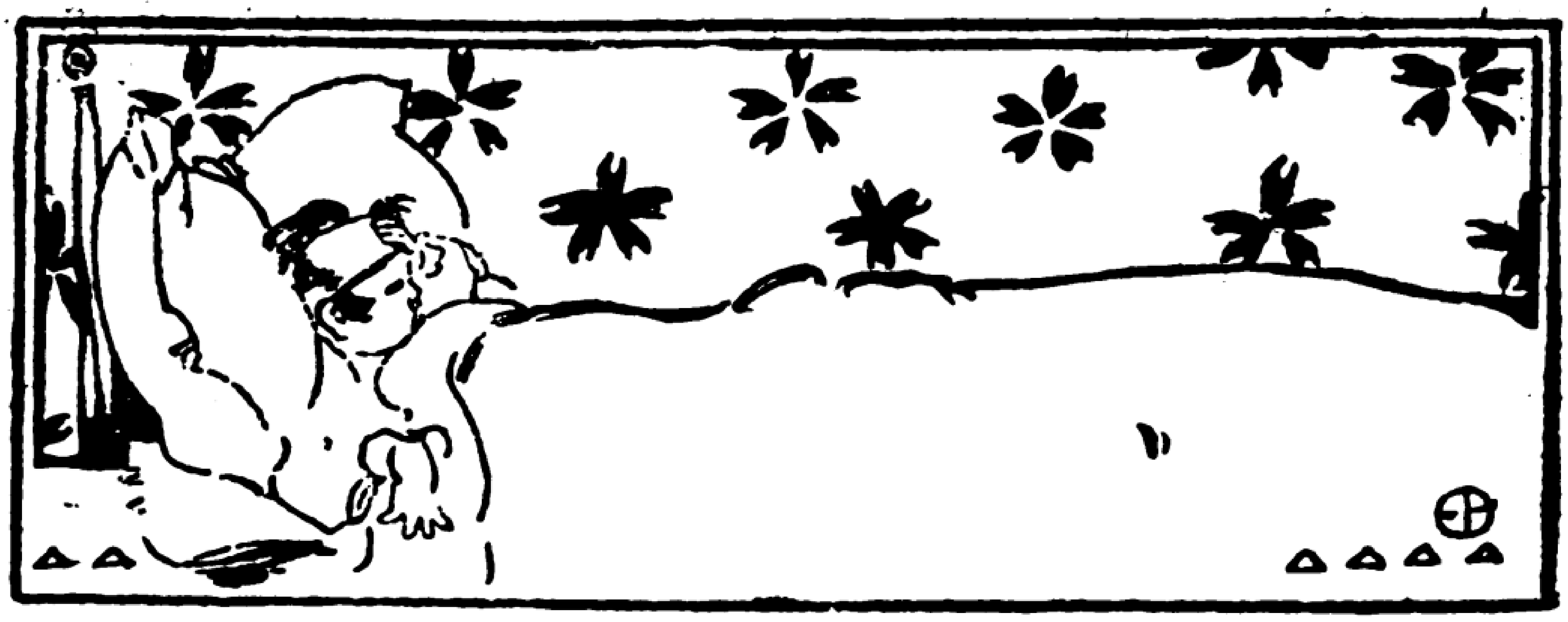
うとからぬ人の來まして、徐ろに取出しける奉書包み、水引をば花に結びたるを押直しつ上下よりはつかにもれしを見れば、帶揚げにかあらん白地の縐縮緬に濃き藍もて、何か大きやかなる模樣と推量りぬ。これは有合せし品なれど、と云ひかけて風呂敷たゝみ居たるに、これは給はずにや、お美事なる品、恐入りぬ、と謹みてお禮申すに、其の人甚く惶てゝ否、否、それは某の君の此次に來まさん折、しか〴〵仰せて御屆け頂度く、失禮ながらお願ひに罷り出でしと頭かき居たり、畏まりぬ確にお屆け申上げん、粗忽申して此方こそ失禮なりけれと、紛せしに例よりもてなして歸しやりぬ。翌の日彼方より使おこせて、是は粗末ながらお孃樣へ、自ら參るべきを些所勞にてとて半襟の箱贈られぬ、とり違へて云ひし昨日のお禮のしたゝか利きつると思ふにも、我が粗忽から爲でもの事をさせつると後にて悔ひけり。

朝顏苗の鑑識法

◎朝顏には並性と渦性と二つがあつて、如何に變化したものでも此の中の一つに屬する。並性は葉がすらりとして花もゆつたりとしてゐるし、渦性は並性の樣に長く延びないで幹が縮み葉が硬くて花も何となく力がある、次ぎに細別すると桐、獅子、洲濱、亂菊、立田、笹、立田笹、南天等の種類が有て、是は花の形と葉の形から來た名前で、其内最も流行してゐるのは獅子である、これは第一花に變化が多いのと、嫩葉の時に花の形や葉の形も大體知る事が出來るから、斯くの如く珍重かられるのである。

◎葉の形は並、林風、肌脱の三つに別れてゐる、變化の多い朝顏は林風で、寶簑葉と云つて葉形では最上等のものがあるが、是れも同じく林風葉である、併し葉の形は花には何等の關係がない、亦葉の色も花や花の色には關係がない、けれども葉の地合には滑りの良いのとザラ〳〵したのとがあつて、是れは花の變化に關係がある、其ザラ〳〵した葉には砂摺、石打、石目、砂目、其他いろ〳〵あつて其地合の如何によつて種類の變化した花を豫測する事が出來る、故に朝顏の種子を蒔いた時には芽の出かけた有樣に注意し、平凡の者よりも風變の者を大切にしなければならぬ。

◎スラリと出る葉が縮んだり、葉に切れ目が出來たりするものは有望で、後に變化をする、是れは多く嫩葉の時にあらはれる、又同じ種類でも生え方で變つて來るものがあるから、何れにしても種子の萠芽を見てから嫩葉が完全する迄は其變化に心を注がなければならぬ、譬へば獅子の種子を蒔いて嫩葉の尖がよれると、本葉に握つた樣な面白い葉が出る其握り方によつて糸の樣なもの、袋の樣なもの、ぶら下つて火焔を吐く樣なものが出來る、是れは朝顏の栽培に熱心な人は經驗の上から直ぐ見わける事が出來る、洲濱も嫩葉の時から判るもので、嫩葉の時に栗の葉の樣な形に出ると、本葉が普通の葉形で先きが尖つてゐないから概して大輪が咲く。（岡不崩氏）



子供の入浴

△入浴用の水の撰擇

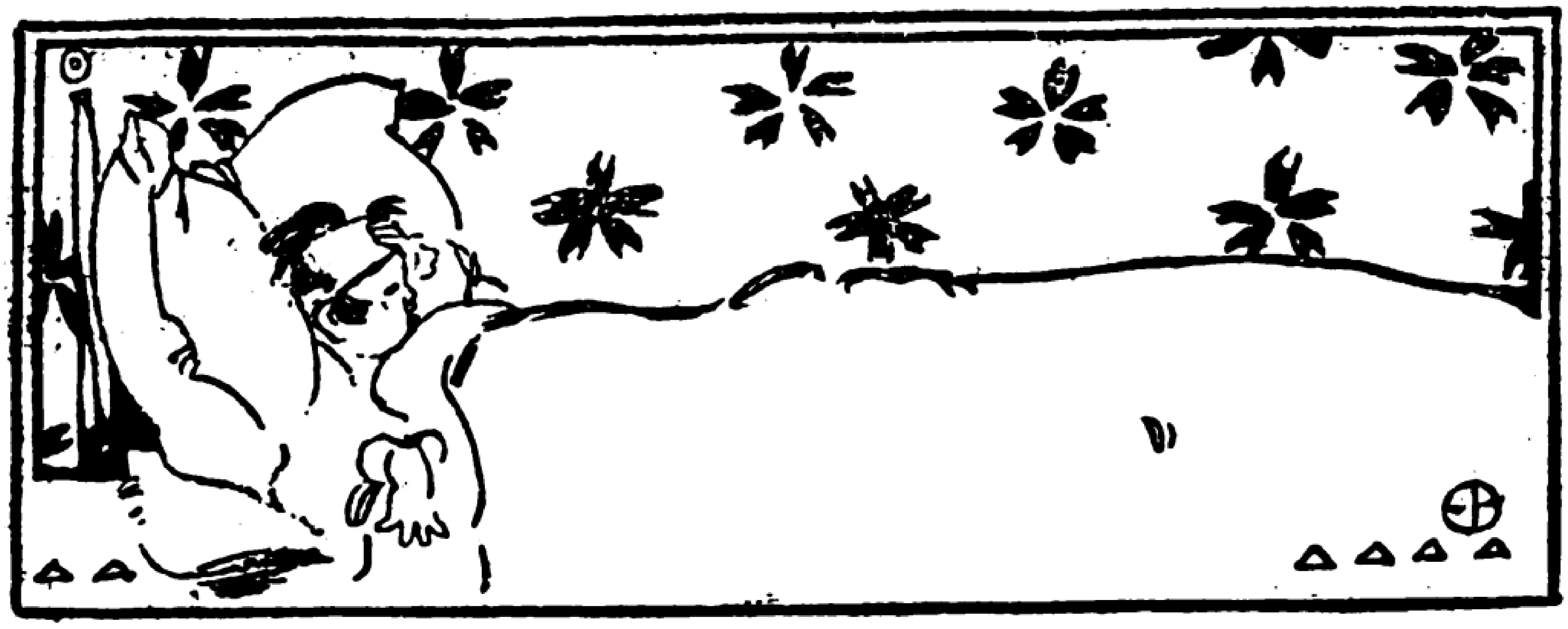
子供の入浴は餘程注意をしなければ可けません、殊に赤兒に入浴させることは最も大切なことで、湯を使はせた後は温かうして床の中へ寢かして置くべきは申すまでも無く。一日たりとも入浴を怠つては可けません。入浴用の湯を沸すのには、水道の水なら申分はないのですけれども、綺麗な水さへあつたなら掘井戸の水でも河水でも。乃至は雨水でも構ひませんけれども。泥氣を含んだ水や。鐵氣のあるやうな水は柔らかい赤兒の皮膚を害しますから、注意して避けなければ可けません。

△湯の温度と入浴の時刻

湯の温度は華氏の九十五度位が丁度宜しいです、今日は寒いからとて。無闇に湯を熱くしたり。今朝は暖かいからとて温度の低い湯をつかはせたりすると、それが爲めに感冒をひかせたり、あせもが出來たり、鼻がつまつたり、痙攣を發させたりします。それから湯をつかはせますのには何時でも構ひませんけれども、成ろべくならば、朝の中が一番宜しいのです、尤も寒い時候の頃ならば、朝の寒い時よりも、晝頃の比較的暖かくなつた時とか又は寢しなに入浴させた方が安全です、けれども此方の都合ばかり云つて子供の方の都合を顧ないやうでも可けない、と申しますのは入浴の時間が來たからとて、スヤ〳〵と好い氣持さうに寢込んで居ろのまでも無理に起して湯を使はせろやうなことでも、困ります。適當の時刻に眼を覺ましたら其時を見計つて入浴させろことが肝要です。

△入浴の方法

赤兒に湯をつかはせろのは、何でも無いことのやうで、實際は却々手加減が要りますので、數多手がけて其コツをよく覺えた人でなければ、うまく出來ないものですが、先づ第



一に湯の中へ手を入れて温度の加減をよく試みて適當だと見濟したならば、赤兒をツプリと湯の中へ入れて顔だけを出して背中を左の手掌で支へ、柔かい海綿とかフランネルとか又はガーゼのやうな柔かい木綿の布片とかで靜かに手やはらかに全身を洗ひます、脇の下股の間、其外手足の折屈みなどのあたりは殊に注意して洗ってやりませんと、たゞれて皮が剝けるやうになることがあります、全身をよく洗ひますことは申すまでもありませんが眼だけは其時に手をつけないで殘して置かなければ可けません、眼の中へ惡い黴菌でも入りましたらば、それこそ取返しのつかないやうな眼病を起させる危險がありますから、どんな忙がしい時でも、眼の部分だけは必ず別に洗ってやらなければ可けません。

△眼の洗ひ方

眼の部分を洗ひますのには、清潔な器に清潔な温湯を取って、新しい布片、ガーゼならば一層宜しいのですが、それを湯に濕して目尻の方から、目頭の方へと柔かに拭ってやるのです。

△入浴の時間と、體の拭き方

湯をつかはせる時間は、餘り長くかゝって感冒をひかせる恐れがありますから、先づ十分以上に渉らないやうに注意しなければ可けません。それから入浴が了って身體を拭ってやる時には、成るべくは新しい、左はなくとも汚れて居ないタオルを温めて、それを下に敷いて其上に子供を寢かしてよく水氣を拭ひ取りその上に乾いた暖かい臥褥の上に靜かに寢かすのであります。

△冷水摩擦

冷水摩擦は赤兒には無論無理ですけれども三歳以上にもなりましたら、冷水摩擦をしてやっても差支へありません。冷水摩擦は皮膚の抵抗力を強くして、感冒などにかゝるとを豫防するに効力があります。

料理食品文盲手引（五）

小泉迂外

△柏餅と粽

樹々は緑に、市は初袷の袂輕い頃となりますと、諸處の菓子店ではそろ〳〵柏餅を製つて賣出します。柏餅は粽と共に端午の食品として古くから傳はつて居りまして、男兒の初の節句には必ず、親族や知己の方々に此餅を配るといふのが通例でございます。

粽は東京では明治に入つて一時廢れましたが、此二三年前から再びポツ〳〵と好事の菓子屋で賣るやうになりました。粽は糝粉で製つて其表を菰の葉や笹の葉で包んで蒸すのですが、近頃では道明寺で製るのや、葛で製つて口に入れますとつるりと溶けるやうな輕い滋味のもございます。

それで形ちも土地によつて種々に異り、長崎邊では三角につくり竹皮で包むといふ有樣ですが、一般には昔京都に道喜といふ菓子工の作りました道喜粽といふ笹粽が行はれて居ります。一體に粽は京都が本場で、東京でも赤坂の虎屋とか、人形町の壽堂とかいふ純西京式の菓子屋で製るのは極めてよろしうございます。

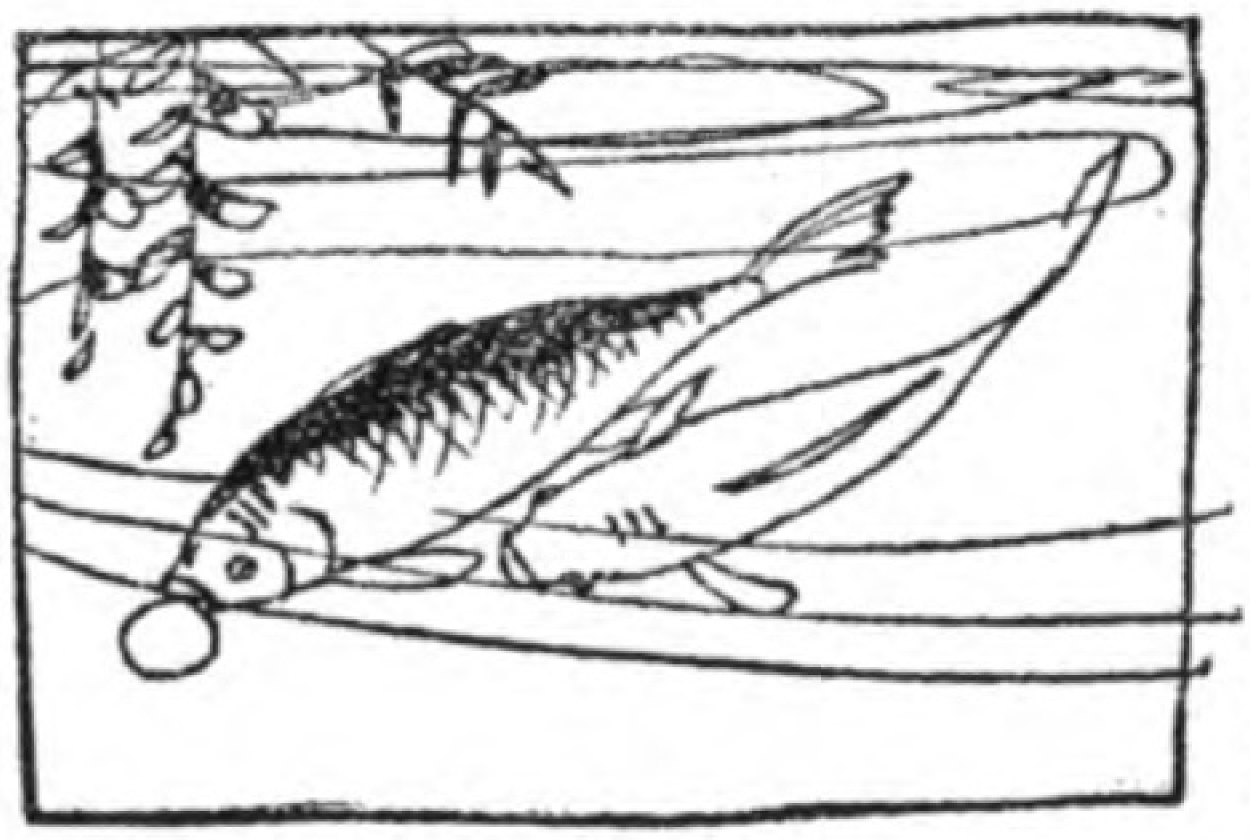
△鯉



鯉は俗に出世魚と稱へまして、目出度い時の料理にも使はれ、端午の節句には鯉幟にも作られて其キビ〳〵した勇しい姿を初夏の風に飜します。

それで、此の魚は昔から、利根川のが一番好いやうになつて居りますが、其實は隅田川のが遙かに味もよく、姿も美しうございます。隅田川產のがそれ程よいのに、何故利根川が幅を利かせて居るかといへば、これには種々譯があるので、昔は此隅田川といふ處は、俗に『御禁川』

と申して、永代橋から千住大橋までの間は殺生禁斷の場所でございました。しかし何と申しましても、彼の廣く長い川筋ですから、秘密に漁を致しても、そこは公然の何とやらで大目に見られたものですが、流石に漁獲た魚は隅田川のだと申されないので、利根川の名を付けて問屋へ賣込むと、問屋でも、それを知りつゝ默つて買入れたものでした。其れが遂に長い年月の中に習慣となつて隅田川の名が利根川の名の陰に隱れて、鯉は利根川に限るなどといふ説を作られたのでございます。



隅田川は東京中の下水が流れ込む所で、魚にとつては、餌は食べ盡されね位ですから、肥えて味の美しいのも無理はありませんが、利根川となると餌に不自由をするのみか、流れが急ですから、鯉も痩て味が劣ります。それから畫筆を御執りになる方の御參考迄に申し上て置きますが、鯉はたゞ泳いで居る時は背の鰭をピタリと背に附けて居りますが、若し躍るとか、怒るとか、驚くとかの場合には、鰭をピンと立てます。展覽會などで、この相違を知らずにお描きになつた大家の作品を拜見するたびに、いつもア、惜しいが・・・といふ感が起つてまゐります。

△筍の味

筍の最も味のよい季節は四月の中旬から五月上旬までゞ、其頃の品は御惣菜以外に立派な献立に加へても差支はございません。ちと早計な評かもぞんじませんが、筍の料理法は東京より京都の方が遙かに進歩致して居ります。

一體京都附近は丹波路へかけて非常に竹藪が多く、從て筍も澤山出ますので、就中深草から稻荷山邊の赤土の多い場所のは、とても東京では知る事の能きぬ好風味を有つて居りますのでございますから自然材料の爲めに庖刀が利くのでございませう。

東京附近で筍の名所は目黒ぐらゐで、季節頃になりますと、態々遠方を電車に乘つて、同地の料理屋迄筍飯を召上りに行く好事家も多うございますが、同所とても、さう毎日多數の筍が取れるといふ譯ではないので、繁昌な茶屋では却て毎朝、多町なり大根河岸なりに買出しに來て仕入れてゆくといふ手品を使ふので、丁度山北の鮎鮓の材料が、やはり東京から輸送されるのと同じ譯でございます。

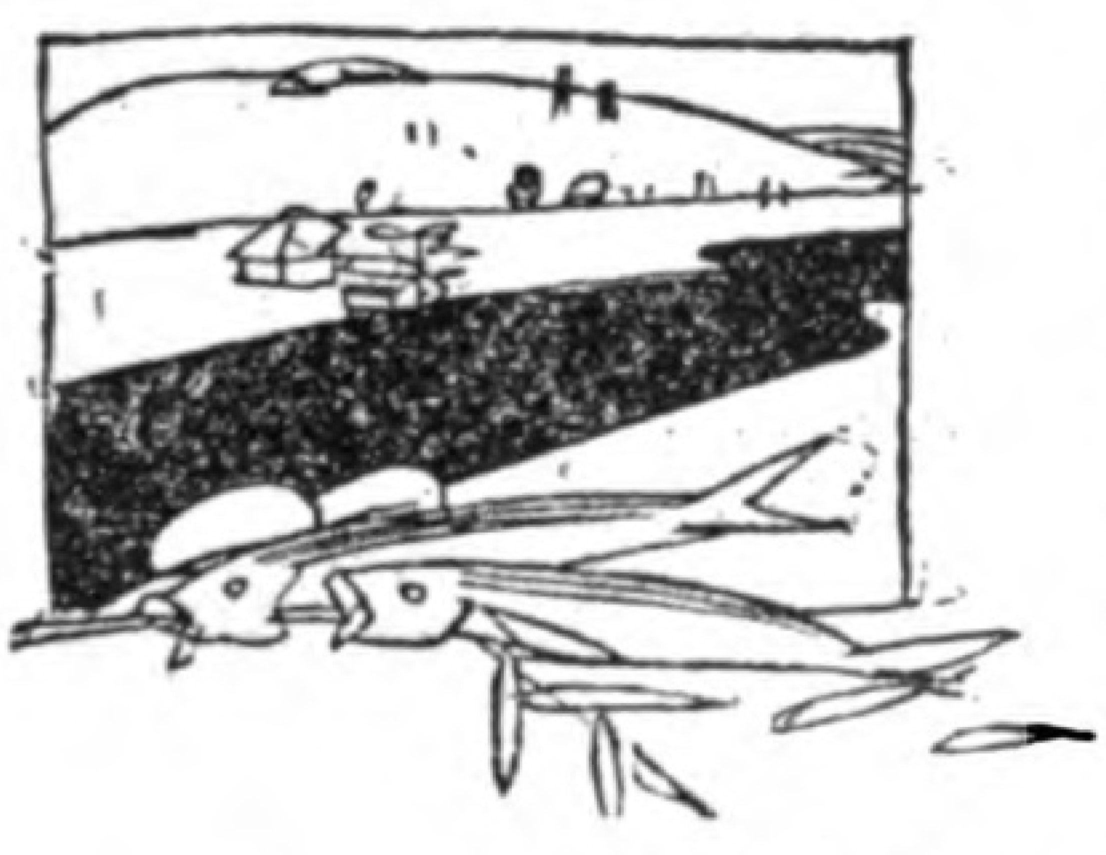


△鮎

夏季は總て輕淡の趣味がよろこばれるので、洋食の濃厚よりも日本料理のあまり手をかけぬ品の方が適つて居ります。

かゝるところから致して、魚材の中では鮎が殊にすぐれて、當季のよき獻立には必ず此魚がつかはれます申すも畏い事でございますが、今上陛下には、すべて海魚よりも川魚を愛でさせられて殊に此魚を御好みあそばされるやうに洩れ承ります。

又此魚は古昔から皇室に因緣淺からぬ目出度き魚で神功皇后が玉島川で餌のない釣針で鮎を釣らせられたのが吉兆の占方となつて、遂に三韓を征らげあそばしたといふ故事もあり、又彼の大海人の皇子が大友の皇子に襲はれ給ひ、吉野の山深く遁れられた折、供御の餘りの鮎を吉野川に放たれあそばせしに、其魚が再び蘇つて、泳ぎ去つたので遂に皇子も再び山を出でゝ世をしろしめされたといふ事が謠曲に作られてあります。



當今、供御に奉る鮎は鹽燒と、煮浸しの二種で、骨をば綺麗に離し、それを原形に直して、御膳に上せるので、其材料は無論宮内省の手を經て遠き御料場からも奉るさうですが、多く多摩川産のが御用に納められるやうです。

△アイスクリームの籠

これは一つのハイカラ談として



料理通の人々に傳はつて居りますが、或歳外務大臣の官邸で晩餐の時に、當時洋行歸りの庖厨主任である某氏が、アイスクリームを盛る器を有平糖で籠形に製くらせやうと致しましたが、風月堂で出來ず諸方の洋菓子屋を聞合せました處皆引受けないので、漸く鹽瀬にコレ〳〵と譯を話して拵へさせました。しかし菓子屋の側では、アイスクリームを積むといふので大概に驚いて、有平糖の籠へつんだら、有平が解けて仕まうだらうなど〻懸念いたしました。

しかし熱のあるものなら有平は解けませうが、氷を入ればバリ〳〵してまゐります。且つ此のアイスクリームは特別に製つて長時間を保つやうになつて居るので、積みあげても少しも崩れずにすみました。

その以來東京では、昨今盛な晩餐には、この有平糖の容易にアイスクリームを盛つて侑める事が流行してまゐりました。

アイスクリームではまだいろ〳〵の話がございますが、一つ滑稽な小話を申上げませう。

御承知でもございませうが、銀座に函館屋といふ小さな洋酒屋がございます。主人は先年亡くなりましたが、主人が奇行に富んでゐるのと、夫婦が豚のやうに肥えて居るのが一時評判で、此家のアイスクリームは實に天下一品の味がございました。これはまた主人が在世中の事でしたが、ある日ハイカラの紳士がアイスクリームを飲んで歸りがけに『オイ土産にするから紙に包んでくれ』と申したので、主人は目を丸くして、『何を包めといふのですか』客曰く『アイスクリームをよ』主人曰く『アイスクリームが紙に包まれますか』客曰く『紙に包めないアイスクリームならいらぬ』主人曰『ソンな物が能きるもんか』客曰く『それができないのか』と罵りちらして去りましたので。跡で主人はベラボーな客もあるものだとウオールスタッフのやうな腹を抱へて笑倒いたしました。

△鰻の味

鰻の季節はさじと申して、春の彼岸頃から夏まで、それからくだりと申して夏の土用から秋までの間を、一番味の佳い時としてございます。



それから此魚は産地によつて著しく味の異るもので、昔から江戸前と稱へて一般に賞美致されるのは、芝浦一帶、殊に濱松町の海岸で捕れますのが最上としてありましたが、ちか頃では同地に瓦斯會社などが出來たために鰻に一種の臭みがついて味の上に甚だ影響を及ぼしてまゐりました。それで現今では、三番の臺場から、中川の入口までの間で捕れますの[illegible]上等品といふ事になつてまゐりました。その次が中川から利根川までの間のもので、下等なのが、利根川から堀江、猫實、千葉境等の産地でございます。

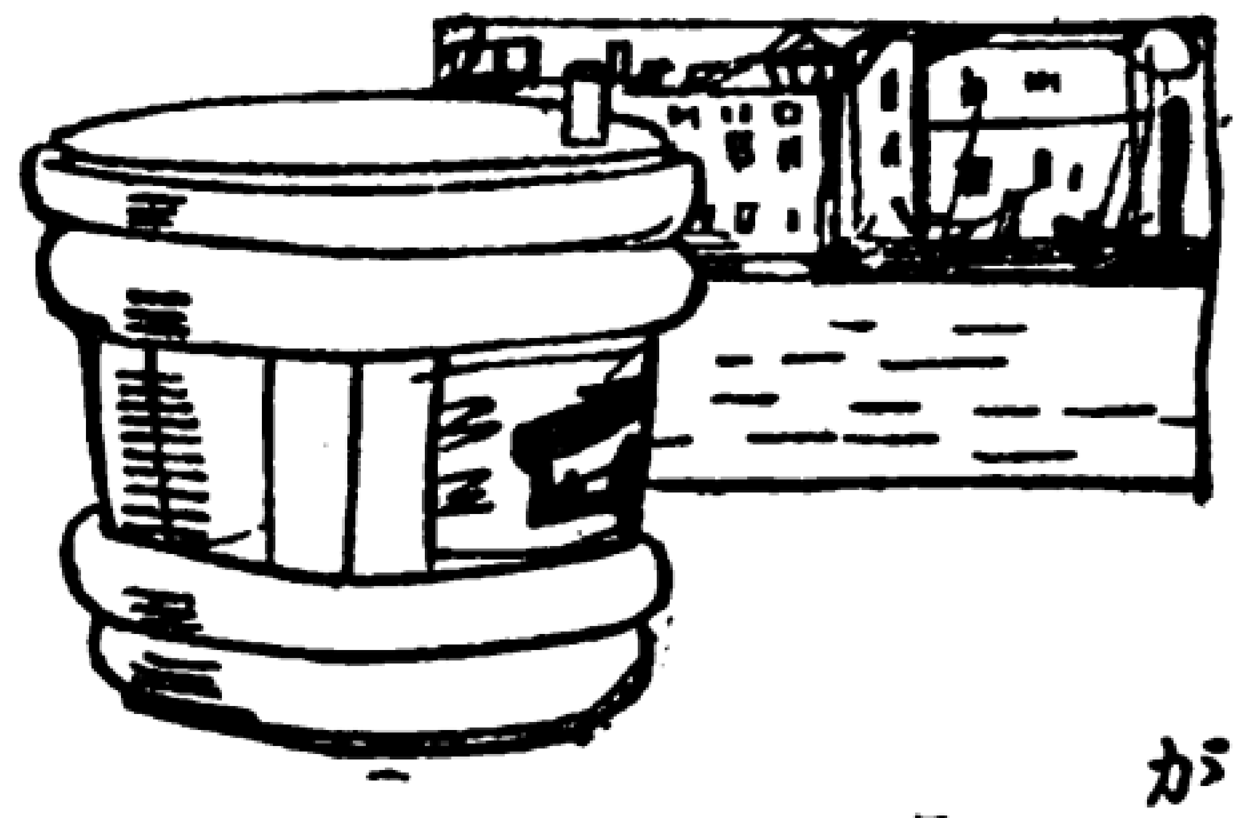
しかし江戸前ではございませんが、下總の手賀沼で捕れますのは味が中々佳しうございます。

鰻の調理は古くから傳りますが、どうしても蒲焼が第一で、大阪ではまむしと稱へて婦人方には歡迎されませんが、東京では到る處之れを燒く團扇の音が盛んで、昔の落語に、ある吝嗇な男が蒲焼屋の隣りに家を借りて毎日惣菜を製らずに鰻の焼ける匂を嗅いで飯をすませたなどゝいふのが有りました。

私が先年箱根に遊びまして、湖水の傍の橋本屋といふ家で晝餉を喫ゞきました事がございましたが、折ふし不漁續きで小田原から何も上つてまゐらぬといふので、中串位の鰻をフライに揚げて呉れましたが、いや其味のアクどいのには大に辟易して、今以て其不味さが頭に泌みて鰻を喰く度に此フライの事を思ひ出します。

△海外に於ける醤油

桑港あたりで發行される邦字新聞を拜見します



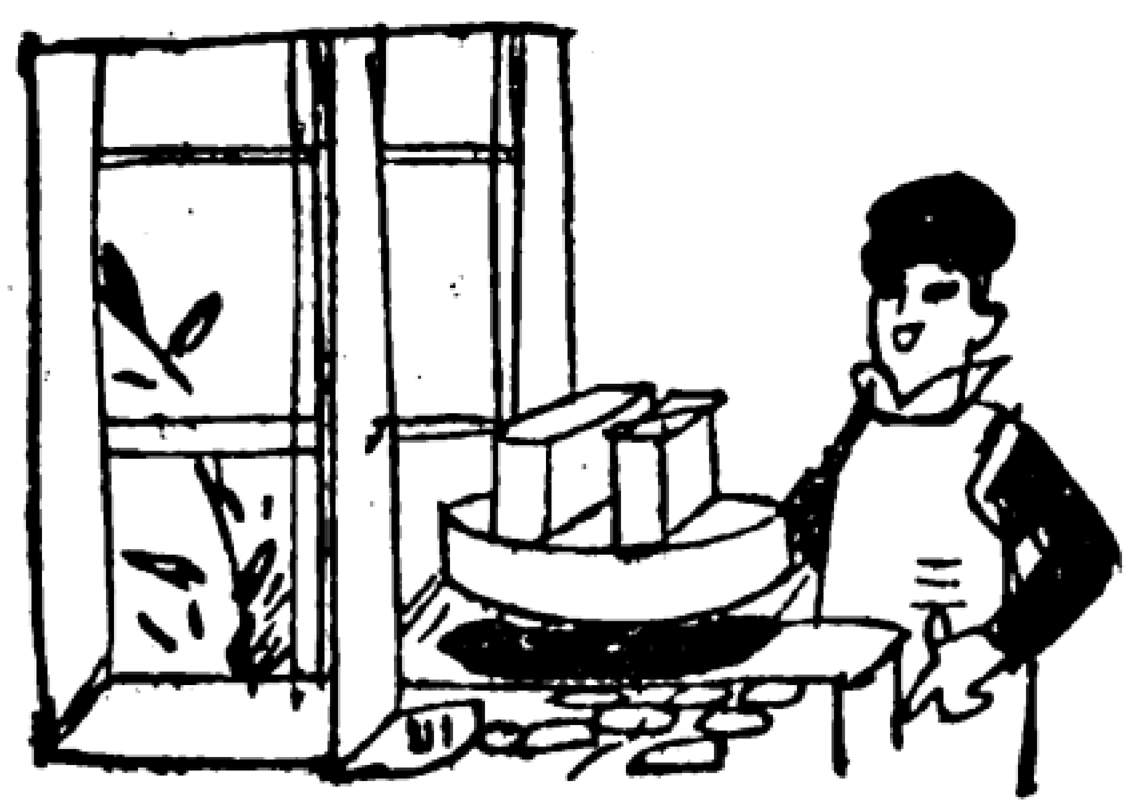
と、日本酒、海苔、干鯛等日本産食品の入荷を廣告して居ります。これは專ら在留の日本人に賣るためでせうが、海外にあつては何よりの御馳走でありませう。しかし外國に在つて日本品を用ゐるとすると極めて贅澤になります。或る外國通の談に、ちか頃醤油の輸出高が段々増加してまゐりましたが、ブラジルの公使館でロンドンから日本醤油を取寄せた人がありましたが、三合入小瓶一ダースが二磅即ち約二十圓で、露西亞の日本公使館で獨逸から取寄せた時も四合入一ダース四十馬克即ち約二十圓でしたさうです。

日本の醤油は初めは臭いなぞと嫌はれましたが、今では外國人の嗜好に大分かなつてまゐりました。ビフテキのソースなども、日本醤油に山葵をすりこみ、パセリを刻んでかけますと、これは妙だなどゝ外人間に評判になつてまゐりました。

△日本風の飯

米は必ずしも日本産でなくてはならぬといふ譯ではございませんが、その焚方は日本が流石に數百年來の經驗からおして、第一であるとの評が外人間に傳はつて居ります。紐育の一富豪で、一週一度この日本風に焚かれた飯を喰だくために、日本人を飯焚きに雇つて月に四十弗を拂つて居る人があるさうです。

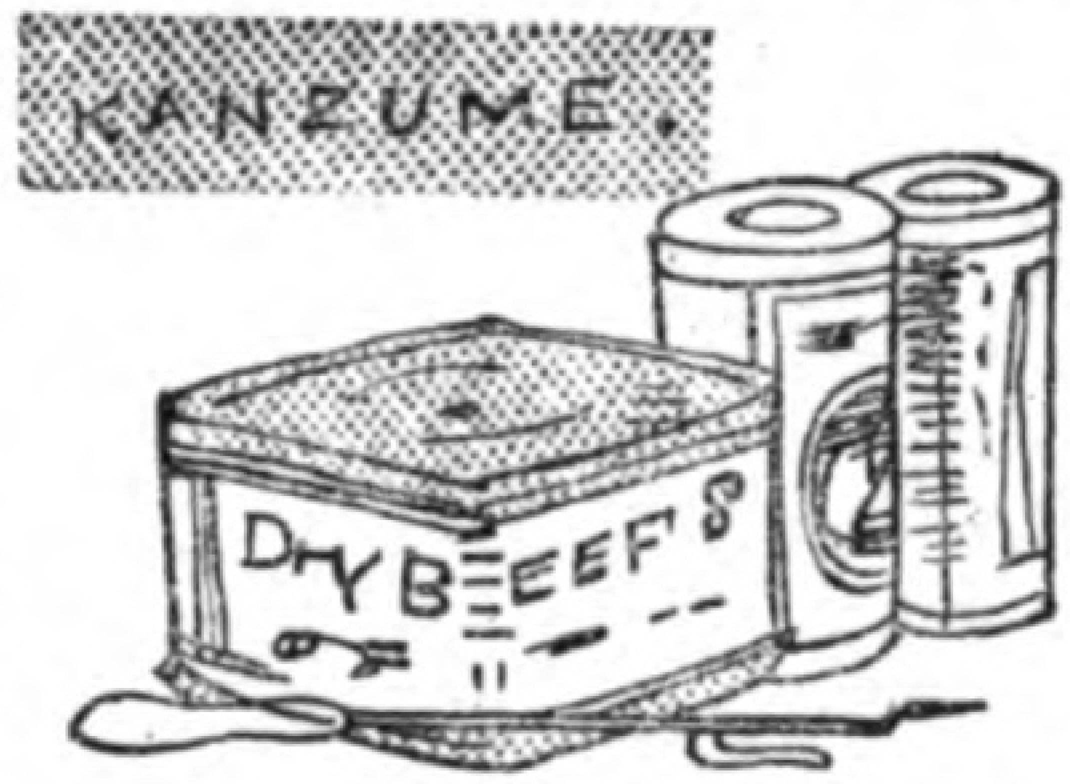
外國人はどうして飯をいたゞくかといふと、洋食の野菜と同樣にして用ゐるのです。たとへば鷄のカツレツなどのあしらひに日本風の飯を添へて出す。又氣取つた料理ならば紙で箱をつくり、これに飯を容れて、その上に鶉の丸燒を乘せてすゝめるといふ話です。



△罐詰の趣味

罐詰といへば牛肉か福神漬位よ

りないと信じてゐる方が隨分ございませうが、鑵詰の範圍は其樣に狹いものではなく、果物、野菜、魚類は勿論、大抵の物は皆鑵詰につくられます、蒲鉾の鑵詰、白酒の鑵詰、鰻の蒲燒まで鑵詰にされます。外國で鰻飯をつくるには此蒲燒の鑵詰を使ふのです。



それで鑵詰の利益は運搬の手輕なのと、貯藏に於ける點なのです。つまり遠隔な地にあつて、何時でも珍らしい物が自由に料理されます。寒中胡瓜が庖丁されたり、暑中蜜柑を用ゐられたり、これがあれば態々孝子をして雪中に筍を探させるやうな苦勞はさせずにすみます。

避暑地などで、怪し氣な宿屋料理をいたゞくより鑵詰さへあれば、工夫して面白い料理をつくる方が趣味があります。蠻殼な方は鑵詰を開くなり直ぐ其儘箸をつけて、これは不味いなどゝ酷評されますが、甚だ滑稽な事で、魚類ならば開ける時に、湯の中に入れて鑵ぐるみ蒸すので、鮭のボイルドや、蟹、海老等は殊にこれが必要でございます。

鮑、松茸、筍、蕗、獨活、蓮根、くわゐ、松露、白魚等は甘煮なり附合物なりにどうしても手をかけなければ眞の味が出てまりません。それに鑵詰は製造所によつて甚だ好い惡いがあるので、どうしても信用ある店のを買ふといふ事が必要でございます。

小鳥の飼養法



◎小鳥には啼物と眞似物とがある、啼物では鶯、駒鳥、目白、雲雀なんかであるが、最も飼ひ易くて素人向きのするのはカナリヤ、ヂウシマツ、文鳥、コキン鳥、セキセイインコ、福面インコ抔の撒餌物、又九冠鳥は一番眞似が上手で面白いが、これは擂り餌物である。

◎インコの類では小白、インコ大ルクインコ、オーパタン、本ギボウシ、淺黄ギボウシ、ヨーム小ギボーシ、ヒメギボーシ、類違ひギボーシ等は種々面白い人語を眞似る許りでなく、馴らし樣に依つては、子供が手を出せば其手に止まつて眞似言を云ふ、併し玩弄物に適して居るのは桃色インコである。

◎セキセイは巣箱の奥に卵を産むから、産卵を知らうとしたら糞を見るのが一番早い、産卵すれば平素の六倍もある糞をする、又孵化は雛の啼聲で分る夜も餌を好く與つて成可く菜を澤山與へる樣にする、親は其菜を細末にして皆子に與へる、菜は乳の樣なもので、且便通を善くするから子が丈夫に成育する。

◎福面インコは折角孵化した雛を往々死なして了ふ人が多い、あれは夜になると雛が巣を飛び出すからつい風邪を引いて　ぬので、折折夜る見廻つて親鳥の巣へ入れてやる樣にすると容易に育つものである。

◎カナリヤの餌は茹玉子、菜葉、稗、粟、菜種、エゴマを付けてやり、子を孵化しても若し其親の養ひ方が惡るいと見たら粟、エゴマ生玉子菜葉等を擂つて筆の尖へ附け指で輕く巣の周圍を叩くと、雛は口を開けるから入れてやればよい。

◎卷毛のカナリヤの子なんかには、好く子育てに經驗のある親鳥を借りて來て乳母をさせるが可い、中でも文鳥とコキン鳥の乳母にはヂウシマツが適任者だ、殊にコキン鳥には好成績である、併し何れも親鳥の養育仕樣が惡るい場合である、又親の發育を助ける爲めに指し餌をする事は名古屋邊で流行するが、矢張り乳母にする方が達者なものが出來る。（今村久兵衛氏談）



婦人は斯くまでにしても美人になりたいものか

美取千里

△どんな痛い目も我慢する

「美人になりたい。」是は世界のあらゆる種屬を通じて總ての若い女の熱望の聲である。美しく生れた人は其美しいが上にも一層美しくなりたいと思ひ、不幸にして不美人に生れた人は何うして化けたら美人に見えるであらうか、年を取つた婦人は、何んな風に化粧したら若い顏に見せられるであらうか。行住坐臥年百年中、女の心から美といふことの離れる暇はない。美しくさへなることならば、命にかゝはらない限りは何んな痛い目も辛い目も我慢をする。美といふことは婦人にとつては、神樣よりも親よりも難有い譯のものである。

△生血滴る牛の鮮肉

色を白くする爲めに、歐米では毒藥の亞砒酸を服する女が珍らしくないといふことである、あはれ局量を少しでも間違つたら、恐しやお陀佛とならなければならない命懸けの仕事だ。然るにそれでは餘りに突飛過ぎる、少々手ぬるいけれども命にかゝることは無いからとて、あちらで一時行はれた方法は、生血の滴る牛の鮮肉を薄く切つて兩頰に當てゝ其上から繃帶をして締めつけて置く。是ならば命に仔細はあるまいが、果して色が白くなるか何うかは保證の限りでない。

△樣々の入浴法

湯上り姿といふことがある、若い婦人は固より年取つた婦人でも、聊か上氣した工合のところなどは正しく綺麗に見えるものだが。外の國では只の湯位では納まりが附かない、古代の事だが、肌目を細やかにする爲めとて油の湯に入り、それから色を白くする爲めにとて更に

牛乳の風呂に入つた婦人があつた。羅馬の或皇后は驢馬の乳に入浴することを考へ出して、毎日二回それに入浴し、旅行せらるゝ時には幾百となき驢馬を引連れられたと傳へて居る。又或婦人は苺の汁を絞つてそれで風呂を立てゝ入浴したといふ、贅澤も此邊まで到着すれば大抵行止りであらうが、偖て其苺の効能はと云ひたくなる。

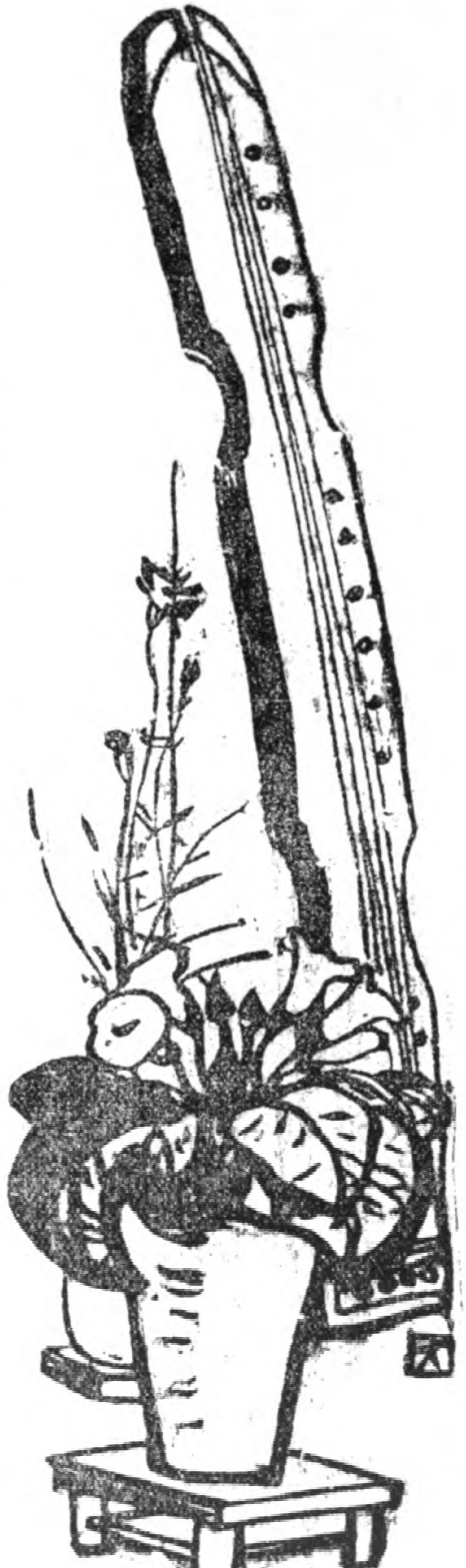
昔の日本婦人は、所謂七ツ道具なるものを提げて錢湯へ通つたものだ、七道具の重なるものは、朴の木墨に、浮石に、糠に、洗粉に、鶯の糞などである、それ等は先づ垢を落す爲め、上皮を搔つて肌を綺麗にする爲め、偖又光澤を出す爲めの目的に使はるゝのであるが、鶯の糞とは蓋し振つたものである。併し糞と云へば聊か可厭になりもするが、其主は鶯であるだけに何となく一種の美的な感じがないでもない、實質から云つたら、牛の鮮肉よりは不潔であるかも知れないが、血腥い肉に比すれば、自國最屓の故もあらうけれども、汚なかるべき鶯の方が美しくなる上に於て効能があるやうに思はれるではないか。



△生れもつかぬ痣を拵へる

鍋の底でも研げば光る、乳で洗つたり、鶯の糞で洗つたりしたならば、瓦が玉とならぬまでも、幾らか色もつやもよくなるであらう、幾ら洗つても研いても、それで効が無ければ並に白粉と申すものがあるけれども〳〵肝腎の顔の造作は、悲しい哉造り換へるべき手段はない、此上は止むを得ないから、せめては其造作が引立つて見えるやうにする新工風があるまいか。といふ事になり、十八世紀の中頃に、婦人は顔に黒い點をつけることが始つた、正しく生れもつかぬ、黒子である、痣である。而も其黒點が、或は月の形、星の形、新月の形、遂には彗星の形を墨黒々と畫く人さへあるやうになつた。此風習は今に行れて、彗星の形や、金米糖の如き星の形こそ畫かざれ、雪とも紛ふ白き顔に漆よりも黒い黒子を巧みに點じて、人の眼を引く美人もある。

日本でも古代の上﨟は、眉毛をわざ〳〵剃り落して額の上に桂の眉顋匂やかに青黛の色を點じたるなど、東西其揆を一にしながら、其趣に多大の懸隔のあるは一寸面白きことに思はるゝのである。



世界奇蹟比べ

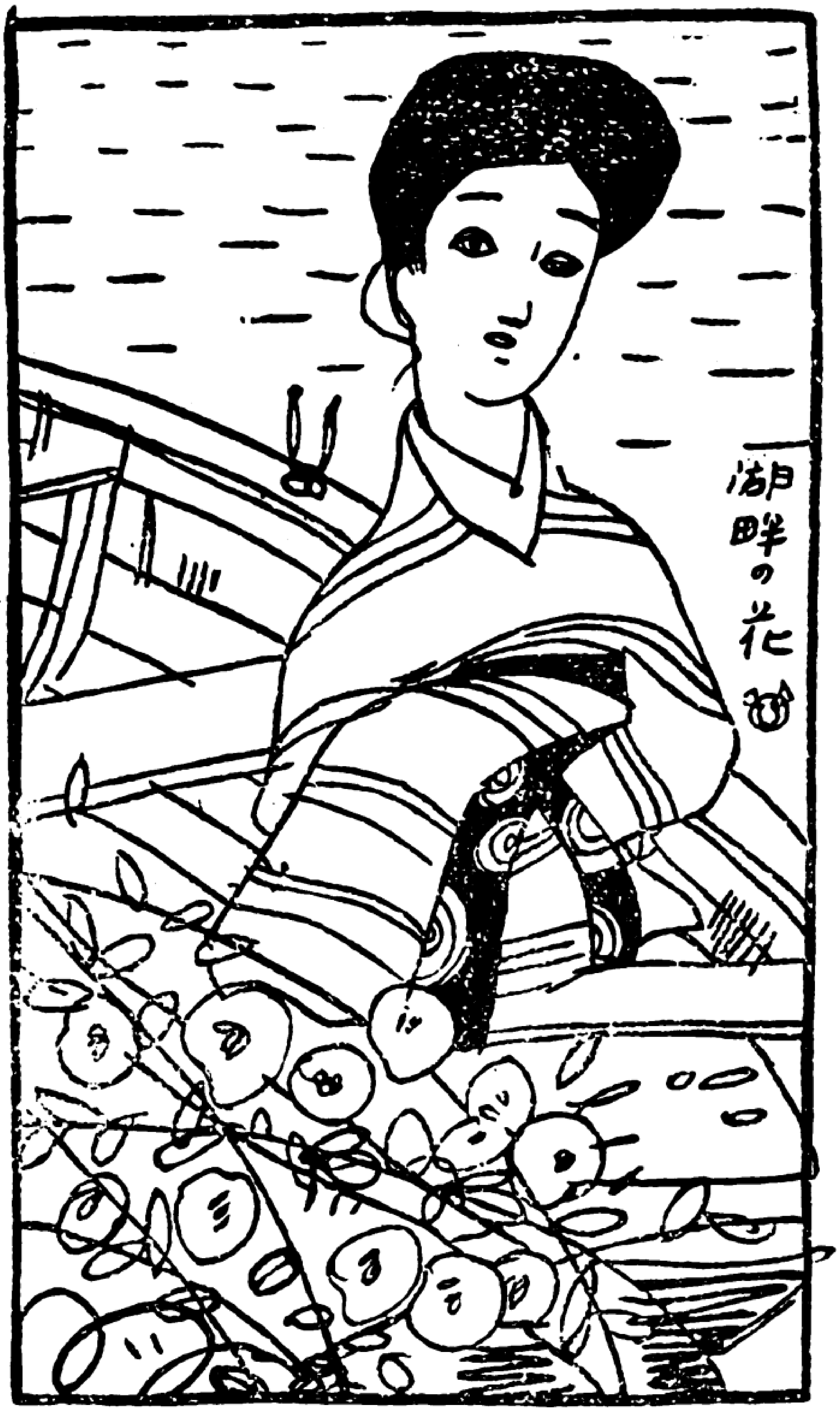
坪谷水哉

賭博が商賣の政府

花の如き淑女が、男子に交り、群衆の前で賭博を行ひ、ハンケチで汗を拭きながら、血眼になつて勝負を爭ふて居るのが既に奇觀だが、其のまた賭博場が政府の經營で、賭博を政府自ら興行して其の收入を以て國の總ての經費に充てると聞ては、實に世界の奇蹟である。其れは地中海北岸のモナコといふ國だ。

モナコは、世界で最も小さな國で、其の全面積が僅に八平方哩、人口が七千人、兵隊が七十二人ある。是で一國だ。日本の田舍には、一村でモナコの一國よりも數倍の大きいのが數多ある。モナコの國民には毫も税が無く、唯だ政府が商賣にする賭博の收入で國の費用を支拂ふのだ。

モナコ國の三方は、佛蘭西領で、一方は地中海に沿ひ、東西に細長く、幅が十町ばかり、長さが二里許りで、山を負ふて海に臨み、佛蘭西から伊太利まで、地中海岸を走る鐵道が其の國を東西に貫ぬくので、地圖で見ると鰌を串刺にした樣だ。其國都と云ふても全國で唯だ一の市街をモントカローと稱し、王宮も政府も、賭博場も皆な其所にある。余は佛蘭西のマルセールより、地中海岸の東に走つて、ニイスといふ別莊の多い市街で一泊して、翌る朝モントカローへ着たのが五時頃だ。



名高い賭博場を見んとて、停車場から馬車を走らせると、時節は十二月の末だが、氣候は春の如く暖かで橄欖の葉が淡緑りに茂つて、海岸から山腹まで、別莊やホテルが樹々の間に隱見して宛がら公園の如だ。流石に世界の各國より斷えず遊覽の旅客が集まる所とて道路も清く掃除せられて、塵一本も散て無い。賭博場は「カシノ」と云ふて、海中へ突き出た丘の上に、蜃氣樓の如くに立つ美しい建築で、立派な制服を着た門番が、玄關に立ち、まだ開場前だとて何人も入れぬ。で、余は其儘馬車を王宮

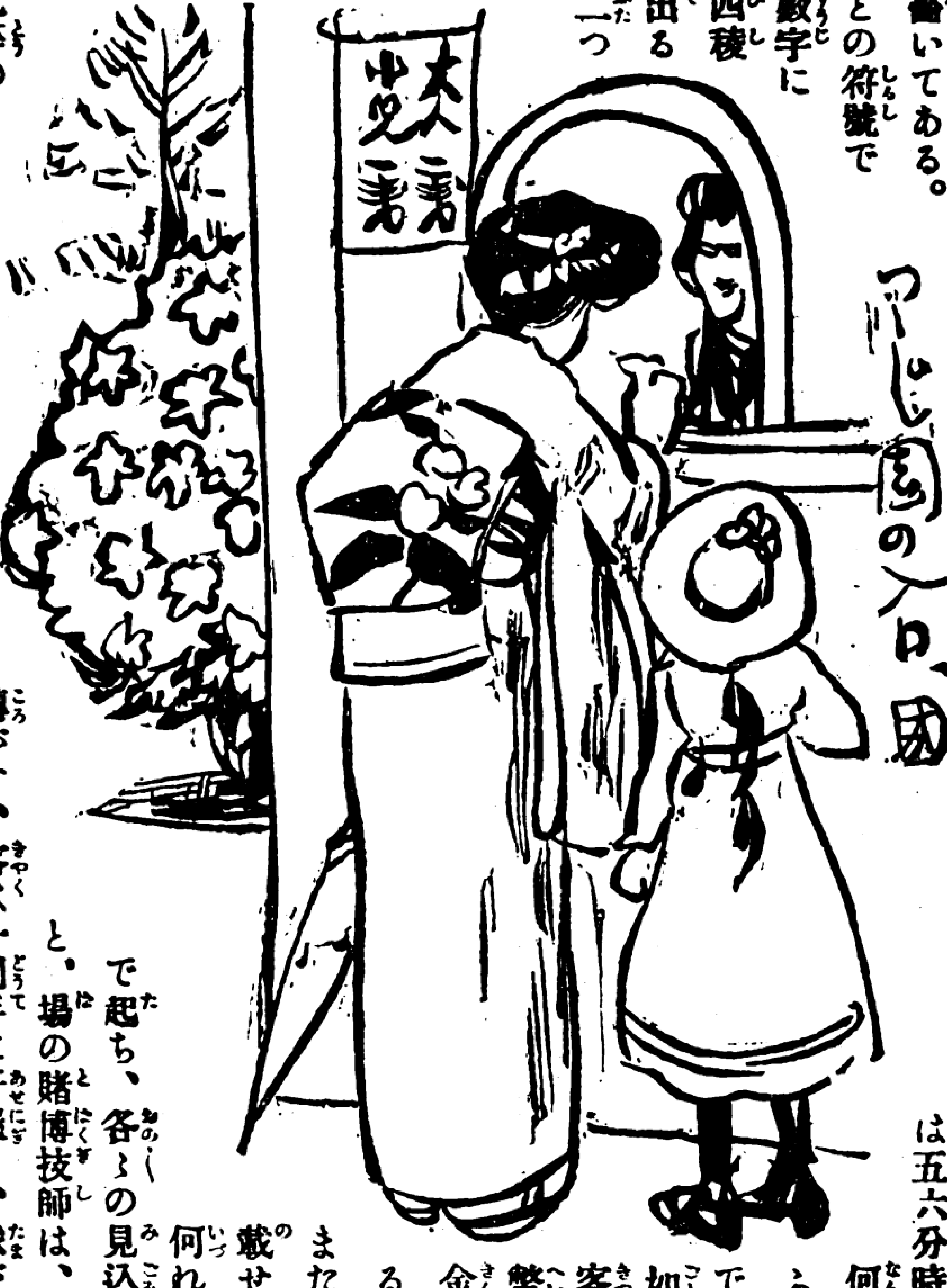
の前まで走らせると、其所には兵營がある。門前に六門の大砲を並べ、王宮背後の山上にも砲臺がある。斯かる小さな國にも兵備があるのも妙だ。

一巡して「カシノ」へ還ると、丁度今開場だと聞き、玄關に就て內部の一覽を請ふと、直ぐに許されたが、入場の規則が却々面倒だ。先づ正面の扉を排いて入ると、金ピカの制服を着た官吏が數人並んでテーブルに對ふ。第一に余が海外旅行劵を檢べ次に國籍氏名を備附の名簿に書けと云ふ。ソコで日本東京坪谷善四郎と書くと、次に最も近い所に在る日本の官憲は何所かと尋ね、里昂の日本領事館だと答へると、其れも書き附けさせた上で、始めて入場劵を交附した。但し入場は無料だ。其の入場劵に二種あつて、何時でも入場の出來るのは長方形だが、余のは一日限りのもので、龜甲形だ。帽子や外套やステッキは、入口の別室で預け、愈よ賭博室に入る。今まで場外で待て居る者が、男子も婦人も一度に入るので却々の混雜だが、日本の樣に押すな／＼と騷ぐ不行儀は毫も無い。皆な秩序正しく靜かに後から／＼と進む。

賭場は二階の上と下とに六臺づゝある。臺は大きなテーブルの如なもので、其の上の中央に直徑三尺ばかりの淺い皿があつて、皿の周圍を三十六に線で區劃して底は一から三十六までの番號が書かれ、また臺の上にも線で三十六に區劃して番號が書てある。賭博は金を其の臺上の番號に賭けるのだ。賭博の方法は、日本の球轉がしに似て、一とつの小球を皿の上方に轉がせば、球は傾斜の甚だ緩き皿の中で廻轉する三十六の何れかの區劃に停まる。其の停まりたる數字に賭けた者は贏ち、外れた者は皆な輸けだ。で、贏た者は賭けた金額の三十六倍を得、當らぬ者は、皆な賭場に取らるるのだ。去れば賭場と客とで勝負を爭ふので、客同志で勝負するのでは無い。而して勝て儲ける客よりも、客が輸けて賭場の儲けることが多いので、其の收益が乃ち此の國の唯一の收入である。其れが多いので、國民は、租稅の負擔が毫も無いのだ。

勝負の方法には、も一とつ極めて簡單なのがある。

其れは臺の上の數字の外に、臺の隅の方に、白と赤との二個の四稜形を書いてある。此れは奇數と偶數との符號で初心の客は、金を數字に賭けずして、此の四稜形に賭け、奇數が出るか偶數が出るかの二つで勝負を決るのだで、奇數に賭けたのに、球は二、四六、八等の偶數に停つたときは、客の負けで、賭けた金は皆な賭場へ取られ、之に反して球が一、三、五、七等の奇數に停れば、客は賭けた金額の倍を取るのだ。



賭ける金額は、一と口の最少額を五法（我が約金二圓）とし、賭る客は何れも紳士や淑女で、一回の勝負は五六分時間で、何百乃至何千法の勝負を爭ふのだから、此處では金銀は土芥の如くに取り扱はる客は先づ巨額の紙幣を投げ出して、金銀貨と兩替したる後、臺上の數字または四稜形の上に載せて賭けるのだが何れも賭博臺を圍んで起ち、各〻の見込の金額を賭けると、場の賭博技師は、小球を皿の上に轉がす、客は一同手に汗握り、球が何れに停まるかと眺めると、球はグル〳〵廻つた最後に、停まつた番號は臺上に吊した摺硝子の燈籠の面へ、パッと電燈で

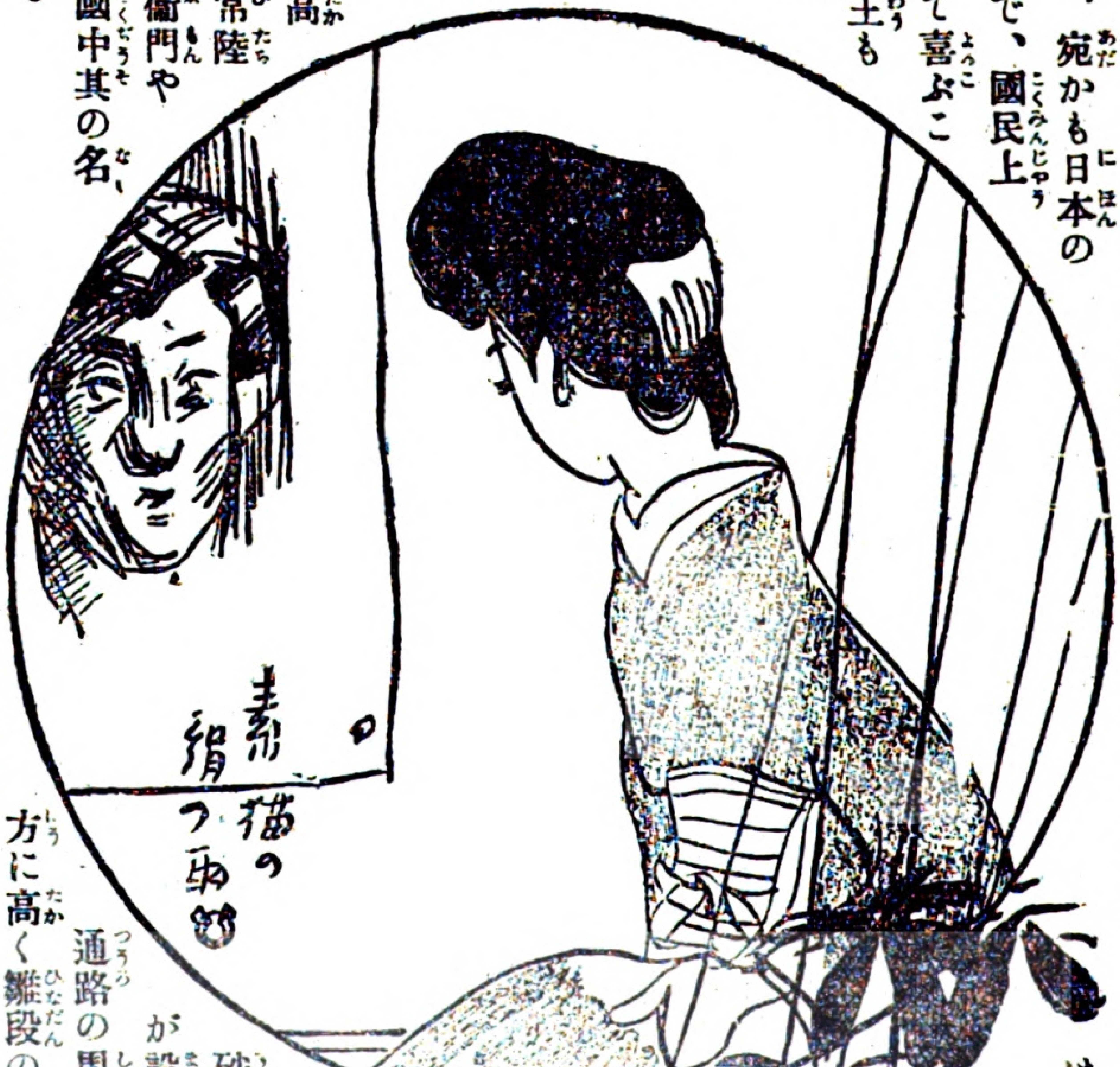
數字が現はれ、勝負は忽ち其所に決すると、賭博技師は、手斧に似たる機械で、輸けた客の賭けた金を、ザク／＼と盡く手元へ掻き寄せ、贏た客へは三十六倍にして拂ふ。去れば輸けた者は百法二百法立どころに失ひ、贏た者は一擧に數百法を得るのだ。斯く勝負は即時に決つて、贏てば大利を得る故、世界各國の慾深き紳士淑女が入り更り立ち更り、毎日此所に集ふ者幾百千人皆な狂氣の如くになつて金を賭け、終には旅費の總てを失ふて、進退全たく谷まり、時には傍の海へ身を投げて自殺する者もある相だ。然れば若し一日中に一人で十萬法（約四萬圓）輸ける者ある時は、其の臺を不吉として、一週間其れを用ゐぬと云ふ。また客が自殺しては、賭場の人氣を害なふ故、全たく歸國の旅費まで失ふた者へは、最も近き所の本國官憲所在地までの旅費を、賭場より給與することになつて居る最初入場するとき國籍や最近距離の本國官憲所在地を聞くのは其の爲な相だ。

日本では鐵道國有だの烟草專賣だので、政府自ら商賣して居るも、未だに賭博を公許して、政府自ら之を營む勇氣あるか否かを知らぬが、若し其れを許さば、競馬の勝負を賭ける樣な女豪傑達は、定めてドシ／＼押しかけて、モナコ以上の收入を得、所得税を減らしたり、通行税を廢したりとも、更に其れ以上の收入があるかも知れぬ。尤とも賭博の爲に本業を放擲し、身代を潰す者の多くなる事も勿論だ。

鬪牛で夢中の國民

男子は勿論、上は王妃、貴夫人、令孃から、下は賤が伏屋の女子までも、牛の弄り殺ろしを見て狂喜するのが西班牙の鬪牛だ。畢竟、鬪牛とは、人と牛と鬪ひ群集の前で、散々に牛を傷つけて怒らせ、最後に弄り殺しに殺ろすのだ。が、其の手段が殘酷で、凡そ世に此れほど動物虐待の甚だしいものは無い。また其の牛を殺ろさんとして、鬪ふ勇士や、其の騎て出る馬が、牛の爲に突かれて怪我したり死だりすることも屢ゝある。其の危險殘酷な興行が西班牙國では公然と許さ

れ、國都のマドリッドを首として、大きな市街には必ず鬪牛場のあることは、宛かも日本の市街に劇場がある如くで、國民上下を擧つて、其れを見て喜ぶこと、氣狂ひの樣で、國王も王妃も屢ゝ見物席に臨まれ、貴夫人や令孃も芝居を見る如くに此の無殘の遊戯を喜んで觀るのだ。日本では近來角力を國技と云ふが、西班牙では鬪牛が國技だ。で、鬪牛勇士の名高いのになると、我國の常陸山や梅ヶ谷または歌右衞門や幸四郎と云ふ樣に、全國中其の名を知らぬ者が無い位だ。



余が見たるのは首府マドリッドの鬪牛場だ。場所は圓く煉瓦の塀を繞らしたる二階建の大建築で、其中には通例二萬人の觀覽者が入れられ、毎年一月の本場所興行には、必ず、國王及王妃の行幸啓があると云ふので其所の壯大と立派なることが推測せられよう、全國中に、二百六十餘りある鬪牛場の中で、此所のが最も大で且つ立派な相だ。演伎場は圓く、恰ど日本の角力場の如く、中央が砂地で、其の周圍に煉瓦の塀が設けられ、塀の陰が通路で、通路の周圍が皆な棧敷で、次第に後方に高く雛段の如に造られ、其の頭上にまた二階棧敷が設けられ、二階は上等席だ。

闘牛の技士は牛を突て傷つけたり、刺し殺したりする危險の離れ業をするのだから、其給料が頗る高く、最も多いのは一日六千ペセタ、我が二千二百圓ばかりな相だ。で、一週間の給料が我が內閣總理大臣一年の俸給よりも高い。

喇叭が聲高く鳴り渡ると、數萬の見物は靜まり返つて待てば、頓て闘牛勇士の一行が、場の一隅から練り出す。十數人の助手を先にしたる勇士は、馬に跨がり黑い笠の樣な幅の廣い帽子に、短かい天鵞絨の上着の上に、更に金銀や寶石で飾られた外套着て、白い靴で鐙を踏んばり、悠然と立ち現はれ、正面で一禮して、グルりと演伎場內を一廻りして退き、勇士は再び出て會場整理者から、恭しく鍵を受取り、會場の一隅に追ひ込み置たる牛部屋の扉を開くと、中から太とく肥えたる一頭の牛が、今屠り殺さるゝと知るや知らずやノソリ〳〵と演伎場內に立ち現はる。

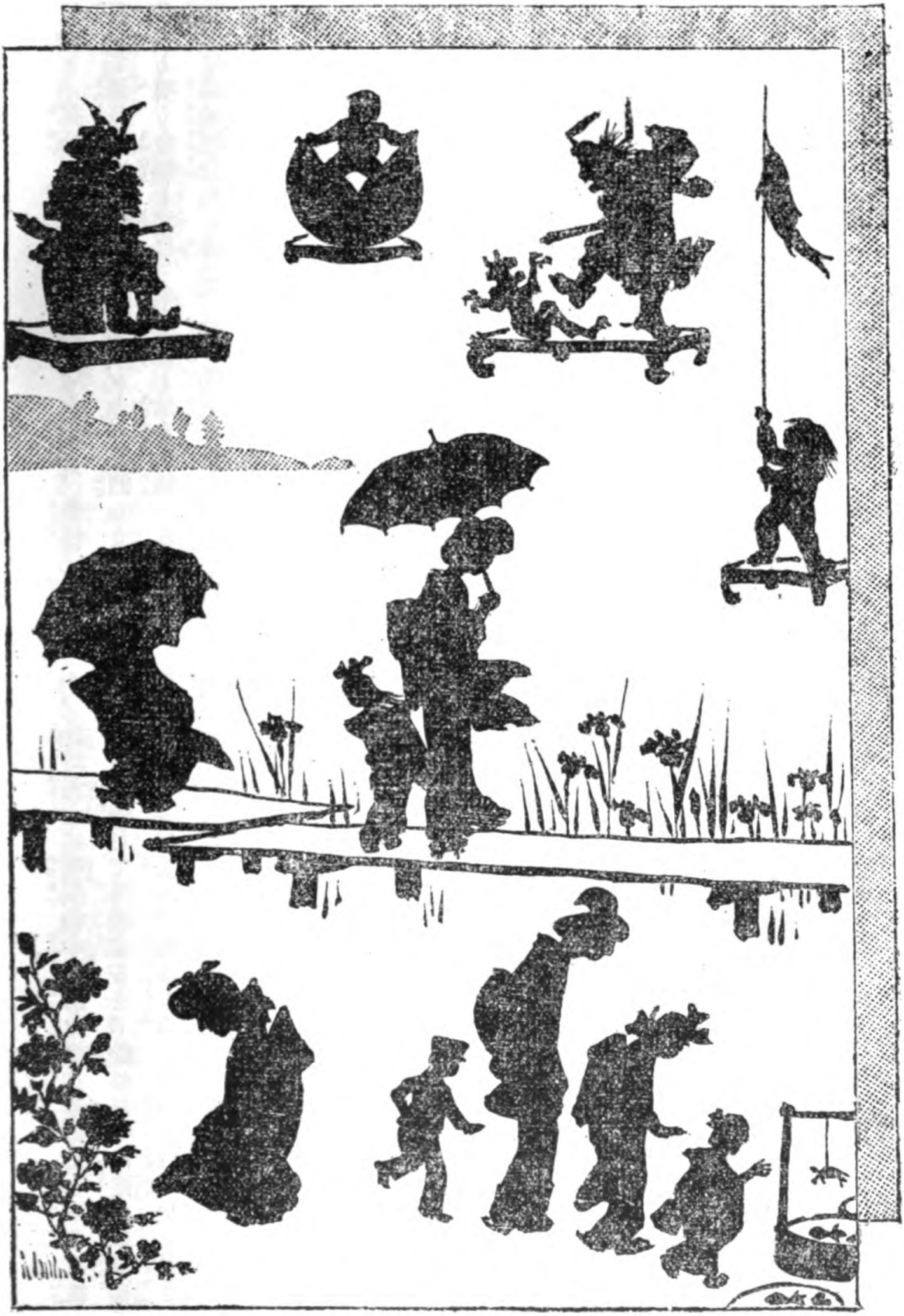
此時槍を小脇に抱へたる數人の勇士は、馬上勇ましく乘り出せば、數萬の見物は口々に贔屓の勇士の名を呼んで、天地も崩るゝばかりの喝采の中に、勇士は暫時馬を停めて牛の動靜を眺め、頓て近寄るが否や、牛の脊目がけて一突き突けば、鮮血サッと迸つて、牛は驚き馳け出すを、數人の助手は、赤い毛布を牛の前に振り廻すと、然なきだに手負の牛は、赤き物を見て益ます猛り狂ひ、右往左往に暴れ廻るを、馬上の勇士と徒步の助手とが、或は追ひ詰め、或は誘き出し、槍で突たり投げ懸けたり、千變萬化の手段を盡して牛を怒らせるので、牛は死物狂ひとなり、角振り立てゝ人馬を目懸け、只だ一と突きと馳け廻り、正に是れ人と牛との大格闘は、目覺しくもまた勇ましい。で、觀客は皆な醉へるが如く、萬目一齊に注視するとき、最後の勇士は寄り近づき、劍を揮つて牛の額の邊りを刺せば牛は益〻怒つて、角の先にかけたかと見る一刹那、勇士は躍つて飛鳥の如く身をかはす、其の速かなること電光石火の如だ。

斯くて牛と人との奮闘三十分許りして、牛も稍や疲れる頃、勇士は更に助手をして例の赤毛布で牛を怒ら

せつゝ、次第に場の中央へおびき出し、最後に劍を揮つて滿身の力を拳に注ぎ、ウンと一聲烈しく突けばサッと噴く血烟と共に、牛は鞺と地上に斃れると、見物席は滿場總立ちと爲て、拍手喝采は急霰の如くに沸く、此時勇士は喝采の中に鮮血滴たる劍を赤毛布で拭ひまた、一禮して退場すると、斃れた牛は直ぐに車に積で場外へ運び去り、觀客も皆な八方の口々から退き去る。

家持の上手下手

最此頃になつて、自分の家の勝手元を顧慮して、什麽しても遣り切れない、是非敎を仰ぎ度いと云つて來た主婦が五六人ありましたが、實際昨今は到る處生活難の聲に滿ちて居る樣です。夫を良く見ると、多くは主婦の落度から來て居ると云つても可いやうです。之に就ても熟々家持の上手な女を拵へ度いと思ひました。什麽したら家持が上手になるかを考へる時には、必ず棚橋先生の過去と現在とを思ひ浮べずには居られません。女は是非共先生のやうにあり度いものです。即ち困難に處して飽く迄も其れを忍んで行くといふ事であります。近頃私の學校では、三十五圓月給を取る良人を持ち、舅姑もあると假定しての經濟向を生徒に行らせて見て居りますが、却々贅澤所ではない或時は一切の鹽鮭を買つて主人の辨當の副食物に半分、自分と姑とで殘り半分を食はればならぬと云ふ献立も出て來ます。而して其今習つて居る此經濟帳簿を嫁入の時の唯一の土産として持て行く樣にと敎へて居りますが、斯う云ふ方から見ると、昨今の樣な苦しい世の中は確に心を鍛へろ好い時機で、此際一家經營の一斑を敎へて置いたら大に功もあらうと思ひます。家持の上手下手を見るには、其人が物事時間等を大切に取扱ふか何うかを注意するのが第一番で、彼の果報は寢て待てといふ樣な諺は、到底家持の上手といふ事とは一致せない事です。女は出來るだけ消極的な處へ氣を附けなければ、迚も家な上手に持つて行くことは出來ません。（嘉悅孝子女史）







虚榮のカタマリ

墨塗下女

奥様の巻

今日はお出かけ、お供を仰せつかる、あまり難有たくなし、背のひくい私がこんな大きな孃様を背おふて衞生婦人のタイプと名稱のある奥様のお供、さぞよいポンチ繪のモデルであつたであらう。奥様のお顔ですか、はあ美人ですとも、中高な黒目がちな、よいお顔ですが、一目みたら忘られぬのは、その體格のいかにもしつかりして居るので、衞生婦人のタイプと云はれても無理ではございませんの、その大なる事六尺にあまんぬべきと、ある人は申しますよ。

まさかネ、ほゝ……

どこへお供したかと仰しやるの、淺草ですよ、奥様は人出の多い所がおすきなんです、それは曰くがあるんですもの、なぜつて奥様はかうして、下女にお供させて、歩くのが女のほこりと心得てゐらつしやいますの、そして、人が見ますよ、私ちやあないのです、自ぼれてるつて、まあお口の惡い、奥様の方ばかり見て行きますの、それが又とない心地なのですつて。

それでね、活動も、花屋敷も、すどほり、料理屋もおしるこやも、すどうりですのよ。

すいたお腹をかゝへて、やつとの事で、場末の小料理屋で、おすし二人前代金二十錢ですの。

ずゐぶん矛盾してるでせう、私もいやしんぼうですわねー。

御隱居様の巻

歸宅した所御隱居樣は、たゞ『お歸りかい』といはれたのみ、一言もなし、この御隱居樣おこりつぽいんです、すぐお顔色に現はれます、まるで七面鳥のやうな方だ、先日も御隱居樣の洗濯物を、かたづけるのを忘れた所、この小さい體のちゞみあがる位な、大こゞとそして十日ばかり口をきかれませんでした、ずゐぶん困りました、この御隱居樣つたらはへぎはのないやうな毛をちよんぼり下げて居りますの、そのちよんぼりがおまけにおつたつて居りますのそれ故かげでは、寒竹さんと申して居りますよ。



それでも、この御隱居樣は、それは〳〵氣さくな方

で、御機嫌のよい時は、之もあれもと下されますの、このお宅では一等この方がすき。
まあ、御隱居樣にお追從して居れば、此の所無事太平なり。

孃樣の卷

この方は當家の旦那樣の妹樣です、女學校へ日々通學、スタイルもよし、お顏もよいけれど、私の乙女時代から見ると、ませて、おしやれさんです、學校の出來も宜しいさうで、文もちよつと書けますが、そのおはねさんときたらまるでお話になりませんよ、着たら着たなり、脫げばそこらへひつかけばなしで、本箱には紙屑が同居してゐますし、針箱には古はんけちがつゝこんである、といふ風、そして、ダンスとか云ふ事を、小孃樣相手に、どしんばたん、それでなければ掃除後へきてちらかしたり、まるで子供のやうです。
でも、この方も、おだてにのるので、おだてゝ居ればこゝの所別狀なし、半衿や小切にも、不自由なし。
お孃樣は、惡いくせがありますの、第一、本をよめば、他の御用はしないんです、それ故御返事がおそくそしてすぐおこります、お顏にこそだされ、すぐそぶりがちがつてしまふのです。
そら、先日私がお供で行つた日のあくる日、ちやうど土曜日でした、御隱居樣は、昨日からのお腹立で、孃樣も機嫌惡く、お二人で日比谷から上野の方へとおでかけになりました、きつとお歸りはおそいと存じましたの、なぜつて昨日奧樣がおそくなつたしかへしでせう。
こちらの奧樣は、お子樣が二人にならうと云ふのにおむつをあてることも、おつくうがつてしないんですそれ故、御隱居樣がおいでにならぬと、第一私の目がまはつてしまひます。
お二人のお歸りは夜の十時でした。
芝居の立見でもなすつたのか。

來客の卷

皆様お留守の日、働いてると、格子があいた。ぬれ手をふき／＼出て見ると、良雄さま（奥様の弟）がいらつしやつた、まあ、どうぞおはいり遊ばせ、と丁寧に頭を下げると、あ、姉様はと聞かれる、お留守でございますが、と申しましたら、困つたなあ姉様の出ずきにも、ちよつ、とやけにいつて、あとはお口のうち、この方いかにも外面は優しい貴公子風で、おとなしさうに見えますが、實は外面女菩薩とも云ふべき方でこちらの奥様にも度々の御無心、今日もきつとそれでせう、留守でこそ幸です。

『ぢやあこれをお嬢様へ、ねえどうぞ』と、御自慢の油畫を手にわたす、御挨拶するまもなく、マントは、くるつと一度まはつて、御門の影へもう見えなくなつたきゆうつ／＼の靴の音はかすかにきえてゆく、私は思はずほゝゑんだ。

お出かけの巻

今日は日曜、おそろひでおでかけなさる、光を（もう一人の女中）お供させて……

旦那様は、御不快とてお殘り遊ばす。

奥様は、今日を晴と厚化粧して、新調の大島お召をすそ長に、なんとやら云ふおみ帯胸高に、わざとお時計はくさりを、ちつと見えるだけに、上へお召の半コートをはをられる、白の振がきちんとそろふ、あつぱれ一廉の令婦人、一段と御容色があがつて見えた、これで摘み食ひさへなさらねばほんとうに、よい奥様だけれどゝ思ふ。

嬢様はかすりお召の着物に、うす色の袴をみじかくあみ上げのくつを、いと輕う歩をはこばれる、いかにも上品に見えた、紅白のおそで裏もおかあいらしい、御隠居様はお召のおひふを召された小孃様は洋服で、光は新銘仙のをきてお供する。

『御ゆつくり、いつて居らつしやいませ』と、お送りして足音のきえたころ、お室へいつてみると、だしもだしたり、まるで古着市の様で着物でうづまつて居る又、なにかしまひ場所を忘れてさがしたんだらうと思

ひながら、すん／＼たゝんでしまふ。

お孃様のお室はわりにちやんと片づいて居る、もう十二時がうつ、御飯のお仕度に取りかゝる、旦那様はむづかしいお顔して、御飯を上がられた、午後おはなれで本を讀む。

時々、お二階から旦那様のせきばらひが聞える、氣になつてしやうがない。

猫は、主待ちがほに、お緣でさびしさうにねて居る三月だと云ふに、なぜかう寒いのだらう、お隣からやかましい唱歌の聲がきこえる、つゞいて、オルガンの音もきこえてきた。

越してきて間もないに、なんてさわがしいおうちだらう、近所の手前すこしは靜かにしてくれゝばよいにと思つた。

そろ／＼晩のお支度と立ちあがる。

皆様は今頃は活動寫眞でも見てらつしやるでせう、お化粧して、遊んで歩くのが、今時の婦人かと思ふといやになる、そしてこんな裏面は世間の人はちつとも知らぬ、實に女は虛榮のカタマリですねー。

◎子守歌の興味　幼い子供は時とするとむづかつて何時までも寢附かないで困る事があります、斯う言ふ時には如何するかと言ふに別に方法もありません、昔からやつて來た樣に幼兒の手なり顏なりを軟和に撫摩つてやりながら低い聲で單調な子守歌を唄つてやるのです、小さい頭にこの子守歌は甚麼に深い印象を與へるでせう、而して幼兒は母の愛を具體化した樣な懷しみのある子守歌を聞きながら安らかに眠る事が出來ます世間の母親が普通に添寢しながら唄ふ子守歌は、皆様方が大抵御承知の通りねんねんようおころりよう、云云と言ふのですがこの歌を低吟して御覽なさい自然と一種のなつかしみを覺えて幼時が追懷されるでせう、これは皆私達が幼い時分に母から幾度も唄ひ聞かされたからです、其故これを幼兒に唄ひ聞かせてやる事は有意味である事がお分りになりませう。

往くもの來るもの





昔の端午と今の端午

◎端午の事

昔から五月五日のことを端午と申します端は初の義、午は五に音が通ずるので、つまり初めの五日といふ意味であります、五月五日と五の字が二つ重なるので、一名重五とも云ひます

◎端午の儀式の事

今では民間でこそ、鯉幟を立てたり、五月人形を飾つたりしますけれど、宮中のお儀式は殆んど廢つて了ひましたが、昔は決して左樣でありませんでした、端午の日の二三日まへから菖蒲を取寄せて、それで禁中を葺いたり、又藥玉に添へて几帳などに懸けたりしました、民間などでもこれを見倣つて、互ひに競ひあつて軒に菖蒲を葺いたものであります、而して端午の日には、天子樣は武德殿に出御まし〳〵、あまねく百官に御酒を下されたのであります。

寢屋の上に根ざしとゞめよあやめ草
たづれて引くもおなじ淀野を
大中臣輔弘

◎菖蒲酒の事

端午の日に菖蒲酒を飮めば、妖邪を攘ひ、命を延ぶと言はれてゐるので、昔は宮中でも、民間でも、盛んに菖蒲酒を飮んだものであります而して菖蒲は一寸の間に九節あるのが最も好いとされてゐました。これを絲の如く細く切り若しくば細末にきざんで酒に浸して飮むのであります。

相伴に蚊も騷ぐなり菖蒲酒　一茶

◎菖蒲湯の事

五月五日に錢湯にゆくと、いづれも菖蒲湯の好い薫がします、これは矢張り菖蒲酒などから起源つた者で、當日一家のもの菖蒲湯に入湯れば、一年中の病魔を攘ひ、また浴中の菖蒲で鉢卷すれば頭痛を病はぬと言ひ傳はつてゐます

菖蒲湯や菖蒲寄せ來る乳のあたり　白雄

◎菖蒲太刀の事

これも今は廢れて了ひましたが、昔は端午の日に木で太刀や長刀を拵へて、軍の眞似をして遊びました、その起源といふのは、山城國紀伊郡にある藤森神社の祭禮からであります、一體この神社は鴨別雷神を祭つたものでありますが、後に至つて早良親王、伊豫親王、桃井上内親王のお三方を併せ祀りました、この中早良親王といふ方は、光仁天皇の第二の皇子で

座しましたが、天慶元年異國の賊が我國に渡來つた時、大將軍としてこれを征伐あそばされました。其時の有様が藤森神社の祭禮に殘り更に端午の遊戲に移つたのであります。

誰が子よ太刀よく似合ふ菖蒲の日　大　香
菖蒲太刀芝居に近き家ならん　几　董

◎人形及び鯉幟の事

端午の節句に甲人形を飾つたり、鯉幟を立てることは、今でも仲々盛んでありますが、これは元來支那の艾人から起源つたのであります。艾人とは艾で人形を作つて、これを軒に懸けて置くと、一年中の邪氣を攘ふと云ふのが何時しか我國に傳はつて來て、張子の人形を作つて、これに紙の甲や冑を被らせ、紙や巾の旗などを持たせて、家の戸口などに立たせて置いたのが、段々年月の經つに從つて、甲人形は益々立派な物になり、旗には定紋をつけたり加之に鯉の吹流しなど添へて、大空高く風に飄させるやうになつたのであります。

艾人に乙鳥のそれる戸口かな　巣　欣

定紋の夜風に並ぶや染幟　孟　遠

◎粽の事

粽の故事に就てはさまぐな傳說があります昔高辛氏の子が五月五日に船に乘つて海を渡つた時、俄かに暴風が起つて船は沈沒し、高辛氏の子も死んで了ひましたが、忽ち海中の惡鬼となつて人々を惱しました。ところが或人五色の絲を以て粽となして海中に投じましたら、それが五色の蛟龍となつて惡鬼を退治したさうです。又一說に依ると、楚の屈原が汨羅に投じたのは恰度五月の五日でしたが、久し間その怨靈が浮ばなかつたので、屈原の姉が大層憐れんで、食物を楝の葉に包み五色の絲で括つて、これを投じて祀りましたのが總て粽の原因となつたさうです。孰れも奇怪な傳說ではありませんか。

遊ぶ日の仕事にほどく粽かな　蚰　桂



◎柏餅の事

柏餅は極く近世のものであります、昔は專ら武家で用ひたものでありますが、當時は四枚の柏の葉で四方から包んだものであります、何故五月五日に食べるのか、それは判然わかりませんが、木の葉で食物を盛ることは確かに上古の遺風であります。

一籠は葉守の神へ柏餅　月　居
葉隱の五日の月や柏餅　存　義
子を祝ふ俳句の會や柏餅　子　規



藻汐草

蠶乙女

湘南は冬暖に夏凉しとぞいふ。打渡すやしほ路遠く江の島うかび。霞の空には富士うき出たり。浪に臨み磯に倚り、立ちめぐらせる黒塀の。いと事そぎ給へるも尊く松のみどりの奥深く、宮の甍のわづかにぞ拜まれける。

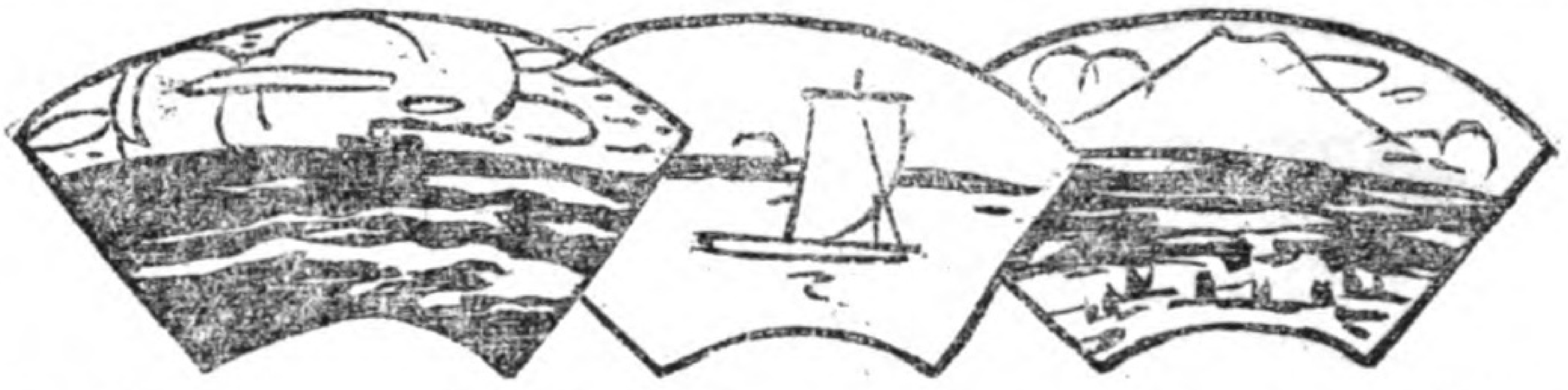
やんごとなき君の御ましどころにて、朝な夕な旅のみ心慰め奉るらん海山の。景色こそ羨ましけれ。

み仕へ人、二人みたり宛後前にちらして、いとやつして近きわたり徒歩はせ給へる道行く人の心もつかで只中を通れば、よぎて行かせ給ふぞ、かしこしとも畏こし。

常に御供に參る狆のなみならぬ、いかなるいみじき果報の下にや生ひにけん。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

いと寒き頃なりけり、ある夕べ鎌倉漬のおろしにとて、大根ぬくべく小やかなる裏の畑に出でけり、氷れる畑地は、昨日をとつ日ぬきける大根の跡の猶形さながらに穴幾個もあき居たり、今宵の代にとて一本をぬく餘り細ければ、もて行かんも煩はしくて、今少し太くなしてより、拔かばやと元の穴に收めんとするに中々入らず、隣なる少し大きやかなる穴へ差込みおきつ、又二三本ぬくに同じく細けれど、何れも異なる穴



へ借家ずまひをぞさせける、漸くに太きを得て用を足しつ、翌の朝何心もなく朝餉の膳につきける時、例の散歩をへ給へる父の昨夜の、寒はことに覺えつるが、實にも今朝畑の大根の、彼方によりたるは皆霜にて葉のしほれ居たる、と、眞貌にのたまへる、ふと昨日の事、思ひ合されぬ、をかしさ包みあへず、實はかく〳〵にてと申せば、皆わらひになりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

さきに、新紙上懸賞の詩に。

山上白雲幽寺鐘　溪橋有客倚孤笻
無邊落木書中景　大幅垂天黃一降

と云ふがありけり。我が曾て見し景をば思ふやうにうたへる心地して、さて其の何處なりしかを忘れたり、口すさみつゝ猶考ふるに、そは知れる家の床に懸けありし幅の畫なりけり、疎畫の内にいひ難き詩趣溢るゝやう覺えしかば、曾遊の地の如く今に記憶に殘り居けらし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

用達しにと町へ出でし歸るさ、よもと思ひし空のはら〳〵と降り出だしけり。折惡しかりと思つゝ、通りかゝりし乘合馬車に乘らんとするに既に滿員なり。ふと見れば親しき友の洋傘もちて乘り給へるが、窓より差出しつゝ、是借し參らせんと呼ばひ給ふ、嬉しくて受取らんと馬車の後おひけれど、豚と肥えし身の馬の足には敵ひがた





くて得追ひつかねば、友の頓智に道へと落し給ひぬ。

折柄其處に通りかゝりし、脊廣召したる男のこは誤ちて落したるとや思しけん、急ぎ拾ひて馬車の後追ふ、我は又是を止めんと此の人を追ふ、馬車なる友は快活なる人の、我が方を見ては手をたゝきて笑ひ、男の方をかへり見ては手かき制しぬ。脊廣の君もあやしと後ろふりかへれば我れあり、漸く意を悟りては極り惡しく思しけん。洋傘を地に捨てゝ振り向きもせで、急ぎこと方にかくれ給へり。

氣が利きて間が拔けしとは、かゝる事をや云ふらんと、お氣の毒にもをかしうも覺えて、漸く我が手に入れば、あなや、雨ははやく晴れにけり。

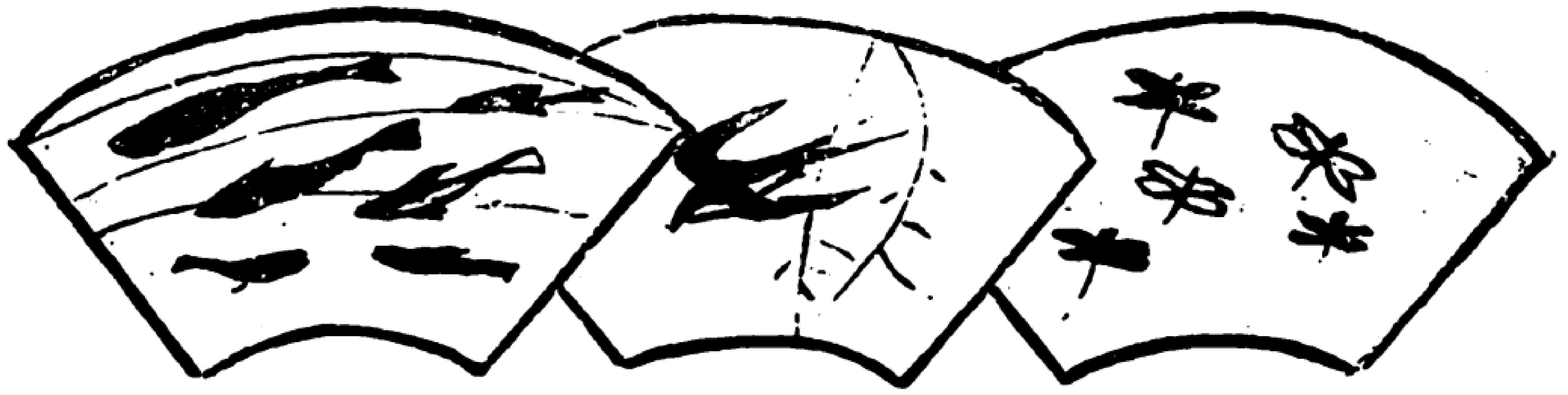
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

いつ迄も故鄕の忘られぬと、誰がいひそめけん、實にこそ其方とし聞けば、人なつかしく事さへ耳とゞまるれ。我れは靜岡に生れて、十年に足らず此地に移りて十とせを過ぎぬ。先つ年熱海に遊びて、海岸に呼ばひ罵る蜑の言葉訛りのふと故鄕おぼえたるなつかしかりき。

さる折每に幼き記憶の、ふとよび起さるゝや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

秋も漸くふけにけり、菊の便りうとからぬ程の小春日和に、染井わたりの植木屋そこ此處とありきて、巢鴨より田端まで線路つたひて行く、心地よき日影は洋傘を通して、四方のけしきの晴れやかなる、足も輕く身も輕く行く程に咽喉のかわき夥し。梨



果はもたれども剝くべき刃物を忘れたるすべなさ、紅さいた口の優しげもなく、其のまゝ歯に押當てゝ皮をむく、洋傘傾げつゝ心地よきうるはひに猶行く程に、頭上の方にて笑ふ聲きこゆ、ふと見あぐるに、早や道灌山の下なりけり、日曜と云ひ折柄の好天氣にて、山上には學生の群あまた見えて、此方を見下し笑ひたるなり。

今更のやうに皆々洋傘の中に頭つき入れける、喧嘩すぎての棒ちぎりてふ比喩もをかしけれども既に遲かりけり。

* * * * * * *

きのふ手筐とり片付けんとて、古き文見出でけり、幼き時いと睦まじうせし友の、其頃しば〳〵おこし給へる一片の、此處には紛れ入り居たるなりけらし。昔なつかしさに、走りかい給ひけるペンのあとたどり行けば、いと細まやかにて、終りに可愛き妹君へとて結ばれたり。かく親しみし昔もありけるものを、過ぎ越し方こそいとゞ偲ばるれ。

其頃は此君の暑中休暇にと此地に來給へば、樂しみ〳〵待ちとりつゝ、旦櫻山の道遥に唱歌に興じ、夕浪切不動に不如歸を語りぬ。

奇すしき運命は、君をば思はぬ方に誘ひて、今は新らしき藝術の園に遊び居給へり老いたる人は女優と聞きて眉ひそむなる、さはれ確固たる決心と高等の教育とのおはする君の、時代に魁け給ふこそうれしけれ、願はくば仇人のあげつらひには耳貸し給はで、直道に遂げ給へと、物の評見る毎に蔭乍ら祈り參らせつゝある昔の友を、そよ



とも思し知るらんかし。

藝術の人として、將また賢き夫人として、慈ある母君として、幸あらせ給へよや。

* * * * * * *

若き友の打集ひて、いかにぞや死こそは實に忌まはしけれ、只いつ迄も身健にて老いてあらんといふ。又一人の、否々死こそ中々に安けれ、灘の水泡と消え給ひし、某の君ぞうらやましき、今頃はいかに安けくおはせん、といふ。若き人の死生觀、若し一年を經て再び問はゞ、生きんといふ人の死を希ひ、死を望みし人の中々に生かまほしくもなりなん、中に一人の其の事問はれて、生をむさぼらん心も有らず、死を求めん心もあらず、とふといひさして、悟りめかしやと自ら笑ひけちたる、あらまほしかりけれど、それも何時にやさゆらぎ易き乙女の心なれば。

* * * * * * *

友のおはして、昔の歌に文に現れし戀の心など語り合ひける、此邊りの若人の戀は猫の如くにこそと、のたまふに、それには答へにくけれど、眞貌つくりて、情死といひ心中と云ふ、日毎の新紙上是等の記事の絶えぬこそをかしけれ、よく譚談にいふ戀病ひとは、如何にしてかなるべからんと、戯れにとへば、むくつけう云ひ給ふ事よとて、とも〴〵笑ひになりぬ。君知り給ふらんを、知り給はずやと重ねていふ友にこそ覺えおはすげに聞きおきけれ。歸り給ひて後の淋しさに、ふと又此事に思ひ及びぬ。



戀か、戀か、我れ未だ燃ゆる如き戀を知らず水の如く淡くはた、清きならば、是や戀なるらんか。

我が手筐にこめたる一束の文、人に見らるゝも不厭、一昔といふ半ばの五年かけて春秋のあはれといはず、夏はさみだれほとゝぎすに、冬は時雨るゝ、あるは雪打ち散らふおもしろき朝など、其の時々の折過ぐさずおとづれ給へる、返しもつきなからずは打ちしけり一昨年ばかりにや、父君の臨終の枕邊近う、豫て婚約給へる美くしき君との、盃あげ給ひけり、去年は打連れロンドンなる銀行にと赴任し給ひつ。祖國をはなれんとする三日前、事繁き中を暇乞ひにとおはしたる嬉しさ。

五七年は彼地にあるべし、若し其間に君の境遇變り給はゞ、御便りも如何や、などのたまひ出たるぞをかしき。爭でさる事の、よし變りたりとも、折ふしのおとづれは必ず參らするものをとて、まゝならば横濱埠頭を出で行く御船をも見送らまほしかりし。

彼の地に參らせん文、上書きの見苦しからんもと幾度か書き改めけんこそやさしけれ。

男てふ者は、めとりたらん後はふつにおとづれずなりぬるが多きと思へりしに、是ばかりこそ異なりけり。

さはれ、そもいつまでとにか、只忘られぬ人の内には此の君をこそまづとて春雨の、只つれ〴〵に書きあつめけるもしほ草、みるめかる蜑にだに捨られつべき。

小野のお伏



△神無月の契ひ

小野のお伏はお通の女にて美人の聞え高き人なる上に糸竹の道にかしこく香道、茶道、敷島の道にも暗からず。信州の領主に册き男女を產す或時お能を見せさせ玉はんと仰せごとありて『かならずと誓ひしことは神無月なかの五日のころとこそまて』とありしかば、お伏は其返しに『かならずとちかひかはらじかんな月中の五日は時雨ふろとも』かくよみて奉りける、其後年を經て母も世を去り世の中うつりかはりしさまを見て無常を覩じ此歌を詠み、後剃髮して宗監尼と號し七十餘歲の長壽を保ちて寂しけるとかや。

小野寺丹子



△共に行く後の世

丹子は赤穗の義士小野寺十內の妻なり、丹子義氣風懷とも夫の行ひに似て殊に睦しかりけるが、夫十內は復仇の事を心に秘めて嘗つて明かさゞりしかども、丹子心に察りて少しも色に出さず。度々の文通にも別れを惜む贈答の歌あれども、互ひに勇氣をはげますの言葉あり『咲きそむる云云の此歌は、春風の題にてよめるなり其外歌あまたあり、十內最後の前日に送りし文に幸右衞門事も心安く思ひたまふべし、我が此歌にてあきらめ候へかし云々と認ため其奥に『迷はじな子と共に行く後の世は心のやみもはろの夜の月』夫も子も切腹の後は思ひかれてや斷食して『つまや子の待つらんものをいそがまし何か此世に思ひおくべき』と辭世を遺し自害し果てけるとぞ。

糸女



△袖の白露

糸女は都木樵町とかいふところの貧女なるが、親族も無くよろべもなき身を歎きての餘りにや、寛文十三年四月上旬、洛東三條の橋のたもとに自害して果てたり、此事都にかくれなく堂上までも聞えしかば、或るやんごとなき君之をいたみて『ことのはは長しみじかし身のほどを思へばぬるゝ袖の白露』『なきとわぶる其ことのはのころさへきくに涙のそでにあまれる』と手向けの歌を下され、厚く供養されけるとかや、世の中には衣食に富み人の上に立ちても花、紅葉の情も知らぬ人も多きにと人々噂しあひぬ。

了然尼



△形を捨て道を求む

了然尼は東福門院に仕へ奉りし女房なりしが、女院崩じたまひし後江戸に來り出家にならんとて駒込伯翁和尚が方に行き其志を述べしに、伯翁の曰ひけるは、佛法に志ざす者は形の美しきを好まず、其容貌にて寺門に出入せば世の人の口ゆるすところあるべからずとて寺に入ることを許さず、了然是非なく近所の町家に入り其由を話し其處にありたる銅器を人知れず火中に入れ、暫くありて赤く焼けたるを手に取り顔にあて『いける身を捨てゝやく身のうからましつひの薪と思はざりせば』かくて其後行ひすまし鐵砲洲に住みしが故ありて鎌倉に住まんとて出立つ時、さる人の許より『水草の清き心よことしげき里より外のすまひ求めて』とありしかば、其返しに此歌を詠めり。

△美貌は道の妨げ

雄禪尼は未だ年若き頃木の葉の散るを見て我身の有様思ひつゞくれば是に同じ、十歳許りの時は春の若葉の如く、又廿歳に及べば夏の梢の如し、三十路は秋の葉に色づくに異ならず、五十路は冬の枯れ果て、其様變るは少時の間なり、斯く仇なる身とも知らで心なく世を過さんは愚かなりとて、甲州鹽の山の向岳院法身和尚は内緣もあればとて戒を受け出家せんことを願ひしが、容顔美しければとて寺に入ることを許されず、雄禪尼之を憂ひ、家にある鐵火を爐に入れて燒き赤く炎の如くなりたるを面皮へ當て、相を變じて此歌を詠みければ、師も是に感じて、法の奥義を盡して悉く授け玉ひしとなり。



雄禪尼



三村德女

△二星の感應

德女は京都に住み醫師三村某の女なりしが、年三十歳に及ぶまで縁遠くて身の片つきなかりしかば或年の文月に此歌を詠み、牽牛織女を祭りしに、不思議にも此歌世に聞え、誠にやさしき心ばへなりとて、或やごとなき方へ緣づき、末めでたく契りけるとなり。昔つくしの大進坊といふ惡黨罪あらはれて鎌倉の獄舍に八年が間繋がれけるが七夕に『ぬきかふるたもとなければ七夕にしほたれ衣きながらにほす』と手向けるに此歌を聞きて北條入道其罪を宥し、あまつさへ姪聟となして知行を與へしことあり、されば德女の此歌も七夕の感應まし〳〵てよき緣を得たるならんとぞ。

△再會期し難し

なびきに近江の國鏡の宿の傀儡なれども、容貌すぐれ心ばへもやさしき女なりしが、年ごろなれそめし人の遠く東國へ下ろととなりしに、久しき別れとならん事を悲み、夜もすがら語らひ。あかつきの別れにのぞみて此歌を詠み出でけるにいつかは人をながらへて見んとは、迚も別れし後はいきてながらへん心もなしとの心、哀れを含み情深ければとて詞花集に入れたまひけり。くゞつとは、近江美濃等の山驛に居れる娼婦のことなり．昔は濱川の湊に居れるを遊女といひ．山里に居れるを傀儡といへりとぞ。

傀儡[illegible]



石川よつ女



△嬉しき鷄の音

よつ女は石川某といふ武士の妻なりしが、夫は年毎京攝に上る勤めにて上方にのぼることとつれのことなれどもしばしの別れを悲しみ、留守のさびしき折から夜半の寢ざめ勝なるに、鷄の聲のきこえけるをかこちて此歌をぞ詠み出でける。榮花物語に山の井の尼の法成寺の法會にまゐらんとて夜の明るをまちし時、とりのこゑなきゝて『いにしへのつらくきこえしとりのねのうれしきさへぞものはかなしき』と詠みけるにも似通ひて歌の心あはれ深し、又よつ女留守の秋庭をながめて『くれて行く秋のかたみは中々にのこるもさびしにはの白ぎく』

義務の名に托したる虚榮心

瑚璉子

△苦心慘澹の靴

世界の何れを問ず、婦人の虚榮心のます／＼増長して、殆んど底止するところを知らぬは現今の有様であるが、其結果時として驚くべき驕奢の装飾を見るのである。本年二月下旬の事であるが米國大統領タフト氏の主催に係る宴會の時に招待された客の中にインヂアナ州ヌンシウーに於て有名なる富豪アンソニー夫人が居た。

此夫人は極端なる派手好きで、曾て前大統領ルーズベルト氏の愛孃ロングウオース夫人が或宴會の席に玻璃製の踵を附けた靴を穿いて、物數寄な米國の社交界を驚かし、流行界の記錄を破つた盛名を羨やみ、何でも其れ以上の靴を穿いてロングウオース夫人以上に人を驚かさうと種々考案に苦心を重ねた末に靴屋を呼んで工夫に工夫を凝らして造つた靴は、踵に金銀珠玉を鏤めた見るも眩ゆき程の立派なものであつた。

△破天荒の装飾

アンソニー夫人は當日其靴を穿き、首にはダイヤモンド、ルビー、其他の貴重なる寶石を黄金に繋いだ首環を二つまで掛け、同じやうな胸飾りを施した上に上衣には金絲銀絲を織込み、粟粒大の寶石を星の如くに縫ひ附け、双方の指には今にも零れ落ちさうな寶石入の金の指環を十數個も嵌めて、悠然として席へ現はれた其装飾の美しさは到底筆紙の盡すべきことではなく、日本人などの眼から見れば美しいとよりは寧ろ狂氣染みた所爲としか思はれない程仰々しくも亦馬鹿馬鹿しいものであつた。けれども外國人の眼からは斯んな装飾は之を以て一種の誇りとし理想として居るところであるから、大抵なことには驚きもしないが、此の滅法な寶石づくめの贋着には、流石の米國婦人も、驚

かずには居られなかつた。破天荒の裝飾として、新流行の曙光であるとか、新傾向の革命者であるとか、有らゆる讃辭を浴せかけられて、アンソニー夫人は一代の面目を施した。

△愛情集注の方便

此夫人はインデア州では寶石女王とまで謳はれて居る位で、此寶石入の靴の外にも種々の貴重品を以て拵へた靴を十幾足も所持し、其靴を平素惜氣もなく穿いて飛び廻つて



居る。

或時夫人の親友が、貴女は何故にそんな奇拔な裝ひをなさるのですかと訊ねると、夫人は莞爾として、私は虚榮やお洒落の爲めに斯んな服裝を好むのではありません、華美な風をすることは私の生命で、隨つて其裝飾法なども、到底他人の想像し得難き一種の裝飾の仕組のあるのを自慢として居るのです、婦人は艶麗でなければなりません、婦人は風采のよき爲めに、人の企て

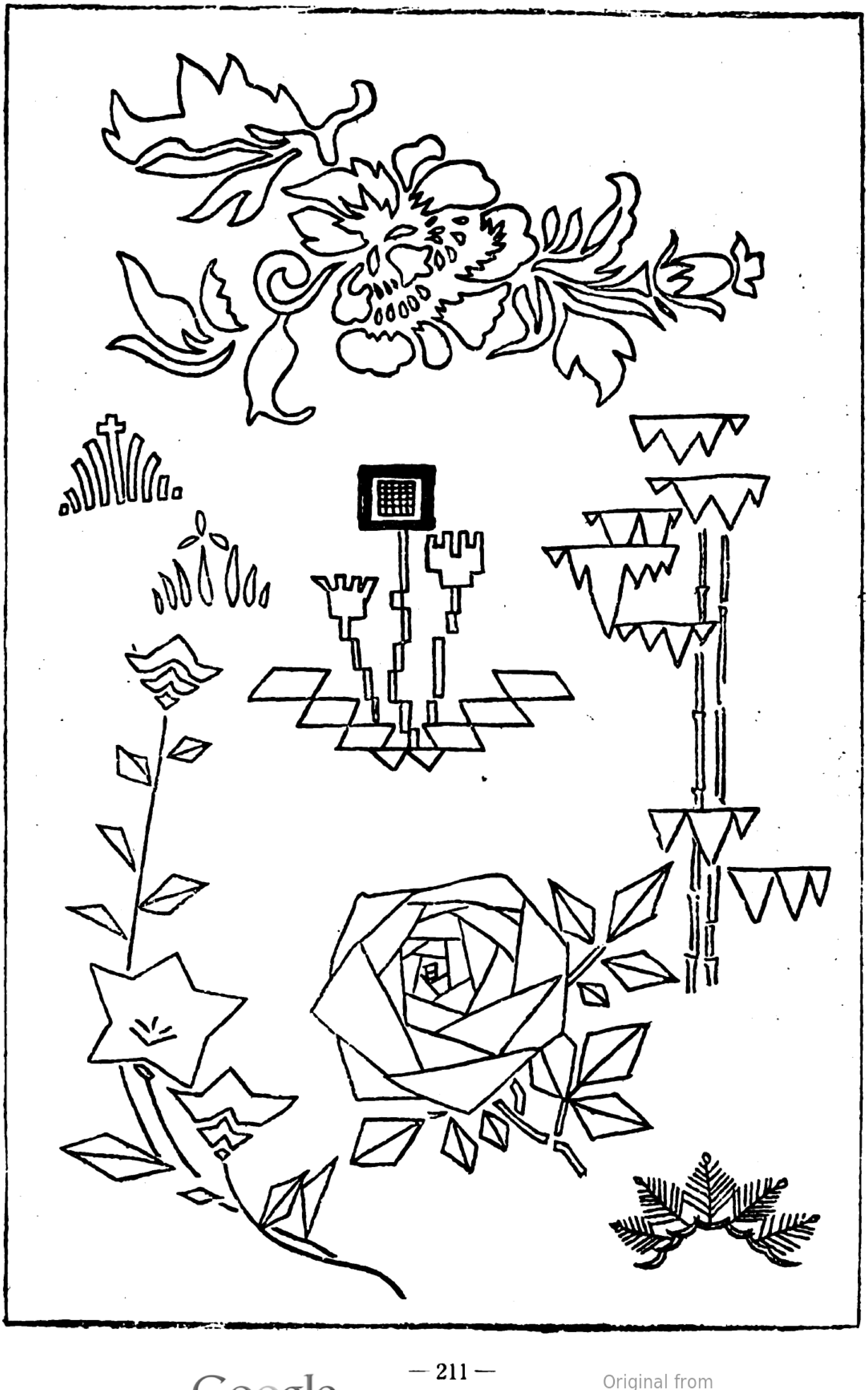
及ばぬ新智識を啓發し得らるゝ實例はいくらもあるのです、それで婦人の風采の美は衣裳の如何によるのであるから、妻たるものは良人の收入の許す限りに於て衣裳の調製に惜まない心得が甚だ必要であります。良人は常に外界の美に心を動かして、妻に對する愛情を薄らげる傾向がありますから。妻たるものは良人の愛情を他に動かさぬやうに、自衞の道として自分の自然美に加ふる外來美たる裝飾を十分に施して良人の愛情を自己一身にのみ傾注させるやうに努めなければならぬので、それが即ち人の妻たる者の義務でありますと臆面もなく言つたといふことである。

△言語道斷の義務

良人の愛を引く爲めに化粧を施し、衣裳に美を飾ることも或程度までは必要であるに違ひない、日本でも紅、白粉を施し、髪を理め、衣紋をたゞすことは婦人の身嗜みとして、婦人の禮儀の一としてあつた、けれども良人の愛情を他へ移さゞらんが爲めに極りなき奢侈を敢てするを以て寧ろ婦人の義務であるとまでに放言するは、言語道斷の次第と言はなければならない。

アンソニー夫人の驕奢は極端である、之を以て一般米國婦人を律するは不當であらうけれども、米國婦人の一般に奢侈を好む風のあるのは幾分かアンソニー夫人の言つたやうな意味から生ずるのであらうと思ふ、而して中には、金滿家の老紳士に嫁し、衣服身の廻りに有らゆる贅澤を極め、それを以て良人以外の愛を引かうとする不心得の夫人もあるやうに聞て居る、孰れにもせよ、斯の如き奢侈の風が我國にも漸々侵入して來たやうな傾きがあるのは頗る慨嘆すべきことで、夫婦間の眞の愛情は、容色の衰褪によつて滅却さるべきものでない筈である。

樣模花草



- △牡丹
- △蒲公英
- △若竹
- △薔薇
- △葛籠
- △小松
- △桔梗



社交界の花形　内田外相夫人

衆議院書記官長　林田龜太郎

△日本の代表的淑女

一體日本人が米國などに行つて、多少彼等の學問をかぢつたり、彼地の空氣を吸つて來ると直きに態度が變つて仕舞ふ。イヤニ高襟ぶつたりイヤニ通を振廻したり、氣障で、生意地で、實鼻持のならぬものである。然るに内田外相夫人は八年も米國に居て、純米國式の教育を受けたにも拘らず、少しもお轉婆なところもなければ、氣障なところもなく、所謂る日本の代表的淑女として何處に突出しても耻かしからぬほど優しくて溫雅である。殊に貴人に對しては、あく迄日本婦人の本領を守り、一言たりとも逆つた事がない。それに平素外交社會に居らるゝから、客に接して人をそらさぬ交際振の巧さは言ふまでもないが、如何なる人に對しても飽くまで眞情から謙讓の態度を持して居られるのは感服の他はない。

これは私の一家言のみでない。何人でも夫人に接した者の感ずる處である。北里博士なども、彼地に行かれた時、大使夫人としてのその態度を見て、あまりの麗しさに非常に感心されて、歸朝後も頻りに賞揚して居られた。その他夫人が維納だの紐育だのに行つて、大使夫人として立たれた交際振を見たものや、また日本人が大使館に頼つて行つて時としては館内に宿泊することがあるが、それ等の人々に對する女らしい態度を見たものは、皆その德に感じないものはない。

△米國の上流敎育

皮相の觀察は屢ゝその眞相を誤解す。日本人が米國に行つて、夜の十一時過ぎ戸外を散歩したものは、夜の女を見る。そして米國の婦人は皆あんなものだと評するのは非常な間違ひである。夜の十一時過ぎに一人で歩いてる女は悉く賤業婦なので、良家の處女は夜どころか、晝でさへ一人では決して外出する事をせぬ。これはよく言ふ話だが米國は自由交際、自由結婚の本場のやうに見做されてるけれど、併し決して日本などのやうに、娘が一人で男子を訪問したり、また監督者なしに面會するやうなことはない。殊に中以上の良家の婦人は、概して健實で眞面目で優しい。況や上流社會の貴婦人となると、眞の意味に於て多く淑女である。又米國の婦人が家庭に重きを置くことは實に非常なものであ

る。私が米國に行つてた時、ジョンソンと云ふ人の邸に招かれた事があつたが、その折夫人は四方八方の談話の序でに、『吾々米國婦人にとつて一番辛いのは、良人から、母の時代よりもお前の代になつてパンの味が惡くなつたと云はれることである』と言はれたが、これを以ても眞の米國婦人が如何に家庭のために意を注ぐといふことが分る。

この堅實な、米國式の上流教育を受けられた外相夫人であつて見れば、その淑徳の高いのも決して不思議ではない。

△賢母の心掛

外相夫人は斯くの如き淑女であるが、外相の母堂も亦たなか〳〵感ふすべき婦人である。八十歳に近い老體を以て、夏冬の別なく邸内で機を織られてゐる。先年も私の母から機械一臺を送つたところが、大變に喜ばれた事があつた。

實は私の母も機織が好きで、七十近くになるが、どんな寒い朝でも又暑い日でも、一日として機織の手を休めた事はない。あまり寒い日には私が注意して『寒中は少しお休みなさつては如何です』と云ふと、『私は運動しなくては、却つて身體に惡い、機は孫たちのためばかりではなく自分の健康のためだから』と云はれる。

老母は平生、『私は年をとつたし、殊に女の身であるから、もう御國のためには如何する事も出來ない。せめて孫のためになりとも働きたい』と云つてゐる。斯様にして私の子供八人の夏冬の着物は、皆な老母の手から織り出される。

故に子供等もそれに感服して、祖母様の手織の着物を着て居る間は、祖母様の前に居るやうな氣がして、惡い心は起らない。假令遠く離れて居ても、始終保護を受けてるやうな心持で居る。斯ういふ心掛は、今の婦人にも欲しいものだ。

●西洋の木履　アフリカの北岸チユニスと言ふ所の木履は其形が丁度孤の様な形で日本の木履と同じ様な造りで 巧妙な透し刻りなど施してあるトルコの木履は又之に似て居て 透し刻の代りに所きらはず美しい貝をちりばめてある。下駄自慢では此の外にスイツツルがあるスイッツルは樹木の澤山な國故從つて態々木履を穿く人が多い、形は矢張り鰐の様で爪先きに色々の彫刻がしてある。佛國とスペインの境のバツスと言ふ地方では丁度日本の細節の様な……木をえぐつて武骨な形に拵へてある山國の事とて其裏には必か三つ四つ齒の様に出てゐる又バリーなどでも裏町邊の娘や女房は多く木履をはいて居るが之は丁度獨木船の様な形で巧妙に中を抉つて有る又アラビヤのセネガールと言ふ地方で穿いて居るのに日本の皮雪駄によく似たものがあるがそれはもう靴と云ふ面影はなく日本の鼻緒の様なものが極めてゆるく大幅に組みちがひにすげてある。

女學生の贅澤

○筆墨紙費、普通の高等女學校なら筆墨紙と取立て、計算する程の額ではない、二錢の鉛筆に五錢の筆、七八錢の手帖二三册、三錢の中紙三四帖、其外何々と細く計算しても一圓には滿たない。

○交際費、一週一回或は二回の交際會は、『お樂み』の名の下に或る學校では寄宿舍一圓で、又他の校では一室の生徒打寄つて間食する事を許してある。此會費一回三錢又は五錢、又全然間食を許さない學校もある。

○もう一つ交際費中に數ふべきは郵便税で、之は普通の女學校では故郷の親、又は親友の安否を問ふ位で、十二錢乃至二十錢で濟む人もあれど中には切手代に五圓、加之も所以もない事の遣取に書翰紙封筒に贅を競ふてゐる者もある。書翰紙封筒對の一箱五六十錢から一圓といふのも珍らしくない。

○化粧費、大抵の學校は表向き白粉禁制となつて居るが、女の事故目に餘らぬ限りは隨意にさせてある。けれど一般には案外化粧品は重んぜられないで、『近頃の女學生は贅澤だ』と嘆ずる人の思ふより實際は遙に質素である。普通は三年生位迄はリボンが三月に一本の割で、櫛が一對七八十錢、髷止め三十錢、其も一組あれば澤山、其他石鹸はみがき楊枝などは僅かで濟む。

○服裝、式日の木綿の黒紋附と學校着の綿服が奨勵されて、其制を犯しては教室に入れないといふ學校と、大目に見て銘仙迄を默許してある處と、銘仙、友禪、モスリンを常服とする處とがある。袴はカシミ十二着で十圓、靴は平均一年に一足と見て五圓が普通である。

○月謝、之は何れも大差なく、最低額一圓廿錢三圓が高額で、大抵平均二圓といふ處、之に寄宿費が六圓に、舍費が五十錢乃至二圓迄、學校に依ては此外に點燈料を徵する處もある。

○此外には級費又は運動會費と言ふ名の下に五錢乃至十錢を徵收される。何か臨時の事が起る場合に一々多額の費用を親に請求せずともと考へて、大抵各女學校で學校からなり生徒が首唱してなり實行して居る。此外に書籍費が一學期一圓から高額六七圓に達する。兎に角實際學資金としては、平均寄宿生が九圓、通學生は寄宿費の代りに往復の電車代一圓三十錢乃至二圓三十五錢程を要する事になる。

○要するに女生徒一人の一ヶ月の學資金消費總額は、被服を除いて平均一ヶ月十二圓から二十圓迄である。專門の學藝を修める時には、參考書や材料などを加へて二十圓乃至三十圓にも上る。

物價騰貴と結婚難

妻の贅澤は、亭主の苦悶である。これは大阪や、東京なぞばかりの事ではない。巴里でも倫敦でも家の雜用を引き締るべき會計役の世話女房が次第に減つて、金遣ひが荒ぽく、稼人の亭主どのを面喰はせる現代式妻君が盛んに殖えるのには、社會の各部面で大分弱つてゐるらしい。先づ倫敦の事情を調て見ると、同市では年々結婚數が減りつゝあるのは事實だ。是は倫敦人が結婚するのが嫌なのかと言ふとさうではない。何處も同じく物價の騰貴と婦人の贅澤と

の爲に、妻帶しやうとしても中々出來ないのである。三四十年前までは倫敦で四百磅と言ふから四千圓の年收があれば、倫敦の場末の月給取町に、四室位の小ヂンマリした家に一家を以て少し位の贅澤は出來たのださうだが、此頃ではとても出來ない。三四十年來倫敦の物價は騰る許りで、下がることが極めて少い。第一に衣物、食物、傭賃、家賃、諸税、其の他一切の費用は益に増して、收入はその割に殖えない。さなきだに愼み深い中流の英吉利の男子が、妻帶して一家を持つことを控へるのも無理もない譯である。

それで一方婦人の方でも教育が普及して高まり來る氣位と共に贅澤品に對する眼が高くなり、家庭を持つにしても理想が無暗に高くなるので、下手に良人を持つたなら却て苦痛が増すと言ふところから、結婚することを躊躇するやうになる。男子も女子も互に結婚を躊躇し合ふ。その數が減るのも無理がない譯である。そこで結婚を躊躇し居る妙齡の倫敦婦人連は、滔々として、女子店員となつて、自分の儲けた金で勝手に贅澤をしやうとする。即ち近頃倫敦に女子店員の數が盛に殖えて、計算役、寫字役、受附、電話書記、速記者等さまぐの職業に、比較的安給でドシぐ男子店員の領分を侵略して、無數の倫敦男子をして殆ど路頭に迷はせつゝ、多々益良き聟がねを減らしつゝある次第である。

斯く言へば、さう言ふ月給取の女子と、等しく安月給の男子とが共稼ぎで結婚したらばどうかとも一寸思はれるが、それは日本では出來るが、倫敦では中々むづかしい譯がある。と言ふのは、かう言ふ種類の倫敦の婦人の殆ど總ては夫婦共稼ぎと言ふことは迚も出來ない。彼等は御化粧や、身のまはりに浮き身をやつして、出來る丈け理想に近い衣物や、髮飾や、其他の裝飾品の買入れに、多くは收入以上を費してしまつた。多少借金のないものは殆どない有樣である。だからさう月給取りの婦人を家の經濟の爲になるだらうなぞと思つて、下手に妻に迎へると、男は一生妻の贅澤の爲に大苦しみをせねばならぬ次第となる。ドチラから見ても、國が物質的に進むほど、結婚難は齎來し來るのは事實である。

食物配達會社

西洋にあるやうに、煮炊した食物を配達することは、忙しい家庭などに取つては實に便利なもので、殊に都會に於ては奮つて眞似で宜い事と思ふが、見渡す處一向にそんな眞似など爲されては居ない。こんな事は心ある人が目論見さへすれば、資本がさう澤山かゝる譯でも無し、實に譯も無く出來る事と思ふ。譬へば一つの大形の自働車を造る。夫れへは御飯を炊く釜も据ゑれば、味噌汁を煮るお鍋も据ゑる。其他何んでも鳥渡した煮炊の出來る樣な設備をする。夫れから一旦煮た物の冷めない樣に蒸氣で暖める樣な工夫もする。さうして自働車を走らせ乍らに、途々御飯も炊き、味噌汁も煮て又煮物を冷さぬ爲には蒸氣でも暖め乍らに驅けて歩く。煮炊する事と蒸氣を拵へる事とは一つの簡單な機械で同時に行れる事であるから、其樣な機械を自働車に取附けさへすれば宜いのである。

斯うして彼方此方を驅け廻つて、「ヘイ貴方の處では五人前ですか、宜しい、ヘイ五人前の御飯に味噌汁にお香物、サア〳〵温かい所を召上れ、ブー〳〵カタ〳〵〳〵と走り去る、一臺の自働車で朝飯なら朝飯一切の用意をして、大抵家々の朝飯時に餘り遲れずに廻れる位の區域を受持區域として廻つて歩くと云ふ風にでもしたら、食ふ方も三食共に何時でも暖かい物が食へて、殊に便利であらうと思ふ。お膳やお椀一切の食器も諸共貸す事にしても宜らう。後から序に取集めるも自働車なら譯も無い事である。尠くとも東京市中などにはこんな事をする會社の一つや二つはあつても宜らうと思ふのである。

第一斯う云ふ物が出來て食事時毎に市中を廻つて歩く樣にでもなければ、忙しい商人の家などで忙しい思をし乍らに炊事をするなどの必要も無くなる。殊に近頃は女中拂底で、却々思はしい炊事方などは滅多に得られるものでない。散々搜して辛と目附けて行らせて見ると、不味い物しか拵へ得ない。其癖品物は澤山使つて、一向美味しい物は出來ない。店の小僧も番頭も、朝からお副食物の小言たら〳〵。夫でも女中の給金は與るだけは充分與らればならぬ。こんな女中で月幾圓は高いと思ひ乍らも代が無いのでツイ其儘置く。店の小言は日に益々募ると云ふ樣な實に苦しい境涯を、多人數を使つて居る商店などの主人主婦は絶えず忍んで居られるのであらうが、こんな食物配達の會社でも出來れば、最早一日もそんな詰らぬ苦をして居る必要は無くなるのである。小僧も助かりや主人も助かる。實に人助けになる宜い仕事ではあるまいか。

それに斯う云ふ會社でも出來れば、味噌でも米でも、醤油でも、野菜でも、肉類でも、何でも皆澤山一時に買ふから、原價も餘程安く買へる。是が却々大きい經濟になる。それから夫を煮炊するのも大仕掛に行るから、安く出來る隨つて又夫れを配達して賣つて歩くにも安く賣れる。確かに家々一戸々々で食事の度毎煮炊をする一切の費用よりも餘程安くて出來なければならぬ。會社は出來るだけ儲を薄くして數でこなすといふ考へを持つて、出來るだけ廉價で配つて歩けば、算盤を彈いて勘定にさへ合へば、無論得意は日に月に殖えて、會社は立派に立ち行く事と思ふ。西洋には既にこんな類の食物配達車は出來て居て、盛んに都鄙を活動して居る。同じ西洋の眞似をするにも、何故こんな宜い處を眞似ないのか。眞似は眞似でも立派に國家の爲め一つの有益な改良事業である。

（宮原中將談）

千五百萬圓の贈物

米國の首府華盛頓で評判のオリバークロムウエル孃がヒラデルヒヤのエドワードステスベリー氏と目出度く結婚の式を擧げたが、此の花嫁が受けた贈物が、黄金の唸る米國にてさへ國始まつて以來と云ふ程の又となき目覺しい物であつた。

花嫁ク孃の家の殊に大きやかなる室々が、孰れも悉く贈物の山にて塞がれたる樣、筆にも言葉にも盡されず。先づ花婿のエドワード氏より贈りし有價證券だけが一千萬圓、尙花婿

の飾りし品にて目星しき物は眞珠の縄なり。之を環にして首に懸くれば、立ちても端は床に就く。されば此環を懸けやうとするには、幾度も々々手繰らればならぬ。此縄の價百萬圓。次に目星しきは恰かも胸の所よりサフアイヤの糸の上より下へ次第々々に大きくなり、最大のサフアイヤの玉は夫れ一個だけにても二十萬圓の價値がある。

花婿と共に事業を爲し居るピエルモルガン氏の贈物中にも、白金の中に數々の金剛石を鏤めたる一揃のネツクレースありて、其最大の金剛石は鷄卵の卵程もあり、此ネツクレースは八萬圓。花嫁は尙此他に數々の美はしき時計等をも贈られたが、夫等は或は腕環に嵌められ、或は又財布の中などにも嵌め込まれて居る。尙白金の櫛黄金の櫛に金剛石を始めとして、其他の樣々の寶玉を鏤めた物も數々あつて、是等と有價證券とで孃が受けた贈物は總額凡そ千五百萬圓とは驚くべきである。

然るに其結婚の儀式に至つては質素を極めたもので儀式は華盛頓の僧　正の扱であつたが、列席者は只双方の家族とピエルモルガン氏其他花婿の事業の上の友人と其家族との極く少數で、其他には一人の列席者もなく、儀式終れば二人は汽車にてフロリダに向ひ、祝宴は其列車中の應接間用の客車内にて開かれた其列車は共に花婿が私有である。

富豪の新式結婚

何事も新奇なることは米國人によつて發明される。そして又理想的の事柄も舊大陸の舊弊に拘泥する國民間には行はれない。今や米國富豪として其名世界に響くヴアンダーヴイルト家によりて、理想的結婚法なる者が發明され、而して之が實行の運びに至つた。ヴアンダーヴイルト家は今後これを一定の家憲として傳へ、子々孫々此の法式によつて目出度き結婚を執行ふとのことである。

花聟は百萬富豪ダブリユー、ケイ、ヴアンダーヴイルト氏の令息エチ、エス、ヴアンダーヴイルト氏で、次に花嫁はエレオノラ、シイアス孃である。此結婚は前記の如く理想的方式によつて行はれたもので、結婚契約の當日より三百六十五日と六時間の間試驗的に結婚し、同じ家にこそ住居せざれど、毎日同じ食堂にデンナー(正餐)を取り、同道して芝居にも遊山にも行き、又同道して外國旅行にも出かける。たゞ眞正の結婚時期に入らぬ間は、生理的の交際をしないと云ふ事だけが、世間並の結婚と違ふのである。

此の百萬富豪の令息の高い眼鏡に叶つた花嫁シイアス孃は、同じ米國ボストンに生れた歴きとした堅氣の娘である。之れが何の爲にヴアンダーヴイルト家のむつかしい選に入つたかと穿鑿して見ると、理由とする所は米國式の女らしい女と云ふにあるだけださうだ。シイアス孃は身丈は少し低い方だが、川でも海でも巧みに泳ぐから、難船した際には甚だ安心だ。それからラケツト遊びポロ遊びロンテニス等も亦上手である。それから飛行機にも巧みに乘り得るから世間の婦女子の如く新式交際におくれを取る樣なことはない。又操銃術に習熟して居るので、耶君のお伴をして山野を跋渉することも出來る。今後一ケ年の間には、いよ〳〵以てヴアンダーヴイルト氏の鑑識の違はざりしことを證明するであらうと、社交界の羨望の的になつてゐる。



風雨三十年

眞山青果

三月雪は蛙の目隱し、四月雪は木の又裂き、その三月の大雪を箱根の湯宿に見た事がある。一昨々年。相模の或る海濱に居た頃の事。

尤も二三日前から寒氣が閉ぢてゐた。或る夕方、湯上の熱つた顏を庭に細く降る雨繁吹に冷して居ると、緣側を踏む足が妙に白く見えて、一種の底冷が身肉に薄つて來る。薄濁つた海面は萎つたやうに凪いで居た。

翌朝起きて見ると、果して箱根足柄の連山は眞白に輝いて居た。然し、私共の住む足柄野の明い麥畑は淺々しく土が濡れたゝけ、海蒼く空碧く、午前の眩しい日光に薄い水氣を蒸發さしてゐた。漁村の茅屋から窺出てる冬枯の梢を折つて挿したら、そのまゝ根が土に降りさうな暖かな日。

私は友人と兩人で、湯本までは電車、そこから五里の山道を話しながら塔の澤まで行くと、里は何んでもない雪が、此所では薄く屋根に積つて、溶け落ちる點滴は雨のやうに道路に流れて居た。

塔の澤を出離れて山道に掛ると、次第に雪は深くなつた。早川の谿流に沿ふて山道を幾曲り、谷瀬を幾越かして宮の下近くなると、溶けてた雪が底から固く、

最う足首まで隠れる。午後の日は近々と向山の頂にくるめきながら、砭すやうな山氣が脊の縫目から襲ふて來た。

俗に大閣風呂と云ふ蛇骨川の落合まで來と、空は急に落ちて薄暗くなつた。森然と靜つてた谿間の樹木を搖つて、急に風が鳴つて來た。宮の下からは人の足跡さへない膝までの雪に、體を前倒りに足元へばかり氣を付けて上ると、素鳴して吹付ける山風は、肩に、袖に、帽子の廂に、見る〳〵白くなる。又雪だ。



道傍の大弓場の空家に息を入れて、そこから近道の杉林を跨つて上ると、風は益々激しく、見下す谿は眞白。時々頭の上に枝折れして、積つた雪がドサリと落ちる。息は乾く、汗は流れる。加之に、周圍はトツプリ暗くなつた。駱駝の脊の如き双子山を負ふて、半腹に御殿のやうに構へた小湧谷の温泉宿を向に見た頃には、腹の皮まで寒氣に顫へて居た。

宿には殆んど客はなかつた。頭から雪を被つた我々

が凍えながら飛込んだ時には、家中の者共は怠屈さうに帳場の爐傍を圍んで、怠けた無駄話に疲れて居た所だ。唯二人の客でも家中の人は急に勢付いて、眠つてる所を搖起された如く慌て立つた。女中は座敷へ、料理番は板前へ、番頭は挨拶に、外番は洗足湯を汲みに。暗く長い廊下は急に電燈に目を覺した。

先づ何よりも一浴。二三日來の山暴にメッキリ溫くなつた湯を出ると、部屋には煖爐が二つも持込れて、ムッとするほど溫つて居た。

翌朝も雪。私は廊下に出て外を眺めて居る所に、熱湯好きな友人は特別湯の方から、眞赤になつて出て來た。

「オイ、妙な物があるぜ。見て來給へ。」と云はれるまゝに、私は特別湯の方へ行つて見ると、湯槽の隅に一束の櫻の枝が浸してあつて、靑墨汁で太文字に「大事な花なり、男性の手を觸る可らず、八番。」と英文で書いた貼札が爲てある。地底の熱を通して湧く溫泉の微笑に誘はれてか、しほらしや固い蕾の唇がやゝ綻び掛けて居た。

「あれが不思議なのか。なんだ詰らない。」

「默つて居給へ。面白い事があるんだ。西洋館の方に唯た一人、去年の暮から居る西洋婦人があるんだ。非常な美人——然かも未婚女だぜ。」と、獨りで悦んでる。

「西洋婦人も居やうさ、それが何んだ。」

「爲やうがないな。湯槽の花、靑インク、西洋婦人、面白いぢやないか、探偵小說だ。」

私は相手にもならなかつた。何かと云ふと、詰らぬ事に好奇心を沸すのが此男の癖である。

この日は終日雪。頭を掩ふてドンヨリ曇つた灰空から止度無く降る雪に、外出は愚か、折角の眺望さへ塞がれた。厚い、重い、雪雲が四方から段々と周圍を狹めて來るやうで、長く見てると、呼吸が塞りさうだ。

私は所在なさに讀物を探す爲めに、女中を案内に西洋館の方へ案內させた。

溫い濃紅色に靑橙色を組合せて、調和よく出來た室

女（その二）

薫風號

文章と新生活

▼五月十五日發行▲菊判紙數二百四十頁 口繪寫眞版數葉入 正價廿錢 郵税二錢

東京本町 博文館

文章世界 第七卷第七號 増刊

文章は生活の表現である。生活の內容が豐富でなければ充實してゐなければ、すぐれた文章の出來べき筈がない。即ちわが文章世界は、新綠の香り滴る五月十五日の増刊に於いて、現代青年の新しき生活について、或は其の基調を說き、或は其の關鍵を探り、或は其の狀態を描き出したりしようと思ふ恐らくは是れ眞個の新生活を說破し道破し批判せる第一の書！

▲近頃讀んだ小說に就いての感想（評論）　田山花袋

昨四十四年の後半期以來の新作を讀んで。それから得て來た種々の感想をありのまゝに書いたものである。一つの立場を持てる人の一つの研究として文壇に寄與する所少からざるべきことと信ずる。

▲文章と新生活…………

生活の藝術化―實生活と思想生活―生活の表現としての新書翰―二重生活とは何ぞや―新しき文章の解剖―藝術家の生活の種々相―耽溺、惑溺、墮落生の泯滅―亢める現代の生活―疲勞の意味―積極的デカダンと消極的デカダン―其他數十項

▲誌友の新作小品十篇…………

集まつた總數三百四十二編の中から選んだ十篇の小品。綠蔭の下に讀み耽るべき誌友が苦心の佳作として記者の敢て世に推奬するもの。

▲誌友の評論數篇…………

主として現文壇の諸方面に對する誌友の忌憚なき評論いかに其の辛辣なるかを見よ。

▲誌友の短歌數十頁…………

窪田空穗氏が嚴正な批判の下に選まれた誌友の短歌を數十頁に涉つて滿載する。

▲新作小說數篇…………

水野葉舟、片上伸、窪田空穗、近松秋江、其の他諸氏、新たに苦心の作を寄せらる。

太田三郎先生著

朝霧

俗謠画集

見よ空前の珍本美裝して今出づ
古くして然も新らしき繪錦帖を

▲情思火の如き赤躶々の戀に接せんと愛する者は本書を見よ。
▲妖艶花の如き女性の匿さざる姿に觸れんとする者は本書を讀め。
▲滅びたる江戸に憧憬の情を寄する者は本書集を左右に置け。
▲古き德川文藝が新人の頭腦に如何に映じたるか錦繪の手法が洋書家に依つて如何に取扱はれたるかを知らんとする者は此書を熟視せよ

定價上下一圓
郵稅拾錢

再版

太田三郎先生著並畫

草花繪物語

○本書は著者が東西洋諸國に殘れる花の傳說を華麗なる文と清新なる繪とに依つて物語られたる花の書也平明流暢の筆に一味藹然たる溫淸を載せて描き出されし其物語の如何に痛切に現代の人のうら若き心に響き渡るか、更に其繪畫に至つては悉く苦心慘澹の作にして三色版石版凸版木版コロタイプ等現今の文明が爲し能ふ限りの技術を應用したる近世の珍書也

定價壹圓五十錢
郵稅拾貳錢

珍本

金色夜叉画譜

○見よ！空前の歡迎を受けたる金色夜叉畫譜は好評今尚盛んにして遂に出版界の倦怠と沈靜とを破りたり原著の才筆、編書の絢爛、經となり緯となり花となる此れみな苦心慘澹の作。　善美無双裝幀優美の書也

尾崎紅葉原著

太田三郎、川端龍子、名取春仙合著

定價壹圓貳十錢
郵稅十二錢

發行所　東京小石川　精美堂

東京　博文館　本町

女(たの五)

■■ 實業少年 第六巻第七號 臨時增刊 ■■

少年立志案内

五月十五日發行　寫眞口繪四頁 本文七十二頁　正價十錢 郵稅一錢

僕は商人になりたいのですが、どうしたらよいでせう

僕は工業家になりたいのですが、どうしたならばよいでせう

僕はこれから小僧に出ませうか學校に入りませうか

各人の身分、志望によつて小僧丁稚に出るならば出かた、學校へは入るならば學校の撰擇法及び學校の種類程度學資の細まで、一見瞭然、眞に立志の案内者たる名に背かず

文(その七)

(東京日本橋本町三丁目)　博文館　(振替口座 東京二四〇)

女(その八)

室は、何所も固く扉を閉して、客の姿はない。二重の硝子窓越しに降る雪は、晝ながら夕闇の如き暗さを呼んで、森々と聲なき雪音を聞かせてゐる。人氣のない長い高い廊下を噛むやうに寒く寂しくまるで、古寺の中でも歩いてゐるやうだ。虚耳か、何所か遠い所でパタリと扉を閉ぢるやうに聞えたが、それ限り何んの事もない。

私は喫煙室の書棚から勝手に古本を探て見たが、これぞと思ふ本もない。僅かにルッソウの自叙傳とゾラの小説を二三冊見付けて、その表紙など開けて見た。すると、不意に後から來て私の肩を突く者がある。

「不可ません、そんな本は。惡い〳〵本です、惡魔の本です。」

喫驚して振返ると、黒襟黄八丈の着物に、桃色縮緬の扱帶をボテ〳〵と前に結んで、亂次ない日本服の着かたの外國婦人が、目を瞋つて突立つてゐる。恐ろしいほど鼻の高い、蒼い顏の五十女である。肱を胸元に突固めて、突倒しさうに進んで來る。

「然う云ふ本は神樣が禁めてゐます。聖書をお讀みなさい。こんな本讀む、目が死ぬ。話する、口が死ぬ。不可ない〳〵。」

婦人は泣出しさうな癇高い聲して、突然私から本を引奪くつた。そして、然も穢はしさうに、牀板に投付けた。

好い鹽梅にそこへ、付添らしい切髮の老婦人が馳せて來て、切りに私に謝つてる間に、西洋婦人は睨むやうに私を見詰めて動かない。

「貴方、許してお上げなさい。この方、松山さんのお知合です。」老女は私に目配爲い〳〵然う云ふと、不思議に機嫌が直つた。嬉しさうにニコ〳〵して側へ寄つて來た。

「貴方、松山さん知つてゐる？　知つてゐる！　松山さん、今何處に居ます。上海？　香港、日本、何處です〳〵。」

私は何んだか判らないから默つて居た。尚ほも國の名所の名を擧げて詰寄つて來た西洋婦人は、遂に泣出

しさうになつた。付添の女が切りに頼むから、私は出鱈目に唯だ「上海。」と答へた。

「上海、オヽ上海。」婦人は急に頽れて笑ひ出した。

「上海！　上海！　あヽさうですか。貴方好い日本人、お待ちなさい、これ上げませう。」と面白さうに笑つて、懐にあつた塗骨の小扇を私にくれた。そして、種種の愛嬌を云つて出て行つた。

遑々の體で部屋へ逃歸つて、友達と一緒に女中を呼んで聞いて見ると、彼の婦人は一昨年頃まで横濱に女熟を開いて居たF——孃と云ふ英國人。少し精神に異狀があつて昨年の暮から滯在して居るが、別に暴燥れると云ふ事もなく、始終松山と云ふ名を呼んで居る。時にはその松山が前にでも居るやうに、獨りグド〳〵と壁に向いて話してる事もある。湯槽に浸けてある櫻枝もその松山さんに送るとて、故々一昨日の雪に切つて來たのだと云ふ。

「それに變なんですよ。」と、女中は笑ひながら、その松山さんを云ふ時に限つて、斯う頸なぞ傾げて、恥しさうな風をしますが、西洋人と思ふ所以か、何んだか氣味が惡るくなります。」と云つた。

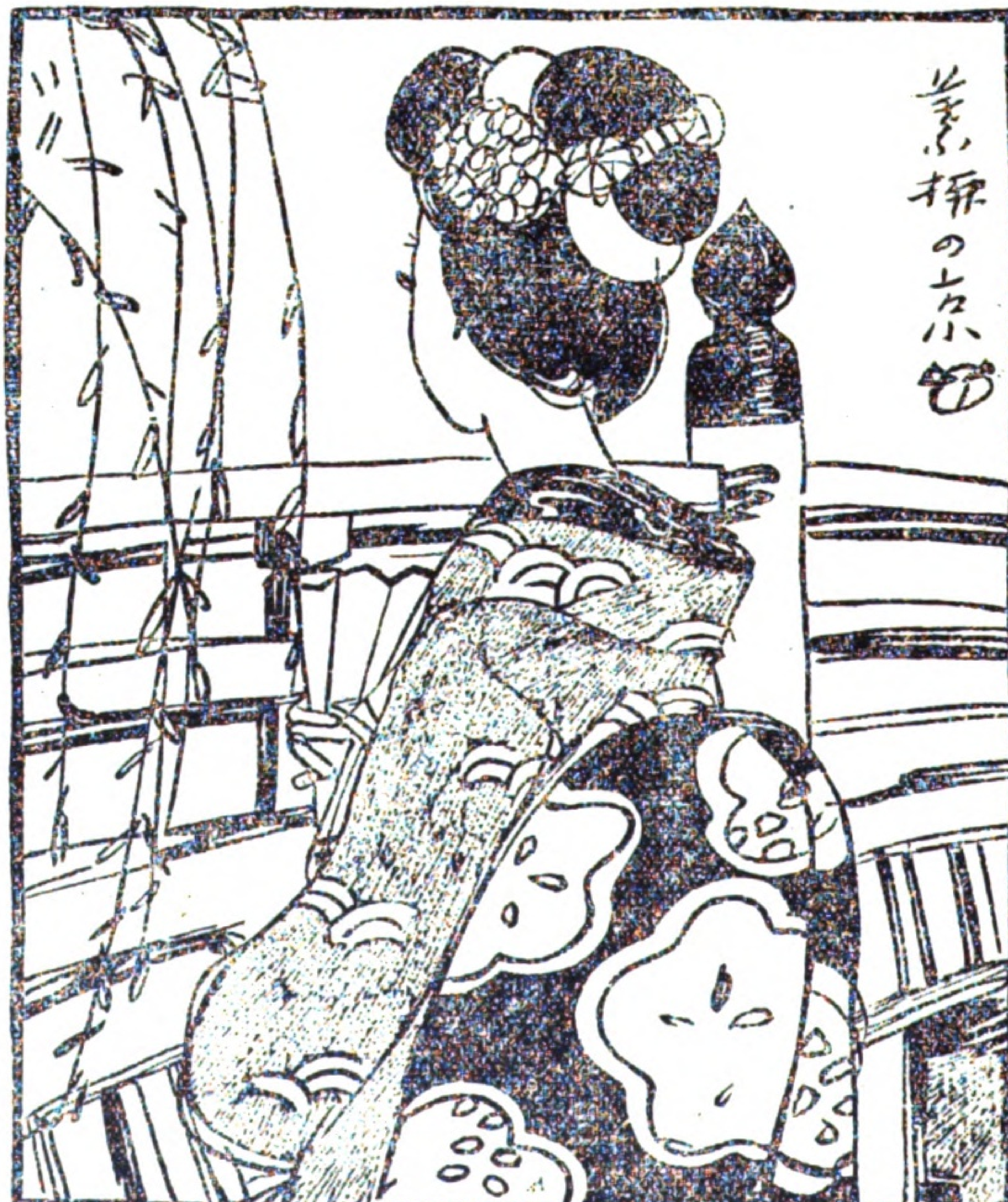
その晩である。彼の老女と廊下口に遇ふと、切りに先刻の無禮を謝した上、暇があらば遊びに來いと云ふ。餘程纏綿つた事情でもあるらしく、婦人の話を聞くと、「實にお氣の毒な方ですよ。」と涙含んで溜息を吐いた。

翌日も雪、昨日までは郵便夫が來たが、今日はそれも停つた。私どもは最うスッカリ屈托して、湯に入る元氣さへ無い。前の山々は雪煙に重く閉ぢられて、午前に少し頂を露はした限り、白濛々たる間に姿を隱した。

私は偶と思出して、八番の室に彼の外國婦人を叩扉した。其室は丁度西洋館の方でも一番山寄の靜かな室で、晝間でも梯子段に燈を點けて置くほど薄暗らい室である。時々木が裂けて頽落る雪音が聞えた。私は何がなしに北歐の小說でも讀んだ事のある、怪塔に幽囚されてゐる貴婦人の悲しい物語を思出した。

婦人は然し、不恰好な日本服ではなかつた。喪服のやうな眞黒な裾長い袴に、白レースの縁取した上着を着て、機嫌好く出迎へた。昨日とは別人のやうに目も穏和に、聲の調子も迫つては居ない。

「私の父はそれは嚴格な人でして、小説では沙翁とユーゴーしか讀ませませんでした。今の此の新教育と云ふのでも見せやうものなら、それこそ大變。どんな事を云つたでせう。まるで御國のサムライ、名譽と克己とを生命とするサムライと同じやうな人でした。私は早く母に別れて、この父の手一つに脩道院と武士教育と併せたやうな教育を受けました。父は休職海軍大佐でした。」と、話の序に斯う云ふ事を持出したのは、自分でも昨日の端ない振舞を恥入つて居るらしかつた。婦人は又寛雅な調子で、日本の文學や佛蘭西の文學に就いて種々物語た。



「お目にかけませうか、私の小さな集列。」と云つて、軈て私を次の室に導いた。旅行中でも傍を離せないと云ふだけあつて、古代日本の種々な

器具や錦繪や古錢など、隨分珍稀な物を集めて居た。夫人はそれを一つ〳〵奈良朝の檜扇とか、正倉院の御物擬造とか、天平の人形とか説明してくれた。

「そして、貴方は何時まで函根にお居でゞす。」と聞くと、婦人は寂しく俯いて笑つた。

「何時まで居りませう。私にも判りません。雪でも消えたら何所かへ行くかも知れません。」

「そして、御本國には。」

「本國にも何所にも、世界に私一人です。」

「本國が嘸ぞ戀しくお思ひでせう。」

「いゝえ。何所へ行つても同じ事。」と、胸に手を組んで部屋中を歩いて居た。五十にして獨身、本國を遠くこの極東の雪に埋められて、靜かに世の終りを待つ人を思ふと、その瘦せて高い後肩まで傷々しく見えた。流石に婦人も多少の感慨に閉ぢられた如く、窓に立つて降る雪を凝つと眺めて居た。

偶と氣が付くと、傍にある鋲打の大旅鞄から金絲に遠山櫻の縫箔した振袖やら、曙染裾模樣の目が覺めるやうな小袿や、友染模樣の艶しい長襦袢やらが溢れ出て居た。私がそれを眺めて居ると、婦人も凝つと石像のやうに突立つてそれを眺めて居た。周圍はホンノリ暗かつた。

婦人は突と一足前へ出た、瞳をその旅鞄に結び付けられたやうに一緒に据ゑて。又、一歩前に――斯うその旅鞄に魂でもあつて、引付けられるやうに。そして、見る〳〵その瞳が燃えるやうに輝いた。

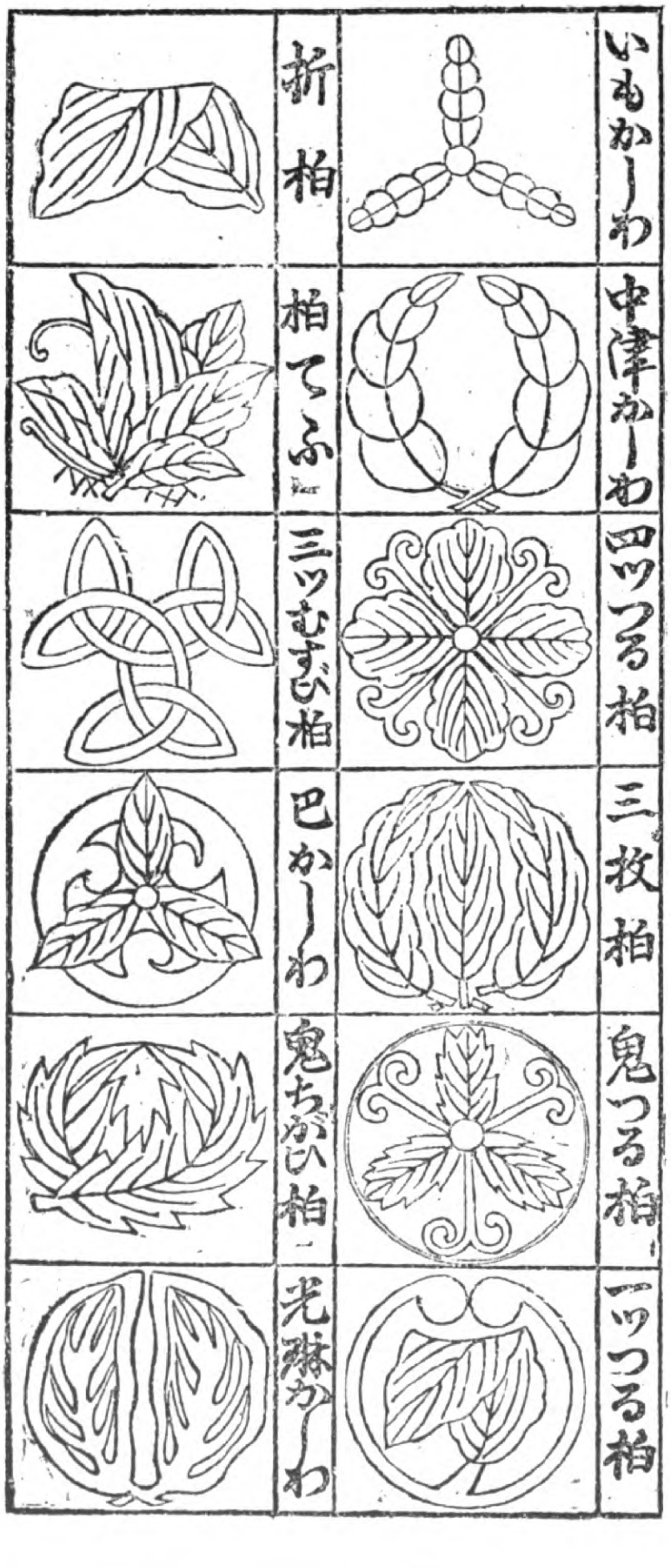
「おゝ皇國キモノ、キモノ。」と、婦人はベトリと片膝を突いた。そして矢庭にその衣服に縋りついて泣き出した。

「松山さん、おゝ松山さん。」

瘦せて血氣の無い婦人の唇から、顫へ〳〵てその名が呼ばれた。

私は此時限りF――孃に會はない。其後付添の老女が來ての話には、松山と云ふは日本海軍の若い士官で、十八の血の燃ゆるF――孃の耳に初めて戀を囁いた人である。そして、御國に歸れば必ず呼迎へて、皇國キ

柏の意匠



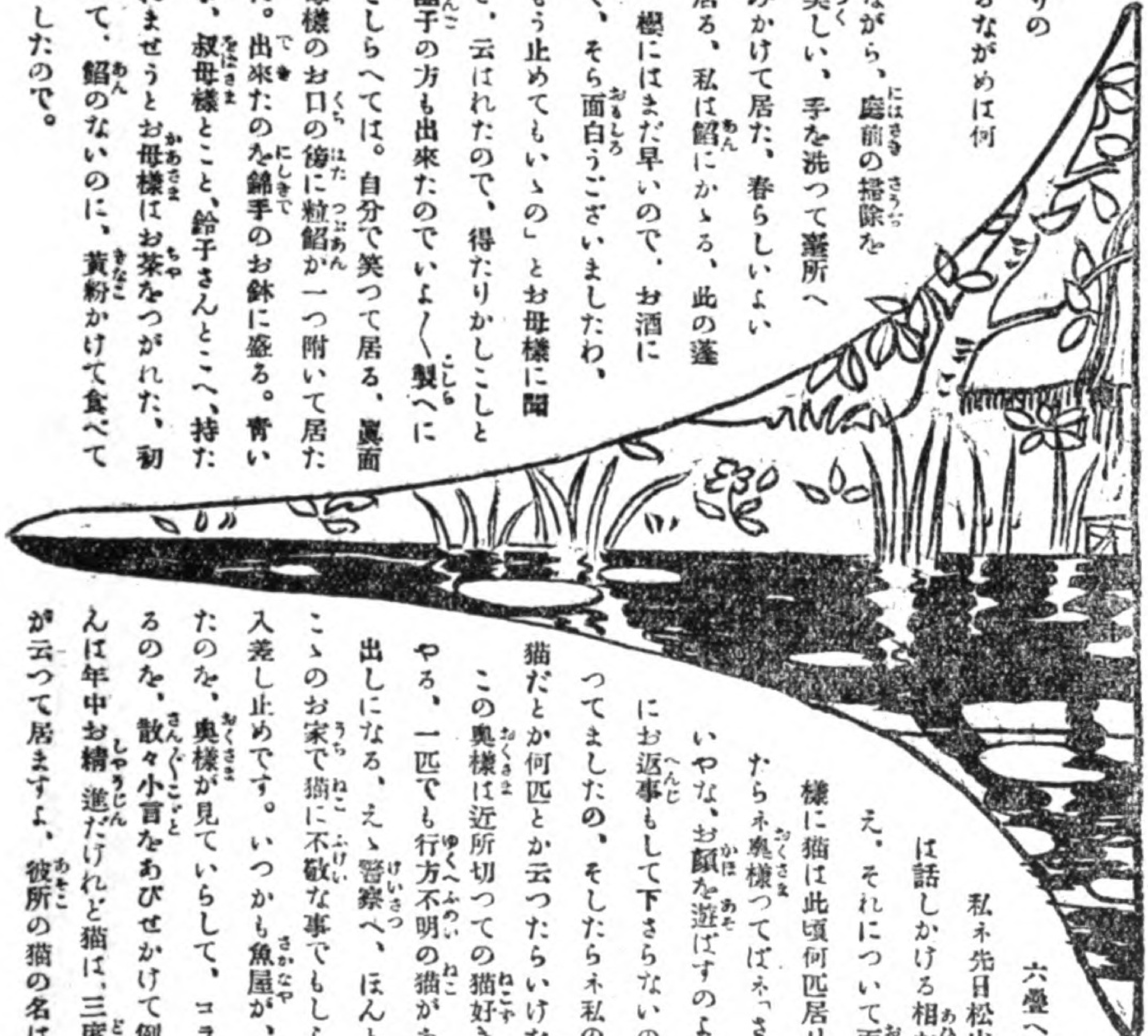
モノを着たお姫様にすると約束した人である。然し、待ちに待つた迎へは來ずに、却つてF——孃の方がその皇國に來て戀人を探す人となつた。何故と云つて、若い松山は英國に新造した軍艦畝傍の回航員であつた。そして、その畝傍は新嘉坡發航以來、今以つて消息の無い不幸な戰艦であつた。

風雨三十年。然し孃は未だ何所かに生きてゐる松山少尉を探す氣で居るのである。

▼脱線

春のうらゝの隅田川上り下りの舟人が櫂のしづくも花と散るながめは何にたとふべき。

大すきなこの歌をうたひながら、庭前の掃除をした。苔や木の色も青々と美しい。手を洗つて臺所へくると、初はもう蓬をきざみかけて居た。春らしいよい香が、臺所中にひろがつて居る。私は餡にかゝる。此の蓬は御室で摘んできましたの、櫻にはまだ早いので、お酒にうかれて居る人もなく靜かで、そら面白うございましたわ、あゝ手がだるくなつた事。「もう止めてもいゝの」とお母様に聞くと、お加減を見てごらんと、云はれたので、得たりかしこしとお皿に一ぱいとつておく。團子の方も出來たのでいよ〳〵製へにかゝる。初が不格好なのをこしらへては。自分で笑つて居る。裏面目な顔していらつしやるお母様のお口の傍に粒餡か一つ附いて居たのを私が見つけて大笑をした。出來たのを錦手のお鉢に盛る。青い上に黄粉がかゝつて美しい事。叔母様とこと、鈴子さんとこへ、持たせて上げる。まう〳〵よばれませうとお母様はお茶をつがれた。初に甘いのは、きらいだと云つて、餡のないのに、黄粉かけて食べて居る。私はおかげん見を度々したので。



鈴子さんが先刻のお禮にいらつしつた。お遊びなさい〳〵と六疊へ引張り上げた。

私ね先日松山様へ上りましたの、と鈴子さんは話しかける相かはらず澤山居ますか。

え。それについて面白い事がありますの。私先日奥様に猫は此頃何匹居りますのつて聞きましたの、そしたらね奥様つてばね「さう何匹居りますか」つて、いやないやな、お顔を遊ばすのよ、それから私がお話しても、ろくにお返事もして下さらないの、それで私宅へ歸つて、さう云つてましたの、そしたらね私の尋ね方が惡るかつたのだつて、猫だとか何匹とか云つたらいけないのですと。

この奥様は近所切つての猫好き、今一匹の猫を飼つていらつしやる。一匹でも行方不明の猫があると、血眼になつて保護願をお出しになる、えゝ警察へ、ほんとですよ。

こゝのお宅で猫に不敬な事でもしようものなら大變、すぐに、お出入差し止めです。いつかも魚屋が、猫の顔に煙草の烟りを吹きかけたのを、奥様が見ていらして、コラッと一喝、魚屋が恐れ入つて居るのを、散々小言をあびせかけて例のお差し止めとなつた。女中さんは年中お精進だけれど猫は、三度お魚ばかりだつて、いつも魚屋が云つて居ますよ、彼所の猫の名は、可笑しうございますのね と鈴

子さん。

まだ知りませんの、どんな名なの。

御自分とこで生れた猫には芳子だとか、武夫だとかつけて他家樣から來たのにはネ、三助といふ名をおつけになるのよ、オホ……、それから御飯の時には芳子さん、武夫さんがお先にお食べになつて三助は後からいたゞくのだつて、オホヽヽ、二人は大笑しました、先妻の子を皆他家へ預けて、猫を可愛がつていらつしやる奧樣だが旦那樣も、旦那樣だど松山さんの女中は云つて居ました。

▼斷念

幼き頃、淸水港より三保の松原に渡りし時、始めて船といふものに乘りぬ。櫓拍子おもしろう徐に波をわけゆく事、此上なうたのしく乘る間の僅なるを飽足らず思ひぬ。其後日淸の役の後なりしかと覺ゆ、富士艦の同港に寄泊せる時參觀して、それより海と船とを愛する心、いと深くつきそめぬ。いかなれば男と生れて海軍々人たらざりし事と、少時は常に嘆じけり。

從兄の在學中、寫眞をば甚く好みて、休暇には常に機を携へて旅行に送りつ、出づれば必ず其地方の景、人物等・十



數葉を收め得て歸りぬ。我、是をも羨ましくなりぬ。我眼、漸く山野の自然を美くしと映ずる樣になりては畫を學びたしと思ひぬ。是を職として手づさふる一管の彩毫に、飄々足の向ふ處を周遊せば、是に增りし快樂やある。寫眞は時に美景をも醜化し去る、繪には如かじと、是のみは稍眞面目に考へり。(かすみ)

▼奔馬

小孃、鈴の如き眼を張りて、孃ちやんはね、今に陸軍大將になるのよ、とてお得意なり。さう? お馬に乘れて?、怖いのよ、といへば、否孃ちやんちつともお馬怖く無いわ、お父ちやまの御葬式のとき、お馬車に乘つて嬉ちかつてよ、おゆうちやんも彼の時おもしろかつたでせう?、と我が膝にかゝりて顔をのぞきたる、振分髮ゆらゆらとらうたき限り無し、かき抱きて、彼れはねお馬車だから怖い事は無いのですけれどね、もし孃ちやんを獨でお馬の脊中に乘つけてねひんひん怒つて跳れ出したら何う?、暫らく小首傾げて考へしが、いゝわそしたら孃ちやんあッて泣いてやるわ、だとお馬が、いゝ兒好い兒つておとなしく爲つてよ、と、我は賢と思ひ付たる樣なり。

幼き時は、此世の總てが我が爲めにとて造られたる樣に思ふ、我有ると共に人の爲にも又あるを知るは、稍長じてよりの事なり。(やなぎ)

臺所の衛生

醫學博士　遠山椿吉

▲臺所の淸潔

吾々人類の生活する上に於て、不潔と云ふ事は、總てあらゆる病氣の基となるから、衛生上より申しても日常大切なる衣食住に關しては、分けても淸潔を保ち不潔に陷らぬやうにする心懸けが、大切であります。

臺所の淸潔を保つと云ふ事は、即ち消毒を嚴重にし病原となる、惡い黴菌の猛力を逞しうさせぬ事柄を申すのです。

凡そ消毒には三つの方法があります、即ち機械的の方法で消毒するのと、藥力を用ゐるのと、理學的作用によつて消毒するのと、此三つであります、機械的の方法を以つて消毒するのは、拭き掃除をする樣なものです、茶碗を綺麗に洗つて拭くのは矢張り夫れが爲めです、雜巾掛けをしたり、箒で掃いたりするのも亦夫れが爲めであります、夫れが何うして消毒法に適うかと云ふと肉眼に見えぬ處の黴菌を取除き、又は其數を減じて黴菌を希薄にするからです然れば金盥にて手を洗うのも、或は洋杯を水で洗うのも、孰れも皆附着せる黴菌を取除くための方法です、故に水が多ければ多い丈多くの黴菌を取除く事が出來て、善良なる消毒となります、藥力を用ゐて消毒すると云ふのは、黴菌の最も忌む藥であつて、之れが爲めには其生命を奪はれる處の石炭酸とか昇汞水か或は石灰の如きものを用ゐるのです、其の次ぎは理學的作用の消毒法ですが、之れと機械的消毒法とは、臺所に於て、尤も必要なる消毒法であります。

▲臺所の消毒

一體黴菌の發育繁殖の最も著しいのは、水分即ち濕氣の多い處です、故に水分濕氣を取除いて、夫れと反對に乾燥したなら之れは黴菌の爲めに最も苦痛となる處であります。けれども之れとても一樣に往かない

場合もあつて、實扶的利亞の黴菌や肺病の黴菌は却々乾燥した位で鳥渡に死ぬものでありませんから之れは別です。故に黴菌全體から云つたら乾燥は即ち理學的消毒法の一つであります。

其一例としてお噺しすれば、御承知の通り乾物屋の店を見ると、寒天とか大豆とか、乾大根とか、或は昆布とか云ふやうな色々な食品を陳列してあります、之れは何うして腐敗せずに居るかと云ふと、即ち黴菌が繁殖せぬからであります、物を保存するには腐らせぬやうにしなければならぬが、此點から考へますと、乾物屋も亦以つて經驗上より得たる一個の黴菌學者と云つても敢て差支はありますまい

斯くの如く乾燥する消毒法の外に尙冷す事と熱する事の理學的消毒法があります。

冷すと黴菌は遂に死んで仕舞ひます一般から申すと氣候の寒い時分には虎列剌、赤痢等の如き流行病の少ないのも全く是れが爲めです、此方法を應用して肉を冷し、野菜類を冷して保存しますが、臺所に於ては是れよりも尙一層適切便利なる消毒法が御座います、是れ即ち熱を加へる事で蒸したり、煮たり、燒いたりして料理する事は何人も御存じでありましやう

▲臺所は暗きを忌む

右の外尙一つ心得て置かねばならぬのは日光消毒で黴菌は非常に日光を恐れるのであります特に我邦の家庭に於ては此邊に於て缺點が御座います。

然らば、此缺點を除きて衞生的理想の臺所にするには如何なる設備をして宜いでしやうか。

第一は臺所の構造

第二は鼠入らず及戸棚の戸の改良

第三は消毒釜の設備

此三つの點が完備すれば、理想に適はうと思ひます最も臺所は狹いよりも、廣いに越したことはないが、夫れよりは構造の上に注意し充分日光の射込みて明るきやうに窓を作り、空氣の流通の宜いやうにする事

を專一としなければならぬのです。

處が我國の臺所は多くは之れと反對で薄暗くして空氣の流通が惡い、殊に從來の慣習として臺所などは何うでも宜いではないか、夫れよりは床柱でも佳くしては何うだらうと云ふやうな考へを以つて家を建築する者が多かつたのです、夫れですから臺所は薄暗く空氣の流通の惡いのが多いのも無理はありません、傳染病流行の際など斯る構造の臺所に於て滋し黴菌が繁殖しかも其撲滅に就いては如何に困難するか知れますまい、之れを撲滅するには、黴菌の最も恐れる日光の透射を良くする事が肝要です。

▲戸棚の板戸を廢せ

食物を貯藏する場所は光線が克く透さなければ黴菌の撲滅上頗る不利益である、然るに鼠入らずや戸棚の如き食物を貯藏して置く處の戸は何うであるかと云ふに、多くは板で作つてあります、之れでは鼠入らずの内部でも戸棚の内部でも全く暗くなつて仕舞ひます。

夫れ故板の戸丈は廢して是非玻璃戸に改良して貰ひたい、若し玻璃戸に出來ずば、紙張りでもよし、或は又網戸でも宜しいのです。

之れを要するに食物貯藏の場所は、光線が透つて明るくして置くのが改善の主眼であります

臺所の構造を改良して光線の透射を宜しくし、併せて空氣の流通を良くし、鼠入らずや戸棚の板戸を改良して内部を明るくし、是丈の設備が出來たなら尚一層完全なる理想的臺所とする爲めに、消毒機械を一個備付けて貰ひたい、近來臺所の改良を圖りて設備も整頓し、室内も明るくして日光も克く透射むやうな構造に出來て居るものでも、唯一つ遺憾に思ふのは、此消毒機械の設備の無い事です

折角の臺所も之れでは消毒上の缺陷を生ずる事となるのではありませんか。

▲消毒釜の必要

或る時私の宅で新年に加留多會を催しました、處が席に集つた客を見ますと、如何にも肺病患者らしい者が居ました、斯くの如き疑ひを抱いた以上は、其人の用ゐた茶碗とか、或は箸の類は、何うしても家族の者のと一緒に洗ふ事が出來ませんで、頗る危險を感じます、斯ういふ場合に臨んだとき衛生上安全の策としては其客の用ゐた茶碗とか箸の如きものは、悉く消毒しなければ再び使用に供する事は出來ません。

又嘗て來客の中に矢張り如何はしき肺病患者があつて、其人は一泊して歸りました、斯ういふ人の用ゐた食器類は勿論、寢具の附屬品――例へば枕かけ、シーツの如き類――は悉く消毒しなければ、危險で再び使用に供する事は出來ない。

扨以上の如き二つの實例に徴し、最も必要を感ずるのは、即ち消毒器の設備であります。

其他家内の者に病人が出來て、其病人が萬一傳染性の病氣であつたなら、此患者に使用せし食器類は其都度悉く消毒しなければ、傳染の憂ひなしとは申されません、斯る際に臨んでは是非消毒器の設備が必要で是がまた臺所とは密接の關係を有するのであります。

ソコで消毒器を臺所に備へ付けるには、何うしたら宜いかと云ふに、夫れは至極輕便に出來るのです。

▲消毒上有益なる飯炊釜

日本では臺所道具として、孰れの家庭にも飯炊釜の設備の無いことはありますまい、此釜には重い蓋が附いて居るので、一種特別なる高壓力を有してある、此釜の中では大抵の黴菌は死滅します、元來普通の弱い黴菌ですと攝氏六七十度の溫度に逢つては遂に生活力を奪はれるから、獨逸のコッホ氏の如き大家は、黴菌は必ずしも百度の熱を加へずとも、撲滅が出來ると云へる事を唱へられた程です。然るに釜中で物を煮る時の熱度は何の位迄昇るかと云ふに、攝氏の百度以上即ち沸騰點以上に上すことは出來ます――攝氏の百度と申せば玉子を茹て、充分に堅まる位の溫度です

——故に日本の飯炊釜の中では黴菌を撲滅する丈の温度に上し完全なる消毒をする事は出來るのであります夫れで私の希望する處は普通の飯炊釜の外に尙一つ飯炊釜を備付けて貰ひたい、爾うして一つを消毒用の釜としたいのです。

斯くの如くして消毒用の釜を備付けたならば、假令疑はしき傳染病患者の使用せし食器でも或は寢具の附屬品でも、使用の都度此釜で煑るのです、爾うすれば消毒の效は確實に奏する事が出來ます。

西洋に於てもパピン氏の發明にかゝる消毒の釜が御座いますが、其裝置を見ると、矢張り日本に於て從來使ひ慣れて居る飯炊釜の如きものでありますシテ見ると日本ではパピン氏の發明を俟たずして既に有益なる飯炊釜を使用して居つたのですから、此釜を消毒用として臺所に備へたら頗る簡易に消毒實行の效果を擧ぐる云が出來ます。

▲日本の蒸籠と米櫃

又日本に存する飯炊釜の外に、尙一つ日本固有の消毒器がある。

夫れは即ち蒸籠で、彼の餅を搗く時など糯米を蒸す蒸籠を申すのです

歐羅巴ですら消毒器の發明に苦心し遂に獨逸のコッホ氏が研究の結果製作されたのを見ると、日本の蒸籠であつたのです。斯くの如く飯炊釜と云ひ、又蒸籠と云ひ、實に有益なる道具が有るのですから、之れを巧に應用したら、充分消毒の效果を擧げる事が出來ます。

蒸籠の中で消毒する際、充分沸騰した湯の蒸氣なら凡そ三十分間にして完全なる消毒が出來るし、又一時間以內なら猛烈なる黴菌と雖も、其生活力を奪ふ事が出來る程です、而して多くの物品の內には、消毒釜で煑ては差支へるものもありましやう、爾ういふときには蒸籠を用ゐ消毒すると至極便利であります。

尙茲に臺所道具の一つとして衛生上並に經濟上より是非改良を促したいのは、米櫃であります、之れは東京でも或は田舍でも略同形に出來て居て、孰れも四

角で深さの深いのが普通であります、殊に田舍などでは一時に多量の白米を貯藏して置く處から、米櫃は却却形の大いなるものを使用する、夏などは米櫃に蟲が發生し、食物として大切なる白米が、何時か蟲の巢に變じ凝結て居て白米が蟲臭くなるなどの例は珍らしくない、肉眼に歴々わかる蟲すら發生する程ですから、他の黴菌は何れ程發育繁殖して居るか知れますまい。

夫れから東京の如きは多くは米屋から混砂米を持つて來ます、此混砂米は無砂米と違つて、多くは水分を餘計に含んで居るから、前にも述べし如く濕氣のある處には自然黴菌の發育繁殖が宜しいので、混砂米を貯藏して置く米櫃の中には黴菌の數は非常に多くなつて居ます。

▲改良の米櫃

私の友人入澤醫學博士は米櫃の製法に就きて考案し改良されました、夫れは從來の米櫃と全然趣きを異にして居ます、底の四隅が不潔に流れ易いのを防ぐ爲め、白米を底から放出するやうに製作してあります、先づ白米を入れるときは上部の蓋を開き、量りだすときは下方の漏斗狀の口から白米の出るやうになつて居ます爾うして之れを二三尺の高き處に設置けてあるが、頗る衛生的米櫃で、面白い改良法だと思ひました、處が近頃に至り入澤氏の米櫃に一層改良を加へ上部の蓋は丁番に、下方の口は漏斗狀に出來て居て、螺旋で何合でも隨意に桝目をきめて量りだす事が出來ます、之れは頗る便利な方法ですが斯くの如き改良の米櫃は大に衛生的で經濟だと思ひます。（大日本衛生會）



心機一轉の結婚

紐育のマンハッタンに、或る百貨店のコルセット部の主任をして居るエムマ、サールスと呼ぶ寡婦があつた。此の婦人は新聞に求婚廣告を出すことが道樂で、再嫁しやうと云ふ謀叛心はさら〳〵無いのであるが、態うして男を釣り出しては、ポンと肱鐵を喰はせるのが愉快で堪らないと云ふ困つた代物であつた。

流石は廣い紐育のことであるから、矢張之と趣味を同じくするものがあつて、同志者十二人で通信倶樂部と云ふを組織し、屢々會合して求婚廣告の趨向を評議し、或は互に男の艷文を披露し散々笑つたり罵つたりするのを樂みとして居た。

サールス夫人は例に依つて或る雜誌へ『美しき褐色の頭髮を有する體重百六十封度、身長五呎五吋の寡婦あり、愛嬌に富み至極快活にして歩行の姿勢正しく、身體健全にして高等の教育あり、獨身生活に飽きたれば、愛情の濃かなる人に結婚を求む』と云ふ廣告を出した。

所が巧く此の廣告に釣られた男の一人に、シーモアー、ハイネスと云ふ紐育オンタリオ西部鐵道の車掌があつた。此の男は一年前に妻を失つて孤獨の感に堪へぬ折柄だつたので、二三度繰返して之を讀んだが、特に『獨身生活に飽いた』と云ふ文句に太く心を動かされ、早速此の廣告を剪り取り、宅に歸ると直ぐサールス夫人に宛て一通の手紙を出した。夫人は此の手紙を例の倶樂部に持出し、可哀さうに男の眞心を罩めた手紙を、皆して散々に惡評し、冷笑したが、如何にも眞面目な手紙であるから、今一度嬲つて遣らうと思つて、『手紙を拜見したが書面の往復では話が出來難いから、一度紐育まで來て下さるまいか、而して直々面會して、色々御話がしたいからと云ふ意味の返書を出した。すると二日目に承知したと云ふ返書が來たが、相變らず眞面目な手紙で、『貴女のお姿は、自分の腦に深く〳〵刻まれて、終生忘れることは出來ない、また御寫眞さへも拜見しないがどんな群集の中でも貴女を名指すことが



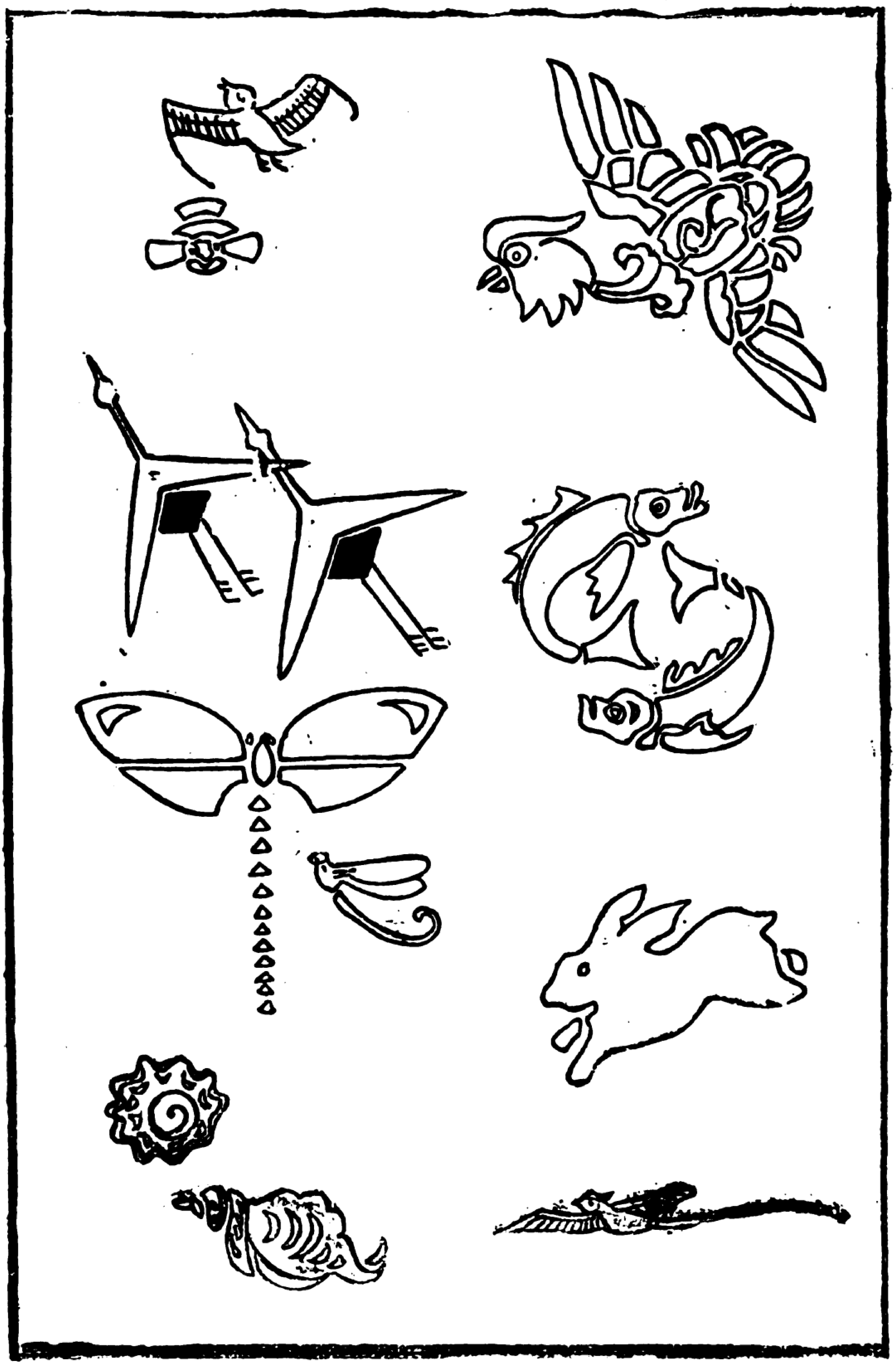
出來ます』と非常な逆上せ方であるから、夫人は益々好奇心に驅られ、『では中央停車場で何時何分著の汽車を待ち合せて居ます』と云ふ電報を打つた。

愈々其の約束の日が來たので、夫人は多數の出迎人の中に混つてプラットフォームに待つて居ると、アルバニー行急行列車が這入つて來た。此時一番に飛び降りた脊の高い肩幅の廣い、中年を少し過ぎた男があつたが、つかつかと出迎人の列を作つて並んで居る前へ歩み寄り些の躊躇もなく夫人の前に來て、『私はシーモアー、ハイネスです』と帽を取つて挨拶し、手を伸ばして握手を求めた。『私もどうやら貴方だらうと思つて居ました』と夫人も白狀した。其夕はホテルで晩餐を共にし後劇場へ出かけた。此夜の劇は頗るローマンチックのものであつたので、互の愛情に大分油を注いだと見えて、二人は屢々無意識に手を握り合つた。

芝居が果てゝ二人は閑かな珈琲店に入り、夜更くるまで語り合つたが、男は自分の經歴を包まず語り、『今の生活は荒野にでも徘徊つて居る樣に淋しいが、若し自分を愛する只一人の女があつたら、自分は如何に幸福であらうか』と赤心を語つたので、夫人も少からず心を動かされ、再會を約して其の夜は別れたが、其の次の週に二人は再び邂逅し、男の方から結婚を申込み、夫人も早速承諾して、茲に婚約は成立した。

夫人が此の事を倶樂部の同志に語ると、一同は且つは驚き、且つは羨んで、樣々に揶揄つたが、夫人は只もう嬉しい許り、何と云はれても嫣然として頓着しない。其後間もなく吉日を選んで結婚式を擧げ彼の倶樂部員一同も列式し、其の夜新夫婦は新婚旅行に出で立つた。目下は夫の住地たるパフキープスヒーで樂しい家庭を造つて居るさうである。

新案動物模樣





身體を弱くする贅澤料理の話

笹木幸子

人は朝と晝と晩と三度づゝ食事をいたします其食べたものを並べて見て今日のお献立など申します頗る簡單な樣でもあり又考へ込んで見るとむづかしいものゝ樣でもありさてそれではどんなもので御座いませうか。

味噌汁大根煮付菜びたし之も一つの献立、ビフテキのカツレツのと頂きゝれない程並べたてたのも献立。

一體人が食べるといふは生きて行くといふことで毎日身體を動かす度に失はれて行くものを補ふ爲めに取り込む方法なのです生きて居たいと思ふ人や生きて居なければならぬ人には大切なる譯で御座います生きて行かれさへすれば大根の煮付でもビフテキでも同じ事の樣でも御座いますが。

科學が發達して人のからだを粉みぢんにくだいて酸素だの水素だの窒素だのにしてしまひました、又之をつぎ合して蛋白質だの脂肪だの含水炭素だの鑛物性鹽類水などにして見ました又之を組合してもとの身體にして見てなるほどゝ感心をしても見ました其間に熱が身體を動かしてるのだといふことも分つたりおまけに其熱がいくらづゝ毎日使はれて行くなんていふ計算までたちました。

同時に人が食べて居ります野菜や肉類もやつぱり蛋白質だの脂肪だの其他のものから出來て居るといふことも見出されましたそこで魚肉類は蛋白質が重で野菜類は含水炭素が重だといふことも見出されましたそこ

で食べるといふことがなるほどかういふわけであつたかとやつと腑に落ちました。

さあさうなつて來ると大根の煮付とビフテキがどつちでもよいといふわけに行かなくなつて參ります、なせといふと大根とビフテキはちがつた方面のはたらきをするといふことが分かりましたから人が考へても動いても身體の一部が熱になつて耗つて參りますそれが何もしなくても否眠つて居てもいるのですから何とも仕方が御座いません一日に何千カロリーといふほど熱が消費してしまひますそれを補ふるには大根でもビフテキでも頂かなければなりません、其中でも一番補ひになるものを。

それで學者が保健食料といふものをさがし出しました此位食べればまづ生きて居られるといふ分量で御座います大根がいくらビフテキがいくらといふのでなく蛋白質が二十五匁餘脂肪が五匁餘、含水炭素が百十九匁餘といふ樣にかうなつて參りますと蛋白質を含んだものと含水炭素を含んだものと丁度いゝ加減にませて食べなければなりませんことになります或る人が肉類ばかり食べて一切野菜を斷つた爲めに四五十日で敗血病にかゝつたとか、それでいよ〳〵献立が必要になり又献立がむつかしい事になるので御座います。

それからまだむづかしい事が御座います前に申上げた樣な調子で行く人ばかりだと大變都合がよいので御座いますが人の中には老人だとか子供だとか頭を使ふ人やら手足ばかり動かす人やら病人と申して動かないで小言ばかりいふて居る樣ないろ〳〵の役目が御座いますそして其役目で熱の出し處がちがつて來るので御座いますからそれに相當した食べ物がうまく參りませんと身體の調子がくるつて參りますつまり献立はからだの調子をくるはさない樣にして又病氣になつてるのをなほしたりする爲にも責任があるので御座います。

例へば上流の人はあまりに御馳走を食べ過ぎて脂肪過多症、神經消化不良、便秘、循環器の病氣にかゝり易いのは運動が少なくて消耗が少ないのは養分が多過ぎるから起るので御座いますからそれには運動も必要

で御座いますがなるべくあつさりしたもので献立を作り強い嗜好品や茶カヒー酒類などは避けた献立を作つた方がよう御座いませう。

又學者や學生などはやつぱり運動が足りないで腦ばかり使ひますから消化器能が衰へて消化がわるくなりますそれ故なるべく消化のし易い滋養に富んだものが必要で御座います永く胃に停滯するものや便通をわるくする樣なものは避けて献立した方がよう御座います疲れたときのお茶やカヒーは消化を助けて元氣を回復させますから家族の人の御注意を要する處で御座いませう。



又身體をひどく使ふ人は前申した樣に熱が澤山消耗されるわけになりますから活力を增し熱を澤山出す食物が必要で御座います

それには澱粉類や砂糖分のものがいゝので御座います然かし長く勞働をつゞけ樣とするにはやつぱり肉類や脂肪やら野菜をませた献立で作つた丈夫なからだでないと工合がわるう御座います一時長時間つゞけて身體をつかふ樣な場合ならお茶やカヒーで一時の元氣をつけ甘いものを添へるなどは疲れに堪へる方法で御座いますともかく身體が丈夫で御座いますから大抵の食物なら充分消化が出來ますから割合献立が易う御座います。

そこへ參りますと老人はだん／＼體力も衰へ胃や腸も弱わり其上齒がかけたりぬけたりしてしまひますからびん／＼してる人と一緒には出來ませんなるべく軟らかな消化のよいものをしかもたゝいたり長く煮たりする樣に献立をしなければなりますまいそして弱つて居る消化器を刺戟する爲めに興奮性のものを添へることが必要でせう之は添へなくつても老人は必要上ほしくなります永年食事をしあきたと申してはをかしう御座いますが目先の變つた献立などは歡迎されませう。

之と反對に子供は消化器がまだちやんと出來あがつて居りませんからやつぱり不消化なものはだめで御座いますが此時代には盛んに大きくならうとして居るのですから筋肉やら骨やら作る樣なもので消化の易いのが必要で御座います刺戟物は唯さへ過敏な子供に大禁物、消化のよい魚類に新しい軟らかな野菜などを取あはして甘しさうに作る献立が出來たならばよい發達が得られる事で御座いませう。

病人の献立を難かしいうちの難しもいのだと此役目に當つた人が等しく感ずることで御座いませう献立と藥と看護とで病氣を追ひ出さうといふので御座いますから大抵では御座いません此場合には病氣の種類も知らなければなりませんし重い輕いも關係いたしますし年や體質も考への中に入れなければなりません其上に食慾が減じて居るので御座いますから飛びつくほどほしがる樣にと申すことを無理なまでも食べて見樣かといふ氣分だけは献立の力でしなければなりませんから。

かうあげて參りますと夏と冬とで献立がちがひませう土地の樣子でもお天氣の都合でも多少の要求はちがひませうさて／＼献立もぼんやりしては出來なくなりましたそんなめんだうな事を考へなくても生きて行かれさうでもあるし又かうなつたらさぞ工合がよい事であらうとも考へられます否其心の方が強い樣で御座います或は文明に進む人が務めなければならない責任かも知れません。



待つ人

有明ばなし

花苺

須磨の浦曲の浜枕に行平の中納言が、いなばの山の峯に生ふる松風村雨の浮名を後の世までもうたはれる程、上下の隔てなき戀は、如何るまくせものである。

されば榮譽も權利も何かあらんと、軒冕を泥土に委れ、雲の上より降つて民間の花と契つた皇族も、歐洲には珍しくない。

フエルヂナンド、カール親王殿下は、現墺國皇帝陛下の甥君として、王位の繼承者たるべき御身をもちながら數年前の夏、同國のプラキユーに於ける舞踏會に於て、端なくも見初め玉ひしは、一平民の少女バルザ、クルーザと呼ばれた美人。

戀に捕はれたるカール殿下は身も世もあらず、國中上下の大物議も空吹く風と聞流し、遂に親王の冠を投棄て一朶の花の香ひに醉ふて一の平民と降り、クルーザと結婚して、樂しき春秋を伏屋の内に送つて居る。

維納の劇場カール座の可憐なる女優レチポルヂネ、ホフマンに思ひをかけた墺國の皇族ヘンリー親王は、國王陛下の事の外なるお怒りを意とせず、民間に降つて、思ひの儘に意中のホフマンと正式の結婚を擧げられた。

墺國の皇族の中には鉄蝶の花を追ふが如くに、甘き戀の香ひを追ふ方が多いと見える。同國皇族中に錚々たるジヨン親王殿下は、今より二十餘年前に、倫敦の女優ミリー、スタヘルといふ美人の花の如き色香に迷ひ、其國法により皇族としての一切の權位を快よく擲ち其名さへジヨン、オースと改め、一平民としてスタヘルと結婚をした。

此新夫婦は夫婦手に手を取つて大陸諸國を漂浪したといふことだが、其後の消息は、何うなつたか一向に判明ない、或は非常に零落して船員となり下り、船と共に沈沒したとの噂もあり、今でも歐洲皇族間の問題になつて居る

といふことである。

獨逸の親王方にも戀の爲め平民と結婚した人がある。ルードウイツヒ親王は女優フローリエン、メンデルと結婚された。處が同親王の姉君ソフイヤ殿下も、トリン、ザエツテンバツハといふ人に懸想して、嬉しき戀を遂げた、又ババリヤのレオポルト親王女エリサベス殿下は陸軍大尉のオツト、ヴオン、シーフリーー氏と熱烈なる戀に落ちて遂に王宮を脱け出で伊太利のゼノアまで、落ち延び、同處に於て、漫遊の一平民として公式の結婚を擧げたといふことである。

露西亞のニコラス一世の皇女マリー殿下は、後にロイテンベルヒ大公の夫人となられたが、其未だ降嫁にならず、露國宮廷の花と唱はれた頃、ペテルブルクへ乘り込んで好評を博した佛國の俳優プレツサンの凛々しき風采と、卓越せる伎倆に心を動かされて、やる瀬なき戀に落ち餘所目にもそれと見受けらるゝ程心あつたが、或夜某處の晩餐會にマリー殿下も、俳優プレツサンも共に出席して其會の散ぜんとする間際に、露國の警察から一通の命狀がプレツサンの手に渡つた。披いて見るとコハ如何に即刻露國の領外に立退くべしとのことである、プレツサンには其の何の理由であるかを解し得ない、驚きの目を瞬る間もな探偵はプレツサンの手を取らぬ許りにして場外へ連れ出した。

その爲めに此王女の戀は其相手にさへも通ぜずに不成立に了つたが此事は一切秘密に葬られて、目出度ロイテンベルヒ公の夫人となられた。

ルイナポレオン親王がサルヂニヤ王の長女クロチルダ王女と結婚したといふことは頗る世間を驚かした。實際のことを言へば、封建時代の武士道を代表したサプライの王家の嫡出の長女が、まだ十六に成つたかならぬに老境に達して居る而も簒奪者の家に嫁したからである。而し其結婚の容子が全然他人の婚姻に相談にでも參與して居るかの如く餘處々々しく居られた。政略的結婚には儀式も何も要るものかと思はれたのであらう。

ダイヤモンドの戶籍帳

花筐子

婦人の髪飾り、首飾りとなり、腕をかざる指環をかざる寶石類の中でも、金剛石は特に貴重なものとされてゐるが、此の大きいのは極めて尠ないもので、價も從つて非常な高價なものである、茲に古來最も有名な世界中の逸品と稱せられてゐるものに就てその由緒來歴即ち所謂金剛石の戶籍調べをして見やう。

△オルロフリこは露帝の笏杖に鏤めてある金剛石の名で、重量は十匁六分許あつて、ローズ形に磨かれ、下面は平らで丁度鷄の卵を半分に切つたやうに見えるもので、元印度のさる寺に安置された佛像の一方の眼になつて居たのを、和蘭人が盗んで來たものであるといひ、或は波斯のナジール、シャアといふ王の寶物であつたのが、王が殺されてアルメニア商人の手に渡り、和蘭へ來たのであるといふ。兎に角此石はオルロフ伯が買取つてカテリナ女王に、銀四十五萬留と、四千留の年金と、貴族の稱號とを代物として讓渡したといふすばらしい品である。

△ブレガンザリこれは葡萄牙王の寶冠を飾つて居るもので、ブラジルで發見された重量百三匁余あるといふから、随分大きいものだが、質はさほど良くないらしい。

△ピットリ又の名はリゼント。印度マドラスの知事ピョドが廿萬圓で手に入れたもので、倫敦へ持つて來てブリリアント形に磨いたら、其の磨き代が三萬圓掛つたといふ。これはオルリーンス侯の手を經て、ルイ十五世王に百卅萬圓に賣り渡されたが、本當の代價は優に其の二倍位であらうといふことである。佛國革命の後一度伯林に入つたが、復び奈翁一世の太刀の欛に鏤められて佛國に戻つた。重量は始めは四百七十カラットあつたが、磨いた爲めに百卅六カラット四分の三（約七匁五分）になつた。其の缺屑切屑も數萬圓で賣れたと

いふ。欧洲第一等の完美なものといふので有名である。

△フロレンチン＝これは黄色の石で、ローズ形に磨かれてある。此石は元ブルガンデー大公チャールスの所有であつたが瑞士グランソン城の戦に紛失したのを、瑞士の一兵卒が拾つて、水晶の破片の積りで、酒一二杯の代價で賣つて了つた。夫からタスカニー大公の手に渡り、又轉じて今は墺太利帝室の物となつて居る。重量は七匁三分餘である。



△コヒヌール＝これは英國の寶冠装飾用で、古い歴史を持つて居る。産地は印度で、今より五千年前有名な英雄カルナの所有に係り、降つて一千五百廿六年モーガル王朝の世祖バベル王の寶物となつたのを、波斯王ナヂール、パシャの侵略に逢つて、奪ひ去られ、國王の子孫から轉々して遂に英國前女王の物になつたのである。某佛國人がモーガル王の宮殿で實見した處によると、此石は始めの重量は約四十三匁半あつたのを、下

手の磨師の手に懸つて七割減じ、英國皇室の御物となつた時は百八十六カラットになり、夫から更に磨き直して、今では僅か五匁八分許のローズ形となつてゐる。其の形及び下面の平らな工合からして、此石と露國のオルロフと、今一つミルザといふ人が、印度で、農夫が久く砥石に使つて居たといふのを手に入れたものと此三つが、以前同じ一つの大きな金剛石の破片であつたらしいといはれてゐる。コヨヌールの名は波斯王の命名で、「光明山」の義である。

△サンシー＝重さ五十三カラット半で、前は佛蘭西のルイナ四世の所有であつたが、廿萬圓で露國皇室の所有になつた、露國皇室には此の外に八十六カラットのもの、及び四十カラットの北極星と名くるものがある。

△カリナン＝近い發見の物では、カリナン、と次に示すエキセルシオルが最も有名である、カリナンの發見は　昨年で、産地は南亞殖民地の首都プレトリアで、大さは二寸七分五厘に一寸八分七五、重量百六十三匁余あり。極く薄ひ青で、殆ど無色、八個の面がある。これぞ開闢以來世界最大の金剛石で、倫敦へ船積する時、五百萬圓の保險を付けたといふことである。

△エキセルシオル＝明治廿六年の六月、同く南亞殖民地から出たもので、無色透明、長さも廣さも二寸五分で、五十三匁半許。價格は一千萬圓と呼ばれて、天下の珍寶であつたが、九個のブリリアント形に切り分けられた。

△其他の名石＝其他ボルネオ島マタンの酋長は其の島産の廿匁許もある大きなのを有つて居る。又ブラジルから産出した大物は約十四匁あつて、南の星と名づけられてゐる。又南亞のヴアール河で發見されたものは直徑約一寸で、十五匁八分あり。極て純粹の無色であつたが、磨き上げたら薄い黄色になつたといふ。

△寶石の歷史＝金剛石の歷史は甚だ古い、印度に於ては古代よりの琢磨法を知つて居たことは明な事實で、種々の裝飾に用ゐられてゐる、維新の頃、或る人が一體の佛像を古道具屋の店頭で買つたら、其の額の白毫が金剛石で、二萬圓からの價格のものであつたと

いふ、これは印度產のものに違ひない、又昔猶太國で祭司等が用ゐた胸板には、種々の寶石を鏤めたが、其中で一つは金剛石だとの說もある。其他希臘では二千二百年前からアダマスといふ非常に硬い石があると傳へられ、羅馬でも早くから裝飾品として金剛石を用ゐた證據がある。然し當時琢磨法が知られなかつたから、自然の面を外へ出して黃金に嵌入して用ひたもので、其の硬さについては、鐵鎚で打てば、鐵鎚も鐵砧も砕け飛ぶなどゝ法螺を吹き立てたものである。かやうな次第で、琢磨の困難は其價値を現すことを妨げて一四七六年に琢磨法の發見される迄はルビーやエメラルドやサファイアの方が却て高價であつた。即ち完美なるルビーはもカラット千六百圓、同じエメラルドは八百圓、金剛石は二百圓、即ち金剛石は第三位で、次がソフイア廿圓と、こんな順序になつて居たのである。猶裝飾外の金剛石の用途、即ち硝子切り、及び他の寶石彫刻用として之を用ふることは、十六世紀の中頃に知られたものらしい。

ダイアモンドといふ名の起りは、希臘語のアダマス(屈服すべからざるの義)から轉じたともいひ、佛蘭西語の磁石、アイモンと同じで、礦物といふ義であるともいふが、恐らくは印度語が本源で、日本語になつて居てギヤマンと云ふのが其れであらう。

△錢の勘定を知らぬ人▽

バーバリヤの王、ルードビックに、由來金錢の價値なるものを敎へられずして養育せられたる人なり。幼稚のときより殆んど自身には、小遣錢を用ゐたることなかりき。然るに十八歲にして大藏省は彼れに金嚢を渡せり。彼れは之を以て第一に買求めたるは母の裝飾物にして、其の代價を支拂ふに當り、財布其のまゝを寶玉商に與へて曰く、其の價する所を自由に取れと。彼れは金錢の價値の何ばかりなるかを感じたることもなければ、如何にして之が勘定を爲し得べきかをも知らざりし。

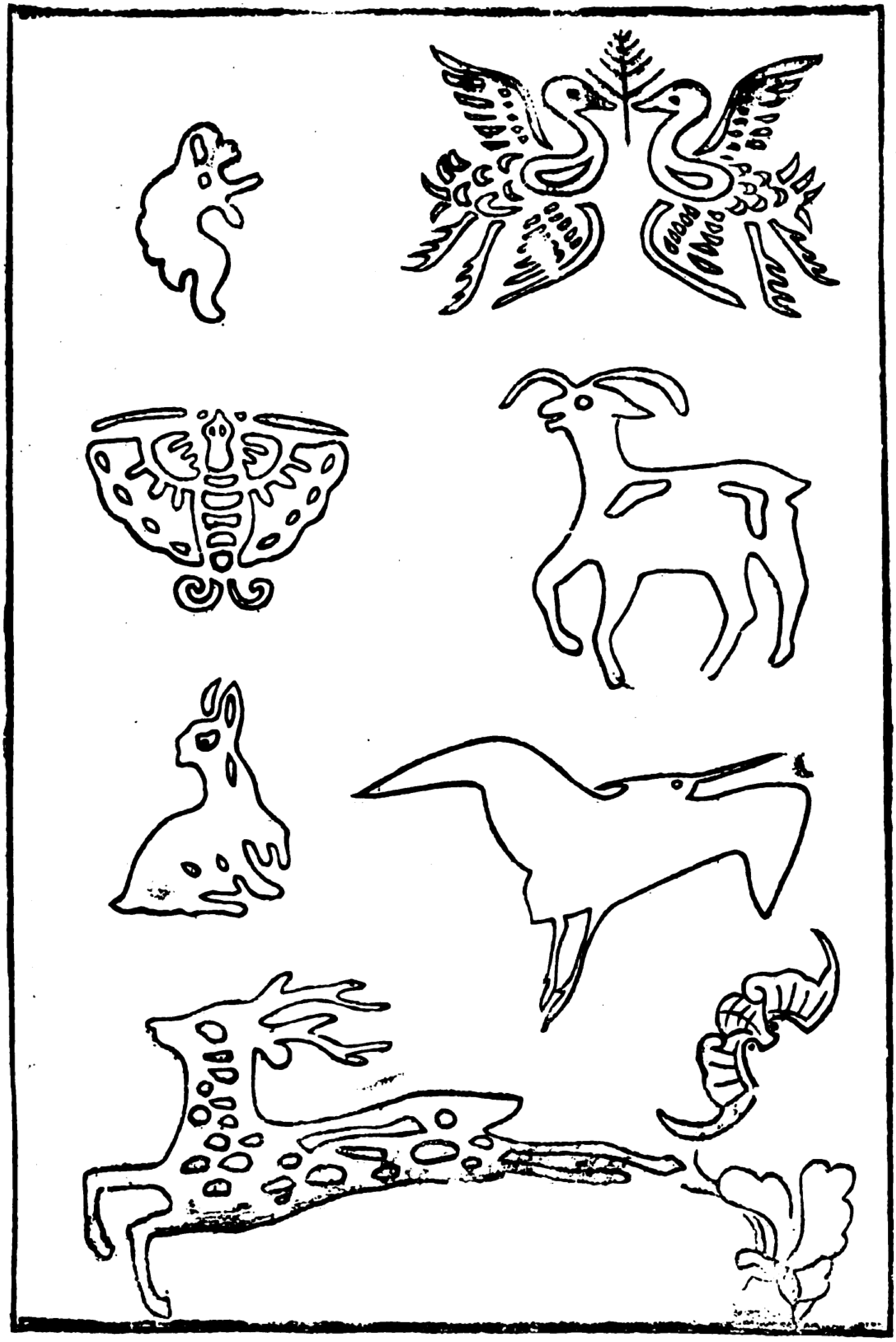
五月の總菜料理獻立（一）

日	朝	晝	夕
一日（水）	大豆摺込（かき汁）、きやらぶき	八つ頭胡麻みそ煮	比目魚ミルク燒、松露もみのり（清汁）
二日（木）	汁（きりぼし）、鯛でんぶ	赤貝、あさつき、こんにやくくろみ和へ	豚、カツレツ、百合、白煮
三日（金）	汁（うぐひすな）、わさび漬	かに味噌煮	鶏肉、玉葱、くわゐ煮込み、ふき梅和へ
四日（土）	汁（わかめ）納豆	うぐひすな、胡麻醤油	八つ頭、牛肉、パイ、かきスープ
五日（日）	パントースト、ミルク、いちご、	わらび、油揚、煮つけ	鮑、ふくら煮、空まめふくめ煮、筍あちやら
六日（月）	汁（さやいんげん）半熟玉子	里芋、筍、葛かけおろし生姜	こち煮魚付け合せ蓮根、みやうが、半片（清し汁）
七日（火）	汁（やつがしら）やたら漬	燒豆腐かのこ煮	赤貝、三つ葉、サラダ、烏賊、筍、煮つけ
八日（水）	汁（あられ豆腐）はぜ佃煮	三つ葉、蓮根、天ぷら	さわら、照り燒、山芋、青和へ
九日（木）	食パン、ミルク	とろゝこぶ落し玉子、（清汁）	豚肉、玉葱、酢みそ空まめ、茶巾しぼり
十日（金）	汁（小かぶ）海苔	烏賊、八つ頭、煮つけ	いさき鹽燒、クリームドポテトー
十一日（土）	汁（わらび）煮豆	あさつき、むきみ、ぬた	かつをさしみ、筍、うすくず
十二日（日）	米粥玉子	林檎、長芋和へ	きす、鹽燒、菊花豆腐、わかな（清汁）
十三日（月）	汁（からしな）きんぴら牛蒡	かき、豆腐くずひき	ゐの目烏賊、しぐれ卵、わさびみそ、ほうれん草おひたし
十四日（火）	汁（たけのこ）さくらんぼ鹽漬	蒟蒻でんがく	アメリカンシチュー茄子、はす、煮付け
十五日（水）	汁（やつがしら）みつばからし漬	ゆでだこおろし和へ	ひらめ、作り身に黄味酢をかける、ぜんまいうま煮

五月の總菜料理献立　(二)

日	朝	晝	夕
十六日(木)	オートミール　玉子	豚肉、馬鈴薯からし和へ	小鯵と茄子煮付け　小かぶあちやら
十七日(金)	汁（半片塞の目）　ほとゝぎす	栄螺つぼ焼き	セロリーのフライ　かまぼこ、蕪菜（清汁）
十八日(土)	汁（玉葱）　半熟玉子	きりぼしむきみ煮付け	白魚、からし和へ　莢隠元、青煮
十九日(日)	汁（にら）　蛤佃煮	さくら飯にもみ海苔佃煮	ぶり、てり焼き　しめきゆうり
二十日(月)	スープ粥　牛乳	さや隠元ごま和へ	たけのこめし、春菊　玉子とぢ（清汁）
二十一日(火)	汁（豆腐、春菊）　長ひじきから煮	蛤時雨煮	フイツシユフリツター　アスパラガスサラド
二十二日(水)	汁（結びかんぴやう）　富貴豆	糸ごんにやく、油揚　椎茸、胡麻みそ和へ	鹽ざけの作り身、橙酢、長芋、甘煮
二十三日(木)	汁（みのぼし大根）　きくらげ	車海老つけ焼　いんげん豆	いりとり（鶏、蓮根、かまぼこ、こんにやく）三つ葉おひたし
二十四日(金)	パントースト　ミルク	たゝき烏賊　ぜんまいうま煮	霜ふりがつを　空まめ塩ゆで
二十五日(土)	汁（茄子）　黒豆	半片柚子みそ和へ	牛肉、馬鈴薯、こんにやく、煮付け
廿六日(日)	汁（かきな）　米こんにやく葛煮	うのはな	ボイルドフイツシユ、ベシヤメルソース
廿七日(月)	汁（百合根）　うるか	くわゐ、さと芋、筍、うま煮	田螺木の芽和へ　いんげん青煮
廿八日(火)	ビスケツト、オムレツ、ミルク	鯉、こくしやう	空豆御飯　焼蛤
廿九日(水)	汁（夏大根）　昆布から煮	たゝき牛蒡	なよし、煮魚、金かんてり煮・鮭打みやうが玉子（清し汁）
卅日(木)	汁（あさり）　焼茄子	ぎせい豆腐	ポーク、サラダ　茶巾百合
卅一日(金)	汁（さゝがし牛蒡）　鮒甘露煮	しのだ巻すし	鰈、鹽やき　ボイルドアツプルクリームソース

新案動物模樣



△[illegible]　△山羊　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△[illegible]　△兎　△[illegible]

懸賞 月宮殿 募集

◎綠蔭榻に倚りて、若し夫れ讀書せん乎、軟風徐ろに吹來りて鬢髮を撫で、樹頭の蟬聲、榮華の夏を誦せんとす。

◎縱ひ霖雨の終日降りつくすと雖ども、迷濛たる黯雲破れて、一痕の月影天心に洗ひ出さるゝ時、萬象の淸麗は唯だ此の一點に凝りたるかと疑はる。

◎雲すでに收まり雨すでに霽る而して、涼風一陣、滿庭の樹木婆娑として動き、簷滴蛙聲尙ほ斷續す。此時に當りて俯して潦水の銀環を眺め、仰いで碧空の月輪を看れば、淸更に淸、麗更に麗、誰れか嫦娥の美しきに懸戀せざらむ。

◎花の麗、雪の淸、共に大に謳歌するに足ると雖ども、未だ月の淸麗なるには若かず。春月の朧々たる、秋月の皎々たる、共に大に謳歌するに足ると雖ども、未だ雨後の夏月には及ぶべからず。

◎今や此の淸朗、覺醒の季節に於て、新たに『月宮殿』は現はれんとす。記する所のものは天上の歡樂か、將た地上に投げられたる奇しき陰影か、抑も亦嫦娥にも似たる靑春少女の理想鄕なるか、天上の秘事、今は語るべからず。

△小說(十種)十五枚まで　△隨筆(十種)十枚まで　△日記(十種)十枚まで　△手紙(十種)五枚まで

賞金

小說(二十圓)、隨筆(十圓)、日記(十圓)、手紙(五圓)

創業二十五週年紀念増刊

女學世界 月宮殿 臨時増刊

女學世界は、本館創立二十五週年紀念として、其の紙數に於て、其の内容に於て、本誌に倍蓰せる臨時増刊を發刊せんとす。題して月宮殿と云ふ。其の如何に清く美はしく如何に涼しき爽かなる、如何に氣高く神々しく、また如何に輝きて威ある名題なるかな。

而してこの清く、美しく、涼しく、爽かに、氣高く、神々しく輝けること猶月宮の嫦娥の如きは、是れ豈婦人の理想的精神美にあらずや。

◎月宮殿の口繪は、現代各名流畫家の丹青に成り、絢爛目を奪はんとす。

◎寫眞版は鮮麗巧緻の極を盡し、渾乎として玉の如き夫人、燦爛として花の如き令孃、活けるが如く語らんと欲するの慨あり。

◎用紙は孰れも美麗にして光澤あるものを用ゐ、而かも本誌の倍數を具ふ。

◎讀物としては方今文壇馳名の大家が心血を濺げる名篇大作を始め、婦人界各方面に亘りて趣味多き記事を滿載して江湖の喝采を博せんとす。

時は子規なく梅雨の天、晴れ間すくなき五月雨のつれ〲を喞つの時なり。この際天外の好信として月宮殿の開扉あり、豈閑却して可ならんや。

一たび月宮殿を取つて繙けば、忽ちにして窈窕たる佳人に遭ひ、忽ちにして嬋娟たる麗女に接す。面白き讀物に誘はれて手卷を措くを忘れ、日長うして展觀飽かず綺語嬌言いよいよ出でゝいよ〱こまやかに感興次第に蔗境に入つて、遂に月宮に昇り、百歳にして而して歸るを忘るの思あるべし。

六月十五日發行 ◆ 口繪寫眞版其他本紙二倍

文學博士森鷗外先生序
文學博士上田敏先生序
與謝野晶子女史著
中澤弘光先生彩畫

新譯源氏物語

上卷忽五版中卷五月上旬發賣

特價 貳圓五拾錢

鳥子紙繪卷物風極彩色金文字入ギルト附頗美本上卷木版極彩色畫（自桐壺至乙女）廿一帖中卷同上（自玉鬘至夕霧）十八葉挿入

正價各冊金參圓小包料各冊拾六錢下卷六月中發行完結

紫式部の源氏物語に關する註釋類や梗概の續出は本書の現代化の要求を證據立てる然るに古典の精神をかみわけて言文一致に譯すことは西歐文學の翻譯よりも困難なる大事業である譯者は此困難を切抜けて見事に成功した而して現文壇の權威たる森上田兩先生は本書に序して我國第一の古典文學源氏物語の譯者として晶子女史が現代第一人たるを論じ其成功を激賞されたのは正に此新譯に裏書した者である・るに中澤畫伯の華麗典雅とりどりなる源氏繪卷五十四帖（奉書刷木版極彩色畫五十四葉）は內容の優美と相俟ち彷彿として平安朝の榮華を展開し平安朝の天才と明治文壇の天才と日本に唯二人の才女の合作を飾つて居る

新刊圖書要目

文學博士法學博士等諸大名家廿名家執筆合編
尊王愛国論
七拾錢

東西本願寺高田派法主題字鐵腸安藤正純新著
親鸞聖蹟
題字額面用美本壹圓五拾錢

東西本願寺法主題字敎祖傳記叢書須藤光暉著
蓮如上人
題字額面用美本壹圓五拾錢

諸大家紀行文執筆中澤弘光彩畫等百數十圖入
畿內見物
大阪の巻頗美装特價金貳圓

木下尚江著
創造
忽再版金卅錢

上田博士序晶子女史著藤島武二裝中澤弘光畫
春泥集
第五版金壹圓

女（わの一）

發兌 麴町平河町五 振替三八一七 金尾文淵堂 神田錦町二 振替二六〇 勉強堂 發賣

藤本藥學士發見

驚くべき新藥



生毛液ピローゲン

●世に流布する毛はへぐすり實に不完全なるの餘り藥學士藤本某氏數年間諸某學博士と合議の上全く生毛の實を得る現代唯一の本液ピローゲンを發見せらる、、、こんなによく生へる嬉しい餘り▲世の御婦人、紳士等の禿者へ告ぐ、凡そ毛根のあるべき部分に毛のなき方、又は▲わけ毛を止め▲薄毛を増し

●實に不思議の奇藥必ず發毛するを確信保證す各禿者より論より證據、早く御試しあれ、▲振替又は小かわせで御注文あれ

大壜	金壹圓
小壜	金六拾錢
特製	金貳圓
送費	各四錢

發賣元 東京市兩國横山町三丁目 賣藥卸問屋 玉置文治郎藥房

電浪五一〇番 電浪一五四二番 振替東京四千五百拾四番

（女學世界にて見し旨御申添下さい）

女（わの二）

醫學士 森友道君著

淘宮術と處世

要目

- 第一章 天源術と淘宮術
- 第二章 淘宮術と衛生
- 第三章 淘宮術の人性説
- 第四章 淘宮術の修養法
- 第五章 淘宮術の道德
- 第六章 淘歌と淘話
- 第七章 淘宮道德と新處世術
- 第八章 淘宮術と日本三大豪傑

全一冊菊判和裝
紙數三百三十頁
定價五拾錢
郵稅八錢

東京本町 博文館 振替口座東京二番

竹久夢二作

繪草紙版純日本式製本
木版氣分刷青磁色表紙

新刊

繪草紙 櫻さく嶋

現實の街角に行暮れて堀割を渡る爪彈に生れし國の小守唄を忍び泣く著者の涙は、紅筆に滴りて小唄となり、パレットを染めて草繪となり昔を忍ぶ江戸好み『春のかはたれ』『見知らぬ世界』は板に上りて候ひぬ。爪彈の音の悲しきを買ひたまへとて。

●春のかはたれ　定價四十五錢 送料四錢

●見知らぬ世界　定價五十錢 送料四錢

●三味線のメモ（近刊）

●日本のムスメ（近刊）

●濱のわかれ（近刊）

●紅燈夜曲（近刊）

發行所　東京麹町二丁目二番地　振替東京二〇九一四番　洛陽堂

女（わの三）

第拾五卷 第六號……五月一日發行

菊判紙數二百〇八頁 口繪石版寫眞數十頁

正價二十錢 郵稅二錢

中學世界

□英語欄 上條教授

□獨語欄 谷口教授

●人生の一大危機……法學博士 浮田和民

●經濟を志す青年に……法學博士 福田德三

●勇氣の元動力……文學博士 三宅雪嶺

●電氣爐の製品……工學博士 鴨居武

●お米が高い……農學博士 稻垣乙丙

□懸賞新題

□笑科大學

□學校評論

□運動界

□五月の花……理學博士 伊藤篤太郎

□綠蘭土橫斷旅行……理學博士 橫山又二郎

□飛行機新話……陸軍大尉 櫻井養秀

□實業青年……高商教授 坪野平太郎

□中學生競爭演說會記……河岡潮風

□銀時計を拜受せし學習院三秀才

□五月富士……伊藤銀月

□桃色のローマンス……鈴かけ太郎

□大村卿の睥睨像……兒玉花外

□轉地原稿……巖谷小波

□千曲川スケッチ……島崎藤村

□三島君と金栗君

東京本町 博文館

女(わの四)

子爵 秋元興朝閣下題序
三輪田眞佐子刀自序
琴松園文雅著

花道池坊指南

（再版出來）

菊判函入大和綴
寫眞版木版數十葉挿入頗高雅
定價金二圓
送料十一錢

花道に關する在來の書は多く花形を聚めたもので秘傳とか口傳とか云ふ最も必要な部分は示さない。故に何れも蟬の拔殼で獨習用としては更に價値のないものである。然るに本書は舊來の陋習を一掃し而も科學的に順序を追ふて一般的の智識から終に挿方の說明をされたもので獨習用として確に空前の快著である。

伯爵 松浦厚閣下題字
跡見花蹊女史題字
琴松園文雅著

諸流通用 生花飾方圖解

附投入花法

（最新刊）

菊横判大和綴頗高雅
寫眞銅版十五葉挿入定價
金八十錢
送料金八錢

女（わの五）

發兌元 東京京橋弓町四 三立社 電話京橋一八五三 振替東京九五五六

賣捌 東京堂・北隆館・至誠堂・林平・春祥堂・東海堂

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册＝毎月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に稗益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◎紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵税一册金八錢

- 第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
- 第十編 惣菜料理 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著
- 第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衞生 牧野濟子女史著
- 第十三編 教育お伽噺 木村小舟君著
- 第十四編 女德の養成 前田長太君著
- 第十五編 家屋と庭園 内山正如君著
- 第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
- 第廿編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君 松浦政泰君著
- 第廿一編 書道手引 井田秀生君著
- 第廿二編 歌の手引 大和田建樹君著
- 第廿三編 刺繡術指南 磯村大次郎君著
- 第廿四編 摘み細工指南 山田興松君著
- 第廿八編 洋樂手引 前田久八君著
- 第廿九編 兒童訓話 母の知識 木村小舟君著
- 第卅編 洋食の調理 東京治庖會講師著
- 第卅一編 衞生と衣食住 福田琴月君著
- 第卅二編 東西名婦の面影 高須梅溪君著
- 第卅三編 婚姻のかゞみ 河崎醉雨君著

東京日本橋 **發行所**

販賣用電話 本局二六二〇

女(わの六)

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 田村貞馨君朝夷孤舟君共著

第八編 **簡易治療法** 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 佐方鎭子女史著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 鹿野化骨君著

第十七編 **女子作文法** 遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著

第十八編 **子女の敎養** 棚橋絢子女史著

第廿五編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿六編 **室内裝飾法** 近藤正一君著

第廿七編 **衣服の調整** 石崎篁園君著

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

第卅六編 **日用家庭理科** 一戸清方君著

第卅七編

偉人の妻

前田雪子女史著

何れの國、何れの時代に於ても偉人として世に立てるもの多くは皆内助の功に待たざるはなし、本書は古今東西に於ける英雄豪傑の妻、大政治家の妻、大學者の妻、大敎育家の妻、大發明家の妻、大事業家の妻、大宗敎家の妻、あらゆる階級の婦人を收む、貞女あり、烈婦あり、才媛あり、閨秀あり、家庭の良婦あり、交際場裡の女王あり、糟糠の妻あり、賢夫人あり、尙附錄には偉人を惱ましめたる妻ありて、是れ亦一興を添ゆ、苟も良人を助けて世に偉業を企てしめんとするの婦人は、必ず一本を購ひ以て範を本書收むる所の偉人の妻に仰がざるべからず

第卅八編

家庭日常 公けの心得

小西眞雄君著

●公に於ける一人前の人と一人前ならぬ人(二節)●婚姻と離婚とに就ての心得(八節)●法律上の親子といふことに就ての心得(二節)●親の權利と戸主の義務に就ての心得(三節)●隱居と養子とに就ての心得(六節)●親族と家族とに就ての心得(三節)●親族會と後見とに就ての心得(七節)●養料扶助の義務に就ての心得(四節)●相續上の心得(二節)●戸籍上の手續に就ての心得(三節)●貸借に就ての心得(四節)●買物と抵當とに就ての心得(四節)●贈與と賣買とに關しての心得(五節)●法律に定められたる委託といふことに就ての心得(四節)●主人と雇人とに關しての心得(四節)●他人のものと自分のものとに就ての心得(四節)●住居及び身體の保全に就ての心得(五節)●隣同志の關係並に水と火とに就ての心得(七節)●他人の秘密といふことに就ての心得(一節)●自分の名譽信用及び業務を保全する上の心得(二節)●脅迫を受け横領された時の心得(二節)●證言を僞り虛僞の申告をしたら如何なる罰を受くべきか(二節)●親族間のものを盜み又は贓物を收受したり故買したりしたらの處分(二節)●毀棄と隱匿とに就ての心得(二節)●逮捕と監禁とに關しての心得(三節)●文書を認め又は使ふ上の心得(三節)●過つて人に傷けられ又は傷けた時の心得(二節)●訴訟する時の心得(七節)●裁判所よりの送達書類を受取る時の心得(四節)●證人に呼出されし時の心得(二節)●差押を受けし時の心得(二節)●告訴若くは告發されし時の心得(四節)私人が犯罪人を逮捕せし時の心得(三節)警官に家宅へ侵入されし時の心得(二節)●犯罪の搜査を受けし時の心得(二節)●遺失物を拾得し埋藏物を發見した時の心得(一節)●貸借に於ける利息制限の心得(三節)●登記に就ての心得(四節)●寄留に就ての心得(四節)●印紙税と登錄税とに就ての心得(五節)●郵便電信及び爲替に就ての心得(九節)●郵便貯金の心得(六節)●電話に就ての心得(八節)●税金を納むるに及ばぬ事々に就ての心得(二節)●所得税に就ての心得(三節)●徵兵に關しての心得(三節)●鐵道に關しての心得(三節)●警察に對しての心得(十二節)●冗談から駒が飛出す違警罪の心得(七節)

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座東京二四〇番

女(わの八)

家事顧問

種痘前後の注意

子供は生れてから必ず適當な時期に種痘を施す可きであるが、其の時期と健康狀態によつては種々の併發症を起し、爲めに一命を失ふやうな事も尠くない。種痘の時期は一般に生後七十五日以後と云ふ事になつて居るが、生後半年位經てから施すのが最も完全である。又時候は餘り暑い時も寒い時も惡い。春ならば三月から五月秋ならば十月か十一月頃が最も適當としてある最も注意す可きは種痘當時の健康狀態で、病氣や病後の子に種痘を施すのは極めて危險である中にも感冒、肺炎後の衰弱、耳たゞれの時などは最も注意す可きである。

種痘前には十分身體を清潔にして置く事が必要であるが尙肝要なのは種痘後の看護である。種痘を施すと云ふ事は、恐ろしい天然痘に打勝つだけの薬を身體へ注入する事であるから、種痘後の子供は非常に危險な病氣に罹つて居るものと考へて居なければならぬ。種痘を施して四日目位からは、極く安靜にして外出させぬ事、消化し易い食物を與へる事、又決して風邪に罹らぬやうに氣を付ける事である。此際若し風邪に罹ると、肺炎になり肺から轉じて腦膜炎になり、終に一命に關はる事も尠くない。七日目から發熱して、大抵は八度以上九度迄も昇るものであるから、餘り熱の昇る時は頭を冷やして腦膜炎の豫防をして置く必要がある。十二日目位には種痘の痕が漆黑になつて痂皮が落るから、其後はお湯に入ても差支ない。

然し七八日目に膿疱で來ると痒いから、擦剝いたり又は着物で擦らしたりして、其處から黴菌が這入て腕が腫上たり、膿が全身に廻たりして之亦一命にも關る事になる。膿疱だ處は大事にして擦り剝いた場合は綿でも當てゝ繃帶をして置くが好い。第二回目は法律で十一歳と規定してあるが、極く安全な法は、五歳位の折に最う一回種痘を施し、更に廿歳前後にすれば好い。第二回目からは極く輕便で腫疱まなければ七日も經ての後は何でもない。三回目からは學校へ通ひながらでも出來る。

麻疹の手當と注意

麻疹の經路は最初の十一間を潜伏期とし、此間は何の異狀すら無く普通活潑に遊び居るが、その次は前驅期と稱し三日間に初めて咽喉に赤味を帶び來り、多少の熱度加はり、眼には俗に云ふめやになど出で、何となく氣分惡しく成り、終ひに發疹期と成りて、此間四五日間疹續發し熱度四十度にも昇り、苦痛を訴ふる事甚しくなる也。此期を順當に經過すれば、漸次快方に赴き糠皮狀落屑と稱して其皮が剝落ちて、やがて全快す。扨て之が豫防は實に困難なれど發疹者は、成るべく隔離するが最上なり。

麻疹の看護法は食養法に依り、隙間風などを嫌ひ次の間位の障子を開けて間接に空を新鮮にし、室内は常に乾燥せざる樣注意し、又强度の光線を避け、窓等には赤色などの窓掛をなす等は良き事なり。病兒の身體は清潔にするは言ふ迄もなく、下着は暖めて時々取りかへ、口中を清潔にし、發熱中は流動食を與へ、熱度減りた

る後には玉子、パン、野菜、白色の魚肉等を漸次取らしむるを可とす。順當に行けば前驅期即ち發病當時より凡そ十日目頃には熱度一時に減じ氣分も輕快と成るより、小兒の事なれば早速遊びに出たがるものなれど、咳の出る間は必ず床に在らしめ、又下熱後二週間若くは三週間は學校其他公衆の場所へは出さず、麻疹にかゝりし以上は一ヶ月は學校を休校する意にて養生さすべし。

幼稚園に入れるべき子供

幼稚園に入て害のある子供は一人もありませんが、殊に入園せしむべき子供を一寸搔い摘んで申せば、幼稚園では萬事規律正しく育てますから多少病身の子なぞは自然丈夫になり、はにかむ子供はお友達より快活な刺戟を與られて知らず〳〵によくなり、よく泣く子は他の園兒の同情を失ひますから、無暗に泣なくなり、我儘な子は感化されて圭角が取ます。友達の無い子は兎角悲觀的になり易く、果は腦病患者になるものですが、入園すると他の子供に感化されてよくなります。沈み過ぎる子は、角力を取らせるか一番で、あわてる子は積木、默座、其他心を沈めるやうな遊戯を與へ、疳癪持ちの子には、教師が其の子供に充分信用を受けるやうに、務めさへすれば、段々よくなつて來ます。又亂暴な子は十中の八九大聲を揚げて泣き乍ら拗れたり威したりするものですから、其の時教師が子供の泣く聲よりも一層大きな聲を出して聲の比べツこをし、夫れからいろ〳〵な方法で矯正するのです。殊に神田の子供はお錢を遣ふ習慣が烈しいやうですが、幼稚園に在る子供は此の習慣がありません。擧げ來れば未だいろ〳〵ありますが、要するに幼稚園に入れる事は子供を完全に育て上げる上に於て最も必要な事であらうと思ひます。

子供が幼稚園に入らうとする時は何かお祭りかお芝居へでも行くつもりで喜んで來て、又古參の園兒も最初お客樣扱ひにしてよく遊んで與れますから、幼稚園といふ處は好い處だと思つて毎日喜んで參ります。けれども子供と云ふものは物に倦きる時代があつて、段々幼稚園に馴れ保護時代より獨立に移る時には、屹度倦氣を生じますが、此の時父兄に之をよく呑込んで置いて頂かないと、中途退園と云ふやうな事になります。それから子供といふものは正直なものですから、父兄は時々幼稚園へ見に來て戴いて、園での育て振りを能く心得、家庭に在ても幼稚園と同じやうに育てなければ駄目です、元來幼稚園なるものは智育よりも寧ろ體育及び德育を主眼としてゐるものですから、入園せしむべき幼稚園を選擇して、後者を實行して居る所へ入れる必要があります。(東洋幼稚園主)

豆の滋養と健康

日本にはもと豆に類した野生の物がなかつた。ずつと古く支那から移植されたものであらうと思はれる。秋に穫るのが、秋大豆夏に穫るのが夏大豆と云つて居るが。普通は大抵秋大豆を作つて居る。これは夏大豆よりも枝葉の繁茂がよく、實の量も多く取れる。種類は粒の大小、形狀の違つた上から、普通日本では目白、目黑、

白大豆、黑大豆、青豆などに分けて居る。そのうち一番用途の多いのは白大豆で、通俗に豆打ちする時の砂豆もこれだ。豆類は植物學では荳科に屬して居る。この荳科植物は外の凡べての植物と大分違つた繁殖の機能を有つて居る。外の植物は空氣中から酸素を吸收して營養分にして居るが、荳科植物は窒素を根から吸入れる。而してこの窒素は我等人間が蛋白質によりて血を養ひ筋肉を強くするが如く、植物にとりては此上もない滋養分である。

すべて米でも麥でも毎年これを作ると土地が痩せるが、豆を作ると土地が反對に肥えて、その跡へ外のものを蒔くと、見事に出來がよい。この理からして大豆を肥料代りに作る處がある。冬に麥を蒔いてその芽が五六寸も延びた頃、麥の畦に沿うて大豆を蒔く。麥の熟して刈りとつた後も大豆だけは向ふ一週間も殘して置いて十分に繁殖させ、實をとつた後、木を寸切つてその土への肥料にする。これは綠肥大豆といひ、少し暖かい和歌山田邊附近では盛んに此法をやつて居るが、熊本地方では三百年も前から豆の木を肥料にして居る。大豆は貴重なもので、普通日本では豆腐、味噌、醤油、それから今いふ肥料にもするし、煮ても炒つても食へる。人間には肉食が必要だといふのは、肉の成分に多く窒素を含み、その窒素を取る目的から來るのであるが、大豆には植物性蛋白質即ち窒素が尤も多量に含まれて居て、肉のとは少し質が違ふけれども、食うだけ人間の滋養になる。

昔の精僧、就中禪寺の坊さん達は肉食はしなかつたが、豆腐や味噌を盛んに食つて居たから、健康で長壽を保つたものだ。これは豆腐や味噌のなかにある窒素のお蔭と云つて宜しい。現今大豆を盛に作のる處はやはり支那だ。西洋には豌豆や蠶豆はあるが、大豆はない。西洋でも大豆を作れぬ事はないが、肉食が盛んだたら別に大豆を食料にする必要がないからかも知れぬ。併し近來米國の一部では、大豆の種を移入して盛んに作つて居る。殊に角豆は穀物中でも最も貴重なものである。（府立農學校長井原百介氏）

古洋服と屑羅紗の利用

家庭でやる洋服裁縫は、大變不經濟なもので、普通洋服屋が好い利益を占めて、それから賣る値段よりも遙に高くつきます。裁屑が澤山に出て時間が馬鹿らしい程かゝつて、それで餘り立派なものが出來ないのであります。

斯うして出來た裁屑ばかりで無く、他にも服地の見本とか、羅紗類の屑切とかを持合はせて、捨てるには惜しく、使用するには途無しと云ふ具合に困つてお出での方よくお見受けるが、この服地の見本帳を少の纏まつてお持合せの方は平常の座蒲團の上等が出來ます。方法は見本帳から剝いだ小切をずつと繼ぎ合せ、適當な長さのを幾本も拵へて、これを又必要な幅に繼ぎ合はせます、綿は普通ので宜しい。それから少しすのある端切ならば、繼ぎ合はせて財布を縫ひます。財布になる位の大きさならば、繼いで腹卷にすれば結構なものが出來ます。古洋服は着てゐる間は二年でも三年でも着てゐられますが一度これを解くと妙に弱いもので、三年のところを一年も着られませんから、子供服に仕立直します（大阪洋服學校長北村佳逸氏）

嬉れしいクラス會

とみ子

昨日の雨名殘なくはれて、青い空には眞綿をとばした様な雲がフハリ〳〵となびいて居る。何處の家でも傘を干したり下駄を洗つたり、共同水道はなか〳〵賑かだ。あゝ今日はうれしいクラス會！ 丁度○○町で乗換の時、川上さんと一所になつた。

『皆様いらつしやるでせうか？』

『さうれ、大勢でなくつちやつまりませんわれ、隨分お變りになつた方もあるでせうれ、私どなたへも御無沙汰してるからわからぬけれど、先日長澤さんのお話では、塩谷さんが大變粹におなりになつたんですつてれ、今日いらつしやるでせうか、さう云へばあなたちつともお變りにならないのれ。』

『まあ、さう？ あんまり呑氣だから、ます〳〵横へのびましてれ、今日もよつぽどころがつて來ようかと思ひましたのよ。』

『ホヽヽヽ。』

川上さんは相變らず大きなお聲だ。

もう皆様いらしたでせうかつて言ひながら、校門をはいるとなつかしいピアノの音が、ゆるやかな春の空氣をたゞようてくる、



かすみに香ふ遠ふ山もとの、
花より白む曙の空、れぐらを
出て行く群烏、あれなきて、
三つ四つ二つ見はてぬ夢か、
行方やいづこ…………………

…………………

我クラスのお得意の歌、去年の音樂會に三部合唱で皆を感はしてしまつたのだ…。其時の和田先生（唱歌の先生）のお喜び、今でも目に殘つて居る。

幹事のお心盡しで、床の軸も新しく、お花も立派に我々を待つて居る様にいけてある。丸髷二人に島田一人、其他日本髪四五人、あとは平凡な束髪、ローマだのウヰンナなんてハイカつたのがないのは何うしたものでせう。塩谷さんは先刻のお話し通り、つぶし島田に緋鹿子かけて、横縦縞のお召に、黑に赤の模様の御帶背中を半分ほど出してしな〳〵して居らつしやる。燕圖先生に熱中して居らつしやるから、きつとお眞似だらうとの噂。それでもあの細そりしたお身體、淺黑いお顔色、パッチリしたお目と、總てが調和して居るから見にくゝはないが、もう少し上品にれがひたいと思ふ。

暖かい日光は硝子越しに皆のリボンや簪を射て、血潮にもゆる乙女二十餘名の胸を一層あたゝめ、五十疊の間は和氣靄々

此處ばかりはお米の價段のどうなつたも御存じない人のあつまりされど〳〵互に美を競ひ華を衒ふあさましさ。

唯錢位の方を、あの方は何時も實業でと云ふが、賞めるのだかけなすのだかわからない。戊申詔書の試驗があるつて、諳誦もし其譯もすつかり覺えたのは丁度去年の今頃だつたのに。

流行の粋をあつめた方を見れば、

『まあ、あなたのお召のいゝこと、私もそれによく似たの先達てこしらへましてよ、今日着てくればよかつた、今度御一緒に行く時お揃ひにしませう、來月の研究會に行らつしやるでせう、其時着て行かなくて？』

『まうれ、私この前もこれ着て行つたのですもの、二度とも同じ着物なんかいやよ。』

ですつて。女と云ふものは、着物で生き、着物で交際するものかしら。

やがて一時と云ふ定刻よりも少しおくれて、廊下に輕い靴音皆一度に先生！と飛び出した。例のふさ〳〵したお髮、優しいお目元にこぼれさうな笑をたゝえて、

『まあ皆樣、よくいらつしやいましたね。さう中へはいつて御挨拶しませうまあ皆樣お揃ひでしばらく、お變りありませんか、あゝ遠藤さんに石橋さん、お目出度う、よくお似合ですよ』



つておつしやつたら、遠藤さんと石橋さんは掛けた手柄よりもまだ赤くなつて、袖で顏をかくしてしまつた。それから先生は、

『皆樣のお音信の中に、よく平凡な生活で何も申上る事がないとありましたが、それは誠に結構な事です、けれどこの平凡と云ふ事はなか〳〵むづかしいもので、うつかりして居ると失敗します、變事に處するには、それに對する準備があるから、めつたに失敗しませんが平凡の時を無事に過すと云ふのは容易でありません、しかし私も安心致しました、此後も絶えずその心掛を失はぬ樣に』とのお話があつて、忙しいからと席をはづされた。

それからは皆袴に靴の昔に立ちかへつた氣で陽氣に、丁度美しい小鳥が籠からはなたれて自由の天地で思ふ樣さへづる樣に氣取つたりすましたりは拔きにして、御馳走に舌つゞみ打ちながら、時のたつのも知らなかつたら、ミセス遠藤が『もう五時よ、私家にまつて居るから歸りますわ』つて言はれるので、皆笑ひながらも驚いて、惜しいけれどもまた此次にと、かたい握手かはして、つきぬ名殘をなしみつゝ、西に東に、おのがまに〳〵みかへりつ見送られつ、また見む次のまとひを心に念じつゝ、夕もやにあたり霞む母校の門前で。

さよなら〳〵御機嫌よう。



文明人と香料

◎香料の研究は、田園生活を營んで居た頃、自身庭園の梅樹百本餘りを採伐して、其の香料を採り、菊からも、枯草からも、固有の香料を採取するに苦心してゐた、その搾り取つた香料は極めて僅少ではあるが、これには外國品に得られぬ、日本特有のかをりがする。

◎此の香料を以て香水の原料として、外國に輸出するまでに盛んになつたならば、非常な國益になるだらう、併し、情けない事には、日本人ほど嗅覺の鈍い人間はない、どの香料を宛てがつても、それを十分に嗅ぎわけることが出來ない、これに反して外國人は決して感覺が鈍いことはなく、從つて多數の原料を製造して各種の香水を造つてゐる。

◎香水には芳香の如何によつて、朝晝夕夜、それ〲時に應じて用ふる香料が異ふのが普通で日本人のやうに一つの香水を朝も、晩も、郊外の散策にも、書齋の獨座にも、さては夜會などに用ふるものはない、尤も人つよつて嗜好が異ふから、どの香料が朝で、何れが晩のと定規を當てたやうに極まつては居ぬが、人により時に應じて香料の異ふのは、動かすべからざる事實である。

◎英國のプリンス、オブ、ウエールスなどは、非常に香料の愛好家で、御自分の用ひらるゝ香料は御自身で選んで用ひられた程で、其のお選みになつた香料が特に芳香馥郁として居た所から、其の名をプリンス、オブ、ウエールスと命名された程であつた、また香料にネロといふ原料があるが、是はネロ皇帝の常に愛用されたゝめに、其名を得たので、之に因つても皇帝御嗜好の程が察せられる。

◎同じ香水でも、ヴワイオレツトやローズや、其素質に因つて、心理作用に非常な影響を及ぼすもので、ヴワイオレツトは、能く聯想を起させるが、ローズは聯想を止めるやうに覺えられる、從つて香料を用ひるにも、時の必要が起つて來る、斯の如く外國では香料の取扱ひは非常に盛んで、其の研究も日本人が想像の外に在るが、我國では斯る研究もなく、また等閑に附せられて居ることも甚しい、其れ故外國輸入の香水を販賣店があてがふまゝに、ヴワイオレツトだの、ローズだの、それを研究もせず用ひて居るのは、外人に對して隨分恥かしい話である。

◎其れで私の思ふのに、昔の香合せの風を襲ふて、紳士淑女の間に香水合せの慰みが起つたら、知らず〱の間に香料の研究ともなり、併せて自分が嗜好する香料をも拵へることが出來るやうにならうと思ひます、而して愈々それが發達して晩餐會や夜會の時などに、各自が特有の香料を吹いて匂はせるやうになつたら、嘸ぞ愉快だらうと思ひます、殊に夏季などは最も妙だと思ひます。（三須氏談）



腰元かる

碧瑠璃園

（一）

今朝の朝日には、まだ錦と照つて居た紅葉が、今宵の風にはひら〳〵散つて心細く軒の雨戸に灑ぎかゝる、前のほどまで、加茂川の水を渡つて、冷たく聞えて居た隆達が唱歌も絶え、後は川千鳥ちゝと鳴いて、知恩院の鐘の聲のみ淋しく響く





四條の橋を東に越えて、川添ひ柳ゆら〳〵と風に搖ぎ、名殘もなく枯落ちて、徒らに糸を垂るゝ枝の端に、五日月の影さやかに懸る、一碧の晴空、星淡く銀河流れて、何處やらに秋の氣色を殘す中、雁一つら高く行く、見る物皆腸を斷つ種であつた、殊に人待つ身の上には、腸を寸々に切れ裂かるゝ樣であつた

繩手の片邊、風流に住みなした只ある家、冠木門に蔦老いて、山茶花の三つ五つ、苔蒸した燈籠、寂びた庭、玄關に隣る女中部屋で、四十近き婢女が、居眠りながら火桶の火を絶やさじと心付くる、襖幾重隔てた奥には、主が心遣りに彈く三味線の絃亂れて、紗の行燈に丁字の花又散つた

「お嬉、何時であらうの」

倦みに倦み、待ちに待つて、草臥を覺えた女の聲は、優しく緩く奥から聞えた

「もう子刻、丑滿近うござります」

婢女は夢心地に答へた

早や子刻…お嬉何云やる、五日月の光り、まだ窓を滑らぬに、さう遲うもあるまい、戌刻の鐘を今聞いたばかりぢやわ喃」

聞かるゝ人より、聞く人の方が確であつた、それでも話の所在なさに、用もない事話しかくるは、人待つ身に例ある事であつた

「では戌刻でござりませうかな」

「おほゝ、おほゝ」　金の鈴を振る如な笑ひ聲「此方次第で、子刻にもなり、戌刻にもなる、お嬉も氣樂でござるよ喃」

「何うござりまするやら……」　語尾は消えて、後には鼾聲が起つた

「おほゝ、おほゝ」と愈よ笑つて「お嬉又居眠り喃、お嬉の居眠り、買ふてくれる商人があれば好いを…日ごと安賣ぢや」

お嬉は遂に返答なかつた

「旦那さま、今夜も來らせられぬかな」　金の鈴は濕つて來た「談合することもあるで、今夜參ると、托言て下されたお詞、又反古にならうも知れぬ、なれどま

だ戌刻、時刻が早い、もう一段彈いて見よ、三筋の糸心あらば、私の思ひを……此の切ない思ひを……旦那樣へ傳へて呉れうに……」

三味線引き寄せて膝に載せつゝ、調子合すも物憂げに、思ひは夫から夫へと續いた



「旦那樣何處にお越しなされうぞ、若樣江戸へ御下向なされて後は、山科のお住居もそのまゝ、三條の朝翠庵に宿取て、來る日も〳〵も、撞木町、墨染さては島原、祇園の里へも繁々お通ひなさる氣ぢや、取り分けて酸漿屋の小車太夫主、強う御意に入らせと云ふ、今宵も其處の香り好い酒、旦那樣を引き止めて居るで無いか、切ては三度に一度、三夜に一夜、情事知らぬお身でも無いを、さりとては强いお心、旦那樣も旦那樣、輕がこれほど思ひ詰めてあるものを……太夫主の引き止めたまふ袖拂つて、例のお駕、垂の裾か

ら吹き入る風に、醉ひ吹かるゝは好い心地ぢやと、日頃仰せなされてあるを、さても辛氣や。今の鐘……亥刻ではないか、えゝ、えゝ」

頭かいた釵取つて、心にもなく打ち付ける、銀の平打に二巴の紋彫たが、行燈の前にばたりと落ちた

「勿體なや、御紋が穢るゝ」

拾ひかけて、心付いて、疊の目を數へて見た

「おゝ、好い數、この數目の出た時、來らせられぬ例ない、嬉しい占形、待つ甲斐ござつた」

花の眼下に笑を含んで、ちやつと釵を取り上げた、さうして定紋を戴いて、それを頰にすり付け、更に懐深く抱いて

「怨し召せ、心からぢやござりませぬ」

(二)

噂すれば影さして、表の扉をとん〳〵と訪るゝ、落葉の響でもなく、風の聲でもない、正しう殿ぢや、旦那樣ぢや、お孃は居眠り、心付かぬか、えゝ、甲斐も無い。

抱き上げた三味線をそとおろして、夢の如く起ち上がる。

年齡は十八、半年でも色町の氣に包まれたゝけ、何處やらに廓の匂ひがする、朱紺地の縮緬に、源氏車を刺繍して、それに櫻の花をあしらつた派手な染模樣、袂は成るべく短かく、燃ゆる樣な緋の名古屋帶、緋鹿子の襦袢の裾を、一歩ごとに覗かせて、座敷の緣から庭傳ひに路次へ出た、路次の兩側は疎な竹垣、月に咲いた眞萩の花、この下に鳴く松蟲鈴蟲、お輕は蕭然たる景物の間を、小股走りに驅け付けて、裡から扉をそと開けた。

氛々たる酒の香り、まづ强く鼻を撲つ、白茶紬三所紋の小袖、羽織も着ず刀も佩さず、取り亂した風俗、福草履つゝ掛けたまゝ、今にも倒れさうな身體を冠木門の柱に寄せ、門の扉の開くまで、手に持つ扇子に膝の上叩いて、自慢の弱法師、然も呂律は廻りかねた。

「お供の衆も無う、此のお姿は……」

「そと脱けて參つた、今日は例に無う醉ふて、坐にも堪らぬを、花車幇間手取り足取り、例の座敷へ伴れうとぢや、太夫參らば由々しい大事、計略の奥の手を出すところと、裏口から脱け出し、漸とこれへ忍び參つた、今にも追人かゝらうやら知れぬ、後の扉締り、誰が來やうと開けまい、醉覺しには和御寮が茶手前、そればかりを樂み參つた」

云ふ中に、よろめくを、お輕は抱く樣に扶けて

「お危うござります、入らせられませ」

「和御寮ならでは天も開けぬ、恕せ」

肩に捉つて裡に入る二つ巴の定紋彫た杉柾の扉は鎖られる。後は蔦の葉風に鳴つてはら〳〵と落つる露個

路次には落葉堆く積れて、福草履の音徐かに、元の庭傳ひ、緣から奥座敷の燈火も漏れる

「媼は」

四十三四、色淺黒く、ぶつてり肥えて、眼許に人の懷く男らしい影、脱き上げた額際、さながらに美しく、醉ひしれてはあれど、何處やらに千五百石取の面影殘つて、體軀は綿やのうに爲りつゝ、心は大磐石の重み、自然詞の端に見えた

「例の如…」と莞爾笑つて「人心地ござりませぬ」

「覺まさすまい、老人は何處やらが固頑ぢや」

とろんとした眼に、幾許見ても飽くことない女の姿を見て居たが、睡魔絕え間もなく襲ひ來りて、片手支いた肩岬が、兎もすると碎けさうに、お輕が袱紗捌きのもどかしき間、ころりと其處に橫になつた

「お風召しまする、お目を覺まさせられ、今夜といふ今夜、折入つてお尋ね申さねばならぬ事ござります」

「他ならぬ和御寮の事、何でも話す、その代り眞の一時…」

「爲りませぬ、輕の心の行くほど、とつくりお聞き申さいでは、一目もお寢かせ申しませぬ」玉の如く白き手を男の脇腹にかけながら「お目覺まさせませ」

「こりや氣强い、女心は一日見ぬ間に變るといふ、花より優しい心であつたが、何日の間に爾うは爲つた

ぞ」むく／＼起きて四邊を見る夢まだ覺めぬ目に入つたは、お輕の彈きさした三味線であつた、物も云はず取り上げて、爪彈は自作の唱歌、音色美しく室の中に滿ちて、折から沸騰る釜の松風に瑟々通ふ

（三）

「旦那様お情、此家に圍はるゝ身となつて、もう半年も經ちまする、初めて此家を貰ひ受けて、嬉しう引き越し參つたは、今年の春も近かんとする彌生の半でござりました」

お輕は懷舊の情に堪へぬが如く、將た心の底に蟠る不平の念に堪へぬが如く半云ひさして目を瞬叩く、三味線にも倦み、茶にも飽いて、床柱に寄たまゝ、男は手を叉んだまゝ無言であつた

「川添柳より繁つて、翠の色濃う見えござりました、庭の櫻吹雪と散つて、旦那の在らせられるお床の間まで、葩三片五片入つてござりました、その柳の葉も皆な散つて、その櫻の花の後に、暗う繁つた若葉さへ、やがて紅葉の末ござります、草も木も情なく世に伴るるを、輕ばかりは…あア輕ばかりは…」もどかしさうに身悶へして「他の目には鴛鴦とも見えう、他の目には蝶々の番ひ放れぬ間とも見えう、太夫主には妬まれ花車新造衆には羨まれて、まことは淋しうこゝ垣一重隔てた花の香り、反古を包む屛風の黃金より、また果敢ないは輕の身でござります」

頰を傳ふ涙幾行、怨みを罩めた眼の底は紅かつた

良雄はそれでも無言、油斷すれば閉ぎさうになる目を瞬て、釜の湯氣面白く、紗の行燈の上に昇るを見て居た

「斯う云ふては冥加無うござりませう、佛罰神罰、報ひ來る事でござりませう、なれど輕は、今の身儚無う、昔戀しうござります、二文字屋のお內儀、殊の外目を掛けて、可愛がつてもらはされた、山崎の親里では、筆一本持つことも協はぬ手に、消息往來習はせて下された、松風の音、水の響き、其他に聞いたことがない耳へ、琴三味線、取分けて隆達樣の好い咽喉も聞きまし

た、二年後には島原から突き出して、將來は傘止の位にもと、内々仰せござりました、其の矢さきを旦那お情、こゝへ畜はれる身となつた、歎びは束の間、春の泡雪見る見る間に消えて、名ばかりの夫婦、他目ばかりの鴛鴦泪は無うても池の水ほど辛氣なものござりませぬ」

「甚う醉ふた、今夜の茶は、何ぢやゝら醉を解く力も無い」　良雄は獨語のやうに云つた



「殺すものは殺し、活すものは活して、きつぱりと埓をおあけなされませ、花の一ひら、蜘蛛の巣に引き懸つて、落ちもやらず止まりも遣らぬは、心惡いものでござります」

「おやに由つて云ふ、もう暫時ぢや乃公が旅から歸る日を、情あらば待てと云ふその思ひ通じぬ喃」

「聞きませぬ〳〵」　輕は花の樣な身を搖ぶつた

「旦那のお旅は、祇園島原撞木町でござりませうもの、何日と限りのない長旅でござりませうもの」

「いや」と良雄は初めて眞面目になつた「此度は左樣でない、心願あつて伊勢大神宮へ參詣、仕儀に由らばその足で、江之島辨財天へ行かうも知れぬ、ちと長旅ちや」

お輕は可愛らしい目を、じつと良雄の顏に付けた

「長旅……長旅と仰せござりますか喃」

「短うて三月、長びけば半年、惡くすると、一年ほど掛らうも知れぬと云ふは、和御寮の知らぬ一大事の用がある」

「一大事とは、江戸からお越しなさせられる堀部安兵衞樣の云はせられる、彼の吉良殿の……」

「高う云ふまい、舊家中の者それと聞かば、例のごと詰め掛くる、それが厭煩さ、三十六計例遣る奥の手、他の目には何と見やうと、此方は知らぬ事、水戸へ參る、誰にも云ふな、心の紐は解かずも、一生伴れ添ふ身を思ひ、眞實を打ち開くる、水戸の鳥井左近といふは、お母樣お實家、歷としたお武家ちや」

良雄は四邊を憚る聲で云つた

「その鳥井樣に何の御用ござります」

「秘密と云ふはこれちや、鳥井殿お袖に縋つて、水戸樣へ仕官——驚くまい、眞實、これと云ふも和御寮いとしさ、望み協ふて知行戴く身となれば、輿輛吊らせ迎ひに參る、二男吉之進、娘お空、邪魔になるを一束家内に添へて、但馬の實家へ逐ひ遣つたも、此下心あるからちや、都では人目がある、そこへ亡君御遺恨、吉良殿を伺うの斯うのと、赤目つゝて云ひ寄る、煩厭さを避けるには、御三家の隨一水戸樣のお袖の蔭、身分立てば和御寮を迎へ、芽出度う祝言、大石殿奥方と云はせて見せる、長うて半年か一年の間、我慢して給らぬかその上で恨みも聞く、また……」と莞爾して「心の香る茶も望もうぞ」

お輕はいつの間にか美しい腮が、緋鹿子の襟の間へ埋まるほど垂頭いた

（四）

「待ちもしませう、旦那樣お心、後の世かけて渝らじとの御誓言あらせられば…」

お輕は暫時して云つた

「後の世とはさて…現世にまだ好い樂みもあらうをの」

「現世は賴みませぬ、後の世長くお情を賴みまするで、この御誓言…御誓言承はりたうござります」

「二度太刀持たぬ法もあれ、冷光院樣御位牌を土足に掛ける法もあれ、和御寮は見捨てぬ、二世かけて妻ぢや」

良雄は流石に曇りある聲であつた

「嬉しうござります、半季に餘る長の間、胸の底に蟠りあつた暗い霧晴れて、嬉しう淸い月見まする、此の灯火見詰めた眼を、此まゝ眠りたい心地暗の間を脱れて、明々地へ出たは、快いものでござります」

輕の眼元に平生の夜も、平生の朝も、乾ぬ間なく宿つて居た露は消えて、晴々と美しい匂ひ、面一ぱいに漲り渡る、彼が現世の緣を恃む心なく、未來永劫渝るまじき良雄の誓ひを聞いて、斯程までに歡喜ぶ憐れさを見ては、鐵石の心もやゝ搖ぐ、お輕の橫面に浴せて居た眼を移しつゝ

「酒を持たう、切角醉ふたが、夕陽の天を見る樣にさめて行く」

お輕はこれに答へなく、良雄の膝頭に手をかけて、溶ける如き眼に見上げ

「御出發は何日とござります」

「夫がさ、內々は伴侶もあるでさ、この伴侶の都合もあつて、明日は未明に、宿元を立たねばならぬ、斯うして居るも眞の一時ぢや」

「え、さらば…」と淚を嚥んで「明日の朝…さうとは喃」

「例も云ふ、乃公の四邊には、きら〳〵と光る眼に、執拗う擧動見る人もあるで、迂濶には致されぬ、昨日から今日へ掛けて、瑞香院へも參詣、淺野家には因緣

深い北野天滿宮へも拜をして、懇意にする家々へ、夫失暇乞ひして參つた、身はこゝにあるが、表面は出發したも同じぢや、酒を持たう、和御寮とも暫時の別れ、彼の盞に盡きぬ名殘を酌み交さう」

お輕は遂に良雄の膝の上に突伏した、紗の行燈ぼんやり照つて、絶えも入るべく泣き沈むその一息ごと、釵の端はびり／＼動き、鬢の毛の一縷にも、靈あつて動くが如く、人の心を引き付くる

「これよ、泣くものでは無いによ、酒の準備せまいか、」と良雄は垂頭いて顏を覗いて「死別れでもする事か、此の旅から歸る日、やがて二人が佳い緣の熟ふ日ぢや、すれば芽出度い、笑顏でも送る筈を、泣き顏は心得ぬ、氣に入らぬことあらば、うきが如何やうにも詫をせう、機嫌直して例の笑顏――喃、愛らしい例の笑顏、酒さへあれば下物は要らぬ、和御寮の笑顏が、太牢の滋味にも勝る、乃公の爲めには佳い下物ぢや」

片手をお輕の背にかけて、搖り動かすやうにする、それでもお輕は無言であつた、涙の絶え間もなく泣き沈むのであつた

「こりや早や……百萬騎の大敵にも恐れぬ我等も、和御寮の惡い機嫌には恐れる、酒がならずばも一度茶を所望せう、茶を可けずば、土產には何買ふて歸らうの、伊勢淺間の萬金丹、江之島の貝細工、江戸には優れて、好い櫛笄子あるさうぢや、近頃流行には、眞鼈甲に蒔繪した……いや夫よりも師宣の繪双紙、それ宜かろ、何うぢや、氣に入らぬか」

お輕は身を搖ぶつて泣き入つた

「土產の數々、乃公の胸に思案がある、包み解けば自然に和御寮の笑顏も溢れう、その代り……」と良雄は四邊を見廻した「今こゝで命ける事、必ず胸に彫み置かうぞ、胸に彫んで忘れまいぞ」

良雄の聲の改つたのを聞いてお輕は思はず顏を擡げて、泣き腫らした眼が、昨夕の雨を花に受けて、底に香を包む如き樣であつた

（五）

「餘儀ではない、我等出發の後・何者が尋ね參り、何事を訊かうとも、旦那殿は伊勢參宮留守中と答へ置け、歸りの程はと問ふものあらば、諸國の歌枕探るに由て、三月ほど後とならうと、秘す處なく答へうぞ」

良雄は抑へ付ける樣に云つた、お輕は又無言

「可い喃、我等詞和御察胸に通じた喃」



詞に力を入れて念を押す時、お輕は淋しげに笑ひかけた

「兎もあれまづ御酒の準備、明日の朝お立ちと云ふに、別れのお盃無うてはなりませぬ」

「機嫌晴れたか喃、はて……」

「待たせ〳〵、お媼が目覺めてはなりませぬ、つひ取て參りまよ」

「別れの盃酌み交しながら、後の事共語り明さう、早や始末爲」

お輕は術と臺所へ忍んで行た、今夜あたりはお越し

なされう心構へ、お顔見て慌てるは御酒の興にもあるまじく、爐を促して料理させた二種三種、幽に殘る火鉢の火に、土鍋掛けたは　主が好物の韮雜炊を、無碍に冷すまじき用心と憐れにも殊勝に見えた

蒔繪した重詰、それに主を思ふ心盡しのいろ〳〵、朱漆に流行唄の一節畫いた竹筒、それに名ばかりの良人に盡す心の香りの酒を詰め、手づから奧の間へ運び出した

良雄は脇息に片肱持たせて、扇拍子面白く小謠を唄つて居た

「お好きな物ばかり、松蕈の走りもござります、加茂川の鯉の生身にしたもござります」

何處やらに沈んで見えるを、良人には見せまじく笑を含んで、良雄の撰んだ酒の掟を黒う記した朱塗の盃をさし出した

「祇園の酒の醉は覺めて、和御寮が情の酌に醉ふ。これが暫時の別れぢや、和御寮もぽつと色さすほどに醉を見せうぞ」

良雄が一息に飲み乾して、餘瀝を切りつゝ與すを受け、片手に手酌しやうとするを

「此方へ貸さう、手づから酌ぐは興ないものぢやに‥‥」

浪々と酌ぐを兩手に持て

「これがお別れ、後の世の誓約、二つの心をお盃の底に籠めて、嬉しう快う、二世かけて戴きする」

次には例の涙頰にさし含み來るを、息もつかず酒と共に飲み乾して

「恐れながら此のお盃‥‥」

「うきが受けう、いざ」

うきは良雄が廓に於ける隱し名であつた

「お慮外とござります、なれど此に輕が一生の心籠めてござります」

「その心も共に飮まう、取り別けて佳い香りぢや」

餘瀝も殘さず飮み乾したが、盃を膳の端に置く間もなく横へ倒れて「他愛なや〳〵、うきとも呼ばるゝ剛の者が、さて他愛も無う醉ひつる」

こゝりと其處に肱枕、祇園の酒の醉も出る、此頃からの辛勞、張り詰めた心も緩んで、語尾の消ゆる下から、雷の如き鼾は聞こえた

お輕はその寢姿をつく〲見た、拂へども〲落ち來る涙に、しと〻襟を濕したが、やがて立つて納戸から搔卷を取り出して、上よりそつと着せかけた

外には秋風蕭々と鳴つて、落葉の音骨に滲みる響き、內には燈火幽に照つて、丁字の花の自ら落つる聲、お輕は再び良雄の寢姿を視入るのであつたが、暫時して涙を拂つて、思ひ切つた樣に居間へ入つた

居間には火の氣絶えて、寒燈水の如く、褥も、文庫も冷え切つて居た

（六）

夜は次第に更け、月はもう西の山に沈み果て、夜の松蟲時を得て鳴き盛る時、夜半の寒さは冷々と身に逼つた

良雄はぞつと身に滲みる寒さを感じて、思はずも眼を覺ます、その耳許に、或る何事かを告げる如に、鏘鏘として落ち來るは、知恩院の丑滿の鐘であつた

「思はずも寢過いた、輕は何としたらう」

頭を擡げて、四邊を見たが影も無い、むく〲と起き上つて、釜に手を當て〻見ると、何日の間にか爐の火も消え、生溫い湯氣が、淡う蓋を漏れて居た

「輕、輕」　呼んで見たが答へをせぬ「輕も醉ふて寢たと見ゆる、例の居間が、潮田、近松、早水、菅谷、三村次郎左衞門も參り合ふて、我等歸宿を待ちあらう、悠々としてはあられぬ、今一度輕に逢ふて、發足後の心得、何かと申し付け置かうよ」

手燭點して、勝手知つたお輕の居間の襖の外から

「輕よ、乃公は早や歸るによ、嫗起すも心無い、後の戶締り、嚴重にして置かうぞ」

幾度呼んでも返事なかつた、今までに無い不覺、さて心得ぬと、異みながら間の襖を引き開くる

手に持つ手燭の焔を煽つて、一道の腥氣、簇り出る流石の良雄も驚いて一歩退つた

「輕、輕」再び三たび呼びかけて、不審げに裡に入る

一穂の寒燈、瞬きする下に、お輕は白綸子の小袖を、朱に染めて、俯伏になつて居た、よく〳〵覺悟したらしく、髪の毛一筋亂さず、兩脚を堅く括つて、良雄から貰つた短刀の鋩白く、咽喉から後頸へ貫いたまゝ

「輕、輕」と消魂しく、「和御寮はさて‥‥此の爲體──」

呼べども答へず、九原遠く魂去る、四邊は一面の血汐

床の間に一通の遺書、良雄は手早く披き見る

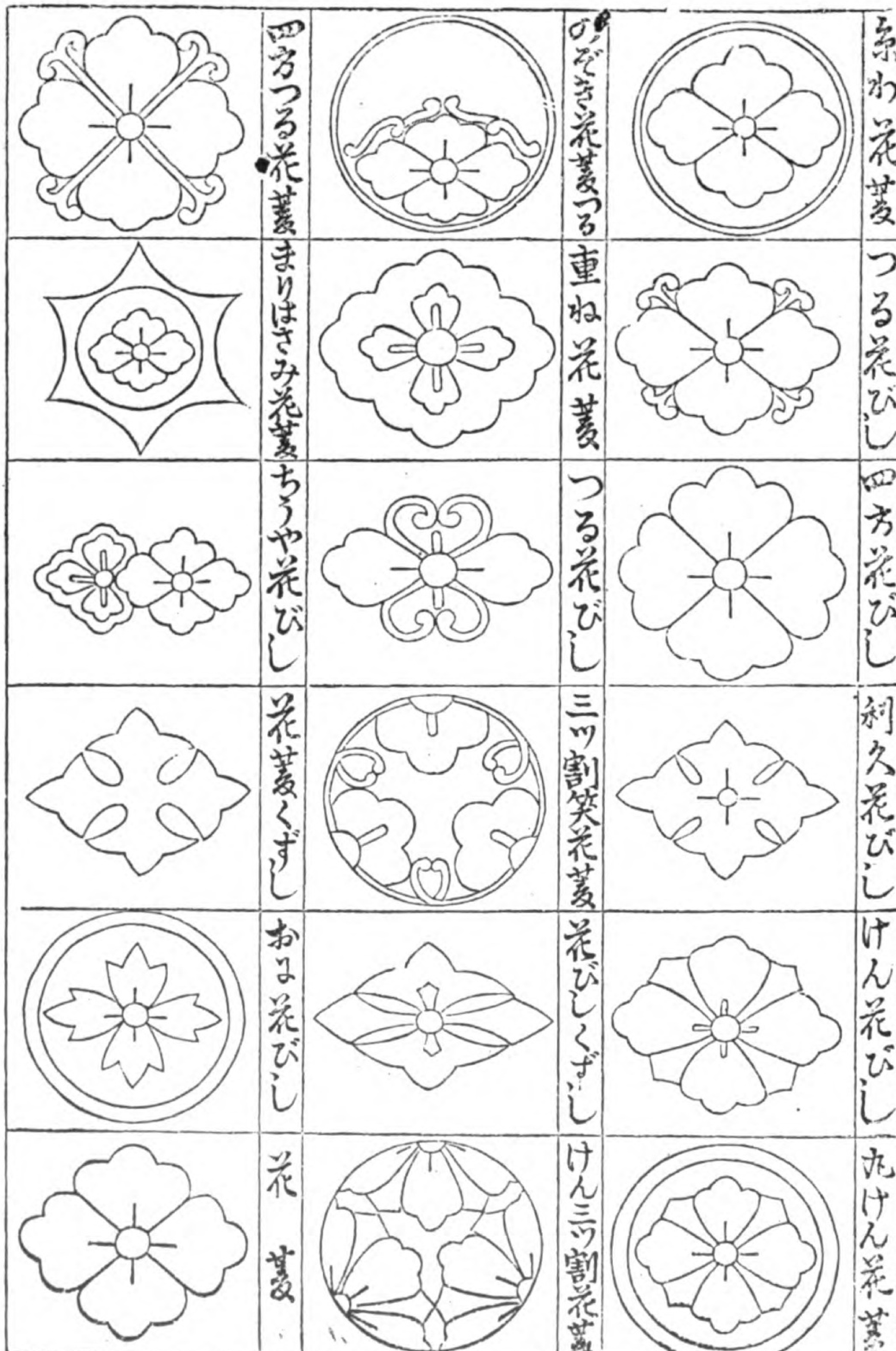
一筆書き殘しまゐらせ候旦那樣明日の御發足再び御歸洛協ふまじき退きお伊勢樣と恐れながら察しまゐらせ候旦那樣に御別れ申し上げて片時生き殘る心おはしまさず殊に此の口、心弱き此の口持ちて淋しく御當家を留守居せんは我ながら石を抱いて深き淵にのぞむ心地怖しく旦那樣御本心をそれと御推察申上げ、此胸に刄を當てゝ一足お前へ旅立ちまゐらせ候今夜のお盃今夜のお約束冥途に御入らせを待ちぞらする身はこの外に申し殘すこともおはしまさずあら〳〵芽出度かしく

良雄の目は涙の中に漂ふた、繰り返し讀む文の端は、その涙で重うなつた

良雄はお輕をこゝに畜ふて、本心を掩ふ雲とした、大志を抱いて江戸へ出發した後の跡を晦ます材を作り置かうとした、然もその雲は天に歸した、その材は灰となつた

野にも美しき花は咲く、お輕は百姓の娘であつて、その魂は武士であつた

花菱の意匠


糸わ花菱
ひのぞき花菱つる
四方つる花菱
つる花びし
重ね花菱
まりはさみ花菱
四方花びし
つる花びし
ちうや花びし
利久花びし
三ツ割笑花菱
花菱くずし
けん花びし
花びしくずし
おま花びし
丸けん花菱
けん三ツ割花菱
花菱



一等

すみれ野はほの〴〵明けて朝月の影にこぼるゝ紫の露　京都 大前たかし

評　纖麗の極なり、再誦油然として一種の情味胸に溢る。

二等

青沼に夕べの蛙くゝと鳴く靜けきころの薄月の色　赤坂 さくら姫

評　天にうす月あり、地に青沼あり、幽靜の情限りなきに、蛙の高くも鳴かず唯だくゝと口ごもり鳴く、あゝ何等の景致ぞ。

たんぽゝの莖を摘まめばたゞ悲し白き乳出でぬ母なし乙女　下谷 中澤とく子

評　母なし乙女の一句に至りて、一首の歌も忽ち躍動す、至情の歌なり、悲哀の歌なり。

三等

春雨の布留の小川のさゝにごり夕暮れしぬにあひる兒の鳴く　前橋 水仙子

評　古語、古調を用ひてよく田園の風景を描寫したり。

ほとゝぎす一聲啼きぬ病癒えて湯の山下るあけがたの空　淺草 遠野塔子

評　病氣快癒に際して杜鵑の聲を聽く、これも一種の取材なるべし。

からたちの白く小さき花ぬらす春の夕べの小雨わびしや　門司 安藤君子

評　よくある景色なり、俳趣味な和歌に詠じたる、面白し。

秀逸

美しき使命もたらしキユピッドは誰が胸に射る櫻ちる宵　小石川 佐久間千代子

評　櫻ちる宵にキユピッドを配したるはよし、その箭に射られて戀に惱める人の、甘き苦みを思ふ。

若人の胸の血汐のくれなゐのそれの如くも咲ける緋牡丹　下總 山崎さく子

丹

評　緋牡丹の緋灼として赤きは青春の血汐か、情熱は唯だ若人の特権なり。

○　　　　　　　　　　釧路　中嶋つま子

思ふことあまたありける若き日を思ひいでつゝはな衣とく

評　女の優しき思出を歌ひて、情趣横溢す。

○　　　　　　　　　　京都　渡邊菊榮

わが戀は消えて跡なくなりにけり七色ゑがく虹の如くに

評　戀よ、わかき人の戀よ、そは七色ゑがく虹の如きものなるべし、されど、あゝされど、虹の如く消ゆることの、更に果敢なさよ。

○　　　　　　　　　　鳥取　宇佐美もと子

サフランの花の狂ひや瀧夜叉が繪ばなしに更く温泉の宿

評　巧みなる言ひまはしなれど、意味朦朧として押附けたるやうの嫌ひなきにしもあらず。

○　　　　　　　　　　群馬　高橋ふじの

さやかには戀ともならで十七の春は消えゆく花ば散りゆく

評　面白き歌なり、よき歌なり、新派の壬生忠岑流とも云ふべきか。

○　　　　　　　　　　芝　遠山久子

船底の小砂利にきしる渡場を夕ぐれ時の躑躅明るき

評　暁差出でゝ渡場ならんか、美しき景色なり。

○　　　　　　　　　　仙臺　藤村京子

白魚は玉藻の蔭に駒鳥は櫻のかげに春の夜を凝る

評　着想よく、いと婉麗なり。

○　　　　　　　　　　茨城　今泉義子

愛でたりし緒琴賣らるゝ悲しさよ我れ二十二の春も暮れゆく

評　面白き歌なれど、わざと作りたる痕の見ゆるはいと口惜し。

○　　　　　　　　　　松山　芥川愁雨

わが胸はよみの國なる黒鐵の開かぬ花のさだめなりしか

評　冷寒、側らにも近きがたし、かく冷かなるは、抑も如何なる故にや

佳作

○　　　　　　　　　　下總　櫻井よね子

初夏の風芭蕉吹く日は髪長き南の島の少女しのばる

○　　　　　　　　　　赤坂　鈴木文子

嫁ぎなば歌はやめなんなど思ふさくら咲く夜の湯がへりの道

○　　　　　　　　　　釧路　中島つま子

かすかにも記憶に残る母君の顔思はるゝ春の月かな

○　　　　　　　　　　神戸　大橋千代子

春風になびく川邊の綠柳織りしく波によられつるかな

○　成田　白樺幸子
花影に只我れひとり佇めば花はいたく更けて月出でにけり

○　神戸　大谷百枝
淡路島かすみの内に明えそめて潮みなぎる有明の海

○　仙臺　三浦藤江
紅薔薇にそゝぐ小雨を窓によりうらびれあれば時鳥啼く

○　伊丹　松田麗志子
紅の雪降る頃や乙女子の洋傘直き春日なるらん

○　明石　久本まさ子
唄ひ行くめしひ少女の聲かなしはやくるわには灯のつきそめぬ

○　神戸　千鶴子
庭先の櫻かげに事秘めて闇へ泣くなる少女や哀れ

○　下關　吉倉田鶴
笑はれぬ戀のつとめのふるがほに嗅ぐゞにかたりてゐれば

○　木曾　もみじ
心おゝ小鳥が若き羽ばたきにはら／＼と散る花哀れなり

○　下谷　星野夢子
母上のよきみやげかも山櫻かざしてかへる春の旅かな

○　横濱　俊子
玉なすかいなづるみてもほそりきぬ胸のいたづきさからいゆく仕

○　淺草　南香子
わかれたる君なつかしむその夕べひとりしのびてひた泣きに泣く

○　福岡　中村みす子
母なきを思ひ出ては涙ぐみ幼き時のまぼろしに見ゆ

○　長野　豐澤木伊子
丸髷を結べる人のわれに似て髱の時は過ぎたらむかな

○　米國　小梅
もゆる胸のほのほなるらん尺八の音はいれがての人に悲しき

○　和泉　高添みどり
うす絹をこゝろ／＼の間にたれのぞきぬひたる昔戀しや

○　島根　磯の春
紫の絹をまとひて春姫はわが戀人と共に來ましき

○　日本橋　小林政子
五月雨の室に細めし花らんぷうろむが如も君泣き給ふ

○　四谷　櫻草
乙女子のふりの袂にちる花は蝶の去りたる櫻ならむ

○　麻布　波野
神さびし社の前の八重櫻風なき夕べはら／＼とちる

○　美作　杉山信子
春日匂ふ若草の野をゆきゆけば我たましひのよみがへるらんか

○　日本橋　野本富美子
一子まきし庭の撫子咲きそめて見れどもあかず愛らしきかな

○　金澤　大地波子
紅梅にふるとしもなき雨けむりいさゝかぬれし絹はりの傘

○　金澤　春子
地の底の木の根そゝりてしめやかに春の雨ふる黑土の上

○　筑後　樺島道枝
無き父やなき母君のましまさば花散る夕べ袖ぬらさじな

○　下澁谷　鈴木君子
うつゝにもふと物思ひ夢心地たそがれてゆく春の海見る

○ 美作　英　容

花の香にかすめる月のうすあかり二つの魂が忍びかにあふ

○ 龜戸　鹿尾かつ子

さみだれの落ふみて入るみやま路に奥ゆかしくも藤のひと本

○ 靜岡　石野くに子

うたびとの叫ひなやみて太息せし細眉なづる花の下風

○ 山形　中野靜子

鄰兒子の忘れやしけん毬一つ桃咲く窓の下に殘れる

○ 横濱　重岡秀子

春の日はくれてゆくなり武藏野の櫻咲く家は夕けぶりして

○ 大和　辻　近欧子

病める子の悲しき歌を口ずさむソロにも似たるさみだれの雨

○ 石川　羽柴かすみ

むろ咲きの櫻敢へなく散りにけり戀しき君の來まさぬうちに

○ 靜岡　白露

そよ風にひらりと散りぬ藤の花暮れ行く春を我は悲しむ

○ 長野　北山はな

ふと本を開けば八重の青き花古びはてたりむかし想ひぬ

○ 廣島　松田まさ子

柔らかくうれし果物の音もなく落つるとぞみし曉の夢

○ 朝鮮　新庄[illegible]ほ子

春の野をゆくに辿るにたゝずむにひとりはものゝ足らぬおもひや

○ 札幌　四方直子

春はよし嵯峨にやどらば歌おもへ硯まゐらす佳き人あらむ

○ 仙臺　武山栄子

舟とめて白き手ひたす若人の春の光は黒髪に滿つ

○ 宇都宮　若菜なみ

訪ふ人もなくて暮れ行く山里は夕月あはくたゞ雉子の聲

○ 横濱　村上溟子

君とわれ車の跡の二筋の線の如くに離れてぞ行く

○ 大阪　北村桂枝

世の幸を身にあつめたるこゝろしてはこりたりしがむかしある時

○ 丹波　齋藤はる枝

雨の日に渚をゆけばうつくしき小貝にまがふもゝの花びら

○ 長野　清浦すま子

公園の瓦燈のかげに緋櫻のおともなくちるゆく春の宵

○ 下野　印南里子

横はる籠のバナゝを見しわれは思ひ浮べぬ南國の春

○ 長門　ゆかり女

君嫁きて指の細りを覺えにき乙女の春のながき身なれば

○ 水戸　中根雅子

忘れんとせし人胸に浮びくる春の夕べの窓の悲しみ

○ 芝　老沼桃村

逝きし友のありし昔を語る顔に君が手植の白躑躅咲く

○ 奈良　今西冬

亡き宿に今宵も細き雨降りて庭の櫻のけぶりて散りぬ

○ 秋田　片岡きみ子

湯あがりの肌に這ひよるやはらかき風がいざなふあまき悲しみ

○ 下總　河原幸子

櫻咲けど彼の山くづせ逢はぬ日はせめても君があたりを見んに



俳句

天

蝶々や草の中なる女神像　牛込　畑中小子

評　麗日あくまでつよし

地

落ち椿に紅蟹這ふやあやめ草　周防　熊谷靜子

評　配合によりて生く

人

紫の霞の底の菫かな　四日市　廣瀨ため子

評　背景大にして美なり

秀逸

青柳の寸晴尺雨のびにけり　佐賀　吉岡つな子

評　鴨川の水消し

草萌や女の心狂ふ頃　靜岡　田中百合江

評　奇抜

市の聲聞く佗住や落椿　京都　船木夢子

評　新意ほのめく

山吹に鳥なかず織殿の雨　越後　藤原好子

評　中七ありて妙

池塘上る水禽や春の茶屋眺め　大阪　吉田玉代

評　句法生氣あり

佳作

花つゝじ散る雨や日限地藏尊　深川　清水すゑ

歌反古の沈みて淺し杜若　富山　小林芳枝

横越えの里三軒や鯉幟　周防　市川初

嫁入の錦繪吹くや春の風　神戸　酒井靜枝

閑居して藁家なつかし柿若葉　松江　加茂岩子

春雨や砂丘後ろに松風塵　朝鮮　小野久子

鶯の夢な醒ましそ花吹雪　本郷　田村いく子

隻脚主雨讀の窓や若楓　越後　藤原ふじ

谷樹子を產むといふ岩を見る　芝　遠山久子

桃咲くやさすらひ人の門敲　群馬　清水さよ子

雛形の世移りや奇し乙鳥　札幌　雪野子

夢炊ぐ煙なびくや若葉影　靜岡　白露

月ゆらぐ水淺し落花ほろほろに　美作　須原かつを

病む娼女の文書くや燕子啼く夕　本郷　柴柳子

拜殿に人あるさまや春の風　深川　宮崎はな

水灯や山吹の花ほかほかと　越中　藤原竹子

夢殿を朧に脱けて菜畑かな　芝　遠山久子

落馬せしに醫者も付き來ぬ藤の宿　小石川　中川舟女
茶摘女や後ろは伊勢の丸木橋　本所　木村公子
湘南の落日遲し潮干時　小石川　栖原八重子
年々に埋もるゝ池や庭椿　小樽　秀香女
元祿の花見眞似けり喫小袖　本郷　千鳥
春風や嫁入人の化粧吹く　神戸　野村小信
行く春の三絃線唄や心中種　橫濱　有明照香
寮の夜の皷に緋桃香れけり　下谷　大上菊子
城の蔦切れば燕子鳴く冴かな　芝　遠山久子
閼伽汲むや浮ぶ殘花もなつかしき　岩手　大和田みつ
汐曇りする朝波を歸雁かな　京都　三宅壽賀子
蟲干や大門閉ぢて潜り門　山口　梅田きよ
比丘尼病んで裏山吹も散る雨や　京都　都路村子
濁江の藻の花―雨や蛇渡る　東京　森野北鳴子
杳見僧んで雛に餌をまく日永哉　大阪　松洲くに子
深山の日永きる木や呼子鳥　神田　高岡水汀
乙女姿見まく欲しき辻や春の月　廣島　上林芳枝
新妻の夢や美し春の夜　大阪　松浦くに子
鮓壓すや竹婆娑々々と寮の庭　香川　猪熊さい子
大船の衛役日永き波止場哉　澁谷　石川菊香
若鮎や落花に盜む水の紋　朝鮮　松田かよ子
蓮月の草廬とはゞや春の雨　臺灣　春苛花子
うき思ひ人知らず櫻散る夕べ　栃木　須賀紫霧香
牛馬市たちて忙がし夢の秋　大阪　田野しか子
足痛む旅籠に水鷄聞く夜哉　群馬　津久井季子

白堊落ちし山院の後ろ椿咲く　麴町　牧野滋香子
色も映ゆ名妓の塚の菫哉　京都　白桔梗
散る花の襟に冷たし朝の醉　麴町　松井のぶ子
夜櫻や雪洞並ぶ橋東　府下　和泉なほ
朧夜や夜の飾りを小雨降る　東京　小野敏子
北越の史蹟すたれて若葉哉　芝　本田爲里子
苗代に降る雨寄し水尻泡　羽後　菊地まき子
遠影の白帆泛べり波疊ら　山形　細谷照代
斷絃の詩ならず春ぞ逝く思ひ　朝鮮　宮原ひろ子
朝日さす富士裾馬や春の霜　赤坂　長谷川八重
菜種咲く村嫁迎ふ灯哉　牛込　小野廣子
島嶼皆春を呼びかふ小鳥哉　麴町　牧野はん子
草の戸や卯の花くだし宵次ぐ　深川　佐野たま江
雨こもる朧の空や鳴く蛙　常陸　渡邊慶子
溫泉の宿に歌友もありぬ春の雨　大阪　中川よし
旅繪師の禿筆賣れず遲櫻　長野　山浦すい子
蝶飛ぶや芝生のに續く赤鳥居　橫濱　飯村綾葉
黄昏て水田を沸ふ柳かな　本郷　高田喜代子
石削る音す谷間の若葉かな　栃木　赤堀千代
ほとゝぎす啼くや朝雨煙る空　仙臺　安井岸枝
春風や亡國の民の髮長し　宮城　鈴木ちさし
病む窓の花菜に來るや白らけ蝶　牛込　波多仲政子
花を肩に渡舟待つ主從夕哉　神戸　大野きよ子
行雁や河心と見えて棹足らず　東京　高尾君枝
佗居して花の師匠や雛祭る　小石川　石井梨木子



誌友倶樂部

▲四月號に「破鏡の歎」お書き遊ばしたみどり樣私はあなたのお姉樣に御同情致します、これ即ち同病相憐むに漏れず、我と同じ境遇の人には何うしても同情の念も深いのです、でもお姉樣はあなたの如うなお優しい妹樣や兄樣をお持ちですから、まだ御幸福です、私は兄弟姉妹てふものもなにもない、世にも人にも捨られた哀れ淋しい孤獨の身です、私にも文才とやらあらば過去半世の悲涙交々の歷史の一頁をさいて、悲劇十番にものするのですが、何分淺學のかなしさ、筆には胸の悶えの一もえ書きあらはしませんの、そして唯獨り悶えに悶えて居ります、早く皆樣の色とり／＼のお筆の綾を拜見して、この小さき心を慰めたいと、四月十五日の增刊を樂しみに待つて居ります、世にも人にも捨られました私には、女學世界が唯一の友です、何卒誌上で時々お姉樣の御消息おもらし下さいまし、蔭ながらお案じ申て居りますから……、さよなら失禮、御身御大切に、（神戸、白菊）

▲いよ／＼淑女畫報が生れましてれ、口繪、寫眞、記事、すべてについて皆樣のお心づくしをうれしく拜見いたしました、あの中の「三春行樂」をお書きになつたのは、もしや本誌上でも度々艷麗なお筆をお見せ下さる紅梅の君ではないでせうか、どうもさうらしく思はれますが、皆樣は如何おぼし召して？（歌子）

▲記者樣、一寸御尋ねいたしますが、讀者の寫眞を御送り申しましても紙上へお出し下さるのですか、あとでかへして下さるのですか、紙上でお敎へ下さい。（岡山の讀者にて、倭文香）―讀者の寫眞も揭げます、また寫眞は後でお返しします、

▲私は東京にゐますから、色々の雜誌に不自由致しませんが、私は此の女學世界の外には、これと云ふものがないと思つてゐますの、皆樣の多くが地方にゐらつしやれば、都と同じですと思ひますの、それから皆樣にお願ひ致し度い事があるのよ、それは都に居ますと、地方の風俗習慣が見たいのですが、これを一つ此の誌友倶樂部で皆樣が各その地の風俗習慣の一端を寫して下さつたら、私うれしいのですわ、（菊香）

▲誌友の皆樣、私は此度はじめて子をもち、たらわながらも母となりましたが、悲しい事には一滴の乳も出ませんので、誠にこまり居ります、これまでは夜やすむ時にミルク瓶の中に一ぱいの乳をこしらへ、肌につけてねました、さうするといつも人肌位になつて居りましたが、これよりおい／＼暖氣に向ふに從つて腐敗するだらうと思ひます、定めし皆樣方の中にはミルクにて御養育なさるお方もおありになる事でせう、どうぞ御經驗のあるお方よ、ふびんと思召してお敎へ下さいませ、お願ひ致します、（千葉縣匝瑳郡椿海村椿、菊間せつ）

▲菊香樣つてどなた？「所が最近の報はかうですのよ、磯千鳥樣は早大の方で……」まあきいて呆れますわ、その最近の報が何だか怪しいものでございますれ、それにしても報導者はどなた？　あんまりたしかでもない報導に菊香樣迷はすのは罪ですよ、磯千鳥樣、おん上については申上たい事も澤山御ざいますが、こゝにはわざと何も秘めて、今しばし皆樣の御想像に任せませう、底知れぬ學理は胸に疊んでゐらつしても、ねえ菊香樣　磯千鳥樣には未だ早大入學のお資格がないの、それとも早稻田に女子部があればいざ知らず、―菊香樣あんまり想像や噂の噂で、そんな大早計な事仰有るものぢやございませんよ、あら妄言御免遊ばせさらばよ、磯千鳥樣!!!　戀しい、なつかしい、慕しい、磯千鳥樣!!!　永久におふろひ遊ばせ、（內田八千代）

▲「釣革物語」拜見致しました、澄子樣に思はず同情いたしました、なんて美しい淸き乙女の戀でせうれ、ほんとに月にむら雲花に風でございますわネ、あゝあたしは三度もくりかへして讀みましたの、さみだれしと／＼と降る夜、澄子樣のみ心はどんなでせうれ、世の中に人知れず物思ひする乙女ほど、哀れなまたはかないものはございますまい、あゝ陰ながらあたしも淸き美しき澄子さまをお慕ひ致します一人です（須花にて、百合子）

▲尾崎恒子樣の筆の雫で、歌川さまの御身の上拜見して同情に堪へません、初戀に破れた女程

みじめな者に御座ますまい、皆様の中で元女優學校にいらした方で、以前は神田の音樂學校に御出なさつた山下花子様の御住所御存じの方はお知らせ願ひます、(野の露)

▲四月號の花電車をおかきになつたのはどなたでせう、なか〳〵振つたおふでつきれ、それから三月號の繪物語の緣の糸は、私思はず泣きましたわ、ロマンチックな戀物語ではありませんか、ほんとに繪物語はいつでもよいのばかりだわ、(赤坂、すみれ)

▲記者様、私はある大なる目的にて渡米いたし度存じて居りますが、かなしい事には御察しの如き事情にて、未だ其の目的もはたし得ずに、一人もだへて居りますが、かゝる事情の洋行者にして對して、非常に便利をはかつて下さる會の如きものあるとのこと、かすかにきゝおよんで居りますが、それにたよつてはどんなもので御座いせうか、御存じでしたら、番地と共に何卒くはしく紙上にてお知らせ下さいませ(澁谷にてもだい女)〇小石川駕籠町五十一番地力行會の島貫兵太夫氏に聞合せて御覧なさいまし、

▲昨年十一月號に「過ぎ去つた人生の春」をお書きなすつたさみどり様、先日は御手紙下さいましてまことに難有う存じます．まあ何と御不幸なお身でせう、只々御一人の御母ア様が哀れ……永の眠におつきなすつたとか、何と御同情申上てよいやら分りません、然しさみどり様、廣い世の中にはやはりあなたと同じ方は隨分多いですよ、決してお氣落ちなく、お身體お大切に、無邪氣に運動場で可愛子供と、鬼ごつこして居る中には、また、天も幸福を與へて下さいませう、何卒お返の節は、折り〳〵お文下さいませ。(福岡縣、後藤文子)

▲今度の淑女畫報の「三春行樂」といふのれ、別邸の主つておりますけれど、ありやあ紅梅さんにちがひないわ、内容の人物と言ひ、きれいなお筆つきといひ、初陣ながら目ざましいおん武者振り、尙この後も華々しくお活動あそばせよ(本鄕、さくら草)

▲皆様にお尋れ致します、私は去る卅七年頃よりの愛讀者でございますが、私の親友で長崎市の人で、森田辰子様と云ふお方の只今の住所御存知のお方は、何卒本欄にてお知らせ下さいませ、一時神戸の女學院に居られまして、其後親御様が滿國大連に行かれた爲め、大連か旅順に行かれた様子ですが、私も空淋き鷄林の空にさらひの身となりまして、日々雨につけ風につけ思ひ出して泣いて居ます、御同情ある皆様何卒お知らせ下さいませ、(朝鮮平壤櫻町、笠波菊枝)

▲本誌十卷六號の「若き婦人の眼の保護」なお話し遊ばせし井上温先生は、眼科專門にておはし候や、又いづこに開業遊ばし候や、お知らせ下され度お願ひ申上候、(芝區、岡田てい)〇麴町區飯田町井上眼科病院長をして居られるお方です

▲私は繪葉書、肉筆水彩畫葉書、顔面用肉筆水彩畫の交換をお願ひします、同好の諸姉様はお送り下さい、早速入念に書いてお送りします。(福岡市中間町中野生花堂内、辰子)

▲四月號面白うございましたわれ、「浮世の外」をお書き遊したむらさめ様おなつかしくてなりませんりよ、お振ひ遊しませ、本誌増刊の「悲劇十番」てどんなのでせうかたのしくつて……(長門のほとり、はつ音)

▲四月號のみどり様の「破鏡の歎」あなた様の御心中お察し致します、でもあなたはいゝわ、私なんか兄弟もなく捨小舟よ、ほんとにつまらなくて、いつも泪を流してゐますの、女學世界は唯一の友なのです、(山口秋、妙子)

▲毒だみ様の逆境の所感、京様とやら、本當にお察し申しますわ、それも運命と御あきらめ遊ばしませれ、(大和、櫻本露子)

▲皆様の中で、お兄弟のおありなさる方は、ほんとにおうらやましいわ、私にもお下げやマガレットに結ふ様な妹があつたら、私しが高髷にゆつて、妹の手をとりながら、若草もゆる郊の野邊に散歩したら、どんなに樂しいだらうと、常に思ひますのされど〳〵父母の愛を身一つに受くる一人の女には、かゝる樂しみを味ふことが出來ないのですもの、私ほんとにまつらないわ、何とぞ皆様、妹と思召してお交りを願ひます、(京都にて、深梅)

▲誌友の皆様、永々御無沙汰いたしました、實は去る二月に出産いたしまして、早や母になりました、嗚呼子を持つて親の恩を知れとは、ほんとうですよ、今迄さほどに感じませんでしたが全く大ていでは子は育てられませんのれ中に心配、從て責任も重くなりました、皆様、未だ御兩親のおそばに入仰ろ御方は決して〳〵我儘など出來ませんよ、子を持つて見なくては親の恩は判りません、ホゝ俄かに大人びてれ、(朝鮮京城櫻井町、石川貞代子)

▲特別寄書は、普通の半紙にてもよろしく候や、半紙ならば何行に候や、又原稿紙ならば女學世

界の原稿紙は何所より求めてよろしく候や、誠に御手數恐入候へ共、お教へ給はり度、願ひ上候、（――用紙書方はすべて御自由にてよろしく候麹町にて露）

▲女學校を出てからお裁縫の方も出て、袋物も致しました、只今する事もなく遊んで居りますが、勿體ないとも思ひます、袋物か何か家庭にゐて出來るきれいな相當な内職をして見たいとぞんじますがどなたか御紹介下さいませんか、（麻布の女）

▲神戸のみを子様、千代子様のお宅は、辻様の御別莊のおとなりですのよ、お母様と御妹子のうめ子さんと御三人の御家内と聞きました、私が千代子様の事をきゝましたのは「松風」をお出しになりましたとき、東屋の人に鵠沼にお住ひなさる方だといふ事をきゝましたので、それから千代子様をしりたいと思ひましても、箱根にお出に成つたとかつて、一度もお目にかゝる事はございませんので、一寸でもお目にかゝりたいと思つて居りますが、今は四國に參つて居りますからいつお目にかゝれる事かとおもふて居りますのよ、（丸龜、白百合）

▲記者様、特別寄書の原稿や、特別寄書外の短文の寄稿等、掲載の價値あるとお認めに成りました文でも、住所姓名を明記せず、變名等でありますと、沒書なのでございませうか、又右の二種原稿の書體は、必ず楷書でなくてはいけませんでせうか、お教へ下さいませ。（花子）〇住所姓名なくて匿名でも、沒書には致しません楷書の方が好都合です、讀みにくいと自然沒書になります。

▲美くしい春の覧も、いよ／＼近いうちにあかず眺めることが出來ますれ、私も此欄でお目にかゝりますのは初めてゞございますが、何卒不束な私をも小さき友の一人として、此後長く御交際下さいませ（南ど）

▲多くのおなつかしいお姉様お交り下さいまし（花の里麗子）

▲私は最愛の友女學世界が月毎に進み行くので何より嬉しい、記者様に感謝します、（神奈川縣波多野禮子）

▲同情ある皆様と繪葉書手紙の交換をお願ひ致します、それから大阪市の中山嘉子様、私の手許に増刊さま／＼の家風不用でございますからお送り致しませうか、また皆様の中に増刊驚く手紙御不用の方がございましたら、おゆづり下さいませんか、お禮はかならず／＼致します（千葉縣山武郡上堺村屋形海保勝子）

▲四月號の記事は、一ツも殘さず皆私にとつては満足な物ばかしでございました、殊に江戸紫様の花電車には、私は深くチャームされました此後も尚ます／＼あのやうな記事を讀ませて戴き度いものです、又忘草様の令嬢評判記、私も大いに心に當る事どもが多うございました、何卒皆様方お振ひ遊ばせ、宿毛町の野村喜久子さまお手紙頂戴な、神田にて白秋）

▲自分の國の方のお作の當選したのを見ますとほんとうに肩身が廣いやうで、うれしうございます、武山癸千様、益々お揮ひ遊して下さい、品川の花つばき様、神田の津川なつ子様、四月號のお歌敬服致しました、私も和歌が大好きなんですけれど、下手の横好きですの、どうしたらあんなに上手になれるんでせう（仙臺清子）

▲下關の傑文子様つて奈良野様でせう、あなたのお作にはいつも感心してますわ、さゝしてこんな歌人が下關にゐらつしやるかと思ふと、ほんとうにうれしうございますの、私少女世界には時々出しますけれ共……、以後何卒お交りを……、御近所ですから、おひまのせつには、いらしつて下さいまし、同市の木村様、山本様、おなつかしう存じます、私も同じ下關の者ですから今後、よろしくお交り下さいまし（下關光子）

▲お懐かしき園世の君よ、春とは申しながら、月影さへ未だ寒くして、そゞろに君をしのんで居ります、くるしさの心のほど深く／＼おさつし申上ます、私も一年ばかり平河町に居りました、おさしつかへなくば御住所お知らせ下さいまし（赤坂區青山南町四ノ二十一水澤方深澤やす子）

▲私も時々ごた／＼を書いては、柄にもないとは思ひますが、投書致しますがなか／＼どうして賞なんて思ひもよりませんが、一度でも載せて下つたらどんなにかうれしいかと存じます、（能登、小川かすみ）

▲美しい繪葉書やお玉章下すつた方誠にありがたう、石部町のみどり子さん、是非御住所お知らせ下さいな、茨城郡到神崎の武藤さんとか、渡米なさるおつもりとか、よろしいのね（水戸松雪子）

▲知火のほとりな野の露様、私事も同じ人の近くに淋しく暮して居る者で御ざいますが、御さしつかへなくば末永くお交りの程願ひ上げます

（山里にて、野への小草）

▲ゕ東なる私に、美しい繪葉書をお送り下さいました諸姉様方、誠に難有う存じました、又夫れ〳〵御返事を差上げましたつもりで居りますが、萬一お送り下されて御返事を差上げないお方がありましたら、何卒おゆるし下さいませ、—其れから或人の申しますには、知らないお方とは決して御交際致してはなりませんとの事、何卒あしからず、北米シャトル市　田中千代子）

▲四月號でお願ひしてから、みな様より澤山に繪はがきを下さいました内、御住所がスタンプの爲め判明せず、止むなく御返事を差上ぐる事が出來なかつた方も、ございます、お心當りの方は、重ねてお所をお知らせ下さい、私の宿は變りまして下記の通り、尚あとのみな様もお文下さいませ、（大阪市東區谷町四丁目早川方、中山嘉香）

▲鳥歌ひて蝶は舞ひ、花笑ひて風かほるいゝ時候とはなりました、本誌のます〳〵盛になりゆくを見て、うれしくてたまりません、ずゐぶん長い事姉が愛讀して居た本誌を、今年の春から私がうけついで愛讀する事となりましたから、妹とおぼしめして、どうぞお導き下さいまし、私れ、今年十七になりましたの、（緋桃咲く里にて、きくゑ）

▲御優しい諸姉様、何卒拙なき妹と思召し、お王章をおめぐみ下さいませ、きつと御返し致しますから、（四谷區永住町、近藤美さを）

▲誌友の皆様、秋田の高等女學校に御出なさいました淺石先生は、東京とかへ御出なされたと聞きましたが、先生の御當所御存じの方は、何卒お知らせ下さいな、諸姉様、不束者ですが、何卒御交際を願ひます、（秋田にて、信子）

▲南國の葉末の露子様、今頃は、何處にどうしてゐらつしやいます、私は昔なつかしい、クラスメートです、日夜お偲び申して居ります、御たより下さいな、（愛知、鄰江子）

▲うらゝかなあした、花に憧がれて野遊をさまよふ嬉しい春は來ましたれ、京都に在す愼野露枝子様貴女は此度御卒業遊ばしたの、私あのお文拜見して、何だかおなつかしく存じます、私も此の三月に卒業致しました、これからはお互に社會の荒浪と戰つてまけない樣に勉めませうれ、（豊の浦にて、ふみ子）

▲在米の諸姉様、毎度美くしい繪はがきを被下て難有う御座います、尚益々御交換を願ます、（京都押小路麩屋町西入安所内、船木夢子）

▲諸姉様繪はがきの交換をお願ひ致します、岐阜縣の諸姉様、特に御交際をお願ひします、（岐阜縣揖斐郡小島村字市場、織田たつ子）

▲皆様の内で、内藤千代子様のスヰトホームお持ちの御方は暫くお貸し下さいませんかおれがひ申します、私「嫁に行く人」「驚ろく手紙」もつてをります御用のお方は、お送りいたします、（大阪市四區新町通二丁目一九二、橋本愛子）

▲皆様の御内に、増刊「驚く手紙」御不用のお方はお恵み下さいませんか、お禮には當地の繪葉書をお送り致します　富山縣射水郡伏木町、松原一枝）

▲誌友の皆様、色々の繪葉書やら、レターなど下さいまして、難有うございました、米國の皆様のは、お名前が判然しませんから、お返しが致しくも出來ません、今一度判然と書いて下さいませ、（茨城縣那珂郡神崎村大字本米崎、武藤亮子）

▲俳句に趣味をお持ち遊ばす諸姉上様、淋しい田舍に暮す私を、妹とおぼしめして、御句をお送り下さいまし、（大阪府豊能郡池田元新町、寺部喜美子）

▲京都の船木夢子様、先日は誠に美麗なる繪葉書を被下まして難有とう、お返事をつひ多忙の爲め延致引しまして、どうぞお許し下さいませ（敦賀町、角野きく）

▲雪に埋れて居つた北海の天地にも春が來ました、枯葉の下には福壽草か笑ひ、籬の小鳥は囀る様になりました、大沼の春子様、夢子様、其後御變りありませんか、毎度誌上でお尋ね下すつてありがたう存じます、春子様、私は未だ御地に參つた事ありませんの：：一度は參り度いと存じて居ます、（膽振の女）

▲四月號の誌友倶楽部にお見えになりました琵琶湖のほとり露の子様、私も錦子様のお作が大好きです、失禮乍ら住所お知らせ下さいませ、（近江愛知川町、ホワイトローズ）

▲誌友の皆様方、御地名所繪はがきお送り下さいませんか、私も京都名所繪はがきや京美人繪はがきをお送り。いたします（京都市西洞院魚ノ棚下ル、淺野たか）

▲潮風先生の釣革物語、あの澄ふさまのお姿が目に見える様ですわ。皆様の内で「櫻咲く島」「嫁ぐ人」「驚く手紙」「マダム振り」の御入用な方はお知らせ下さい。御送り致しますから。（攝津川邊郡伊丹町神樂岡方、入江浪子）

募集（五月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

（報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈）

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內｛定刊數／增刊四回｝	十二冊　一、五、九、十一月價格同一
郵税	一冊　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候。

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十五年四月廿三日印刷納本　第拾貳卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　市川七作
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

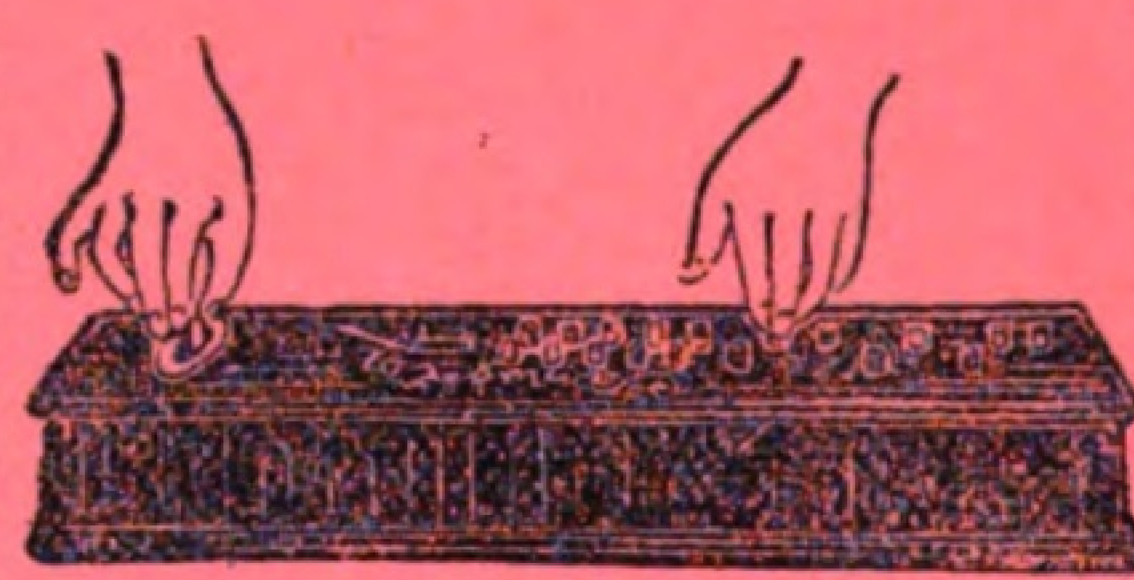
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博通社 博 特賣品

便利で廉くて安心な買物は博通社に限れり!!!

新案また琴



本品は體裁高尚にして如何なる少年少女諸君にても容易に彈奏するを得、少しく練習するに於ては一種の箏音玉を轉ばすの妙あり、家庭教育上無二の好侶伴にして知らず識らず音樂の趣味と知識とを養成するを得、良家の家庭に是非一品を備ふべき洋琴的樂器なり、

▲音譜及使用説明書付

▲特價上製一圓五十錢

▲荷造送料内地廿錢 臺灣朝鮮 五十錢

教育地球儀

◎本品は最近の調査に基きたる正確なる地球儀なり紳士學生諸君の參考品として、家庭教育の材料として最も必要、書齋常に座右に置く時は一々地圖を繙くの要なく最も有益に最も重寶なる品なり



大形徑七寸 ◎特價一圓八十錢

中形徑四寸 ◎特價八十五錢

小形徑三寸 ◎特價四十五錢

荷造送料内地二十錢 臺灣樺太朝鮮清 五十錢

女學生御袴

◎非常の廉價を以て今回提供せる女子用袴は特に苦心の結果流行色合を以て、特製せしものなり、專門家の考案により年令に準じて夏向衣裳に調和せる流行色合と生地を撰定せるものなれば體裁の優美高尚にして沙洒たる女學生諸君の女性美を發揮すべき特製品なり



◎モスリン上製

◎尺六 特價一圓

◎尺八 特價一圓四十錢

◎二尺 特價一圓六十五錢

◎二、二 特價一圓九十五錢

◎二、四 特價二圓三十錢

◎カシメヤ製

◎尺六 特價二圓八十錢

◎尺八 特價三圓三十錢

◎二尺 特價四圓

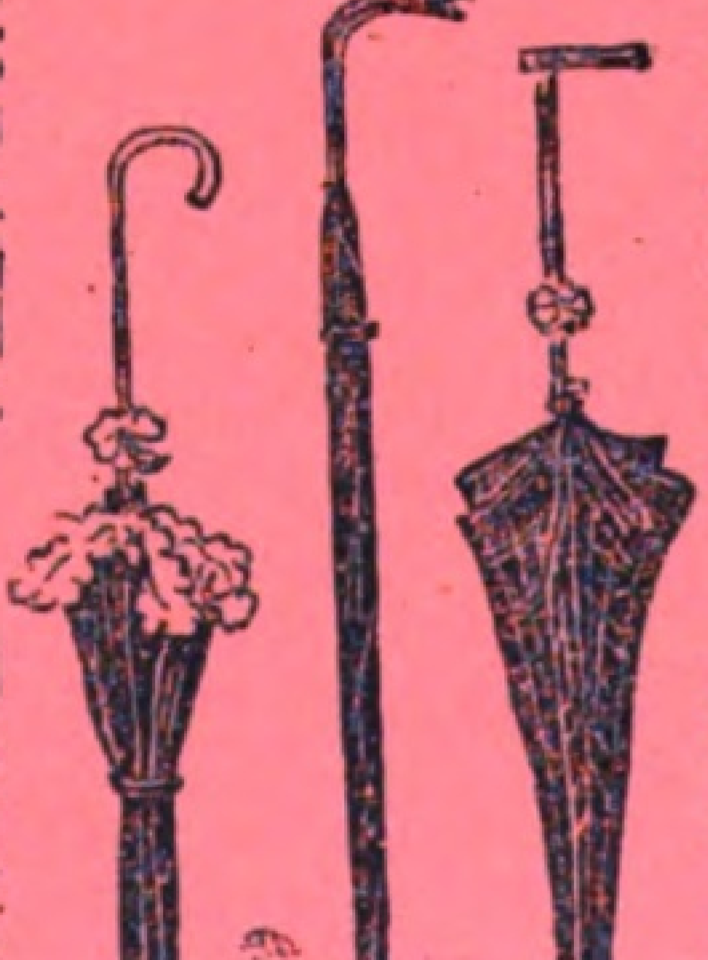
◎二、二 特價四圓八十錢

◎二、四 特價五圓

送料内地十錢 臺灣樺太朝鮮清 三十錢

御徳用と流行洋傘

◎御徳用で然も流行向の本社特賣の洋傘一萬本實に普通の市價に比して三割以上の低廉なり 申込が早くなければ品切 註文の節には御年齢と色合の御好を附記あれ



【特價】

◎郡内上絹 二圓

◎同コハク 二圓五十錢

◎西陣無地 三圓五十錢

▲送料内地二十五錢

【特價】

◎西陣模様 四圓二十錢

◎豐玉絹 四圓五十錢

◎豐玉上絹 五圓

臺灣樺太朝鮮清 五十錢

御手紙一本で何品でも御買物は辨じます!!!

(後付の一)

大橋メール、オーダー、ビジネス

博通社

東京日本橋區本町一丁目

電話本局六百四十番

振替口座東京五十番

文學博士 井上哲次郎君閲

東京高等師範學校教授 文學士 有馬祐政君　國學院大學講師 黑川眞道君　共編

國民道德叢書

全三冊　洋装菊判上製頗美本各冊紙數約五百頁

上卷‥正價壹圓廿錢　郵稅十二錢

中卷‥正價壹圓五拾錢　郵稅拾貳錢

日本國民道德に關する良書珍本は皆蒐めて本書に在り我が忠誠なる國民は必ず本書を讀まざるべからず

上卷目次

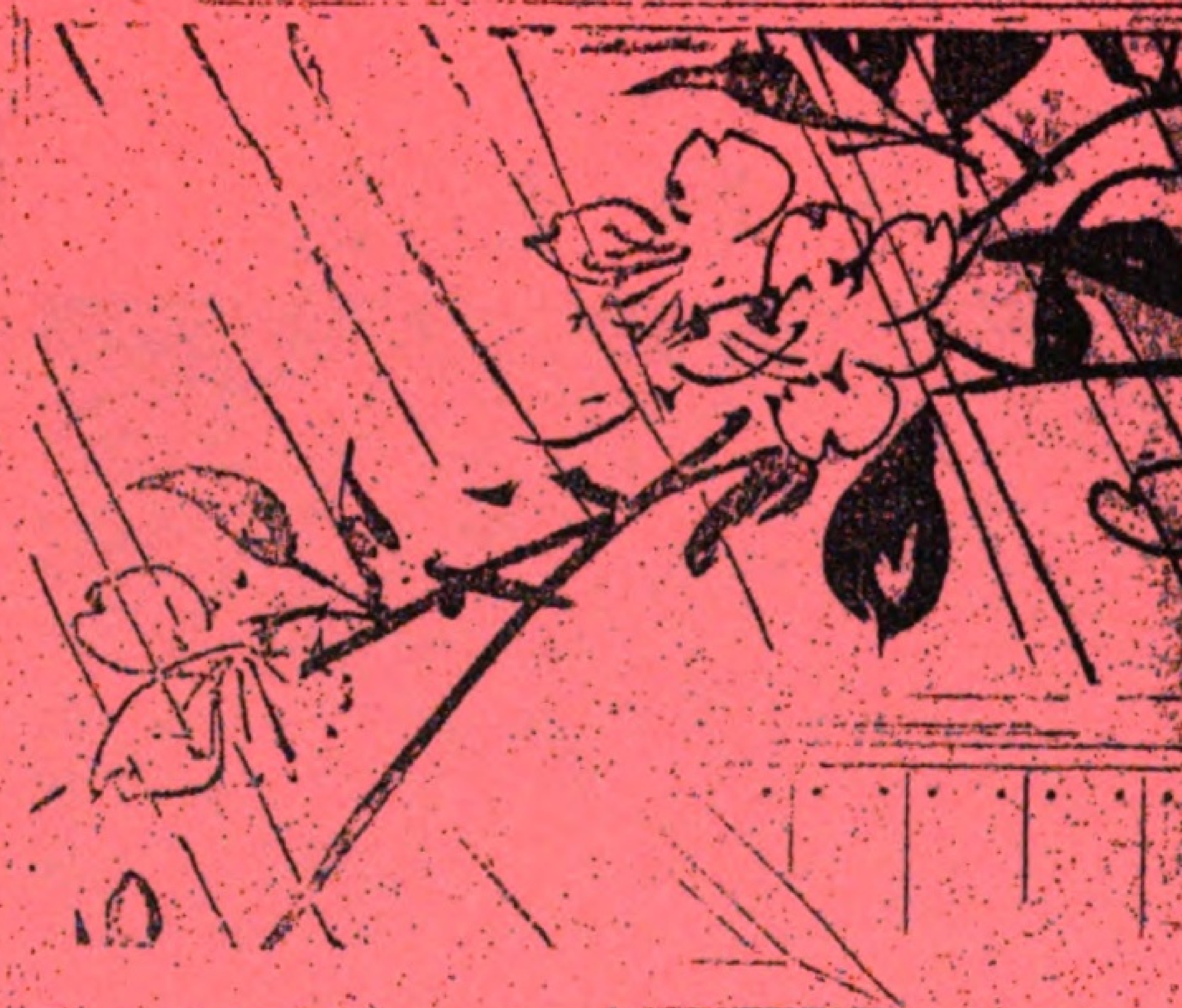
中卷目次

下卷目次

我が孝廉なる家庭は必ず本書を備へざるべからず本書は國家の至寶なり國民の聖典なり……

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

女（後付の六）



岡田八千代女史編

閨秀小説十二篇

（發兌元 東京本町 博文館）

▽最新刊△

洋装四六判三百餘頁
装幀瀟洒優美
定價金四拾五錢
郵税金六錢

源氏の大作枕の草紙の雄篇現れたる平安朝は知らず才媛の蔚出近時の如きは蓋し未曾有の事なり殊に筆を小説に染むる閨秀に至りては未だ今日の如き偉観はあらず本書は現時の傑出せる作家より特に十二篇を撰びたるもの感覚の鋭敏にして感情の優婉に観察の微細なる別に一境地を拓けり就中個々各異彩を放つて紅紫爛熳たる處近時出版界の美観と云ふべし

前田雪子女史抄譯

家庭小説

小姫君

洋装四六判　総クロース南京綴　紙數二百八十頁　正價四十五錢　郵税六錢

慈愛深い父母の膝下で、厳格なる家庭の教育を受けて生育つた、最と睦まじい姉妹の姫君は、浮世の戀愛を夢む時、父母に由つて定められた婿君を嫌つた奇才に富み傾徊に長けた妹の小姫君は、花もうら若かしい十七歳の年頃に、その機智を遺憾なく發揮し、厳父が偶想した婚約をからりと外させ、日頃仲の好いお友達なる令嬢を媒介して、孰れも満足しかも幸福なる三組の婚姻を成立たせた手際の鋭敏なる所、ナイーヴな所、是れ本書の主眼併せて善良な家庭の有様も窺はれる。

女の後付の七

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.

女學世界 第拾貳卷第七號 （毎月一回廿三日 印刷納本）

明治四十五年四月廿三日印刷納本

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

定價金貳拾錢（郵稅貳錢）

VOL. XII （東京市日本橋區本町三丁目 博文館發行） No.